明治三十六年七月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

# 女學世界

## 第三巻第九號

口繪






地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

# 女學世界 第參巻第九號 目次

メキシコの婦人



（記事參照）

（博進社工場印行）

雨後



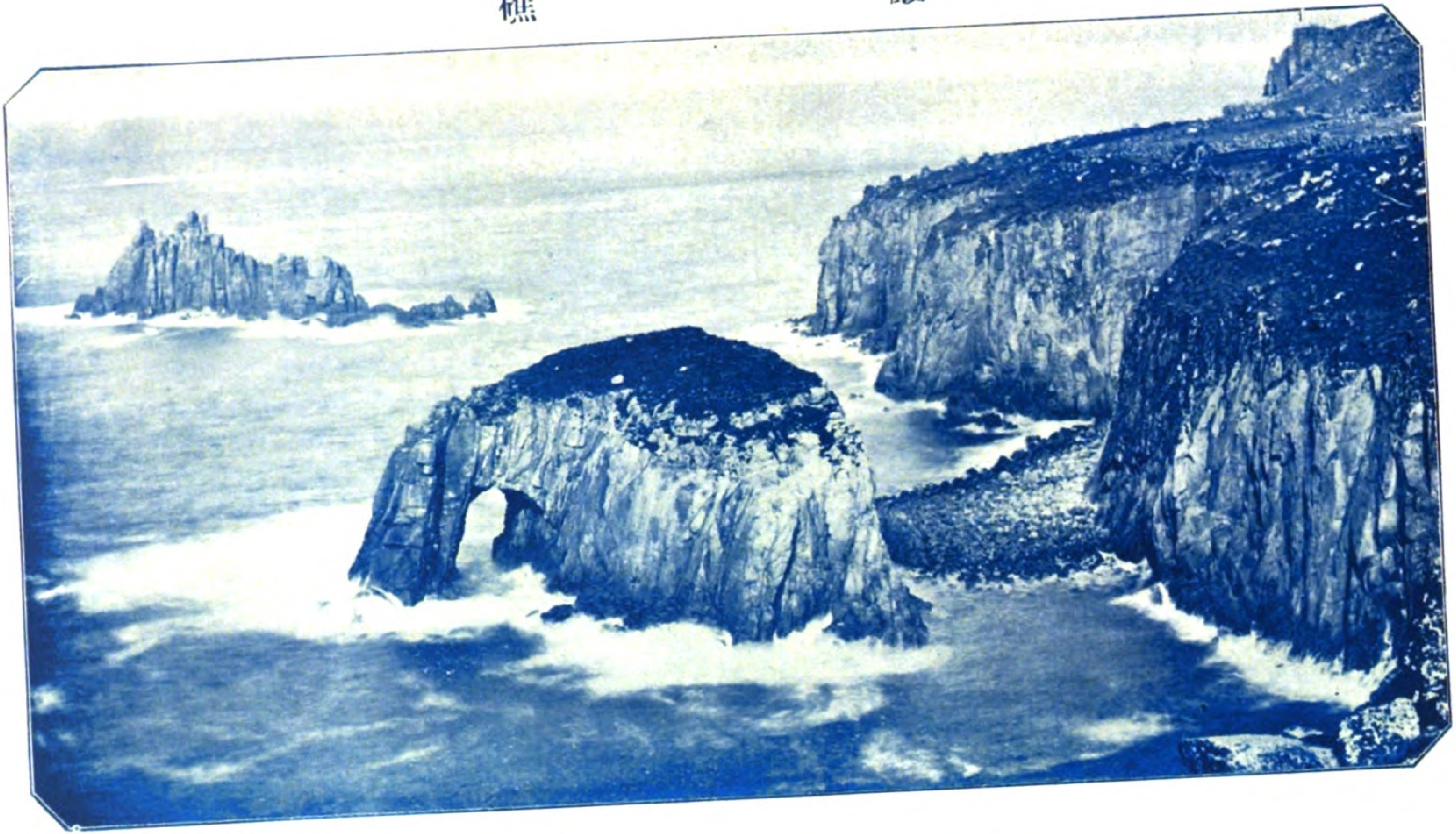
寺崎廣業氏筆

太公望



橋本雅邦翁筆

巖礁



# 書道の要訣

前田默鳳道人著

（近　刊）

# 書學捷徑

全部二冊乾卷出來唐本仕立

**坤卷**

七月下旬發兌
正價郵稅未定

諸君此坤卷は行書及草書に就て最も精しく說明せしものであります、就中草書の習字法は、未だ本邦になき捷徑法であります。又行草二體に關する諸說は平易なる講話體にて何人にも直ぐ解し得らるゝ樣深切に述べてあります。其論說の正確なる等のとは、錦鶏鴻齋二大家先生の序跋に詳述してあります、故に玆に贅言しませぬ

前田默鳳道人著　●書學捷徑（乾　卷）　正價金五十錢　郵稅金六錢

三宅青軒君著　●書法自在（全壹册）　正價金二十五錢　郵稅金六錢

石川鴻齋君著　●書法詳論（全壹册）　正價金四十錢　郵稅金六錢

市川米菴君著　●略可通（全壹册）　正價金四十八錢　郵稅六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（甲の一）

前田默鳳道人編撰

（近日發行）

# 五體字書

全部十二卷合本四冊帙入中本紙數一千頁字數各體ヲ通シ約八萬餘字

默鳳道人の書學に精通せらるゝは世人の普く認むる所にて書鑒書海其他各種の著書は大に世に行はれ後進を裨補せられしと鮮少ならず而して其書海は既に鬻き盡して今や一本をも殘さゞるに至るといふ本編は書海を訂正縮少せしものにて即ち古籀篆文より隷楷行草に至る各体を字典の部門に分て網羅蒐集して毫も洩さず右各體を一目瞭然ならしむるの外古今用字の異同及正俗通用等の文字は悉く之を注記し其引證の正確にして且つ精博なるは他書の比すべきものなし寔に空前の一大字書といふも過言に非るべし方今東亞諸邦の交通日を追ふて頻繁なるに際し隨て文書の必用なるは言を俟たず即ち此に據て之を書せば清韓諸邦に通ぜざるとなし苟も文學に實業に從事せらるゝの諸君は机上欠くべからざる寶典なり是非御購ひあれ

瀬尾鴎齋名編

# 草叢

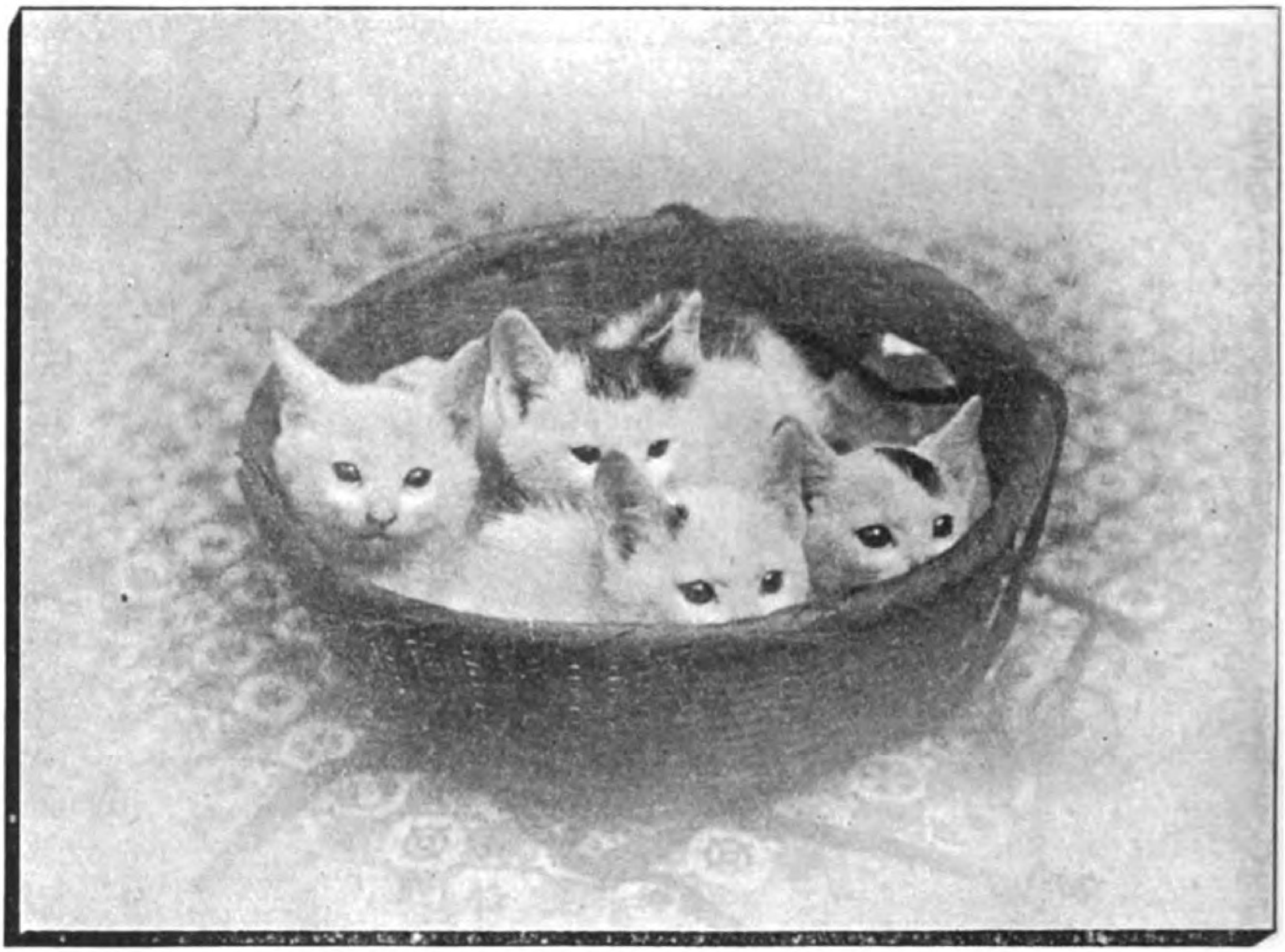
全部十二册和裝上製大判七百頁

正價三圓五拾錢小包送料六百匁

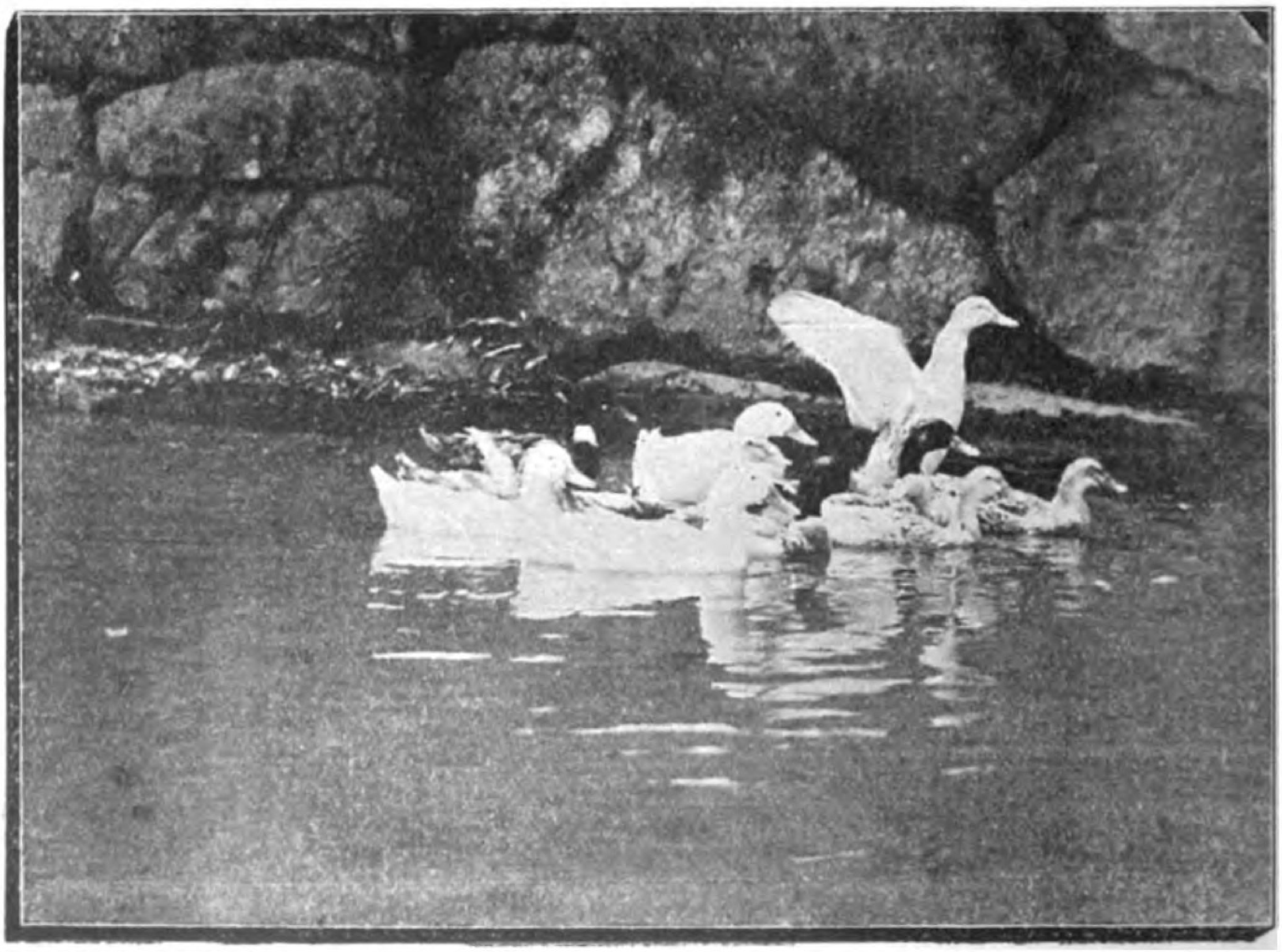
（甲の四）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

搖籃



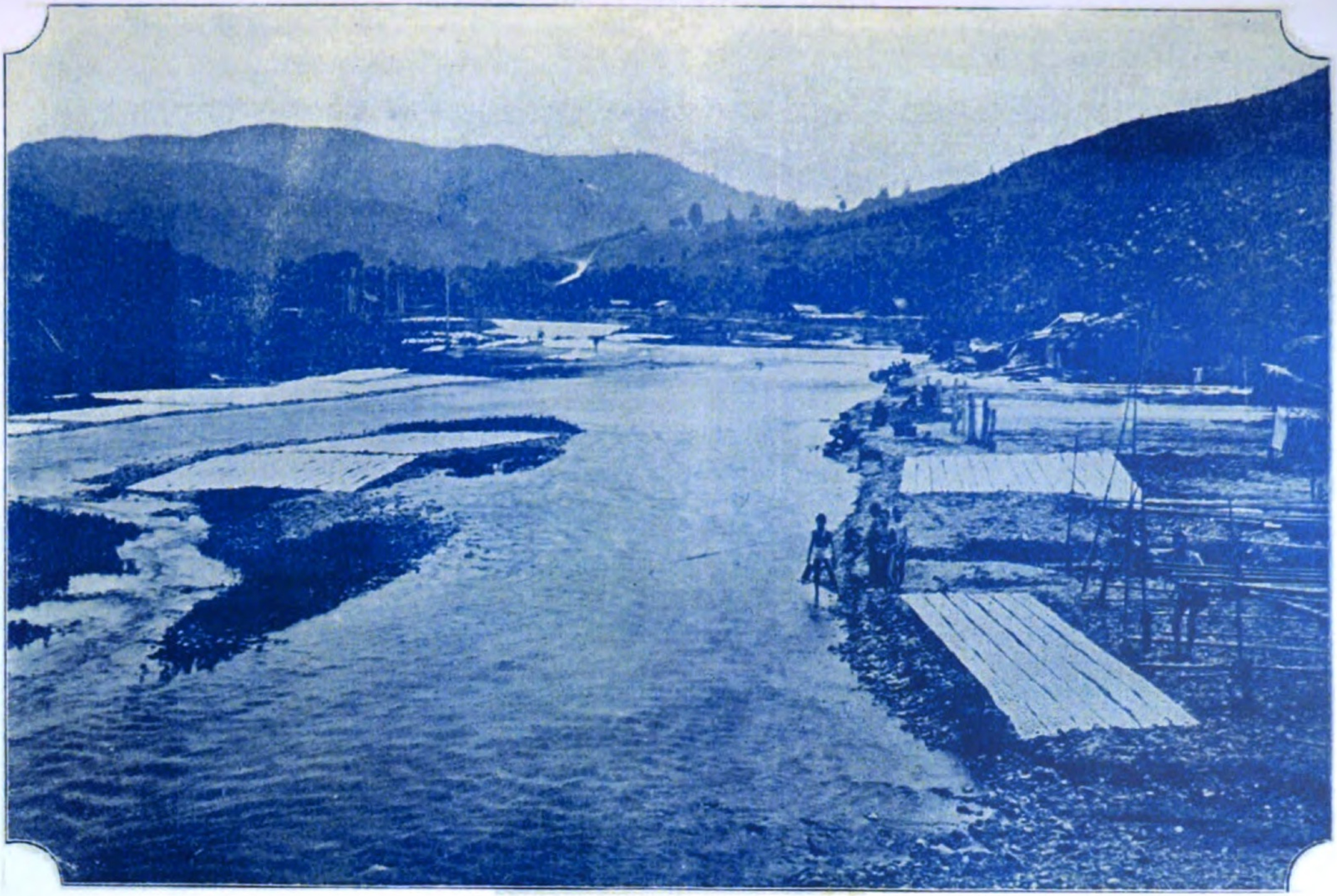
大阪 市川貞次郎氏寄贈



京都 黒川翠山氏寄贈

游鴨

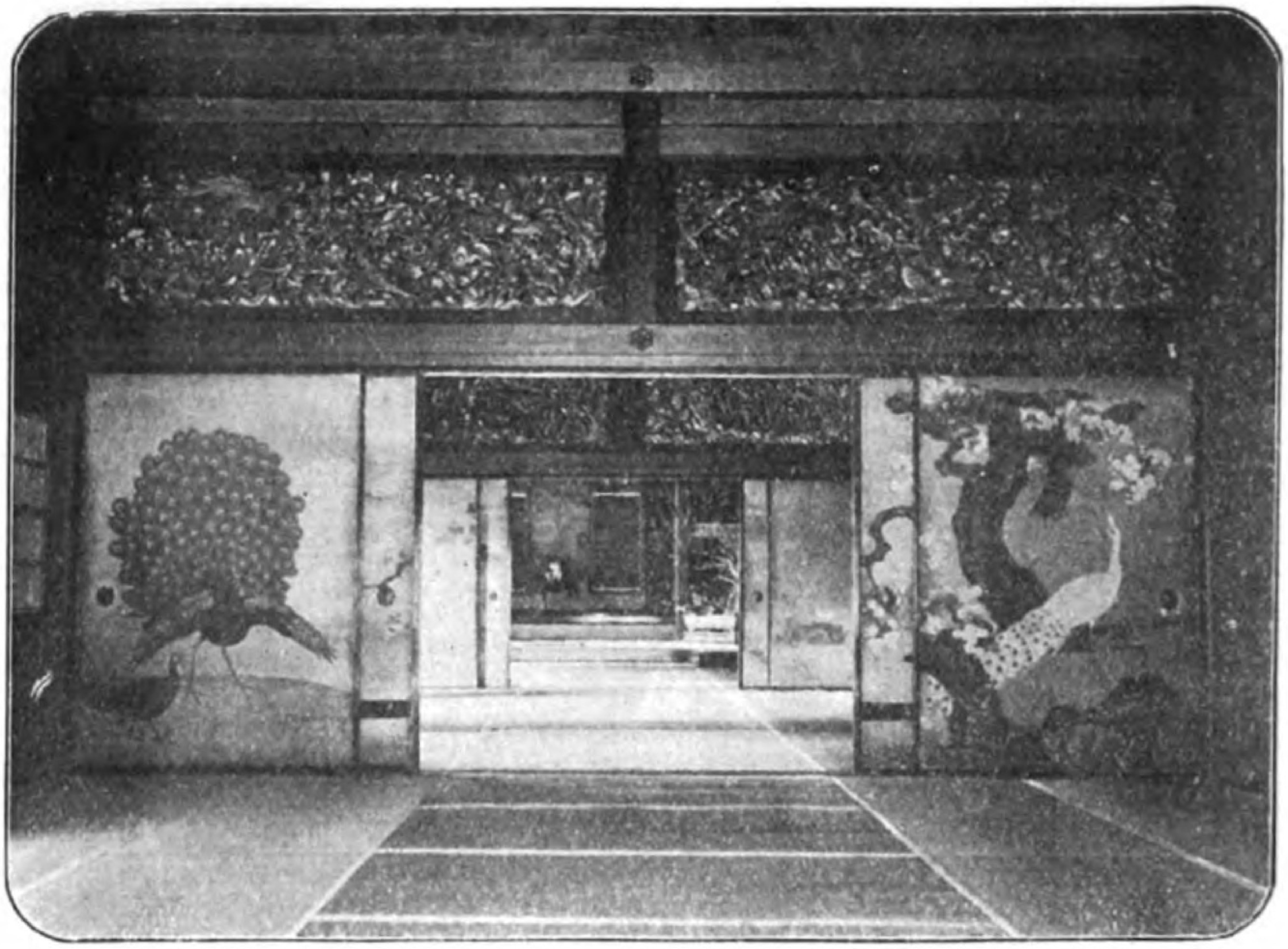
## 晒　布

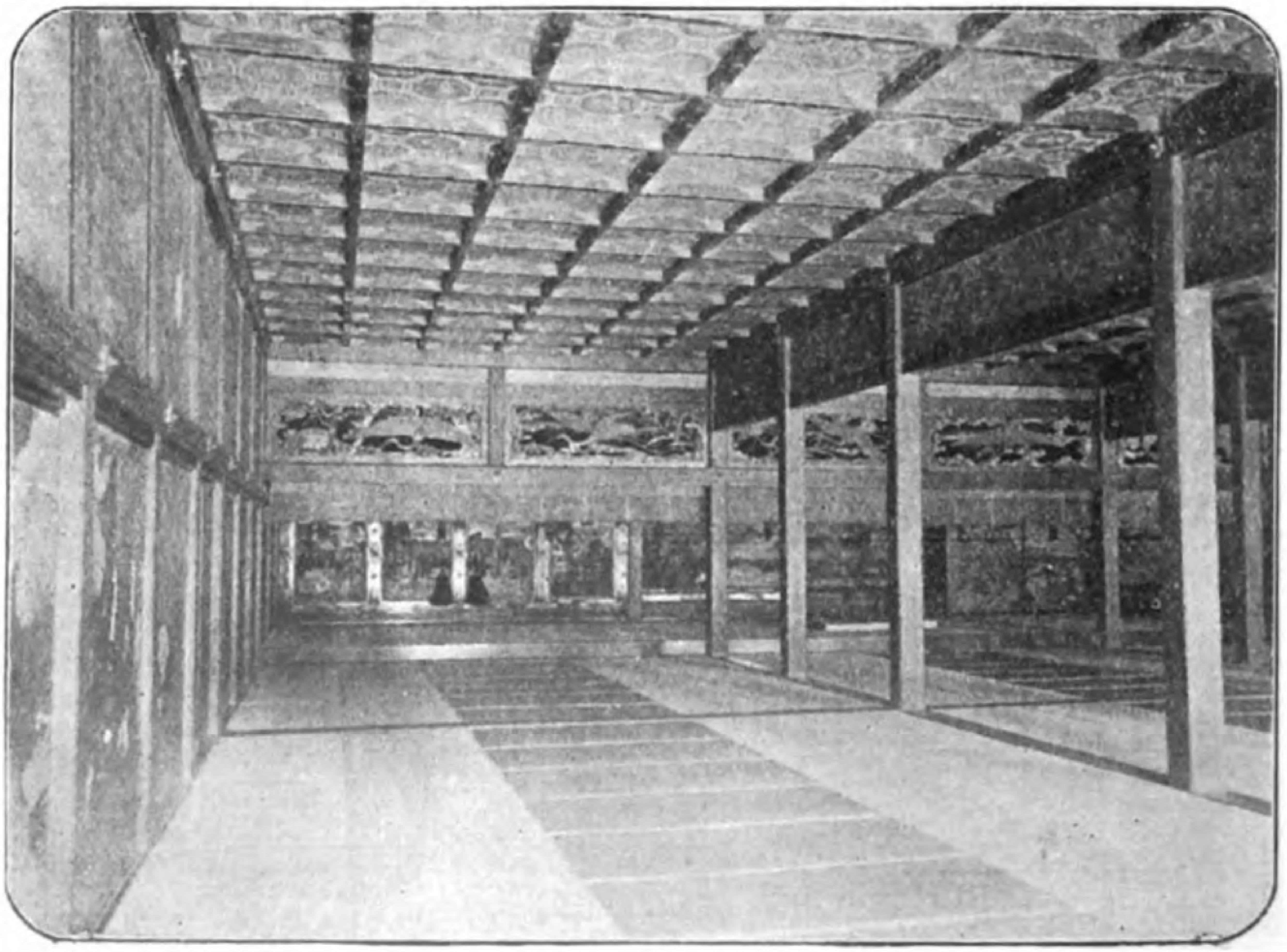


越後國加茂川の清流

# 本派本願寺の接待所

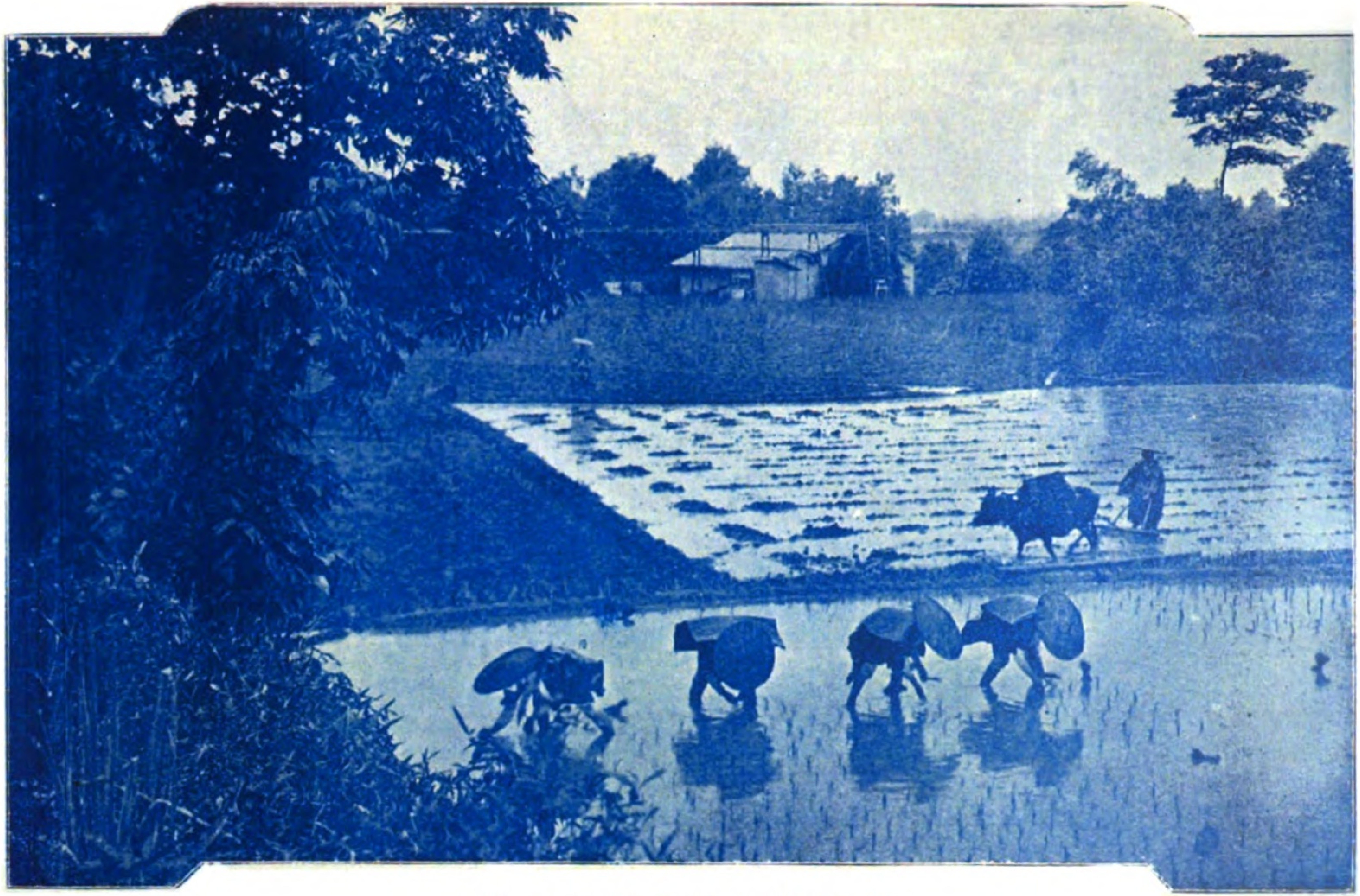
紫明の間





鴻之間

# 田植



（京都市外東洛若王寺村）

（關觀水氏寄）

# 旅途の伴侶

水哉 坪谷善四郎君著

## 日本漫遊案内

東部（東京附近、關東、東海道、中仙道、北國、奥羽、北海道、）……（一冊近日中發行）

西部（京都附近、中國、山陰、四國、九州、冲繩、臺灣）……（一冊本年秋發行）

全貳册 洋裝袖珍本 正價未定

**近來我國の交通機關**は、陸海ともに日に備はり、東西漫遊の遊客は年々に增加するも、皆其の漫遊すべき地方に於る完全なる案内記なきに苦む。是れ案内記無くして旅行するは、燈なくして暗中を行くが如く、目的の視察は概ね遂げずして、失敗と不快とを招くことのみ多ければなり。

**本書は著者自ら全國を漫遊し**、最近の精確なる材料を集め、親しく視察する所によりて編述す。凡そ全國の大都名邑、高山大川、港灣湖海、大社巨刹、名所舊蹟、温泉場、海水浴地等の風景風俗より、其等各地に至る順路、氣候、旅館、酒樓、遊觀地：船車の利用及其等の費用、物産及農工商業の事情、諸物價等より、各地歴史上著明の事實、其地方に關する古今名士の詩歌等をも編入し、且つ各地の詳密なる部分地圖と數十の風景風俗寫眞を挿入し、記事の盡さゞるを補ふて、實益と趣味と兼ね備ふることを期せり。特に旅行家の案内記たるのみならず、蓋し一部最近の全國地誌たるを得べし。

**總て案内記に必要**なるは、最も**新**しき**材料**により、最も精確に說明するに在り。之を爲すには著者平生自ら實況を視察せざる可からず、若し陳腐の材料に據り、漫然几上に編纂するが如きあらば、案内記の爲めに旅客を誤まること至大ならん。本書は此點に於て殊に意を用ゐたれば、從來旅客の爲に案内記不備の缺點は、庶幾くは此書によりて補足するを得んか。

（乙の一）

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

文學博士三上參次先生序文
文學博士芳賀矢一先生序文
山本九馬亭著

文學士藤岡作太郎先生序文
文學士嶋文次郎先生序文
越路太夫改 竹本攝津大掾
竹本彌太夫賛助

# 淨瑠璃通解

全部拾貳冊
一冊 紙數約二百六十頁
菊判大和綴 表紙優美

▲第壹編……七月中旬發行

淨曲が德川文學の精華にして當時の世態を反照せしにも係はらず學者其人を憎みて其書を捨て敢て一顧を與へさりしかば永く磨がゝさるの玉となりて空しく今日に至れり近時諸大家漸く其篇を認めこれが研究に從事するを見る著者久しく斯文に研鑽し精勵遂に通解を完ふす此文學は上雲上より下裏長屋に至る迄神祇釋教戀無常あらゆる社會の狀態を寫せるものなれば用語の範圍頗る廣く隨て解釋の難澁なるもの尠しとせず著者玆に注意し臺詞曲節の調より歷史地理の大に涉り隻語を遺さず正を質し歪を求めて斯文の精華を啓發して餘蘊なし蓋し淨曲の寶庫は此得かたきの秘鑰を得て始て世に萬丈の光彩を放つものといふべし

水谷不倒君校訂
## ●義太夫百番
全壹冊洋裝上製美本
正價壹圓郵稅拾貳錢

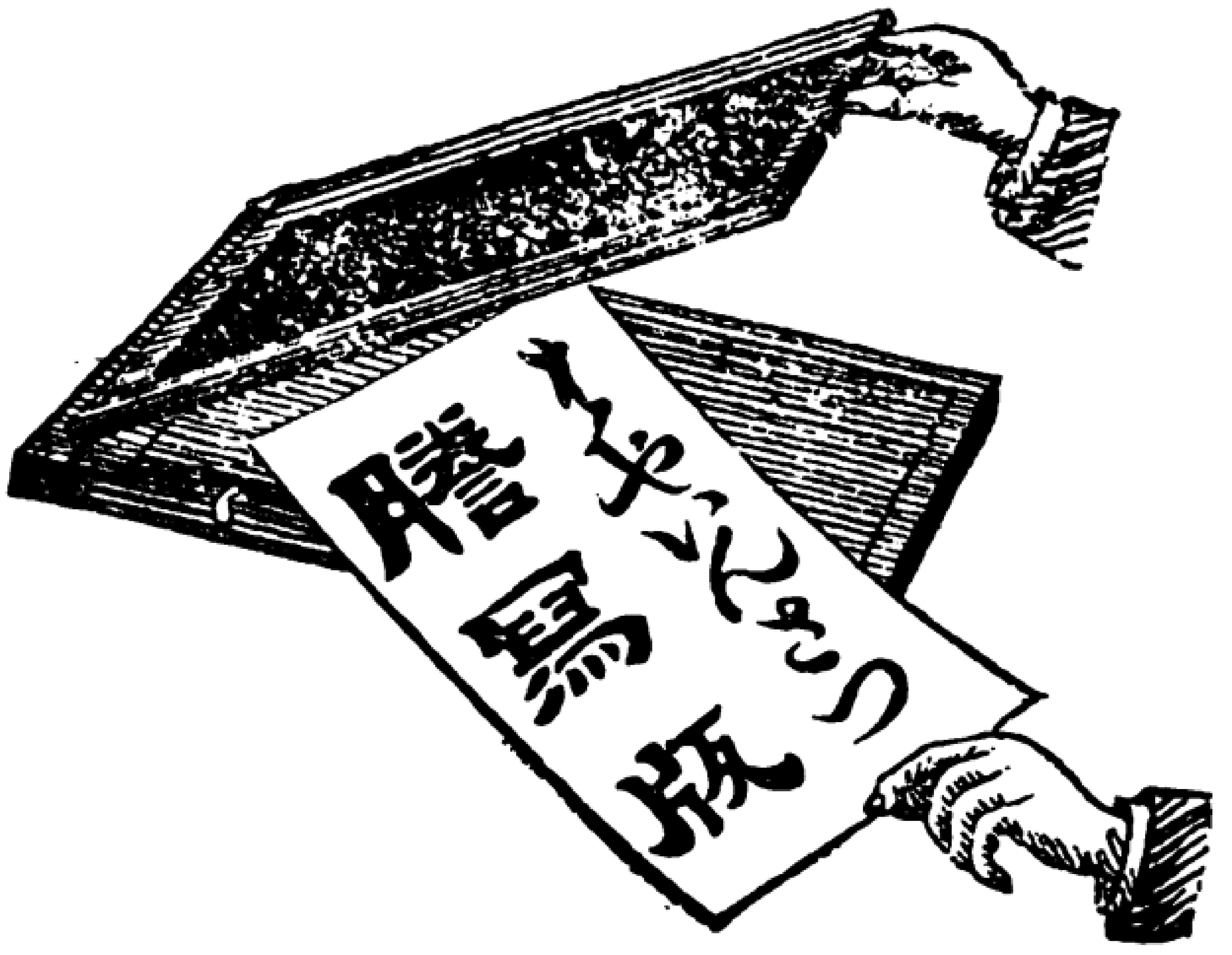
博文館編輯局校
## ●淨瑠璃名作集
全壹冊洋裝金文字入
正價六十錢郵稅十六錢

（その二）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

# 大改良謄寫版

●賜進歩賞牌 陸海軍御用 **専賣特許** 發明人 堀井新次郎




●本器は何人にても熟練を要せず直に實用し得らる

●一枚の原稿にて千枚以上を印刷し得、最も書畫隨意筆記の儘を寫す

●書體は眞草行隨意最も最字適當なり

●濃き墨色を主として赤青自在なり

●本器製品番號十餘萬號に及べり以て確實多望なるを知られよ

●解說書（和英二種有）及印刷見本御申越次第送呈す

## 販賣元 謄寫堂

東京神田區鍛冶町三番地（電話特本局千〇八十四番）

内國特約 大阪 岡山 門司 名古屋 函館 仙臺 丸龜 福岡 横濱 飯田 秋田 高知 富山 松江 其他

海外特約店は米、露、清にあり

今回佛國より原料を輸入し之に改良を加へ**暑寒共變質**なき**完全なるルーラ**を發明したる事を**本器拾餘萬**の御使用者各位へ謹告仕候（明治三十四年九月）

（乙の四）

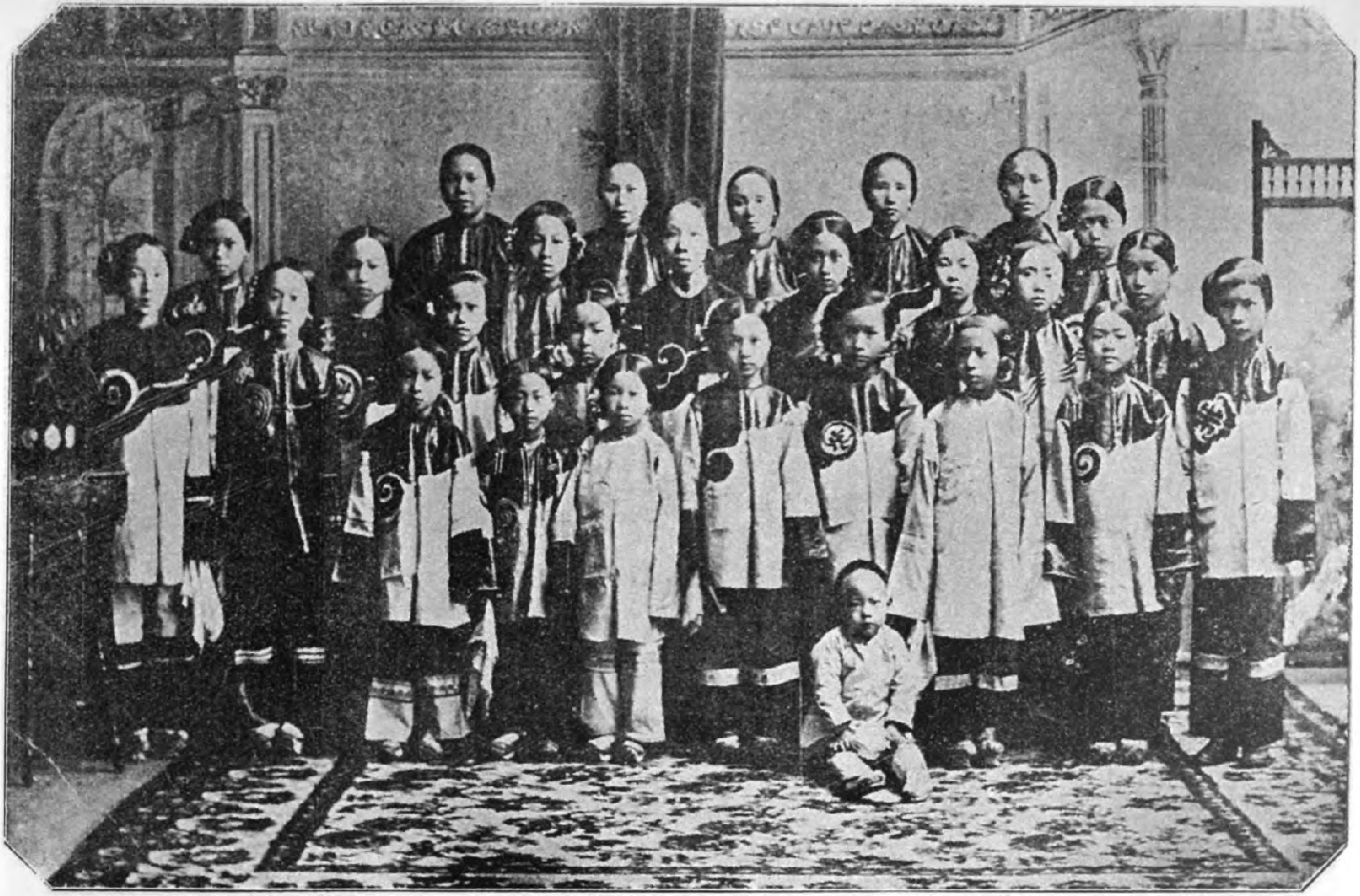


上田高等女學校卒業生

漁村の娘

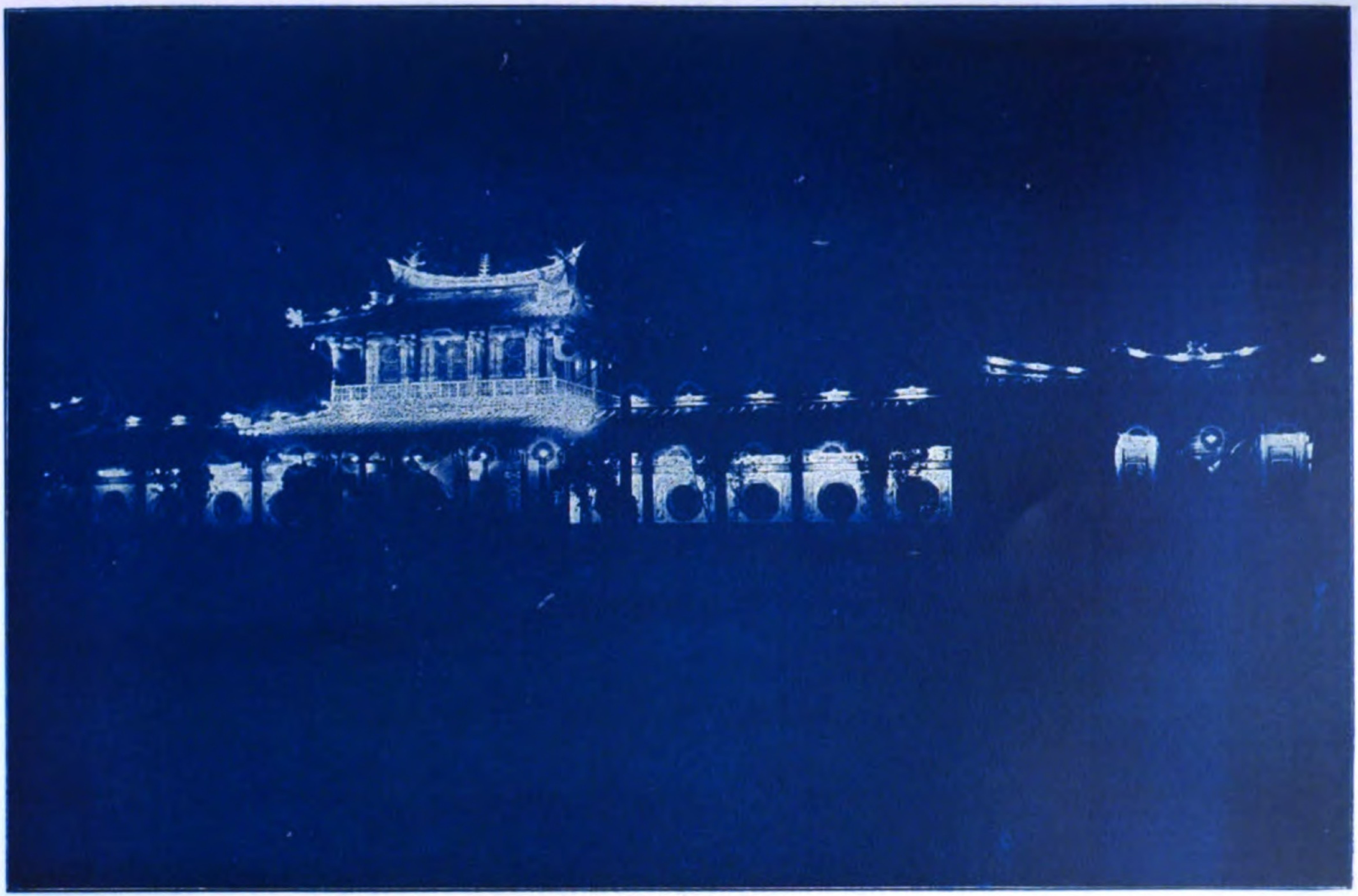


片山春帆氏筆



橫濱大同學校生徒

臺灣館の光飾



大阪博覽會の夜景

# 新刊書類

● 英人リッテル女史英譯　村田丹陵君畫
和英對譯日本昔噺 **猿蟹合戰**
正價金拾參錢　郵稅四錢

● 英人リッテル女史英譯　武內桂舟君畫
和英對譯日本昔噺 **松山鏡**
正價金拾參錢　郵稅四錢

● 早稻田大學講師　杉山重義先生著
**英文逸話集**
正價金廿五錢　郵稅四錢

● 中島義式先生著　挿畵數十個入
**新撰女子作法書**
正價金廿五錢　郵稅四錢

# 近刊書

● 小川文雄先生著　木版圖書九拾餘個挿入
新案圖解 **玉突術**
正價未定

● 飼鳥大家川口清五郎翁著　諸鳥實色彩色石版刷入
實地活用 **諸鳥飼養全書**
正價未定

● 英學新報社編纂
和漢名家 **英譯詩歌集**
正價未定

● 海軍教授文學士田中西熊先生著
英文譯註 **みさを物語**
正價未定

● 米人グリーン女史英譯
和英對譯日本昔噺 **花咲爺**
正價金拾參錢　郵稅四錢

● 米人グリーン女史英譯
和英對譯日本昔噺 **大江山**
正價金拾參錢　郵稅四錢

發兌元
博文館●東京堂

---

# 書籍雜誌

● 書籍雜誌の委托販賣は獨特の擴張法を以て賣弘め方取扱候間御申込被下度候
地方御同業者の取引は薄利を以て發送は日々敏速に勉強致候間御取引希上候

何れの出版を不問 **勉強販賣**
東京神田表神保町
電話本局二三番 二四八番
**東京堂**

● 弊堂出版部(文武堂英學新報社)は擴張し良書續々出版可致候間御愛顧希上候
弊堂本店博文館出版の書籍雜誌は悉皆取揃置き同館同樣割引發送共勉強致候

理學士山崎直方先生
理學士佐藤傳藏先生 共編

# 大日本地誌

全部十卷
約六千頁

第壹卷……七月中發行



●地形地勢　各地方に於ける地形の大勢を説き、山系、水系、海津、港灣の形勢を明かにし、氣象の梗概を明快に記述し、自然地理の形勢をして一目眼頭に來り迫るの思ひあらしめんことを期す。

●沿革　各地方に於ける歴史上の事蹟を地理的に描寫し、殊に古今の盛衰興亡に就きて多大の苦心を費せり、されば此沿革を以て、地圖と相對照せば、英雄豪傑龍鬪虎戰の野も都邑城市變遷盛衰の理も忽ちにしてこれを知解し得べし。

地理の書たる汗牛充棟啻ならずと雖も、其の描寫、其の觀察多くは普通の地誌たるにとゞまり未だ地形地勢より説き出して、沿革の變遷、產業の盛衰、行政、司法、宗教、教育、軍事等に及びたる者ある

發兌元　東京市日本橋

(丙の二)

と聞かず。本館多年これに慨する所あり、今回斯學の泰斗と稱せられたる山崎佐藤兩先生に囑するに此事を以てし、歐州に於ける最新地理の體裁を參酌し、以て大に本邦地誌の闕を補はんことを期せり。之を以て其の力を畫す所、全く在來の地誌と其目的方針を異にし、地文人文の關係を說くや極めて詳密、極めて明徹、竊かに誇りて本邦地理書中の偉觀と爲す。而してその卷冊の浩瀚なる、其叙述の明快なる、その製本の美麗なる、一として力を盡し思を致さゞるなし、況んや每冊鮮明美麗なる、彩色地圖を挿入すること十數葉、各地方勝地の寫眞版を添えること八十余頁、諸君をして錦上花を添えるの思ひわらしむるに於てをや。此書一度完成せば、日本全國に於ける地理は宛然これを掌に指すが如くならんか。今其の編著の方法の大略を下に示す。

**●行政司法**　行政區劃に於ては中央政府と地方政治との關係を明かにし、司法區劃に於ては、その管轄區域の詳細を記す。其他地方廳、裁判所等の所在地等勉めて洩すことなし。

**●軍事教育**　海軍に於ては鎭守府の位地及管區權能、組織、役員等を始めとして軍艦の所屬、造船所の內部等一々詳しくこれを說き、陸軍に於ては、師團の分布、師管の區劃、及各師團の特色等を詳說し、地理的觀察を用ゐて、或はこれを綜合し、或はこれを解剖し、一々批評を附し、詳密丁寧を極む。

**●產業**　農業、工業、商業、鑛業、林業、水產の六部に分類し、農業には米穀養蠶牧畜等の現今の景況より其歷史に及び、地理的分布を詳述し、工業には製糸、織物、陶器、漆器、銅器等の產地、沿革、製造の狀況等を記述し、商業には銀行、取引所より內國商業外國輸出の一盛一衰する有樣及其理由、鑛業には各地鑛山の分布、林業には國有、民有の區別、植物の種類及產額等、水產には各地方特色ある漁獵、遠洋漁業等を記述的に叙し、一として洩らす處無からん事を期す。

**●交通**　各地方に於ける鐵道、滊船を始め、電信、電話、郵便、道路に至るまで、細大洩すなく、本邦交通機關の要は　この中にあり。

**●地方誌**　都府を中心にして、其附近の名勝、古蹟、神社、佛閣等を記し、其他の地理的形勢に就き、最も其精を極めたり。殊に材料は皆最新にして最精確なるものを選びたれば、一面最良の地誌たると共に、また旅客の爲に好案內記たらんことを期す。

（丙の三）

區本町三丁目　博文館

藤本藤蔭君校訂

# 西鶴名著集

（近日發行）

全貳册

洋裝上製
背皮金文
字入美本
正價未定

上卷目次

(一)日本永代藏
(二)胸算用
(三)本朝二十不孝
(四)武道傳來記
(五)男色大鑑
(六)好色一代男
(七)全五人女
(八)萬の文反古
(九)俗つれ〴〵

下卷目次

(一)武家義理物語
(二)新可笑記
(三)本朝櫻陰比事
(四)好色三人男
(五)全一代女
(六)織留
(七)本朝町人鑑世の人心
(八)名殘の友
(九)置土産

附錄目次

●新永代藏……
●西鶴傳授車……

以上

博文館編輯局校訂●人情本傑作集
全一册洋裝背皮金文字入
正價六十錢郵稅十六錢

博文館編輯局校訂●梅曆春告鳥
全一册洋裝背皮金文字入
正價六十錢郵稅十六錢

博文館編輯局校訂●滑稽名作集
全二册洋裝背皮金文字入
正價六十錢郵稅十六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丙の四）

多田親愛先生筆

待賢門院堀川

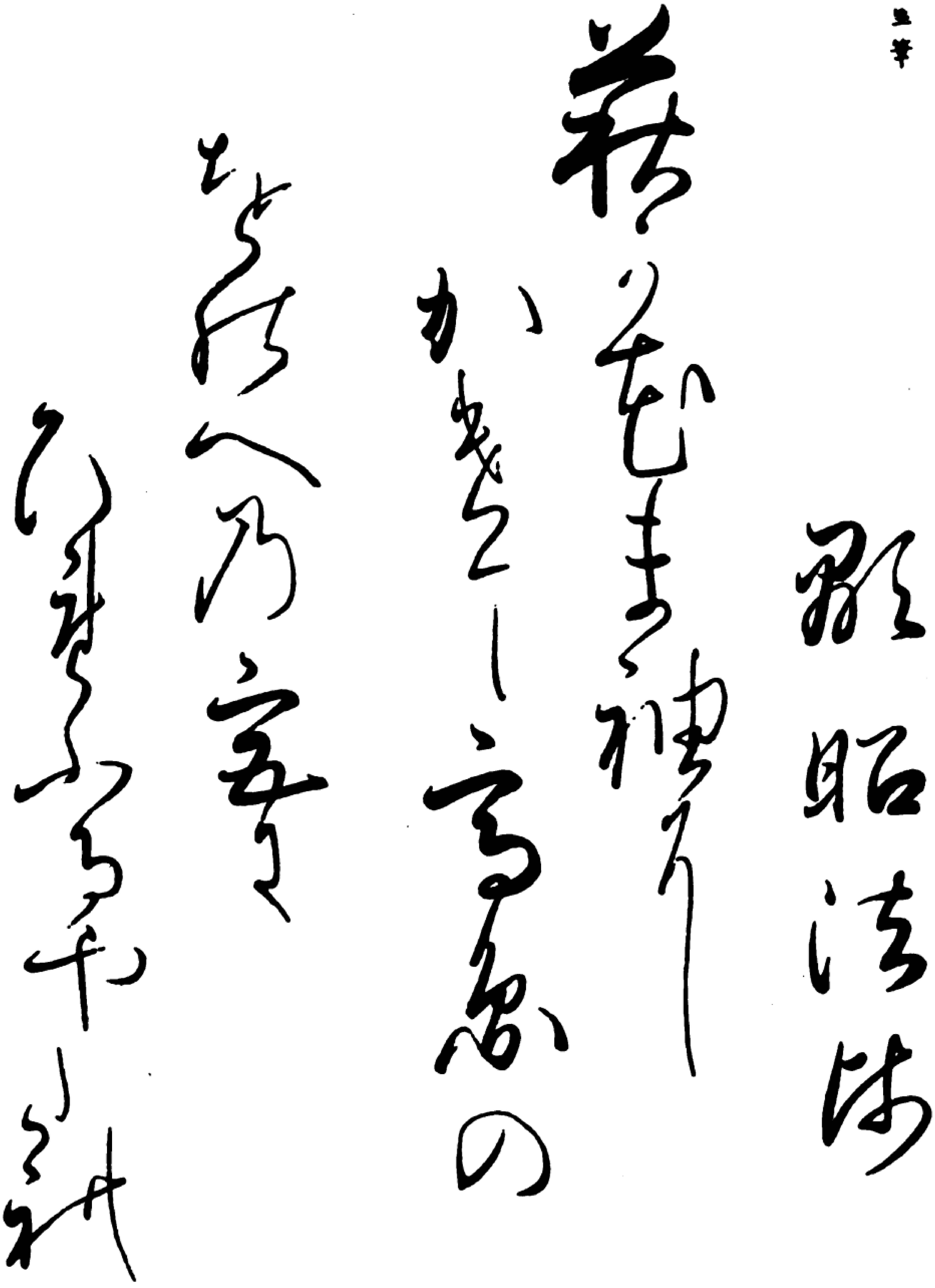
七夕のあふせたえせぬ

あまの河

いかなる秋か

わたりそめけむ

多田親愛先生筆



坂正臣先生筆

鉄道

回遊列車

卒業式

鵜飼舟

あさぢの原

避暑

鮎

夕立

はなび

坂正臣先生筆

あつさ彌増し候へど
の寧し極ばん御学校
休業となり候はゞ早く田舎
むさく御しめてなど御待ち
やそ御ものゞりゆるく
遊るべく楽ミまゐり候しこ

# 柳蔭夏色

野口小蘋女史筆

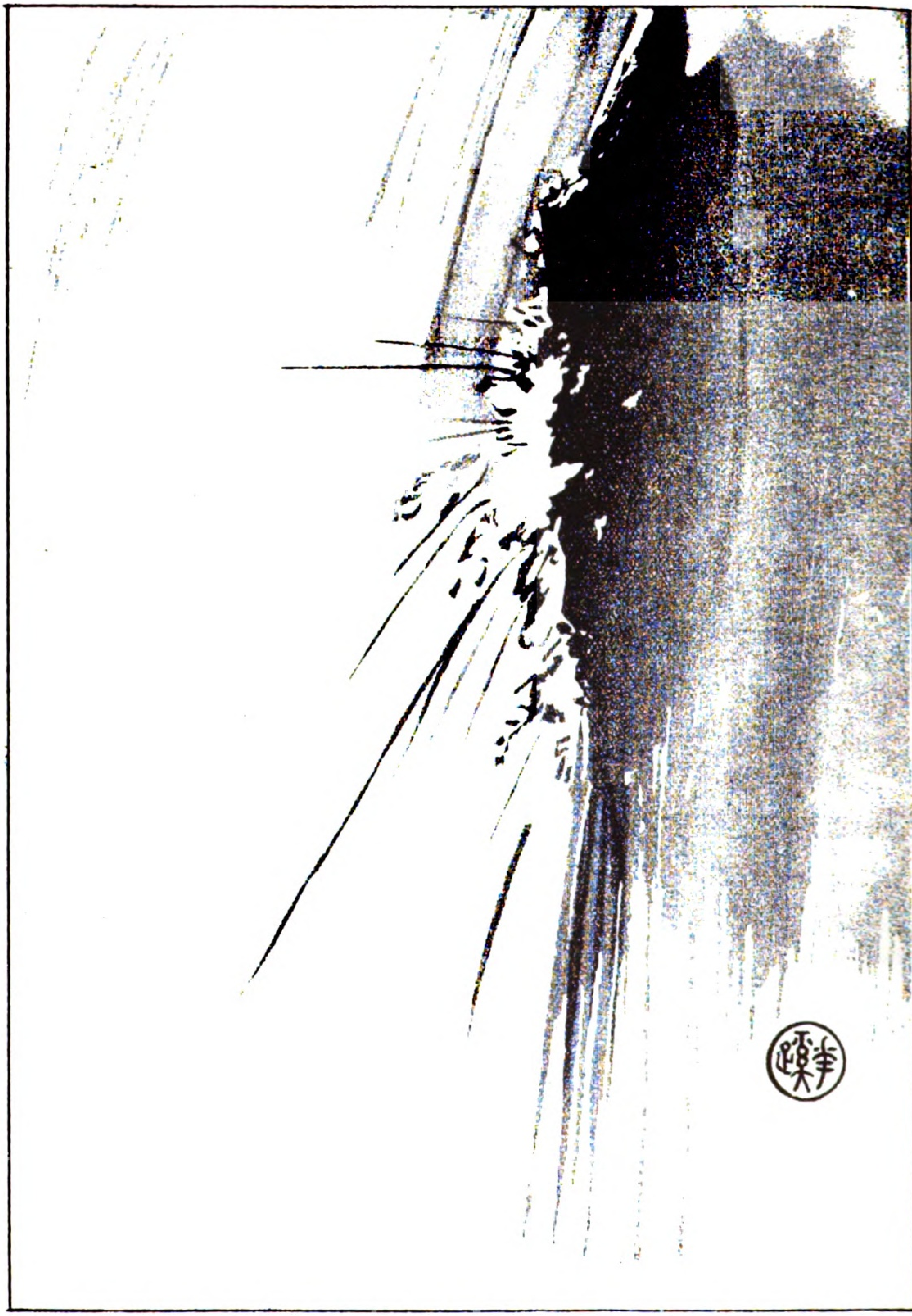


# 柘榴花

野口小蘋女史筆



瀑布



跡見花蹊女史筆

## 荷花

跡見花蹊女史筆




定期増刊
山と水
文藝俱樂部第拾號
七月十五日發行
正價貳拾五錢……郵稅貳錢五厘
炎帝漸く其の威を擅まにして、人々おのが好める山に、水に遊び行かんとする時は來れり。從來旅行家の好伴侶たらんを期し、各地の名勝佳境の案內を指導する書籍雜誌の發刊せられしもの、既に牛に汗し棟に充つるほどなれど、若し夫れ月靑く波冷かなる甲板の上、雨繁く霧闇き列車の窓に、讀者が旅情を慰むるものは、恐らく我が文藝俱樂部の夏期增刊『山と水』に如くものなからむ。先づ全篇を飾るに、寺崎廣業畫伯の才筆に成る二頁大の『美人海水浴を試む』の精彩木版畫を始め、本誌獨得の三色版及びアートペーパアの美人寫眞は素より『日本十二景』の絕美なる寫眞版十二葉を卷中に挿入す。記事は左に其の概目を列記する如く、小說あり、雜錄あり、旅行記あり、讀者一とたび此の書を讀まば、足其の名勝を蹈まず、目其の風景を見ざるに、早、既に此の書の奇趣妙搆に驚くなるべし。來る十五日發兌の日を待ちて、其の一本を諸氏が旅カバンに收められんことを望む。
山雨水晴……嚴谷小波
神泉嶋……江見水陰
京の山……中川霞城
京の水……中山白峰
うたかた……三嶋霜川
岩蓮華……武田櫻桃
木下川……磯萍水
水繪行脚……鶴澤四丁
山番……矢崎嵯峨の家
東海の仙區……勝間舟人
濱風……田村松魚
山の女……岩田烏山
夜の川狩……木村小舟
山小屋……田山花袋
發兌元
東京日本橋區本町三丁目
博文館

(丁の一)

蠶業叢書新刊

小田島次郎君 大森孫十郎君共著

# 多化蠶飼育論

全一册 洋装

●正價金三拾錢 郵税六錢

一利一害の事物に伴ふは宇宙の通則なり、蠶業に於ける各種の飼育法又之を免れずと雖も只利害優劣の輕重によりて其欠を補はざるべからず多化蠶は春蠶（一化蠶）夏蠶と異なり年數回の發生をなすを以て飼育法に於て大に異なる所あり隨て其取扱等甚だ複雜なるものあり本書之を論ずるに當り必要上先つ多化蠶の經過性質等を説述し次で其特質に論及せり蠶業に從事するもの請ふ本書によりて多化蠶を研究し優勝の好果を檢すべし

發兌元 東京本町 博文館

---

高等女學校（學科程度）初號より取揃（送本の準備有）

會長 子爵 岡部長職君（四號まで既刊六號七月三日發行）

講師◎修身、篠田教授◎國語、佐方教授◎地理、伊藤校長◎歴史、高木教諭◎理科、林校長◎家政、下田學監◎裁縫、喜多見舍監◎禮法、小笠原講師◎兒童心理、松本文學士◎女子衛生、鷲山校長◎割烹、赤堀講師其他名家論說會員の文章和歌等趣味津々

一種獨特の

各科解釋付 通信教授

# 女子學術講義

（目下入會の好時期）

女學世界へ廣告中

割引券

入會金特に拾錢に減ず 但し七月中

（見本郵券卅錢）

我が教育會は女子の爲講習を開き更に講義錄を發行す講義中難解の文字には別に註釋を加へ女子の讀易く了解し易き◉講義錄なり◎入會金廿錢◎會費三ヶ月七十五錢六ヶ月壹圓五拾錢壹年三圓一學期間四圓五拾錢◎入會者に會員證卒業者に卒業證書を授く◎卒業期一ヶ年半

東京神田一橋通町 帝國教育會內 東京府教育會附屬 女子講學會

（丁の二）

## 天下の人士に告ぐ

國家は一人の相集まりて成る者にて其人々の無病壯健なるは即ち國家の無病壯健なるなり、無病壯健なる國家にして始めて世界に雄飛すべし、今や文明の聖世に過ひ衛生の道大に進み、到る處病院國手の備へあらざるはなしと雖も人は病の器なれば、何時急病の發するやも圖り難し、此時に當て之れが豫防の良藥なくんば一厘の差は千里の誤り遂に醫師の治療を受くる機を失し貴重の生命を棄るとなきにしもあらず、且つ常に攝生を重んじて身体の壯健ならんとを欲する人は此太陽丹を携帶して自他の便に供するは誠に國家の爲めと云はさるを得ざるなり、大方の諸君幸に之れを賛語に附せず陸續御使用わらんとを乞ふ

東京日本橋病院長醫學士岡本武次先生新發見藥

## 懷中新藥 太陽丹

吐瀉　下痢　船車酒の醉　頭痛眩暉　胸腹痛等に著効あり　殊に食後四五粒つゝ用ふる時は　時候中り　食中り　食物滞り等の患なく精神爽快音聲清淨ならしむ

(價)千二百粒入金壹圓～二百五十粒入廿五錢～五十粒入金五錢
五百粒入金五十錢～百五粒入金十錢～全國郵送料二錢宛

東京日本橋區本石町大通り角　電話本局二一八六

**發賣元**　藥種貿易商　**博愛堂本店**

取次所は到處の藥店にあり品切の節は直接注文を乞

---

## 通俗農藝文庫第六編

農學博士　横井時敬君閲
農學士　井上正賀君著

## 氣候編

●正價貳拾錢……郵税四錢

各地の溫度、濕氣、風等の狀態及其變化を總稱して、氣候といふ、蓋し動植物の生育は、氣候に大關係を有することゝ、及び農業に從事する者は、氣候の影響に注意を要すること、言を待たず、本書專ら作物の生育病害と、氣候との關係を究む、蓋し天候を未發に豫知するの方法といふべし……………………

**發兌元**　東京本町　**博文館**

(丁の三)

（丁の四）




# 女子と文明

女子は人類の半面なり、家庭の半面なり、社會の半面なり、國家の半面なり、故に女子たるものは、その人類に對し、その家庭に對し、その社會に對し、その國家に對して、相當の智識なかる可からず。

智識は文明の源なるを以て、女子の智識は女子の文明を作り、兼て又た人類社會の文明を作る、未だ男子のみの文明を觀て、全たき文明とは謂ふ可からず、必ずや女子といふ文明の後援者ありて、初めて文華燦爛の光明を人生の上に放つを得るものなれば、新進の女子には是非共文明を脊負つて立つといふ覺悟あるを要す。

古來日本の女子は男子よりも能力劣れりと做されて、權力以外の片隅に置かれたるものは本能性の然るにあらずして、女子に智識の無かりしより來る誤解に過ぎず、故に此の誤解を正さんと欲さば、女子に於て家庭を辨識し、社會を辨識し、國家を辨識し、人類を辨識し、得る丈の學識を蓄へずんばある可からず、かくいふも是は女子に取りてさまで難き事にはあらざる可し。

是に於て余輩は言はんとす、卿等女子は宜しく智識を廣めて自己の領分を擴張すべし。識見を高めて自己の位置を高尚ならしむべし、望むらくは男子の話相手となり、良友となり文明社會の半面を支配せんことを、余輩は卿等女子の進んで此地に來らんことを待つものなりと。

# 家庭と快樂（二）

三輪田眞佐子

苦樂は畢竟人生の大問題ならんかし、卽ち苦を避け樂に就かんとするは一般民人の傾向なるなり、されど樂を求めんとて苦を買ひ苦を忍びて樂を得るものあり、思はざるべからず、わきて家庭は人の生活する所なれば今快樂につきて家庭上よりものせんも益なきにあらず。

昔印度の敎に苦行派なるものありと聞く、其は此現在の世にありて成る丈苦を行ずるを以て未來の世に樂を得らるものと信ぜしとかや、故に一見苦を求むる人もあるが如しといへとも其の究極の目的は樂に歸するが如し亦浮世を厭ひて山に入る人も一見亦樂を棄るが如しといへとも能く考ふれば一層大なる安心の地を得て一層大なる快樂の實を收めんとするを知るべし、例之ば西行も長明も大なる樂を求めんとて世を遁れたるにあらずや、祗王も蓮目も大なる苦を去らんとて世を退きたるにあらざるか、古歌に

春かすみ立つを見すてゝ行く雁は
花なき里にすみやならへる。

とあり、實に雁は花なき里に於て大なる樂を得んとし霞立つ春を以て憂きを感ずるに由るらん、世にも亦雁に類する人少からず、なとか一槪に論じ盡すべき。

されば行ふ動作は千種萬別あるも苦を避け樂を求めんとするは人生の事實なり、故におのれはこれを以て强ち人に高下の評を附せんとはせず、獨り苦を避けんとて可愛の妻子を見すてゝ山に入り、己のみ安きを貪るものは社會の罪人なり、亦樂を得んため人を害して利を射り己のみ苦を忘るゝ如きは道德の罪人なり、されば樂むは他を害せざるのみならず衆と共にするをつとめ、苦を遁るゝも亦己のみを先んせず衆と共にする覺悟こそあらまほしけれ。

これを以て家庭に於ける快樂も同じく家族共通のものを撰ばざるべからず、例之ば主人は能く酒に醉ひ食に飽くも妻は寒に叫び兒は飢に泣く家庭なきにあらず、甚しきは良人外にありて美人と戯れ妻女内にありて閨内の恨を懷く家庭なきにあらず、或は母たるもの美服をまとひて劇場に出入するも子女に敎育の道を與へず其の行く末如何になるらんと隣人の愁を博するものもありと聞く、要するに家庭の快樂は一人一個に偏して家族全般に及ばざるはおのれの採らざるところなり。

苦に於ても亦然り良人眉を顰むるを知らずして妻女の笑聲門外に聞ゆるものあり、母斷腸の思あるを悟らずして子放蕩の夢を破らざるものあり、老者病に苦みて水枕邊に到らざるものあり、要するに苦樂を共にするは夫婦の本義なり、若し家庭にして苦を分つを知らざるものあらばおのれは家庭の名を與ふるを欲せざるなり。

既に家庭に於て苦を共にするのみならず、樂も共にするを以て必要なりといへども、或る家庭にありては殆ど苦のみありて毫も樂なきものあり、勿論家貧にして苦むは良し夫亦は妻にして病むも止むを得ざるべし、されど衣食足りて露ばかりも苦の原因なくして樂む能はざるものあり、これ不幸の甚しきものなり、即ち夫婦相和

せざるため苦む如き、子として親の心を安じ能はざるため苦む如き、若し人は家族に敎育なきため不理不義の風吹きて悲しむ如き、或は家庭に趣味なく韻致なきため樂む能はざるが如きは、人生の一大恨事にあらざるか。

さて樂に二種あり一は精神上のもの他は肉體上のものなり、而して肉體上の快樂は口に美味を食ひ目に麗色を見居は安逸を貪る如きものなり、之に反して仁を行ふを悦び學を修むるを願ふ如きは精神上の快樂なり、思ふに肉體上の快樂は所謂物質上のものにして其の極は奢侈に流れ放慾に陷り勢ひ劣等の弊に傾くを免れず、されど精神上の快樂は不限に湧き出づる泉の如く樂めば樂むほど善に進み決して弊に染む憂なし、從ひて高尚の性質を有するものなし、是を以ておのれば家庭に於ても精神上の快樂を增加せしめて肉體上の快樂を專一とすることなきを望まざるべからず、而るに今日の上流社會亦は紳士社會と呼ばるゝ限にありても肉體上の欲求を充すを知りて精神の滿足を得るを知らざる觀あるを惜む。

若したとひ肉體上の關係を離れずといへども害なきのみならず寧ろ好すべきものを奬勵せざるべからず、例之ば日曜日亦は祭日に於て家族打ちむれつゝ郊外に行き、或は春の色を樂むも可なり秋の光を樂むも可なり、是皆家庭の快樂を增す源となると同時に心を養ひ亦體を養ふ所以となるべし、おのれはかゝる樂を以て坐輿に耽り飮食に飽くよりも高尙且つ有益と信ずるなり。

なほ苦を忍ぶには必ず將來樂を以て報いらるゝ考あるを要す、若し苦のみにして樂なきものと浮世を觀せんか失望を以て落膽するを免れず、古歌に

丈夫はしかまつ事のあればこそ

茂きなげきもたへしのぶらめ

而して一家庭に於て最も樂しきものは子孫の立身發達なり、實に兒の爲には夫婦の不和も止むべし況んや寒さを忘れて兒のために夜半の夢を破り唯子孫の行く末を思ふ心を以て家庭を結合する原動力となるべし、されど家庭教育は其の良否如何に由りて家運の盛衰は更なり人生の快苦も相岐るべし、己れ實子を育て亦他人の子を育つること少なからざるが近來一人の孫を得るに至り一家に和氣を增すこと大なるを覺えぬ、由りてかゝる考も一層切なるに至れり。

我が國は家族制度の習慣わるを以て夫婦てふ家庭の中心は老者を安んずることを忘るべからず、從ひて老者も亦一家の平和を破らざる考を有するを以て人の上たるもの丶任とすべし、思ふに床の間の花一枝、庭の先の菊一本は、大に老者の心を慰むるに足り、亦月夜の琴一曲は終日社會の風波に勞かれたる良人の氣を養はしむるに足らん、或は母の口より出づる一言母の身より現るゝ一行は子孫に感化を與ふること深きことわり、これ必覺するに家庭の快樂にわらざるはなし。

# 米國の家庭教育

井深花子

女史は、明治學院長井深梶之助氏の夫人にして曾て米國に遊學し、米國流の教育を受け歸來亘人と共に專ら子弟の教育に從事さる左は近日記者の訪問に就て語られたる談話の一節なり

米國は御承知の通り自由を尊ぶ國柄で御在ますから其の家庭も嘸ぞ自由の空氣で滿たされて居ることだらう豫想して居りました所、彼の地に渡つて實際の有樣を伺ひますると、仲々そんな風はなく、日本よりは却つて嚴しい位で御在ます。

第一　親子の同情　日本の家庭ではどうも子供が親の意に從はぬとか、親を親とも思はぬとかいふ風が見えます、從つて親の方でも子供に我意を募らせて打捨て置くを放任主義と心得て居るやうな傾向が見えますが、彼方では子供が親の監督の下に在る間は、子供に自由を與へません、男女とも二十歳位、即ち中等教育を受くる年頃は、兩親が保護を加へて嚴重に監督致します。其柄親子の間の情愛を申しますと、至つて深く厚いので御在ます。子供は親の同情を得ることと親の心に同情することを唯一の務と致して居ります。即ち親の感情に逆らはぬこと、碎いて申せば親の機嫌を損せぬやうにと致して居ります。親の方でも亦た子供の感情を壓へ付けませぬですから惡戯をしても頭からがみ〳〵嚙み付くやうな小言は申しません『阿母さんはお前が那麼事をするのを欲しません』又は『阿母さんは其を好みません』とか優しく申します、其故お友達が誘ひ出しに來ても母の顏色の惡いのを見ますと『母が私の出るのを好みませぬから……』と言つて斷りを申します。萬事が斯ういふ風で、親の好まざる事を敢てするといふことは子として忍ぶ可からざることのやうに思ふて居りますから、親子の間は誠に麗しいので御在ます。

第二　子供のしをき　子供が過をしても決して荒々しい叱言は申しません、是は懲らさなければ爲にならんと認めた時は、相當の體刑を加へまするが、それも極く優しく、子の手掌を平手で叩くので御在ます、日本の

子供なれば此位の事をされても何とも思ひませんが、彼方の子供は親に斯うされるのが何よりつらい樣で御在ます、其柄、椅子の上に立たせることが御在ます、此時は親が『お前は是々の事をしたから、此上に立つてお在でなさい』と嚴に言ひ渡します。すると子供は些度もあらがひませんで、言付通り素直に立つて居ります。又た戸棚へ入れるにしても親が泣く子を無理に引立てる抔といふことは毫も御在ません、『お前はこんな惡い事をして不可ないでは在ませんか、二階へお上りなさい』と申しますと、七歳や八歳の小さな子供でも親の言ふなりに成て、一人で階子を昇つて參ります。而して自分で押入の戸を開け、其の中へ這入つて泣いて居ります。阿母さんから御許が出るまでは何時迄も斯うして靜然として居るには感心致します。すると阿母さんは宜い頃を見計ひ二階へ上つて來て、戸棚から出して遣つて、物優しく其の罪過なることを言ひ聞かせますから、子供も自然母には心服する譯で御在ます。

第三　博愛の心　子供の時分から博愛慈善の心を養ふやうに教育するのは大切の事で御在ますが、この事に就て彼方の親は初中注意を拂ふて居ります。就中之を行ふ唯一の機會はクリスマスで御在ます、此の日兄弟達は互に贈物を遣取致します、又た親類の叔母さん叔父さんからも樣々の贈物が參りますので、阿母さんはその子供衆を側に呼んで、申しますには『お前達は人樣から戴いて許居ては不可ません。お前達も其丈の御禮を神樣に捧げなければなりません、ですからお前方も何か贈物をなさい、困つて居る可哀相な子供達に何かお遣りなさい』と申付ます。其故子供達は近所の貧乏人の子供に夫々贈物を遣つて喜ばせます。誠に善い習慣で御在ます。是等は些細の事のやうですけれど、絶えず斯ういふ鹽梅に躾て行きますから、知らず識らずの間に博愛の

心慈善の情を養ふことが出來、成長の後社會に出でゝからも大層之が益になるので御在ます。かういふ風ですから彼方の人は慈善や義捐の事を己の名譽と考へて居ります。日本なれば義捐金募集の人でも來やうものなら善い顔どころか、迷惑相に出すのですけれど、彼地の人は斯る場合喜んで其の要求に應じます『人の不幸を救ふほど喜ばしいことは無い、私に親切を盡される機會を與へて下されたのは、ほんに神樣の御蔭で御在ます、私は是を神に感謝致します』と申して例へば腰の曲つた、さまで餘祐も無いお婆さんでも、必ず應分の喜捨を致しますが、是には毎度感服致します。

第四　家庭の富裕　米國の家庭の平和で、且つ麗しいのは一つは金があるからで御在ます。つまり家庭が裕であるのは個人が富貴の所爲で御在ます、何な婦人でも相當の貯蓄を有て居りますのを見ても解ります、而して其の人が一人者でもあると逝去ります折、親類の中で困つて居る者に遺産を讓つてゆくといふ風ですから、自然社會に浮いた金が出來、延いては國家を彼の通り隆盛ならしめ、富の度を高めたので御在ませう。それに男女が結婚を約しますと、互に先づ家庭を作るに足りる丈の資産を拵へて置いて、而して後婚禮し、玆に初めて新らしきホームを持つことにしてありますから、餘裕のある立派な家庭が出來上るので御在ます、此方のやうに處帶を持つてから稼ぎ出すのとは違つて、先づ身上の土臺を据ゑてから結婚するのですから、あはれな家庭がなくなる道理で御在ます、誠に是は宜しい風習だと存知ます。

# 女子教育時言（下）

女學記者

## 高等女學校教授要目私見

修身を離れて國語、地理、歴史其他の各科目に就て見るにいづれも注意周到にして學理を基礎として應用を重んずるの趣旨を明かにしたるは甚だ喜ぶべし譬へば文法を學ぶに就ての注意に故事故語に關しては初より簡單なる説明を與へ、徒らに生徒を苦しましむべからずと言ひ、作文は達意を主として用語の爲めに思想を拘束する弊なからしむべしと言ふが如き、又歴史上の注意として社會の變遷、邦國の盛衰に關する明晰なる概念を得せしむることを主とし徒らに細密なる事實の穿鑿に流れざらん事を要すと言ひ、將た地理上の注意として既知の事實より之に關係わる未知の事實に及ばさんことを旨とし事實の比較連合を力むべしと言ひ又手藝に就てはなるべく多岐に亘らず熟練を旨とすべしと言ふが如し、是等教授上の注意は教育上至當の用意にして平々凡々別に事新らしき訓示にあらざれども、從來形式一邊に拘泥して學問の活用を失ひ、徹頭徹尾詰込主義を以て滿足したる官邊の學校に於ける教育上の注意としては聊か異數の事とすべし、而かも猶學習すべき科目徒らに多くして、その細目を一々正確に教へんと、今の高等女學校四年の學期を以てして到底堪ゆべきにあらじ、如かじ、その科目を半減して、その少數なるものに就て熟練徹底せしむるこそ女子教育の效果を收むるの捷徑たるべし、即ち徒らに多數の科目を未熟に教ゆるよりは少數の科目を精密に教ゆる方生徒の身に取つて便益大ならん、論より證據、今日の高等普通教育は學習すべき科目の徒らに多くして、學生の多くは學問の食傷に勞れ、その結果不消化の儘にして卒業するもの多く是を以て一度び世間に出づるや學校にて學びしもの、大半は既に忘却して殆んど活用すべからず、前後數ヶ年の學校教育は徒らに個人を苦しめ、社會の不經濟をなせしに過ぎざるの觀あり。男

子にして然り、況んや婦人の身に於てをや、女子が學校を卒業すれば多くは皆嫁して家庭の人となるべきに、現在家庭に於て爲すべき事柄は學校にて學びし科目と殆んと緣因なく、否寧ろ緣因なきにあらずと雖も、俗世界の事は存外卑近、淺薄のものにして家事と裁縫、手藝の二三科目を除けば、他の歷史と言ひ、地理と言ひ、理科、國語の如き實際家事家政とは風馬牛も啻ならず居家處世の上に於て殆んと全く無用の長物たるの觀あり、但し女子の學問は必らずしも居家處世の上に直接の必要のみを目的として授くるものにあらずと雖も、家事を營むに全く關係なき學問を注入して、諸生を苦しむるは敎育上の弊害とせざるべからず、況んや、その無用の學問をせざる可からざるが爲に有用の學問をして等閑ならしむるに於てをや、故になるべく未必用の學科を省略して當用の學科を專攻せしむるは個人幷に社會の爲めに計つて上策ならん是に就て吾人の希望をいへば、全部十四項の學科の內に就て西洋歷史東洋歷史の如き、地理中の地文學の如き、理科中の動植物の分類、解剖の如き、又化學及び礦物學の如き、物理學中の諸細目の如き、又圖畫の如き、算術中の代數方程式の如き、又國語中の中古文の如き、いづれも徒らに學生を苦惱せしむるの料たらずんばあらず、この如きは宜しく省略し、その省略したる餘力を以て他の必要なる學科を十二分に徹底せしむるは、學問經濟の上に於て策の得たるものならずや、吾人は文部省の訓示の精神に就ては大贊成なれとも、學科の諸目を從前の儘にしてその應用を求むるは事甚だ困難ならん、文部省は徒らに學科の體裁を完備せしむるに急にして實際の運用を遲鈍ならしむるものにあらずや。是れ吾人が今回の訓示に對して甚だ遺憾とする處なり、學校敎育が徒らに活きたる字引を造り出して社會に無用視せられたる事多年、今や稍く新文明の曙光に接して亦世間に學問食傷の弊を言ふものなしと雖も、實際上學校敎育が活ける人物を造らざるは明かなる事實にして、今より二十餘年の昔、獨立自尊宗の開山福澤翁は、その文集中に敎育に關して言へる事あり、言は

聊か奇矯に走りたるも、學校教育の時弊を刺して痛切を極めたり、即ち左にその一節を抄記せん。

教育の事を喧しく言ふ人の言を聞けば今の世に生れて地球の圓いと言ふ位の事は知らねばならぬ、歴史の一と通り位は心得ねばならぬとてその言如何にも尤もに聞こへて誰一人之に否と云ふ者なし、されとも今茲に二人の男をならべてその一人は此世界を圓きものと思ひ他の一人は平かなるものと思ひ。又その一人は和漢西洋の古事來歴を知り、一人は頓と歴史など讀みたる事なし、一口に言へば一人は物知りにして一人は物知らずなれとも今日一家の世帶を持ち人に交はりて世間の附合をするに二人共に左まで替りたる事もなし、夫のみならず、或はその物知らずの方が却て甲斐々々しく立廻りてよく働らくものなり、されば一家の爲にも世の中の爲にも働のある者こそ所望なれば此物知らずを崇め尊び、向後の心得として成る丈人を無學文盲に導く可き歟、これも甚だ不都合にして家の爲め不安心なり、さりとて物知りは實に役に立たず誠に以て當惑の次第なり、進退如何にして可なるべきや。

此疑問は一寸難題のやうなれとも少しく考ふれば譯もなき事なり、彼の物知といふ人物は物を知るのみにて物と物との縁を知らず、一に限たる物事を知るのみにして其物事の此と彼と互に關り合ひあるの道理を知らざる者なり、學問の要は唯物事の互に關り合ふ縁を知るに在るのみ、此物事の縁を知らざれば學問は何の役にも立たぬものなり、故に地球の圓きを知るは地理學の手始めのやうに思はるれど己が住居する町の名も知らず、己が家に附たる田地の幾反あるを知らざるは地理學の順序あるものといふ可らず、地理を學ぶに地球の圓きを知るは甚だ緊要なれども、その圓き事に縁を求めて考へざる可からず云々又英國に、何等の產物ありて亞國にては何の品を製するや、東京の唐物屋にて求めし八角時計は亞米利加の製にして神戸の呉服店にて買ひし唐棧は英國の產物ならん、橫濱より輸出する茶は米國へ送り込まれ、神戸より積出す絹は佛蘭西へ行くならんなど樣々の物に觸れ事に當りて之を平常

學び得たる學問に照らし合せその學問を活かして用ゆればこそ地理學も役に立つものなり、詰る處ろ地理の學問も產物商賣等今日の事に緣なければ之を知るも知らぬも同樣なり。

歷史も亦この通り漢史に曰く周の武王は文王の子なり殷の紂王を滅して天下太平を致し在位二十年にして崩ず、太子立つ之を成王と爲すと又日本の歷史に曰く永祿四年秋九月上杉謙信一萬三千の兵を率ゐて信濃に入り武田信玄と大に川中島に戰て勝敗相半すと和漢の歷史に記する處ろ大抵この類なり、然るに古來之を歷史學と唱へて大切に思ふは何ぞや實に譯の分らぬことなり、爰に歷史あらん、前町の黑は斑の子なり、橫丁の白を嚙み倒して町內に威張り其後河豚の肝を喰て死す、今の白斑は即ち黑の子なりと、又明治九年六月の梅雨に向ふの小溝のこかげから蝦蟇が三疋飛び出して又此方からも飛出して互に腹をふくらして組んづ結んづ戰ひしが勝負は慥に分らずとては犬と蝦蟇の歷史なれども面白からざれば耳を傾むくるものなし、されど周王の歷代も黑斑の歷代も、川中島の合戰も小溝の合戰も等しく歷史合戰なるに一方を大切として一方を粗略に思ふは何ぞや實に不審に堪へざるなり、數百卷の歷史を讀んで國王歷代の系圖を詮索し、武將勇士の功名を記るし之を暗記するも天下古今人情の成行を知らず其互に鬪り合ふ因緣を知らざれば唯無益の骨折たるべきのみ。

故に彼の物知りと云ふ人物は實に物知りにして物の緣知らずなり、地理を知つて地理の緣を知らず、歷史を知つて歷代の緣を知らず、その功能は地理歷史の字引に異ならざる者なり、强いてその異なる處ろを云はんとならば、紙の字引は飯を喰はず、人の字引は飯を食ふの相違あるのみ。云々

學校敎育の歷史地理學が、社會の實際に用をなさゝるの弊を刺して痛切なりといふべし。

# 婦女雜觀

桂濱月下漁郎

女の男に望む所少くして、男の女に望む所、何ぞ多きや。

女とてもわざ〳〵多く望まざるに非ず。財產あり、學問あり、地位あり、賢にして人情あり、色白くして風采よければ、これに越したるとはなけれとも、そのやうに慾張りたりとて、容易に得らるゝものならねば大抵の處にてあきらめをつけて、多くを望まざる也。情のあつき人ならば、醜男子なりとも可なり、學問が出來れば、財產はなくとも可なりなど、たで喰ふ蟲もすき〳〵、それ〳〵あきらめをつけて、一生をうちまかして、不足を言はざるが常也。

之に反して、男の女に望む所は、頗る慾張る。美人ならざるべからず、學問も出來ざるべからず、琴、生花、茶の湯などの藝なかるべからず、賢にしておとなしからざるべからず、裁縫も出來ざるべからず、家政に長せざるべからず、交際も上手ならざるべからず。持參金あれば、なほ更結構なりなどゝ、人の慾に限りなし、もしその望む所がかなはざれば、はじめ目につきし女房も、直に鼻につく。さりとは、餘り無理ならずや。

男は女の美なるを望む、されど、家婦たるものが朝から晩までお化粧のみして居らるべきものに非ず、且つ色は年と共に衰へ易し。美なる女も子の三四人もうむうちには、その顏やつれざるを得ず。夫たるもの、これをこれ察せずして、愛想つかすは、不人情も亦甚しと云はざるべからず。

遊び相手、酒の相手に面白きものと、一家のしまりをよくするものとは、兩立すべくもあらず。妻は一家をとりしまるものなれば、じみなるがあたり前也。世上の男子、藝者や酌婦に求むる所を以て、之を妻に求め、その無趣味なるを尤むるは大に誤れり。

女の氣の大すきぐるは、困つたもの也。一家の妻たるものは、よくしまりて、小心翼々として、妄りに濫費せざるやうにせざるべからず氣が少しでもゆるみてはしまりが付かず、一家の經濟上、非常なる損害あるべし。

女の酒を好むも、困つたもの也。酒のめば、自然氣が大きくなり、なげやりになり、色々な過失をしでかすべし。酒のむ時の相手には、飲める口の女がよけれど、一家の妻としては、甚だ不可也。飲むも、二三杯のめば、直に赤くなる女こそしほらしけれ。尤も家を嫁にゆづりたる老女にありては、必ずしも此限にあらず。




女の強情なるも、困つたもの也。男は智惠あるか、藝能あるかなれば強情なるも、その強情が却つて爲めになるとあり。されど、女の強情なるは、始末が付

き難し。女は家婦として夫に事へざるべからず、また舅姑に事へざるべからず。從つてすなはなるとは、何よりも先きに必要なると也。

女のなまけものなるも、困つたもの也。



中等以下の家婦にありては、一日の要務頗る多し。下女なき家は朝早く起きて、飯をたかざるべからず、夫や小兒に辨當こしらへてやらざるべからず、衣服も見苦しからざるにしてやらざるべからず、垢つかぬやうに洗濯せざるべからず、室内もきれいに掃除せざるべからず。何から何と細かな用事頗る多ければ、いそしく立ち廻はらざるべからず。家婦がぶしやうものならば、家の内しだらなく、殊に臺所がだらしなく、戸棚の中が亂雜になり居り、夫には垢つきたる衣服を着せ、子にはほころびた衣服を着せ、從つ

て經濟もうまく立ちゆかずよろづにつけて損失が多き也。

女の不規律なるも、困つたもの也。出したものは、出しッぱなしにし、話しが面白くなれば、おみこしがすわりて動かず、物を整頓しておかず、いざ入用となれば、大騷ぎしてさがすも、容易にみつからず、これ畢竟するに不規律なるに由る也。家婦たらむものは、何事も順序正しくし、必ず物を整頓しておくやうにありたきもの也。

小才を恃みて利口ぶる女も困つたもの也。まことの智惠あるにあらねば、わけがわからず、何事も自分のするをよしと思ひて、高くとまり、人を見下し、人の言を用ゐず。教育してやらむにも、手のつけやうなし。牛うり損ふも、かゝる女なるべし。

工女、女髮結、酌婦、藝者、娼妓など、女子が世間に職を求むるの道は、多くいやしきわざなりしが、女教師出來たり、看護婦出來たり、新聞記者も出來たり、電話交換手出來たり、郵便局員出來たり、會社員出來たり、かく女子は社會に進み出でゝ、その領地をひろめつゝあり。人生は勞働の謂に外ならず。女子がかく獨立自營の道を求むるの道ひろくなれるは、女子の爲めに祝すべきこと也。その中にも、男子には出來難くして、女子に最も適するものは、看護婦也。女子や概して情に富みて深切におとなしくして、周密也。從つて看護婦の如きは、その最も適する所也。看護婦は、また一面に勇氣を要す。柔順なる女子には出來難かるべきやうなれど、女子情熱しては、案外に男よりも却つて度胸のすわるもの也。從つてよく看護婦の職をつくす。余は女子が酌婦以下の賤業に從事する代りに、此方面に向つて進むものゝ益多からむことを望む者也。

家庭

# 婦人會の長者

## 毛利公爵母堂の人物

貴族社會の婦人たちも、近頃は各種の婦人會に澤山見受けるやうでありますが、ツマリ同じ顔の方たちが彼會にも此會にもお出かけになるといふやうなことで、指を折つて見ますると、その實幾人もないのです。中で毛利公爵母堂と鍋島侯爵夫人とは、最も夙くより婦人社會の事業に關係して名望ある方々で御坐います。殊に公爵母堂は御老年でありますのに、早くも新時代と同化されたので、世人の多くは或は一種の女丈夫のやうに、または一箇のハイカラ的婦人のやうに母堂の人と爲りを考へて居るやうで御坐います。

併しながら遠方からの想像は、折々實際と相反するもので、毛利公爵母堂の人物の如きも慥にその一例で御坐います、母堂に昵近の人は皆申します、母堂の長所はたしかにその婦人らしき優しき感情と、その貴族的品位にあるので、母堂はどこまでも鷹揚な慈愛深きお方です。すべての事柄の光明なる側にのみ心を寄せてその暗黒な方面に及ばれぬがまた此方の特色です。

德川時代に於ける諸侯の夫人は、始終江戸住みで良人と同棲する機會の少かつた爲か、今に華族の婦人中には、全く家庭の樂しみを解せぬ向も多いやうでありますが、毛利公爵母堂の何よりのお樂しみと申すのが、一家親族をお集めになり、晩餐の御馳走のあとへ老人も子供もうち解けて嬉戯することで、たまには若き方々に音樂をお命じになり、御自身に舞はるゝことなども御坐います。母堂は一體その天眞を慈悲深き人柄に掛てゝ加へて、どちらかと云へば賑かな事がお好きな方で

わりますので、その住まはる丶高輪の邸は、常に和氣洋々、イヤに鹿爪らしきものと相場のきまつた執事も此邸のは實に親しみよげな人たち計で、女中のしとやかに丁寧で、しかも氣の置けぬのにも、御主人の人柄が代表されて床しき心地で御坐います。

母堂はまたその關係せらる丶婦人會や慈善會を思はるるとは恰も慈母のその子に對するやうで、有體に云へば昔の御婦人のことでありますゆゑ、之といふ奇拔な考を以てその會を指導さる丶といふ程の事もありませぬが、會のために盡力する人々を心より愛遇して、常にその意見を尊重されるのです。そして御自身に出來る限り會の便利をお計りになることを少しも臆屈うに思はれぬので御坐います。母堂の會長たる大日本婦人教育會の、今の婦人會中最も盛大なるものと云はれますのも、是等の所以でありませう。

母堂はまた福田會惠愛部の部長であられます。純然たる慈善のあつまりでありますゆゑ、その愛憐ふかきお心より、何かと世話の屆かる丶には皆々感服するので御坐います。外國婦人などに交際社會に於ける母堂の評判を聞きましても「禮儀正しく上品なお方」であるとは凡ての人の一樣に申すところで御坐います。

此頃救世軍はその克己週間に於て、名ある華族方に細やかな手紙を添へて寄附を求めたさうですが、金員を封入して早速返事を送られたのが此公爵母堂お一人であつたさうで、救世軍の仲間は、貴族にもこの樣に眞實の同情を持つて居る方があるかとひどく感心して居るさうです。またある年若き位地もなき一人の婦人が或必要のために矢張諸名家に祝歌を求めたことがありました、勿論承諾せぬ向もあつたさうですが、ひきうけた方々も期日を約束しながら二度も三度もひきのべて幾度か足をはこばせた揚句、出來た時にはまたも態々呼びつけて渡すといふ風でありましたが、公爵母堂ばかりは『年寄つて居ることゆゑ時日を限つては出來ぬかも知れぬゆゑ、あてにはせぬやうに』との答でありましたが、數日の中に美事な短冊が若き婦人の手許に使を以て屆けられたといふことです。母堂の篤實に親切な

る例證は、數へ立てましたなら、まだ〳〵幾つもありませう。

名譽のある方には、自ら多少の惡名も傳はるものでありますが、公爵母堂の惡樣な評判は少しもありませぬ倨傲尊大、徒らに他人を見下げるやうな貴族は、實に賤しむべきものでありますが、公爵母堂の如き品性を有つた方こそ、眞の貴人として心より尊敬の情を表することが出來るので御坐います。

# 金錢と女德

野中い代子

家人はいふも更なり、凡人に交るに善を行ひて惡を戒むるといふことは、極めて重要なことで御在まして、善をおこなはねば人たる道がたちませぬ。さらば善は如何にして行ふかと申せば、先づ愛敬を本とせねばなりませぬ。愛とは人をうやまひておろそかにせざることで、敬とは人をうやまひて侮とらざることを申すので、この二つはすべて人倫にまじはりて善を行ふ心法で御在まして善をするは愛敬の外には御在ませぬ。先づ父母を愛敬するを本といたして兄弟夫婦親戚下人に對するも皆その通りで御在ます、各其人の品によりて愛敬して、うとけれどもおろそかにせざるは即ち愛でありまして、いやしけれどもあなどらないのは即ち敬で御在ます。

さてかやうに身に善をおこなひ、心に仁をたもちても其善を人の知らんことを求めぬやうにせねばなりませぬ、これ所謂陰德でありまして、まづしき人も其力に應じて陰德を行なはねばなりませぬ、まづしき人は富み貴き人より唯之を受るのみが決して能では御在ませぬ。前にもいへるごとく貧人とても其力に應じて、道にある荊、からたち、かとある石など人を害するものを取のけ、道にをちたるを拾ひてかくさず、いけるものを少なりとも故なくしてみだりに殺さぬほとのことは誰にでも出來ることで御在ます。つねにかやうにして陰德を行はねばなりませぬ、年をへて之を久し

く行へば其善はつもり〱て必らず大なるものとなります、實にたのしいでは御在ませぬか。貧しき人すらかくの通りです。まして富めるほどのものは、餓たるものに食をあたへ、こゞえたるものを温かにし、かはけるものに湯水をあたへ、老たるものをたすけ、幼をいつくしみ、病人をいたはり、人の子弟に孝悌をすゝめて行はしめ、人の善と才能をほめすゝめ、人の誤をそしらず、人の惡をかくしてあらはさず、人の過惡をいさむるくらゐのことは、決してなしがたいことでは御在ませぬ。富て財あまりある人は、天道みてるをかく道理でありますから、人にほどこさずして財を多くあつめおくことは、後に必ずわざはひ出來て財をうしなひ、却て子孫に其財をのこしがたいことになります財多き人は尤も父母にあつくし、親戚朋友の乏しきをにぎはし、貧しき人をたすけ、飢寒ゆるものをすくひて、廣く人を愛して善をせねばなりませぬ。凡人をすくひたすくることは、天の好みたまふところで御在まして、天道は善にさいはひしたまふ道理でありますから、かやうに廣く人を愛することが久しければ、天のよろこびたまふこと深くして福をうくること必ずうたがひ御在ませぬ。天道はかへすことを好まるゝと申してあります、善を行へば天よりさいはひを下し、惡を行へば天より禍を下されます、善惡につきて報ひあることを還すことを好むと申します、此道理は必ずうたがひ御在ませぬ、是は天道のまことであります。かやうの次第でありますから善事をなして久しければ、彼道なくして神佛にへつらひいのり、其さいはひをうけ禍をのがれんとするよりは、百倍のしるしがあるで御在ませう。愚な人は天道の善にさいはひし、惡に禍ひしたまふ道理を知らないから、天道をおそれずして天道をうたがひます、天道の善にさいはひし惡にわざはひしたまふの理は、古今西洋にも日本にも支那にも其ためしは澤山ありまして、其理はまことにあきらかです、即時に其しるしはないけれども、後に必ずむくひがあります。是は信實でありまして疑ふべきことではありませぬ、惡を行ふと財多くして人にほどこしすく

はないのは天のにくむところで、のがるゝことは出來ませぬ。富貴なるも貧賤なるも、志だにあれば其位に應じて日々善事は行はれます、善をするほど樂しきことはありませぬ、つとめて善を行ひて此樂を知らねばなりませぬ、財をおしみては、善を行ひがたしと古人の申したのは道理で御在ます、又無益のことに財をついやすのは愚で御在ます、是は善を行ひ人を救ふに志がないからです。

財を多くたくはへて富める人にして、もし生れつきに仁心なくとも、わが身のため子孫のためをおもひて、善をおこなひ人をたすけねばなりませぬ。財寶を多く子孫にのこさんよりは、財をすてゝ廣く善をおこなひ父母兄弟親戚などにあつくいたし、又其餘の人の貧をすくひ、飢寒を助けねばなりませぬ、是は後のさいはひ子孫のため、財をのこすに甚だまさつたことで御在ます。富貴の家に貧賤なる親戚などの出入するのは、主人の仁愛のあつきことがあらはれて、其家の面目とせねばなりませぬ、かゝる人の來るのを決して耻るやうなことではなりませぬ。かやうのわけゆゑにわが財祿をたもちて失なはず、子孫長久ならしめんことを願ふならば、只仁心をもちて人をあはれみめぐみ、善を行ふをつねのたのしみとして、子孫に善ををしえすゝめねばなりませぬ。是は天道にかなふ道理であるから萬金をすてゝ神佛にへつらひいのるに百倍せる祈禱で御在ます。少し、くどいやうですけれとも今少し是等の道理を説かして頂きませふ。

凡天地の氣が滯ふれば必變をなして、風雷水旱地震などの災となります、世間の物が久しく集まれば必散ります、人の氣血飲食めぐらずして滯ふれば必病となります、財寶も多くあつめて人に施しめぐまねば、滯りて後日のわざはひとなるものです、老子も多くあつむれば必あつくうしなふと申されましたが、是は相違ありませぬ、乾度間違なき道理で御在ます。財を多くあつめて人にほどこさず、永く子孫につたへんとしても、不意の變災にあひて財をうしなひ、或は子孫の不德によりて財をうしなふことは、古今世間に其た

めしは數へきれぬほどあります。財をあつめて禍とせんとしても、財はあつめたるまでにて、人にほどこさねば必ずわざはひとなる。支那のお話で日本にまでも名高き彼の鹿臺の財、鉅橋の粟もおごりてはたもつことができませぬ、鄧通が銅山の財、石崇が金谷の富も不德であればつゐに失ふことになります。たとひ財寶をあつめて子孫にのこしても、わが身に仁愛を行はずして積善なければ天道にそむきて後の餘慶はありませ



ぬ。其上子孫不肖にしては、とても其財寶をたもつことはできませぬ、只陰德をおこなひてつねに善をなしひろく人をすくひ、子孫に其餘慶をのこし、又義方の教とて、義理の正しきことを以て子孫のあしきことをいましめて、その行を正しくするこそ、子孫のさいはひとはなります わが身一人にて福祿を多くうけすごせば、天道はみてるをかきて子孫には福はのこしませぬ。わが身みづからさいはひのみてるをかきて、わが

ため子孫のために禍をのがれねばなりませぬ、是がみづから禍をうけすごさずして、子孫に福をのこしわたふる道理でありまして、即ち智慧ある人のすることで御在ます。

澤山にお金をためて餘りがあるならば、どうか人に益あることに用ひたい、無益のいとなみをなして金錢をつゐやすのはむだなことで實に惜いもので御在ます、賢き人の金錢をみだりにつかはずして惜むのは、人に益あることに用ゐんためであります



たとへば百萬錢をついやして萬燈をともさんよりは十萬錢を出して飢た者萬人を養ふ方が遙かに利益が多い又壹萬圓も出して子女をおよめにやるものはあるけれ共、千圓かけて子を教ゆる人なしと古人も申されました、又世間富み奢つた人は、一日の内にも千圓二千圓の金をつかつて無益のたのしみをいたしますけれども其十分の一を出して飢た者を救ふ人の稀なのはなぜで御在ませう。

凡すべてのこと我身の養をうすくしても、場合によりてはつくさねばなりませぬ、父母兄弟親戚朋友其外飢寒艱苦するもの、たとへば親戚故舊のむすめが嫁入るべきときが來ても、貧乏で嫁入る力なきものあつて、もし我力が及ぶならば助けて嫁入らせるといふやうなあんばいに、及ぶだけ有益なことに金をつかふて人をたすくればこそ、家富み金は澤山にもてる甲斐があるといふものです、ところが世間の金持でも道理をしらない人は、無益のことには金をつかひがちであるが、殘念なことには義理にもそむきがちである、ひとしく金をつかつても、道理にそむくほど無下に愚かなものは御在ませぬ。智惠なきものは此道理がわからないので、みだりに神佛にへつらつて福を祈てみたりいたして、實にあはれなものです、抑も道なくして神や佛にへつらふは神佛を愚にするといふものです、私ありとしてあざむきあなどるのであります、是はすでに正しき神や佛の心にそむいてゐます、かやうな人になんで御利生が御在ませふぞ。

金錢をおしみては善をすることもできず、功をたつることもできがたいのは前にも申した通りでありまして第一、人の心を得ないから人が思ひつきませぬ、又人の和なきゆゑに事をなしがたふて、なす事が何樣はかがゆきませぬ、香餌の下には懸魚ありともいつてゐる程で、褒美がうすければ士卒にはげみなく、身をすてて潔く戰はぬと同じで、畢竟吝嗇のわざはひであつて俗に小欲大損といふのでありますから、何事も此道理を辨へてをらねばなりませぬ。人もし富貴にして財を多くたくはへもてる人は、是は天より我一人にかぎりてあつくせらるゝのではない、多く人を救はしめんために、おのれに授けらるゝのだとおもひて天命にしたがひて常に仁愛の心をわすれてはなりませぬ、お金を澤山もちてもわが身ひとりの保養におごりて、人にはほどこさずして善を行はねば貴きお金も無用の物となり、澤山に石や瓦をもてると同じことです、かやうな人を守錢奴と昔の人が申されましたが夫に相違御在ませぬ、お金をもつてる甲斐はないやうなものです

から、まるで貧乏人と同じです。かりそめにも士女として財利をむさぼり、吝嗇にして廉耻の志なく、親戚故舊に對しても心つよくしてすくはず、禮義をつとめず又はあたふべき者にあたへず、とるまじきものをとり、人の物をつかつてつぐのはぬ程のことが、我身に若し其一つでもあらばいましめねばなりませぬ、人のよきあしきをみるも皆わが身の鑑です、善いことを見ては之を學び、惡いことを見ては我身にもありはせぬかと顧みねばなりませぬ、さやうに致せば皆自分の益となります、先づ人のあしきをそしらずに我身のことをかへりみねばなりませぬ、我身の保養におごる人は大抵財をおしみて人に施しませぬ程子は財をおしみては善は行ひがたしといはれ、又易といふ書に天道はみてるをかく、又物みつればかくといつてあります、又古語に多く藏ればあつく失ふといつてありまして、お金を澤山にあつめたまでにて人の貧窮をめぐまねば、みちては必ずかくるの禍をまぬかれぬ道理で御在ます。

それから家人をつかふには、其心をおしはかり、うれひくるしみをしりて、人の苦みなきやうにほどこさねばなりませぬ、奴婢などは主人をたのみにして身を養ふものでありますから、心を用ゐて情をかけ、刻薄にして苦しめてはなりませぬ。しかし奴婢が利口にして我心にかなふたからとて愛し過してはなりませぬ、愛し過せば必おごりおこたりて家法をみだし、私を行ふやうなことになりて、主人の禍となりて其身も亡びて仕舞ます、總じて利口なものは多くは佞奸でありがちですから、却て主人の心にかなひやすいものです、是を愛し過せば大抵わざはひとなりますから、おそれて決して好むではなりませぬ。要するに家人に對するには、嚴正にして厚く重々しければ、おのづから威あつて人があなどりませぬ、又いかりてはげしく惡言を出さなくても人はおそるゝもので御在ます、つまり心はめぐみ深くして、禮法はきびしく立てねばなりませぬ、法がいるかせだと侮りて罪をおかし、とがにおちいるやうになります、いやしき者は法がいるかせだとおて

たりて惡におち入り、とがをおかし易いものでして、實にあはれむべきもので御在ます、およそ下部などをつかふには、心を用ひてゐなとらず、又下部に侮られず、法をおかされず、おこたらしめないやうにするが大事で、又不慈にして彼等を苦しめ、所を失はしめてはなりませぬ、陶淵明が一人の僕を子供の處にやる文に、これも亦人の子なりよく遇すべし、と書てやつたと申すことですが、是は法としてよい言葉だと思ひます、人をつかふに緊密なるうちにゆるやかなところがなくてはなりませぬ、日々少しの暇もなきやうにつかへば、人は必くるしみて其ところを得がたいものですから、少しいとまあるやうに人をつかはねばなりませぬ、又前にもいへるやうに、褒美をわたへずして只言葉の情ばかりでは、人の心は悦服いたしませぬ、賞をわたふれば悦んでよくつとめます、それも一時に多くわたふるよりも、少しづゝ時々わたふる方が怠りませぬ、澤山にわたへても久しく與へねば、めぐみをわすれておこたるやうになります、言葉の情のみにて物をわたへねば、實事がありませぬから、人がまことをつくしてくれませぬ、どうか婦人の仁などゝいはれないやうにしたいと存じます、しかし物をわたふるにもおのづから法が御在ます、何の功もなきにみだりにわたふれば、千金萬金をわたへても我に何の益もなく又人も悦びませぬが、又一言の情も千萬金にまさることもありますから、其邊はよく注意せねばなりませぬ。

貧しき親戚故舊友達などが、お金や物を借りたならば我力に應じてそれを與へねばいけませぬ、決して貸すつもりでゐてはなりませぬ、與ふれば我仁愛の道が行はれて、わが心持もよく、先でも我恩に感じる道理です、全體借るものは貧くて金なきゆゑに借るのでありまして、借りて返せばいよ〳〵まずしくなるから、極く々廉直の人でなくば、返すことは稀で御在ます。最初貸さゞるうらみは僅かで、借りてから後返さないのをこなたより催促する時、借りてる人のうらみいかりは大變に深いものです、したしき人には殊更金を貸してはなりませぬ、成丈け與へた方が宜しう御在ます、お

金を貸すは禍を求むるやうなものです、後にたがひにうらみができて仲がうとくなり、今迄しげ〳〵出入したものも、足が遠くなることが多いものです、俗のうたに

しる人に物ばしかすなたゞやりね
かさぬうらみはかふはとはなし

貧乏人は借財をつぐなふことができず、後は返さんとおもひても、其時はすぐれば忘れやすくして償ふことを思ひませぬ、いやしきうたに

うきこともうれしきことも過ぬれば
其ときほどはおもはざりけり

まわこんなもので御在ます、我身のなんぎなとき、人のめぐみをうけて、後まで忘れぬ人は稀です、ところが其借財のをいめをつぐなはぬとき、こちらから催促すれば、先ではうらみいきどほりて仲がたえ又うらみふかくしてわだがたきとなるものも世間には御座ますこちらからせめさいそくしないでも、返さない方にひが事があるから、親類とても必我にそむきてうとくなります、まして友達や他人は猶更です、お金の貸借はお金をついやしてかたきを求むるやうなものですから、ふだんよく心を用ひねばなりませぬ、故にやむことをえずしてお金や物を貸すならば最初から遣ると思ふて貸すにしくことは御座ませぬ、貸した時には喜びますけれども、時が過れば恩を忘れて返しませぬ、其時遣つたと思つてをれば恨みはありませぬ、貸した物を必取返したいとおもふから中絶のもとになるのです、貸したものを必得んと思ふは、人情を知らぬといふものです。故に借りて返さないのは世間のならひと心得て決して腹をたてゝはなりませぬ。餘り長くなりますから是位に筆を擱きますが兎に角家に居ても世間に出でても、善をおこなひ道にしたがふほど楽しむべきことはありますまい、初めはつとめならひて之を行ねばなりませぬ、久しく行ふてならひなれますれば、昔の賢人君子の域に達し得ずとも、善をおこなふことは必たのしくなります。才藝といふものは雑事です、初は面白くなくても、久しく習ひなるれば後は面白くなるも

のです、ましてこれはよき道をおこなひ熟すれば、何で樂しくないことが御座ませうぞ。

# 白粉問題

翠香女史

先頃報知新聞に一たび白粉問題を出せしより日々の紙上贊成反對續々として世上の大問題として騷ぐなり是他なし世上一般の不景氣につれて諸新聞も賣れ行きのわしきより何をがなして人目を惹かむと百法苦心して或は懸賞に種々の物品を出し詩歌俳句笠づけ謎言など其方法はかはれども詰まる處は世間讀者の心を騷がせて己が新聞を多くうらむとするに外ならず然るを是に動かされてとやかくやと眞面目に考按數日夜を費やし投書を艸するに骨を折る人尠からずそれも當ればよけれども當撰者は僅にして多數は骨折損となる岡目八もくより見る時は甚笑止といはざるを得ず白粉問題も又然也爰に一應中止を告試みたりしかど中々以て止む氣色なくます／＼火の手盛に燃て停止する處を知らず之が爲に我がをしへ子らも來りて此可否を問ふ者多し故に止むを得ず彼等が爲に此一篇をつゞる。

夫白粉の我朝に傳はりしは持統天皇の御代よりや始なりけむいと古くより用ゐ來たりて婦女たる者の扮粧するは强に顏色を衒ふに非ずして禮儀の一つ也故に古の敎へにも朝はとく起出て髮上げ化粧して寐亂貌を夫に見する勿かれと迄いましめたり然れば雲の上皇后宮を始奉り宮嬪より末々に至る迄苟も婦女たる者は老も若きも悉く皆每朝白粉をほどこし粧色を整へて上に仕へ奉る事一日も怠ることなし中頃の武家と雖も又同じされば婦女にして功ある者には賜はるに扮粧田の名目を以てせられたり女子の扮粧は斯の如く公然たる物なるをや女子の扮粧は公の勤にして私に廢すべき理由ある事なし然れども物事極端に走れば弊害を生ずる事は免れ難き勢ひにて白粉も又德川幕府の泰平打續くまゝに婦女輩は明暮に唯裝飾をのみ身の勤とし上下押なべて紅粉を粧ふに時を費し艷色を競ふの餘り

遊女俳優等が厚化粧して工みに夭艶なるを羨みて是をまねぶに至れる也就中大阪は昔より俳優を崇拜する事他國の比に非ず動すれば婦女輩の之が爲に身を誤つ者多ければ舊幕の頃は河原乞食非人小屋者と貶しめられたるにも拘はらず其爲す事言ふことを悦びてまねし髪の結ひぶり櫛 簪 又衣服の色もやう着樣に至る迄 悉く皆名代俳優の舞臺にて用ゐたるに始り色街に傳波し次で町々婦女等の流行となる事今以て猶然りかゝれば大阪の婦女が盛粧して出たる樣は女形に異ならず京都は大阪程に 甚 しからねとも猶五十歩百歩の差のみ然る替りに京阪の女子は幼より扮粧を日々の課業として爲習ひ家に在ると他に出るとに拘はらず毎朝化粧し母親又 傍 より注意して敎ふるが故に妙齡に至れば其業に熟して他力をからざるも自らよく扮粧する者多し東京は新柳二橋を除くの外町方の婦女等は槪して扮粧は拙也と斷言するに憚らず（中には上手も有べけれど此記者未出會ず上手の婦人必ず腹立ち給ふな）其白粉の爲樣をみるに多くは湯屋に携へ行身體を洗ひ畢たる時左掌に白粉を溜右の指にて貌と首に只べたべたと捺り附るのみ再び湯に入りて手拭にてそと拭ひおくより外の事をせず家に歸りて克鏡に向ひて改むるや否とかく耳の後など自己の眼の屆かぬ處の白斑なるをみる事多し夫よりも一層氣の毒なるは家にて十分に化粧して出たりとも時を經ては汗出貌に脂浮きて鼻の先額頬すべて肉の高き處は剝げて赤くなり鼻の兩脇眼のふち耳の後等凹める筋にのみ白粉殘りて其見苦しき事笑止千萬なるも終日平氣にて箱せことかいふ物帶に挿ながら金時計に比しく只外觀に持つ物とや心得けむ是を出して顏を正さむともせず予婦女集會の席には度度交れとも物陰に退きて貌を繕ひ直すをみたる事なし京阪の婦女らは他に出るには 必 化粧具（東京箱せこなり）を携帶して休息所にては先是を出して汗脂を拭ひ白粉を添へて顏色を正す物を喰へば又直し小用に立ては容貌を繕ふ事を怠らず大阪博覽會に行たる人は見聞して予が言の虛ならざるを知り給はむ便所に扮粧を正す席を設たるを東京ならば豈爰に心づく人わらむや又設たりとも京阪より來る婦人の外之を利用する者もなかる

べしかるが故に京阪の婦女らは其貌いつも美しけれど其弊は長時間を扮粧に費すにあり京阪及び名古屋は殊に淫風盛なれば此地方にこそ女學生の白粉禁止もよかるべし東京の如き扮粧法の不完全なるには禁止處か課業に入れてもちと奨勵したくこそあれ。

夫扮粧は一種の美術にして畫家の着色に異ならず濃淡おの〳〵其法有りて既に扮粧傳といへる秘書さへあり其書の法に依りて工みにほどこせば低き鼻も高くみせ少なる眼を大にみせ口の大なるを小さくみする等種〳〵の法あり然りとて何も天稟の黒き色が白くなるに非ず低き鼻は高くもならねども化粧の仕方にて其幾分を見消さるゝ也されば こそ美術なれ婦女たる者是をよく修得すれば天稟の美はます〳〵美の光を發し醜なるも又其幾分を隠し得て人に嫌はるゝの憂を免るべき也然るを白粉禁止などゝ極端に走りては天然の美女こそさし障りなけれ普通の者は今迄よりも見にくゝなり然らでだに疎暴に流れ易き女學生等の醜はいよ〳〵醜態を露出して天眞の度を越し文明どころか野蠻人となりて賣口なきに至る者必や出來るならむ予私塾を開きしころ生徒等白粉をほどこし盛装する時は日頃疎暴なる者も少しはたしなむ心生ずれども扮粧せざる時は女子の本分を忘れて疎暴を極る事毎度ありき。

白粉禁止論の根據は鉛毒にありなる程白粉には鉛毒の交りてあるには相違なかるべししかしながら從來世上一統に白粉を用ゐたる女子等が悉く鉛毒にあたりたるにも非ず甚しく日夜に用ゐる者俳優娼妓の輩中にも生質胎毒など有る者が鉛毒にもかゝる也もし白粉を塗る爲必鉛毒に懸る物ならば俳優妓輩は悉皆病人にて長生する者もなき筈なれどさもなくて無病壯健に七八十迄も生居る者も亦多きに非ずや其中の少數が鉛毒にかゝりたればとてしかも俳優妓輩程に白粉を專とせざる世上一般の婦女迄が白粉の鉛毒を恐れて女子の美術を捨るにも當る間敷に非ずやたとへば時に難波船のあるを聞きて船は危險也乗るべからずといふが如し船にのらずば生涯海は渡る期なし稀なるを引て常を律せば誰か至當といふ者あらむやかく迄見易き道理なる

を世には輕跳浮薄なる人多く奇を好み新に走るを得たりと附込新聞記者が筆鋒に掻まはされて狂する如く騷ぎ立ち只眼前みる處を以是非を定めて深く將來を考ふる事を爲ざるは歎かはしき事にてそ曩には飲酒の論いで〻新聞に雜誌に喋々と囂しく一方には禁酒會のおこるわり昔より酒は百藥の長といへとも過すが故に百害の長ともなるとはカビの生たる陳々腐々酒の害多き事誰とて知らぬ者もなけれと扨數年來の習慣と成はて〻日々に酒を呑つけたる人々はいくら税の高きが故に酒の價は騰貴してもやはり止められず弦齋先生が酒道樂にいたく御骨を折られても猩々藝者や酒山氏などを話柄とし是を肴に酒をのむで笑ひ興ずる人さへ有ては又如何とも爲方なしもし又斷然として禁酒勵行する人は是必眞の酒好に非ざるか何か又爲にする計略なるの二ッのみ新聞記者先生達も議論立派に書立ても性質の上戸ならば如何かする禁酒勵行なるや否お手元拜見といはまくほしと思ひしが果せる哉今以て世に生醉の絶えぬをみれば方今の白粉問題も新奇を歡迎する一時の

流行熱にして贊成者多くみゆれどもいつしか醒る時來たれば冷却し去つて其結果は又禁酒問題に同じかるべし國家の嚴禁たる花骨牌すらしかも貴顯紳士の輩がおもに是を弄 ぶなり況や公然禁令の出ざる酒や白粉をなに程新聞社が聲を枯らし筆を禿して絶叫すとも到底禁せらる〻物ならんや但しては一時の權謀にて世間を騷がして新聞の賣高を增したれば定めて滿足なるべし報知社萬歳と大呼して祝し申すべし眞實に白粉を禁止せんとならば彼鐵漿の如く上は皇后よりして斷然と御廢止わりて下萬民に禁止令の出るわらば其時こそは是非を論ずべきに非ず愼み畏みて即日より斷然廢すべき也然らぬ限りは誰が何といふとも憚る事なし扮粧は女子の美術たり縱ひ女學生たりとも是を廢して可ならむや日々に新にして又日々に新なる扮粧を淡薄に施して其美術たるの本意に背かざる樣に敎師と家庭と相俟ちて淫風に流る〻をいましめ高尚に導かば白粉それ何の害かわるべき、文明の先進國なる西洋にすら婦人は白粉を用ゐて扮粧に意匠を凝らすなるを況や鉛毒なき白

粉の世にある以上は是を適度に用ゐて以て容儀を整へ日本婦女の美術を増進すべき也世上の浮説に惑はずして扮裝の方法を研究せよ少女輩つとめて怠る勿かれ。

## 西洋 御臺所の拜見

家政研究會報

英京倫敦に一人の儉約しい未亡人さんがありました。この老夫人は、三十五歳の時に、二世と契つた夫に死別れましたが、その時夫は少からぬ負債を寡婦に殘して逝きました。夫婦の中には、當時五歳の男の兒が一人ありました。加之も夫は遠い〳〵印度で果敢無く成つたのですから、その奥樣は死顔さへも見ることが出來ませんかつた。ところで氣の弱い女であつたならば。他にもつと安全な策を取つたのでありませうが外國にもしつかりした氣象の貞女はあります。この若未亡人は萬難を排して、一心に儉約の道を守り、いろいろ收入の道を考へまして、爾來滿二十年といふ永い間、夫の忘形見を敎へ育てる傍に、家政の整理に我が一身をば委ねて居ました。所がその後十五ヶ年目に、(丁度その年五十歳)夫の負債を綺麗に消却して仕舞つて、後數年間は若い子息(土木師)と非常な勤儉貯蓄を實行して一廉の財産家と成り得たのは、この未亡人が五十五歳の年でありました。その後子息にお嫁さんを貰つて、こゝに一家三人は、始めて愉快な家庭に美しい笑顔を合せることに成りました。まづこれまではこの人の履歴ばなしですが扨てこれからいよ〳〵本文に這入ります。所が姑の未亡人は、經驗上非常な家政に長けた目で、お嫁さんの爲る所を見ると、年の若いお嫁さんの味方をして、いかに鷹揚に見て遣つても、何うも自分の氣に愜はぬ。殊に臺所の整理法などを見ると、食べかけた物も、またこれから食べやうと云ふ物も、殆んどごッちや混せに成つて、これを日に積り月に積り、また積に年つて見た日には、自分自から手を下して居た時とは違つて、嫁が今日の遣方では、知らず識らずの間に於いて、何程の無益が立つかは計り切

れない。これでは子息が何んなに稼いでくれても、底の無い釣瓶で水を汲むやうなものだ。家の爲にならぬ子息の爲にならぬ、イヤ我が大英國の爲にならぬ、そこで一番この嫁を教育して遣らうと云ふので、或日お嫁さんを臺所に呼びましたが、待てよ！世間一般齢の若いお嫁さん達の遣方は何うであらうか、それを先づ一通見ない中は、おなじく年の行かない家の嫁ばかりに強い言葉を向けるのは氣の毒だと思つて、その日は然氣無く裝つて何んにも云はず、直ちに外出けておなじく若いお嫁さんが臺所を主宰つて居る二三軒の懇意な家に行つていきなり、何うか此方のお臺所を拜見させて下さいと申し込んだ。所が何處でも太く迷惑がり、且は客の心事を疑ひながらも、別に斷ると云ふ譯にも行かないので、ぢやア何うかと云つて、不承無性に主婦が先に立つて案内した。有難うございますと云つて、客は臺所に行つて、隅の隅まで凝然と見渡し果は御免下さいよと云つて、戸棚の戸まで引開けて、隅から隅まで落無く萬事吟味して、また有難うございましたと禮を云つて、匆々暇乞をして歸つたので、何處の家でも一樣に、この不思議な臺所見物人の所存を訝つて居つた、二三軒見廻つて、家に歸つた姑は、またお嫁さんを臺所に呼んで、私は今日方々のお臺所を拜見して來ましたが、獨りお前さんばかりでは無い、若いお嫁さんの主宰つて居るお臺所は、何處も皆この通りだが、これぢや第一物も粗末に成れば、衞生上にも宜しく無い。臺所は謂はゞ一家の造幣局を見たやうなもので、お金は此處次第で出來るものです。また此處は一家の生命を繼ぐ太切な所ですから、清潔にした上にも清潔にして、棄てる物は棄てる物、また保存つて置く物は保存つて置く物、皆それ〳〵に區別して、整然と約かに整理して、何時も光り耀かせて、睫の數も戸や板の間に映る位に清潔にして置かなければ成りません。福を主り玉ふ神さまは、何の家を守つて遣らうかと思し召して、始中終世間をお歩き成すつて、先づ家毎のお臺所をお覗き遊ばし、チッと樣子を御覽に成つて、お臺所が鏡のやうに清潔だと云ふと、はアこの

家の細君は中々勤める、此處は福の種を蒔いて遣らねば成らぬと仰有つて、何やら財布の中からお出しに成つて、パッパとお蒔き成さると云ふと、その家は春の草の燃え立つやうに富み榮えたが、これに反して、戸棚の中から臭氣が外に漏れたり、また食べかけた物や何やが、其處邊にでちや〱混雜して、埃塵溜のやうに成つて居ると、神さまは顏を顰めて、アヽ此家の細君は不性ものだ、こんな家に福を授けて堪るものかと



仰有つて、匆々とお遁げに成つて了う。一家の主婦の戰場は此處です、今後はお氣を附けなさいよと、姑は語に力を入れて云つた。所が心優しい嫁は一々姑の敎へに從つて、その後臺所の整理と云ふことに心がけて、昨日一ッ今日また二ッと云ふやうに、段々と臺所の整理に注意して行くと、成程利益が目に見えて、貯蓄が興味を敎へるので、お嫁さんは益々中饋の勤儉を勵んで、一年餘りの年月を送る中にこの家の臺所は次

第に整然と整頓して、誰が目にもその家の家政のいかに整頓して居るかを、略想像らせるやうに成つた。誰云ふとも無く忽地に、この噂は世間の口から口に走つて、先づ近所の婦人連中から、この模範的臺所の見物に續々と來るやうに成つた。所が姑は喜んで客を迎へて、一々臺所の説明をして聞せて、我が嫁の婦徳を稱たへ、世間の人々も皆我が家と同様に、善く臺所を整頓して、家長の爲に、一家の爲に、イヤ我が大英國の爲に專ら勤儉貯蓄の功を積まんことを奬勵した。所が何事にも善く心の一致する國民の婦人連中は、皆此家の若い細君の善い行爲を倣ひ學んで、誰も彼も先づ臺所から整理し始めると倶に、婦人同士が何處の家に行つても、これまでは互ひに着物の柄などと見合つて、これは何方でお求めに成りましたか、など〻尋ね合つた口から、主客互ひに顔を見ると、何うか此方さまのお臺所を拜見と云ふのが、英吉利婦人、一般の例と成つて



來ました。

## 其二　押入拜見

所が又或る老夫人は、この新しい美風を大いに喜んで、今度は自分の家の若いお嫁さんに、先づ臺所を整頓させて、次には一家の押入を、何時何方さまのお目にかけても、決して耻かしく無いやうに、整然と秩序正しく整頓させて、今度は他所の家に往つて、奥さん何うか此方さまの押入を拜見と出かけた。さあ堪らない、中にはソレお客さまだと云ふと、其邊に取散して在る着物と云はず、器物と云はず、皆押入の中へ打き込んで、何うです此方樣なども、何時も綺麗に片付いて居るでせうと云ふやうな貌をして、澄し切つて居る細君は、突然押入拜見と來られては、胸の中で火がくわッ／＼と燃えるやうだ。所がその老婦人は御免なさいと云つて、平氣で他の家の押入を開けて、やあーこれぢや此方さまの御内證も知れたものです。何うか今後はチトこの押入の中を御整理成すつたがお宜しうございませう、憚りながら若しお暇があッたら、何うか手前供の押入を、お遊びがてら御覧下さいましと云ふぢやア參りませうと云つて、直樣その老夫人の家に行つて押入を開けて見ると、成程自慢するのも無理は無い、それは其、これは此とキチント片付いて、一點の批難すべき箇所も無い。成程と見る人毎に感心して、皆一樣に老夫人の家に倣つて、次には押入などを綺麗に整頓することに成つたが、英吉利の婦人社會に於ける今日の押入拜見の禮はこれから起つたのださうだ。

## 其三　御帳面拜見

段々とこんな善い新工夫の禮式が婦人社會に流行つて來たので、また或る婦人は、何處から見ても拔目無く、我が家政をば整理して、一文半錢も無駄使ひの無い日毎の支出を明細に帳簿に記して、專ら勤儉貯蓄の功を積んで、外に冬も汗をかく家長を内から助ける傍らに、ちよい／＼と機會を見て、他所の家に出かけては、「奥さん何うか此方さまのお帳簿を拜見」と云ふて

とに成つた。さわ、お帳面拜見と云ふことに成つては兼て家政に上に何んの準備も無い、詰り主人の金を使ひ放しの細君は、お臺所拜見、お戸棚拜見などよりも顏が燃える。所が心わる人は皆これを聞き傳へて、我も我も成る可く無用の支出を廢して、一々明細に帳簿に記して、他の家は何うであるか、試みに帳簿に就いて、互ひに照し合せて見て、猶この上にも無駄な費用が有つたならば省かうと云ふ考から、甲の家の細君は乙の家に、また乙の家の細君は丙の家にと云ふやうに、お帳面拜見に出かけては、互ひに勤儉貯蓄の研究をして居る中に、段々とこの新しい美風が世間に廣まつて、これも同じく婦人同士の間に、「奥さん何うか此方さまのお帳面を拜見」と云ふことが、婦人社會の一種の禮式のやうに成つた。所がこのお臺所拜見、押入拜見、お帳面拜見など云ふ新しい禮は、英吉利をして益々富祐ならしめる一源因に成つて居ることは、識者の疾より認識して居る所であるが、我が國に於いては總ての家庭に於いて、未だこの美風が行はれて居ることを聞かぬ。それとも或る婦人社會には、既にこの美しい新禮式が實行せられて居るかも知らんが、吾人は一日も速かに、一家の爲にまた一國の爲に、お臺所拜見、押入拜見、お帳面拜見など云ふ新しい禮式の、我が婦人社會に流行せんことを渇望する。

## 家庭衛生

# 海水浴の注意

（諸大家の談片）

◉海水浴の効能

海水浴の良いと云ふ事は誰にも殆ど異論のないのでも分つて居る、相當の注意さへ怠らずに爲たならば、申分は無いが、身體の模様に依つて善い人と惡い人があります、假令ば心臓病、腎臓病、肺病と云ふやうな普通の運動をしてすら非常に身體に障る者は海に入つて水に抵抗するだけの力が却て其の身體を激するのです

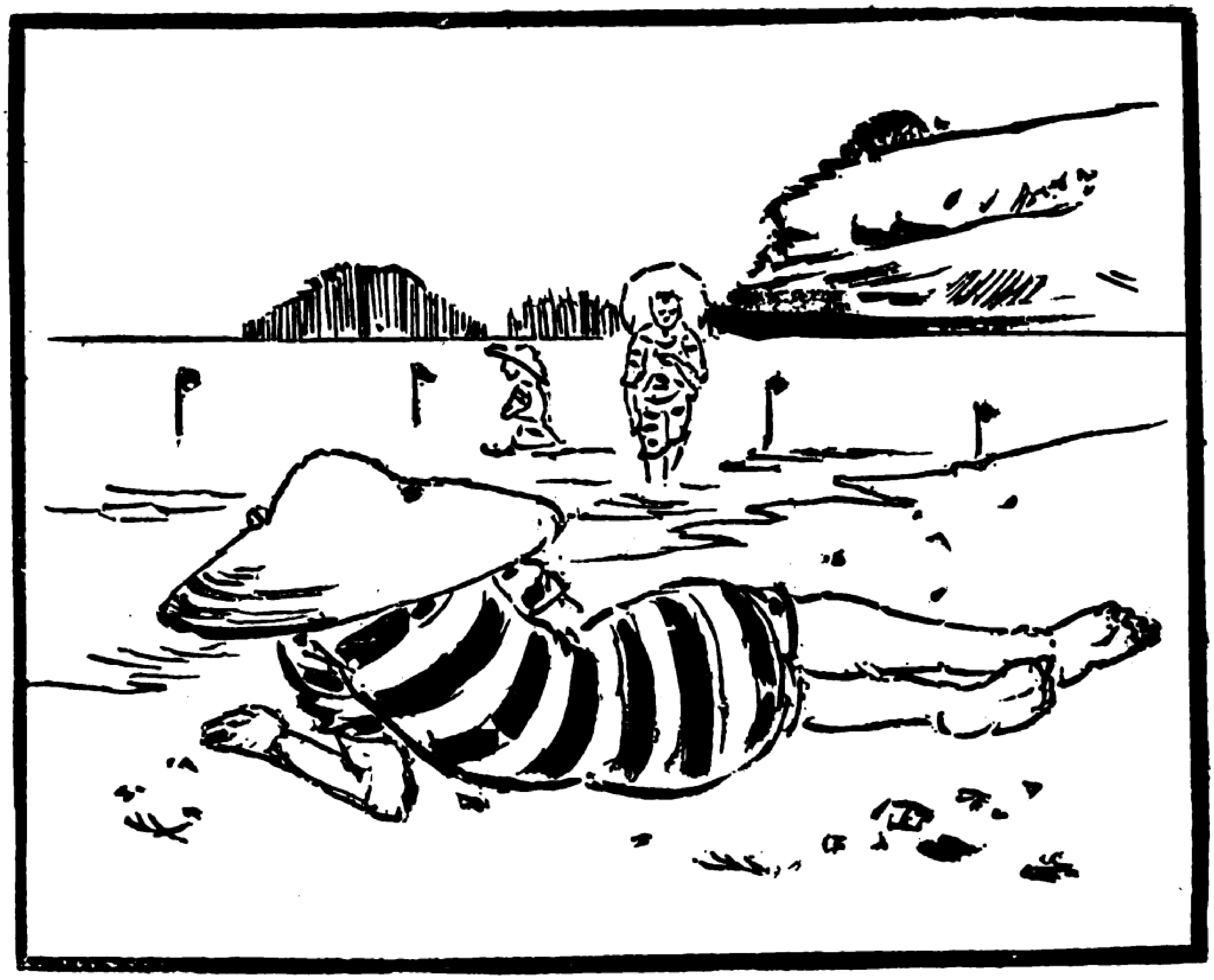
から、斯う云ふ質の病人には、無論良いと云ふ譯には參りません、其他熱のある病人には無論惡い、又病氣快癒の人抔は病氣の方は全癒つても身體が衰弱して居ると云ふ事から、此等の者には不適當である、其邊は浴者が充分注意せねばなりません。けれども又海濱に於ける効能は海水浴と同様實に著しいもので特に外科患者の全癒り掛つて居る者抔には、著しくこの寒暖のない塵界を去つた海濱の氣候が適當ですから、病後の人抔は是非とも海濱へ轉地するのがよろしい海濱の効能に就て一の例を擧げれば、佛國のカロウの法と名付けて居る手術がありますが、之れは脊髓病で脊の背が曲つて居るのを、魔藥を懸けて三人程で引張つて通常に伸ばして置いてギプスと稱する藥劑を塗り綳帶をした上、海濱の病院に寢かして置いて、時々海濱を散歩させるのですが、此の方法抔は、到底海濱でなくば良經過を見る事の出來ないと云ふので、兎に角立派な効能があると云つて差支へない、病後の人抔は假令海に入らない迄も、氣候の正しい海濱へ轉地して營養するのは、甚だ良い事と信じます。

私が今日迄患者の全癒り蒐つた者に向つて、海濱に轉地する事を勸めたもの丶効果は、實に豫想外の健康を來して居るのが澤山ありますから、健康な人でも暑中激烈の暑を受けて、東京のやうな塵芥だらけの處に居るよりは良いに違ひないのですから、何處の場所でも成るべく手輕に誰にも一寸行き得るやうにして貰ひたいものです（佐藤順天堂副院長の談）

### ◉健康者の保養場

海水浴は近來頻に流行して來て、如何なる病氣も直ちに癒る事と思ひ違へて、病人の多くが誰も彼も矢鱈に出掛るやうになりましたが、之は寔に惡い習慣である何故なれば病人に對して海水浴が偉大な効能を奏すると云ふ譯は決してない其れを能く承知して貰はねばならん、要するに、海水浴は健康な人が保養をする處で病人が無闇に出掛けて行く處でない、病人も病氣が平癒して身體が舊の通に復さんと云ふやうな者には、無論惡くはないが、是等の人々には、獨り海水浴に限つ

た事はないので、海水浴場にでもなつて居る處は海と云ふよりも其の海濱が海の爲めに溫度を平均せしめて、其の氣候が正しいのであるから、さう云ふ土地へ行つて靜養すれば無論良いので、強ち海に入るから良いと云ふ事はない、それで海水浴が壯健な者には誰にでも適當であるかと云ふに、其の人々に依つて適する人と適さない人とありますから、其れを見分けるのが最も必要で、之れは初めての日に、眞の僅かの時間——二三分間程試



みて、其の翌日から少しづつ追々に時間を伸ばして見た結果、食慾が進むやうならば、無論其人には適して居るのですから、大いに行るが良いですが、若し之れに反して、海に入つた爲めに食氣が衰へると云ふやうな人は、海水浴が適して居ないのですから直ちに止めないと、浪に揺られた結果心臟の働きを害するやうになりますから、此の邊は特に注意して貰ひたい（櫻井婦人科病院長の談片）

●海浴の効能と
　その方法

海浴の効用は皮膚筋肉を強

壯にして、身體諸部の物質代謝の機を催進するものであるが、胃病の甚しい者、心臟病、精神病とかに罹つて居る患者には、決して適當でない、また虛弱の小兒や老人は、海浴を避けた方が至當です。が、斯う云ふ人々でも、海濱の氣候は大いに冒寒の癖を根治にする事が出來る上、人體の諸機能を振起せしめる効力は、確かにあるのですから、朝夕渚に沿ひつゝ逍遙散歩すると云ふやうな事は、極めて良好な事です、或は之れに一歩を進めて、試みに最初は極めて微温い海水で身體を拭ひ、それから灌水法若しくは浴法を行つて、漸く身體の慣れるに及んで、海浴を行ふのは、決して惡くはない。

海浴に就て有名のホウベル氏は、左に列記する如き原則を設けました。

一　腺病或は經久潰瘍に因て衰弱する者、體格薄弱、皮膚弛緩蒼白にして冒寒し易き者、神經痛、偏頭痛、及び諸病の回復期に適す。

二　纎弱過敏性の者、及び婦女子にして急に冷却する時は痙攣、眩暈等を起し易き者は海浴を禁ず、宜しく温海水浴を用ゆべし。

三　妊婦は海浴を禁ず、動もすれば墮胎するの虞れあり、但し經閉の者には、之れを催起するの効あり。

四　慢性子宮炎、子宮脫、子宮痛ある者には海浴を禁ず、必ず温海水浴を用ゆべし。

五　僂麻質斯、痛風、肝臟病、結核病には温海水浴を良とす、又僂麻質斯には海濱に於て砂浴法を行ふを良とす。

それから温海水浴に浴する時間は、大人は二十分から四十五分位、小兒は十分から二十分位の處が適當で、又温度は普通の浴よりは、低いのを可とす。度數は攝氏の三十四五度が極適當な處ですが、麻質僂斯にはも少し温く、即ち三十七八度が丁ど良い處です。

海浴の方は、十分間乃至十五分間が適度で、一日中に朝夕二回に行ふのが最も良いのですが、空腹の時とか喰過ぎた時や、酒を飲んだ後抔には、決して直ぐに浴してはなりません、又身體に熱の有る時抔も、全然浴する事を禁ぜねばならん。

這麽事ですから、空腹の時には先づ少許の食物を喫してから入り、身體が熱して居る時には徐々に海濱を歩いて身體の表部が冷却するのを待て、始めて水中に入るやうに爲たくてはならない。(足立陸軍軍醫監の談)

# 一日醫者（其五）

糸左近

▲肺結核　素人の方が唯單に肺病と言つてゐるもの

〔原因〕結核バチルスといふ一つの黴菌である。此の黴菌を、一たび吸へば、これが肺臓の中に入り、段々殖えて、肺臓が傷むのである。試みに、肺結核者の咯いた痰を、他の動物に吸はしむれば、即て本病を惹き起すを以ても、其の證據が分る。故に結核者に接すれば何時となく傳染するのである、即ち結核者の呼氣を吸ふためである。然れど虎列剌やペストのやうに、其の傳染したことが俄かに分らぬから、世人は左程に恐れないで、甚しきに至つては、結核患者と盃の交換などしてゐる。實に危いことをする命不知と言はねばならぬ。又此の黴菌を誘ふ第二の原因となるものは、體質が虚弱であつたり、或は遺傳或は不潔な空氣を吸つたり、或は營養物不足或は結核性の牛乳を飲んだり或は他の呼吸器病から續發したりするからである。又房事過度或は心配事なども間接に本病を誘ふものである。我が國では、本病者百人中四十人までは遺傳であることは、大學病院其の他諸醫の認むるところである。子孫の長久を希ふ者は婚姻せぬ先に、能々注意せねばならぬ。

〔病状〕一種特別な體質を呈はし、肩の骨や胸の骨が露れ出で、面色は蒼白くなつて頰に少し赤みを帯ぶ、歯も薄氣味惡い程白くなる。顳顬や眼の上が凹み、髮の毛が薄くなり、それで身體中に贅毛が生えて頸が自然と細長くなる。故に醫者の目から見れば、何と無く結核患者であるといふことが判斷せらるゝものである。全體肺病素因の人は、日本の所謂美人的の者に多い。即ち女ならば小野の小町、男ならば丹次郎といふやうなのが結核的の代表者である。故に小説家は往々美人が肺病に罹り、色々と不幸な目に遇ふ状態を寫して讀者を泣かすのは理由の存するところである。色黒くて筋骨逞しく腕力人に勝るといふ男女には決して本

病の素因は無いと断言しても可い。借又一たび本病に罹れば、極めて徐々に痩せ、次第々々に貧血となり、食欲も段々減り、これは胃病で無いか知らと自分から氣がつき、醫者に診て貰へば、醫者でさへも餘程丁寧に診ないと慢性胃加答兒であるなどゝ誤診する。そこで胃病の療治をしてゐると、呼吸が短かく、痰多くなり、聲が嘶嗄、胸が痛み、頑固な乾いた咳嗽が出で、痰も從つて多くなる。續いて汗盗が出たり、又は日哺熱とて、午後の四時頃から微熱が發り病漸く進めば、痰中に血液を帯ぶるやうになる。斯うなると、素人でも、結核ぢやなあと、診断が出來るのである。病益進めば、結核黴菌が腸にまで蔓り、即ち腸結核を發し慢性下痢といふ按排になり、從つて身體に脂肪氣が無くなり、皮膚がコセ〳〵し、歴易となる。それから四肢に浮腫を發し、衰弱益進み、遂に善人は極樂惡人は地獄に落るのである、六親眷屬歎き悲しめども更に其の甲斐あるべからずである。

抑本病に罹ると、甚だ長い日月を苦しむもので、如何に短かくも數月を費し、長きは十數年に及ぶのがある。己れ本病になつてゐることを知らずに、家族或は朋友と談笑しつゝある間に、家族或は朋友は之を傳染し、數月數年病蓐に苦しむを見て漫に可憐の心に堪へず、深切に看病などしてゐる中に、己れの病勢が漸く進んでくる、そこで己れは最初其の人に傳へてゐながら、却て其の人より傳染つたと、恨むやうなことのあるものである。

借次に本病は全快するものかといふに、是れは仲々六か敷い問題である。されど素人の方が、信ずる程に、絶對的治らぬものでも無い。或る醫學者は初期ならば百人に六七人は全快するものであると断言してゐる。現に余の知つてゐる某巡査が本病に罹り、余に診察を求めたから、暖地の海邊に移住するを勸めた。某は固より巡査の俸給で其の日を送る人なれば、おいそれと轉地療養の出來る筈も無い、そこで彼は極端にも小笠原島へ轉任の許可を得、彼の地に於て巡査を奉職しながら、間がな隙がな釣を垂れたり、音樂を奏したりし

て、少しは自棄的の風流をやつてゐると、咳嗽咯痰も次第に緩ぎ、滿一ヶ年程經つと、身體も次第に肥え太り、病氣に罹らぬ以前よりも一層健全になつたやうである。彼大いに喜び、早速歸京して再び余の診を受けた時には、余も大いに驚いたである。それより歲月は冉々として去り、早足掛五年を過れども、今に健康無事である。併し先に此の地を去る時、我が一日醫者の法を敎へ、藥品及び器械などは、殆んど田舍醫者でもするかの如くに、持つて往つたのである。いでや左に其の療法を。

〔療法〕 第一に南海の半島或は孤島に移り、鹽味ある空氣を呼吸し、絕佳なる風景を眺めて心神を慰め、頻りに魚鳥獸肉の滋養品を食して、適度に運動し、少量の葡萄酒麥酒を飮んで心身を快活にし、或は時に海水浴を試み、或は時に冷水洗拭を爲して皮膚を淸く且强くし、常に日光善良の溫室に居り、或は花を愛し、或は樹木を喜び、夜は早く寢ね、朝は寒い時の外は早く起き、腦力を使用することは斷然廢止し、氣に合うた友達と樹林或は濱邊を徜徉散步し、又は釣を垂れたり、貝を拾ふなど、疲勞を來さぬ限りは、身體を動すことを勉むべし。斯ういふ風にして居れば、大抵は治癒に赴くものである、一體胃を丈夫にして、滋養品を能く消化させ、善い空氣を呼吸して居れば、或は結核バチルレンが消滅するのであらう。例へば、樹木鬱葱たる日蔭には、青々たる苔が生へるけれど、日光赫々たる處には、植ゑても枯るゝやうなものである。即ち弱い身體は日光の當らぬ陰地のやうなものであるから自然とバチルレンが繁茂し、滋養品を食し、善い空氣を吸ふのは、樹木を伐つて日光を通すと同じ道理で、バチルレンはそれが爲に、枯死するのである。されど肺の組織が非常に傷み、空洞な處などが出來てからは何程悔いても仕方が無い。然るに藥さへ服めば、それで可いかと思うて、くよ〳〵心配しながら、塵埃雜沓な而も氣候不順な東京の地などに、伸吟してゐるとは甚だ當を得ぬことである。今や文明日進の世なれども未だ結核退治の藥品も發明せられぬ有樣なれば、慾に

胃を害するやうな結列阿曹篤など服まうよりは、寧ろ此の滋養療法を行ふ方が、何程善いかも知れぬ。故に余は結核患者の診療を請はるゝ毎に、右の養生法と、健胃强壯劑とを與ふる外、治肺劑などは少しも服ませぬことにしてゐるのである。今其の健胃强壯劑の一二を擧れば、

機那皮四瓦を、土瓶の中に入れ、稀鹽酸半瓦を落し温湯百瓦を以て、十五分間煎じ、其の煮詰つた丈水を入れ、更に百瓦(半合)とし、白糖適宜を混せ、一日三回に分けて服むが可い。この法は、令へ半年續いても、一年續いても、更に害が無い、又肺病者のみならず、如何なる人でも、服めば、健胃强壯となるのである。又

含糖百弗聖三瓦　マルチチ〇、三　白糖適宜

右能く混せて三包に分け食後一包づゝ服むも可い。又熱の出る人は

鹽酸規尼涅〇、五乃至〇、八を丸藥とし、朝夕二回に分けて服まねばならぬ。

返すゞも、心配は非常な害がある、令へ醫者が肺結核であると言つたところで、之を驚いてはならぬ、世の人は、肺病の診斷を受くると、恰も罪無くて死刑を受けたかの如くに、落膽して了ふ。それ故に病勢は一時に進むのである。昔より「健全なる身體に健全なる精神が宿る」と言ふけれど、余は「健全なる精神が健全なる身體を作る」のではあるまいかと疑ふのである。

序ながら言つておきますが、令へ健全な人でも結核を傳染らぬとは斷言し難いから、該患者には必ず近よらぬ様に注意せねばならぬ、或る外國では、該患者を避病院に入れて、交通を遮斷してゐる。然るに我が國では結核先生が兒童教授の任に當つたり、該患者と知りながら飲食を共にしたりしてゐる、野蠻を去ること遠からずと言はねばならぬ。

▲氣管支加答兒

〔種類〕　本病を分ちて(一)急性(二)慢性とす。

〔原因〕　(一)は營養不良及び肺結核の遺傳ある者及び

感冒などが誘因となる。直接の原因は塵埃或は惡い瓦斯を吸入するからである。又インフルエンザ窒扶斯麻疹天然痘及び心肺二臟の病などを續發するのもある。（二）は急性から轉じたり又最初より急性と同じ原因であることもある。

〔病狀〕（一）は熱の發するのと惡寒と交々反復し、揚句に氣管內に搔いやうな痛さを覺え、咳嗽が頻りに出で、喀痰もこれに從ひ、續いて食欲が減り十日乃至十五日程の間は頗る困難するのである。（二）は苦しい咳嗽を連發し、コン〳〵ヒーと顏を眞赤にした後に嘔吐をすることもある。さうして呼吸困難食欲進まぬなどの有様を以て、緩慢にも數月數年或は一生涯治らぬことがある。要するに急性は重いやうで早く治り、慢性は輕いやうで長く苦しむのである。されど其の急性を早く治療しないと、慢性に轉じ、甚しきは肺結核とまで進むのである。

〔療法〕（一）（二）共に左程の大差が無いから一つにして說かう。偖本病に侵されたらば、第一に濕うた溫かな室に居り、消化のし易い滋養食物を取り、胸部にフランネルを纏ひ、常に發汗するやうに注意し、或は溫暖なる飲料を飲み、或は溫脚浴を爲すが可い。酸い物或は辛い物を飲み食ひしないやうにせねばならぬ。出來得べくば轉地療養即ち暖かな海邊に移るが可い。蒸氣吸入は甚だ効能がある、これに用ゐる藥は、食鹽或は重曹が可い、其の分量は、何れも水三十瓦に就き、半瓦乃至一瓦を溶かし、蒸氣吸入器を用ゐて。一日に三四回も吸入するが可い。此の器械は醫療器械屋にあるから、購求の節其の使用法を敎はりなさい。內服藥としては、

擬涅瓦根四瓦を溫湯百瓦（半合）にて、五分間煎じ、煮詰りたるだけ水を入れ、白糖を混ぜ一日三回に分けて服むべし。

若し又熱發の甚しい時は、

撒曹三瓦　薄荷油一滴　白糖適宜　水百瓦（半合）

右一日三回に分けて服むべし

小兒には胸部に濕布繃帶を施し、度々取り換へてやるが

可い。兎角素人の方は、病氣と言へば、直に内服藥で無ければならぬやうに、思ひなさるが、併し療治といふものは、藥を服むばかりが主意では無くて、病を全快せしむるのが、大目的であるから、其の手段として行ふ方法は、出來能ふ限りは實施せねばならぬ。

或る腎臟患者に、余は診察して、君は營養不良が原因となつたのであるから、易化滋養の食品殊に牛乳五合宛毎日飲み玉ふべし、藥は更に要らぬと申したれば、其の患者怫然として怒り、先生人を馬鹿になさるな、斯う見えても藥價や診察料を拂はぬやうな、不義理者ぢや御座らぬ、仰しやる通り牛乳も飲まうし、刺身も食べませうが、何うか内服藥も下さいと曰ふ。余は色色と辨解したけれど、彼遂に信用せずして、或る漢法醫の治療を受け、病勢更に進んでから、又々他人の勸めに從ひ、余が門に降つたから、矢張前説を主張して色々と滋養食品を撰び、あらゆる攝生法を守らしめたれば、病遂に愈えたことがある。であるから、此の濕布繃帶も夢疎かに思ふてはならぬ、餅は餅屋病は醫者であるから、醫者の言ふことを彼是邪推しては、甚だ宜しく無いものである。

又室内を乾燥させて、おくことは、咳嗽を益す基であるから、金盥に水を入れて、室内におくが可い、本病に罹つた時に限らず、側に火鉢を置く時は、必ず鐵瓶なり、土瓶なりを掛けて、松風謖々の音を聞いてゐるが可い、否松風謖々の音は何の功も無いけれど、其の水蒸氣が室内の空氣を濕し、それが爲に呼吸器に少なからぬ利益がある。又温水蒸氣を吹き出すために、室内が一般に温まるものである。又此の外に炭酸瓦斯を清むる効能もある。又常に湯が沸いて居ればお茶を入れて飮むといふ便利もある。炭が早く減らぬ。五德の名は或はこれから出たかも知れぬなんかんと、斯る駄洒落はさておいて、我が國の如き炬燵や火鉢といふ不完全な暖室法では、是非とも鐵瓶をかけて置くが肝要である。

# 腦膜炎の注意

腦膜炎には結核症、化膿症のやうな種々症のわるいのがあるものですが、大學の弘田博士の説によれば、盛暑の候は比較的に豫後のわるい腦膜炎はないと申されました。

扨夏日流行するこの病症は初期に少しでも疑はしい症候の現はれに時は直ちに醫師の診察を受くるのが第一ですが、その病の一番多いのは當歳の小兒か、乃至一年前後で、その始めは何となく不機嫌で、一日兩三回青便を漏すか、又は一日三四回乳を吐き、いが〳〵とむつがるのが例である、恰も腸胃の疾病に罹つたやうな症候を現はし、漸次物音に驚き易く、時には常にうと〳〵と眠り勝な有樣で哺乳する毎に乳を吐くといふのが多い、此時に油斷をして居ると例の痙攣が來る、さア斯うなると皆狼狽して、種々遣り損ひをするものですが、甚だ不安心な次第である。

一體都會のやうな人家の密接してゐる土地で、空氣の流通はわるし、只さい暑いのに瓦の照返しが強くて大人ですら堪へ難いのに頭腦の薄弱な小兒の事ですから腦病を起すのは無理もない。故に是を豫防するのは、成べく樹木の多い、涼しい閑靜な場所へ小兒を置くのがよろしい。直接に日光を小兒の頭に當てたり、法外な暑い處に居らしめ、又は長入浴をさせるのも善くない。

又人の群集する處、騒々しくて物響の劇しい處などはなるべく避けねばならぬ。

又胃弱などで度々乳を吐く小兒、又頭腦の形のよくない小兒、且つ頭の特別に大きい小兒などは猶更注意せねばなりません。

それから又子守が手荒い爲めに小兒が常にピク〳〵するとか、又は頭の外傷打撲又は頑固な便秘なども甚だわるいです。

扨て腦膜炎に對する急應の手段は顏或は胸部に冷水を灌注け而して後ち頭部を強く氷で冷やすのです、それでも痙攣も治まらず醫師も未だ來ず患者も衰弱すると

かのことがあれば芥子泥（芥子を微温湯にて練るを宜しとす）を半紙半分位ゐに延べて足に貼るのです、そして十分か廿分かして足の皮が赤くなるのを度として取除き決して水泡の出來る迄貼用ないのがよろしい、さすれば痙攣は大抵鎮まりますまた鎮まらなんでも其上は醫者の役ですなほ、また痙攣時は近傍小兒の手足の屆く處には外傷せぬ樣に硬い物は悉皆取除き、又手や足や尚更ら胸などを無暗に壓へず、只無暗に小兒のもがゝぬ樣に輕く捕まへて居るだけにするがよい呼吸が爲難いから帶を解き胸を寬げて呼吸の安全を計り齒の生た小兒なれば柔かき木片を口に咬まして舌を咬ぬ樣注意せねばならぬ。腦膜炎は京阪地方で俗にチリケと稱してひきつけるや否や直ちに灸など据へるものであるが是は無益な事です。

## 入梅後の注意

毎年夏の始めには病人が多く出來ます、これは入梅三十日の間空氣が濕つて居て、物が腐り易い、そこへ來て急に入梅あけが熱くなる、腐つたものが日に蒸される、これが人の體に甚だよろしくないのです。赤痢や虎列刺のやうな流行病はそこをつけねらつて人體を襲撃するのでありますが、コレラ病の先鋒ともいふべき腸胃カタルはいつでもこの際に流行して老人小兒や、虛弱な人は往々これが爲めに生命を失ふ事がありますされば平常の衣食住に注意を加へ、この病敵をあらかじめ防禦するのは家庭目下の急務でありませう、そこでまづ空氣から申しませう。

此世の中に生きて居るには、無論食物も大事ですが、併し空氣が無かつたならば到底死なずには居られない人間も動物で有る以上は此事に就いて餘程注意せねばなりませぬ、田園の生活は殊に夏が好ましいので、外の事は兎も角もまづ空氣の新らしい丈け身體は丈夫に成る、精神は爽快に成るとは云ひますが、人の務に依り家の貧富に依つては、夏に成つたからとて、それ避暑、それ温泉行と、贅澤三昧をする譯にも行きません

から熱閙の市中、繁華の都府、紅塵紫埃に立ち混つた處で有つたら、よしんば方一間の庭でも宜い、成る可く青い物を置く様にすれば、いくらか空氣を新らしくする事が出來ますから、務めて樹木を植ゑる様にした方が宜しいです、今月は黴雨の期節で少なからず空氣は濕つて居ます萬一五日も十日も降り續いたら、硫黄薫蒸でも行つて家の中を清めると、大分殺菌をする事が出來ますこれは唯呼吸の方計りでは無く疊で有らうと道具で有らうと、日を定めといて乾いた空氣に曬して置くのは至極よい事でありますなるほど起きて直ぐ床を疊む、脱だ着物を直ぐ仕舞ふと云ふのは、家の内が片附いて良い樣なもの丶、實はほさないと、身體の爲めにも着物の爲めにも宜くありません、夜具などは二日に一遍位竿に乾なければなりません。

次は食物であります、滋養々々と言つて無暗に旨い物ばかり食ふたとてそれで身體の養になるものではありません旨い物を食ふ前にまづ胃を休めるといふ事が衛生に取つて甚だ肝要の事であります殊に禍は口より起ると云ふ譬の通り、是から夏に成ると、往々意地穢なの果が悪い病氣に取り付かれて了ふ、滋養物として牛乳なども餘程良いには違ひないけれど、是程また危險なものはない、若し沸騰させ方が足らなかつたら、牛の心臟病と人間の肺結核とは同じで有る處から、飲んだ乳に其黴菌の居たが最後、父母所生の身を生れもつかぬ不治病の器にして了ばなければ成らない水でも左様で、冷で飲むのは無論いけないけれど、生ぬるいのは猶更良くはありません。とんな水にも虫が必ず居るとすれば、一定の温度を與へると却て黴菌の精力を増して、非常な害をするもので有るから、まづ一旦熱してそれを冷ましたものが一番無難です、物にも無論依るけれども、食物は重に火を強く掛けた方が當り障りが無くつてよろしい彼の不文明と稱する支那人が身體が壯健で割合に流行病に罹らないのは、職として生水や半熟の物を食はぬからでありませう尤も卵などは例外で半熟を最も滋養としてある、此卵は白味にも多くの養分を含んで居るのですから、強ひて黄味のみを最

上とする事は出來ない、生れてから三週間孵化力がある
ですから、成るべく其間に食べる樣にするがよろしい、彼の上海あたりから來るのは時日は經つ、目方は輕くなるあまり滋養に成るものでは無い是れに限らず食物は何でも自分で遣るに越した事は有りません、店屋のなとを見て表は流石に蓋がして有るけれと、裏へ廻れば明けッ放しで、蠅なとはとまり放題にとまつて居て、誠に安心のならぬ事です一家の盛衰は臺所の隅より起るとしてある以上は、此臺所を預る細君其人が食物に就いては充分身を入れて、苟も蛆なとは這はせない樣に、成る可く南面に向け光線の入り具合をよくせねばなりません。

次は傳染病の防禦です、これは何でも手です手を第一に大事にすれば、大抵な傳染病恐るゝには足らない、彼の患者に面會が出來て話をしたり介抱したりした處で、千倍の昇汞水に同等の石炭酸を入れて、是で能く洗へば先づ後の心配は御無用です、傳染病のみで無く平生でも御飯前などには、キット一度手を能く洗つてそれから食べる樣にした方が、とれ程宜いか知れません、昇汞水が無ければ石鹼でも宜い、鹽と云ふものは殺菌力を多く含んで居るのだから、食物にしろ何にしろ、此鹽分の含まれて居るものを多く使つた方が安心で有る、彼の世間で梅干を御膳の節に食べますが此點から見て至極よろしい。

それから果物です子供に蛔蟲がわくと云ふ事、世間では甘い物を多く食べれば必ず生ずるものとして居る樣ですが、實は果物の皮と肉との間に其卵は多く居るので、喉が乾いたなとゝ無暗にたべさせやうものなら、忽ち此患を見なければならぬ、出來得る限り皮を厚く剝く樣にしなければなりません。

## 料理實驗ばなし

掌膳會といふを設け篤志の人を集めて熱心に家庭料理の改良をはからるゝ宇山夫人（宇山氏は建築術生の專門家で、今は官命を帶び洋行中で御坐います）

のお話に左の事を伺ひました。

▲下婢や料理人に庖厨をまかせるとは、經濟からも衛生からも、更に大なる家人の幸福からも斷じて惡いと思ひます。主婦たるもの丶料理の智識と手腕とを有せぬとの、一家に及ぼす不幸といふものは、決して裁縫をよくせぬ段の話ではありません。是からの奧さんは是非共料理を御研究になりまして、下婢を監督なさる計か、さほど忙はしくない方々は、御自身に手を下して遊ばすがよいと思ひます。私は子供が六人居りますし、他にも用事を持つて居りまして、隨分暇のない方ですが、婆やを一人置きまして雜用を任せ、別段下婢といふものなしに自分で御飯焚きから致して居ります自身の實驗上多くの利益を感じますので、皆樣におすすめする譯で御坐います。

▲我邦でこれまで家庭料理に無頓着でありました事は勝手道具の不揃なのでも分ります。風味のよい食物を家人のために備へやうと思ひますなら、是非一通りの道具だけはなくてならぬもので御坐います。で、皆樣の御參考までに家庭の庖厨に必要な、和洋一通りの料理道具を新たに調へるものとして、勘定して見ましたところ、まづ十五圓で日常差支へぬ丈のものが出來るので御坐います、お安いではありませんか、奧さんのお羽織一枚の儉約で日々家人の身體を養ふ大切な食物を調理る器械が出來るのですもの、てんぴがないの、裏漉しは持ち合せぬのと、さも贅澤品でゝもあるやうにお云ひになるほどのとはなからうと思ひます。

▲西洋人は食味に就てはどうしても日本人ほど鋭敏にないと思ひます。胡椒にしてもカレー粉のやうなものでも、我々には堪えられぬほど多量に用ゐねでは、彼の人達にはこたへぬのです。私はしばらく或西洋婦人に料理を習つたとがありますが、萬事につけてこの樣なとを感じました、その他なほ日本人とは大分趣味の違ふところが多う御坐いますゆゑ、純粹の西洋料理に手加減を施さねでは、ホントーに甘味いものは出來ないかと思ひます。次に料理屋風の日本料理これも矢張家庭にそのまゝ採用するには、種々の點から不適當で

御坐います。特に家庭料理研究の必要を感じますのはか丶る事がらで御坐います。

# 季節總菜料理

## 附 手輕西洋料理

### ○夏向のスープ

米を普通の通り煮たるもの丶中に、少量の鹽を混じ、小匙一杯位づつに丸めた、之に卵の黄味を塗り、その上よりパンの屑を粉にせしものをかけ、油を引きたる鍋にて、焦げざる程に燒きて皿に入れおき、上より牛肉の煮汁を灑ぎ、好みによりては少量の胡椒をかくれば、淡白にして、夏時に適するスープを得べし。

### ○馬鈴薯のスープ

先づ太やかなる六個計の馬鈴薯の皮を剝ぎ、一時間ほど水に浸すべしかくて一本の葱を少く刻み、少さき袋に入れて、五勺計の牛乳にて煎じ、先きの馬鈴薯と、適宜の鹽及胡椒を此の牛乳の中に入れて、二三十分間煮立て、その柔かくなりしを見計らひて、一二個の鷄卵を入れ、膳に供すべし或る人は鹽の代りに鹽豕を入れて珍重するものあり。

### ○白瓜料理

二三個の白瓜の皮をむき、種子を去り縦に切り、五分ほどの間、西洋うどを湯出る如くに、ざつと湯出、水を捨て、之を鹽、胡椒バタにて加味し、然る後白瓜を引き出だして、皿に盛りおき、後の汁に少量のうどん粉と、水とを入れ、十分計り沸騰せしめて後、二個の鷄卵と青味少し計りと能ふべくはクリームをも入れて、よく搔き廻はし之を皿に盛りたる白瓜の上よりかけて食膳に供すべし。

### ○白瓜の佛蘭西料理

中位の白瓜二三個の頭と、尻とを切り、棒にて中の種を押し出し之を牛乳か水に鹽を加したるものにて、湯出をき、別にパンに牛乳をかけ、づく／＼に濕めしたるものを、二重鍋に入れて沸騰せしめ、その中に鷄肉牛肉のたゝきたるものを加へて、鹽砂糖にて加減し、その中へ鷄卵二三個を入れて混和せしめ、好みによりては、葱の湯出汁少しを加へ、能く混ぜ合せて、先きの白瓜の中に詰め込み、バタを澤山引きたる鍋の上を轉がして、一寸外側を溫め、之を輪切となして皿に入れその上より牛の煮汁、もしくはクリームの汁等をかけて、食用に供すべし。

### ○白瓜の葛煮

大なる白瓜を、五分位に小さく切り鹽水にて湯出、水を捨て、更に牛乳を入れかへ、その中へ鹽とバタと胡椒を入れて加減し、沸騰したる時葛もしくはうどん粉を解したるを入れて、葛づゝりの樣になすべし。

○白瓜の卵焼

能く熟したる白瓜の皮を剝き、二つに割り、中の種子を匙にて掬ひ去り、二寸四角位に切り、目籠に並べて、上よりパラリと鹽を振り、暫時をきて水氣を去りたる後、鷄卵の解きたる中に浸たし、引き上げてパン粉の上を轉ろばし、油を引きたる鍋にて燒くべし。

○玉　葱

第一、西洋料理のすきなる人の用ゆる一法は、ねぎの上皮の赤かき物を去り、三分位の輪切にし、一時間計り鹽水に浸たしをき、引き上げて、牛乳にて煮上げ、温かき上よりバタを掛けて食すべし、第二、牛の油を解かし、湯出たる玉葱を入れて炙り、之に一二合の水と鹽、胡椒、麥粉、極少量の砂糖を入れ、二十分の間度々掻きまはし、どろ〱になりたる時、炙りたる麵包の上に掛て食すべし、第三、玉葱の皮を去り、薄すく切りて湯出ては絞り、湯出ては絞り、二三度も水を變へて、臭氣の拔けたる時、湯出拔卵の黄味計を、少さく刻みて、鹽を加へたるものゝ中に入れ、玉葱と、黄味とを能く混和し、味醂酢若しくは、砂糖酢を加へて食すべし。玉葱はよく湯出こぼす時は、惡臭全く去り、老人小供の齒なきものにても、嚙むに難からざれば、之を丸湯出になせしものを、砂糖醬油にて鰹魚出しにて煮付け、もしくは牛肉の中に入れて、煮る時は淡泊にして一種の風味あり。

○馬鈴薯の葛煮

ジャガ薯の皮を剝きたるものを小さく刻み、暫らく水の中に入れおきやがて取り出だして、鹽湯の沸騰せる中に投じ、能く煮へたる時湯を去り、更に葛を鹽と砂糖にて加減し、乳にて煮たるものを掛て食膳に供す。

○馬鈴薯サラド

馬鈴薯を丸煮となし冷めたる後極めて薄く切り、之を一列に並べ、其上に燒肴又は煮肴の肉の細かくせるものを載せ、又た其上に薄片を一列に載せ、此の如く交互に肴肉と薯とを適宜に重れ次にサラド、ドレッシングを振掛けて食するなり。序手にサラド、ドレッシングの製法を述べ置かんに、そは卵黄三個を土鍋の如きものに入れ、之に砂糖五勺鹽茶匙半分を入れて能く攪拌し、更に牛乳一合半を入れて火に掛けて絶へず攪拌し、糊狀を呈するに至れば別に温めたる酢五勺を加へ(酢の温度は現に煮つゝあるものと同温なるを要す)是れ即ちサラド、ドレッシングにして渾てのサラドに掛て用ゐるものなり、斯くして得たるドレッシングは十人位のサラドに掛けるに足るものなれば、用ゐる材料の分量は人數の多少により斟酌して可なり。

○豌豆スープ

此は野菜スープの中にて人の最も多く好むものにして、而かも手輕るく製する事を得べし。而して此のスープに肉入スープと並スープの二種あるなり、今其一つの製法をあげん、青豌豆スープを製せんとせ

ば、先づ二斤の豆をよく洗ひ皮をむきて二つに割り置き、火に懸けたるスープ鍋に大匙二杯の牛酪を落し、之に前の豆を投れ、凡そ五分間煮付かぬやう能くかきまぜ煮たる後、水一升八合を注し、其の沸立つを待つて浮沫を去り球葱三個胡蘿蔔蕪菁各々一本を細に刻みてスープの中に入れ、同時に醬油若しくは鹽、及び砂糖にて味をつけ、豆は十分軟かになりスープは濃くなるまで更に凡そ二時間煮たる後漉して用ふべし、但しこまんとする時、スープを餘り濃しと認めたらば、適度の熱湯を注してよくかきまぜ、然る後之を濾すも妨なし。

○柳川鍋

泥鰌の鶏卵とぢは淺き土鍋に、酒と醬油とを入れ砂糖を少し加へ、さゝがき牛蒡を敷き、その上に骨抜どじようを並べ、以上二種の煮へたるとき、溶きたる鶏卵を流し入れ、鶏卵の煮へざるうちに鍋を下ろし、粉山椒をふるべし。是を柳川鍋といふ、鶏卵とぢは何にても斯くすべし、鶏卵煮へて鍋を下ろせば、固まり過ぎて宜しからず、煮ざるうち下せば鶏卵は熱氣の爲め自から半熟になるものなり。又醬油と酒を代れる代りに鰹節のだしにてもよし。鹽辛きは味を損ずるものなり。

○鶏卵豆腐

鶏卵豆腐は清し汁の實立ちたる中へ豆腐を砕きて入れ、煮ねたる頃に鶏卵を破りて入れ掻きまぜて煮上ぐべし。又清し汁に代へて味淋を加へ、又は酒と醬油とに砂糖を加ふるなど好みに任すべし、煎鶏卵、又は煮豆腐は、すべて鶏卵豆腐の煎方に同じ、煎豆腐はまづ豆腐一丁のまゝにて茹で布の袋に入れて能く揉み、細かにして煎るなり。但し、之には椎茸、蓮根、たゝき鶏肉、芝蝦、花鰹、柚子の刻み皮、又は牛肉等の具を雑ふ、此の種々の具は細かく切りて煮汁にて煮上げ、其後へ豆腐を入れて掻き混ぜ煎るなり、但し山吹にするには煎上げ際に溶きたる鶏卵を注ぐべし。

○田舎鱠

田舎鱠は蘿蔔を短冊に切り鹽にて揉みて能く洗ひ揚豆腐をへぎて細く刻み、椎茸、煎餅麸なども細く刻み、芹、三葉を一寸ほどに切り焦したる燒味噌と燒豆腐とを擂りまぜ、三杯酢にてのばし、何れも和ねて粉山椒をかけるなり。

○夏向の酢の物

夏季酢の物を作るには鰹、すゞき、はも、さば、鹽さば、ふな、あかゐい、あわび、野菜、海草類なるが、まづ鰹魚細つくりにして紫蘇の葉の算木切りさらし蘿蔔を取合せ蓼酢にて仕立つべし。すゞきは洗ひにし（洗ひとは刺肉にして暫時鹽を撒り置き、冷水にてよく洗ふなり）おぼろ鶏卵をふりかくべし。さばは細作り三杯酢をかけ、針生姜を添ふべし、鹽さばには酢に砂糖を加へてよし、鮑は一分ほどの厚さに切り、小口切にし、酢に鹽を加へてかけ、蓼と紫蘇とのせんうちを

添ふべし。又胡瓜は揉み、砂糖を加へたる酢か又は酢と味淋とを等分に混ぜたる物を注ぐべし、これには紫蘇のせんうちをまじへ、又は削り鰹節、或は油揚の細切、生節のむしり、蛸の小切など加ふるもよし。夏蘿蔔は卸ろして二杯酢をかけ、花かつをゝ振るべし、又ちりめんざこを雜ふるもよし。

## ○スープの製へ方

牛肉や羊肉にてスープを煮出しますには脛あたりの所、肩先あたりの所の肉で充分です、骨も砕いて共に煮出します、髄からも中々佳良い味が出ます、分量は骨も共に一人前三十匁内外もあれば上々のものが出來ます、先スープを煮出すには五六人前のものを拵へますそして肉を卵位の大きさに切り骨は一寸砕きて髄も煮るやうにし鍋に入れ水は八九人前と思はるゝ程に餘計に入れて一旦は強い火にて沸騰させるのです沸騰すると泡粕が立ちますから其泡粕を匙で取ッて除ける、この泡粕を取除けないとスープが濁つて見ともよくなく、味も佳良ありません、泡粕を殘らず取除けた所で、玉葱、蕪、人參、芹、三葉等の野菜物を入れ鹽、醤油、胡椒にて鹽梅し弱き火にて三時間乃至四時五時間ほどもコトヽヽと煮ます、出來ましたなら篩か木綿で漉して別の器に移し次に脂か上へ浮いて居りますれば匙か何かで其脂を取除ければ是でスープは出來上つたのです此儘で召し上ればプレーンスープと申しますが、加へ入れる實の種類に依つて種々と名が變つて參ります、味も變つて參ります、それ故に是が種々なるスープの原料となるのです、さてその割合分量は肉及び骨ともに百匁、玉葱一ツ（上皮か黒焼になる程に燒て用ふれば一入よし）、人參一本蕪一ツ芹、三葉の類三四莖、鹽加減はお口に聞きて適度ほど、水六七合尤も三四合ほどに煮つめる、時間は三四時間程を要しますが、肉は多量となるに隨つて段々多く時間を要します。又病人や衰弱の人なぞに供するものには野菜類を一切用ゐずに肉や骨のみを煮出します。

## つけもの新世帶

◎精舍納豆漬　瓜、茄子を丸で一夜鹽押したのを、水氣を斷りて納豆に漬けるので、一日天日に干して漬ければ味一層よい、が、これは急に漬き難いもので、生姜、唐辛、辛皮など入るゝこともあるから時節に應じて何でも漬けるのであります。

◎金柑鹽漬　金柑の餘り熟さない内に、水と鹽と等分に交ぜて煎じ一夜冷して器に入れた中へ入れ、そして風のあたらぬやう目張をして置くのです。

◎筍鹽漬　筍の皮を剝きて、澤庵大根のやうに一側づゝ並べて、鹽を中鹽に撒き、かるき押をかけて漬けるので、附味の爲めに唐辛など少し入れて置くのです。

◎蕗水漬　水蕗を生の儘皮を剝きて鹽押し、又葉ばかりを擂鉢に

入れて鹽で揉んで青汁をとり、之を前者の中へ注ぎ込むのです、で、使ふ時は鹽出し、煮物に入るゝに宛然生の通であります。

◎漬蕨　蕨の柔かき所ばかりを選んで、之を鹽と灰と交ぜた中へ漬けろ、そして、使ふ時は四五日前より、呼灰汁を入れて水に浸して置き、熱湯をかけて料理するのであります。

◎三つ葉溜漬　三葉芹の白い所ばかり揃へて、竹の皮を細く裂きて之を結び、根と葉とを取りて、水氣をよく乾し、味噌の溜を馬尾篩で濾した中へ漬けろ、二晝夜ばかりで加減よくなります。

◎葉附小大根三杯漬　大根の極く小さいのを選び、之を莖一寸計り殘して葉先を切り去り、一時間程天日に當てゝ直ぐ三杯酢に漬けるので、俗にこれを洗ひ髮ともいつてゐます。

◎土筆粕漬　土筆の穗ばかりとり、よく洗ひて水を斷り、そして、直ぐ粕に漬けるので、即ち使ふ時には粕を洗ひ、花鰹節などかけて猪口に使ひますが、風味も至つて上品なものであります。

◎きざみ漬　大根の軟き若株を選り拔きて、よく洗ひ之を小一寸位に刻み、又大根を短册に切りて之と等分に交ぜ、醬油樽（徑一尺深一尺二寸）に一杯ならば、鹽一升ばかり入れて能く揉みつけ、手比な押をかけるのです。十日餘もたてば、既う漬かつてゐるから、之を出してざつと水で洗ひ、醬油をかけて當座用にするのです。

◎大阪切漬（くもじといふ）　大根と蕪とを等分に、葉莖ともに刻み込んで、醬油樽（前と同じ物）ならば鹽五合位入れてよく揉み、そして押を強くかける。十日餘も經てば既う漬かつてゐるから、ざつと冷水で洗ひ、固く絞りて醬油をかけて喰べるのです、之は京阪でよく流行つてゐるもので、齒ぎれもよく、至つて淡泊な風味を有つてゐるものである。

◎淺漬　太き大根を選んで、よく洗ひて水氣を乾し、酒樽のあきたてへ漬けるのが一番よい、大根五十本に花麹一枚、鹽一升が其大凡の分量である。其漬け樣は鹽と麹とをよく揉み合せて、一段一段に之を振り撒いて、そして其間毎に新藁を十五六本宛敷く（之は色のよくなり味も付くのです）それから最後に其上側に、鹽斗り二摑みほどぱらりと撒き、押蓋をして強く押をかける。やがて水十分に上つて二十日計で漬かるが、風味のよい所は先づ十日ほどで、餘り永く經てば直く酸味が出るから、早く使ひ斷られねばならぬ。

◎大坂淺漬　細い大根を洗つて葉は切らず、莖も其儘で淺漬の通りにして、强き押をかけるので、之も二十日ばかりで漬かるもので。

◎奈良漬瓜　夏土用のうち、極新しい白瓜を吟味して、之を二つに割つて中實を深くとり、其凹處へ鹽を一杯盛りて、之を二時間許も天日に乾し、そして其溶けた鹽水を零し、よく冷した後で、鹽加減をした糟に仰向にして漬けろ。そして桶の底へは中底に穴のあいた板を置き、又其下へ糠を入れ置きて、水氣を下へ導くやうに、そして粕を時々取り代へれば久しく保つものであります。

# 夏季の日課

まさ子

半歳夢の如く過ぎて季節は漸く夏期安息の期節に入りぬ。大磯逗子の海邊に濤の音、松の風に詩情を養ふも面白く、輕井澤、箱根あたりの木陰冷やかなる所に塵外の凉味を貪るも惡からず、又少しく足を延して北海道の邊に探勝するか航海旅行なども又一段の樂しみなるべしこのごとく消夏の法は各種の方面より、席を清めて待つてふ、有様なれば、隨分其の撰擇に迷ふ方々もあるべし。猶それよりも一層女學生側に向て氣の採めるは夏期の講習、國語、英數の諸學科を始めとして割烹、禮法の講習が新聞紙雜誌にその廣告のあらはる毎に、種々なる方面に手が出し度く成りて、しづ心なき夏の此頃とまでもいふべからん。

夏期の講習、これは僅か一ヶ月半位な短期にて。大意とは申しながら、その學科の要領を習ひ得らるゝなれば、如何にも便利ならんされどこれは主として平日業務に忙しき人が一年一度の夏期を利用して學術智識を養ふにあれば普通の學生には益なくして却つて家庭の主婦などに適するものならん平日學問攻にされたる女學生に向つて夏期の講習をせよとは甚だしき重荷なるべし余は敢て夏期の講習を惡しと云ふにはあらず、若しこの數旬の休日を利用して、女學生に家事科の實修を自宅でさする事にせば如何、これは殊に平素家庭との事に關係の薄き富豪權門の娘達に向て希望するなりこれから嫁入して家事整理の局に當るべき年若き婦人が、この實修の經驗に由て得る所の利益の少々ならざる事はわれらの深く信ずる所なり、成程女學校には何れも家事科の設けありて、始終講習を勉むる事なれど多くは他の學科の講義のごとくテーブル論畑水練の弊を免れざるなり。それは割烹や裁縫茶の湯のごとき術科として實地に手を下す規則なれど、實は形式的に流れ易く。のみならず主婦として、一家の仕事をなす時に當ては、とても學校にてテーブル上の講義を聽聞したる通りに参るものならず、いろ〳〵の意外の問題に

逢着てこれを切り拔ける工夫を爲さねばならぬなり。もし學校の試驗問題なれば成蹟惡しとてさまで不都合なきも、今一家の主婦としては、その處分の良否の結果は家庭の福祉に大なる影響を來すものゆゑ主婦は先づ其の責任を負ふの覺悟を以て事件に臨まざるべからず。

經濟のこと、衛生のこと、敎育のこと親族の知己の交際等を始めとして下婢下男の使ひ樣に至るまで敎へ立つれば際限も無き事ならん、其責任は實に輕からぬ職務なり、猶臨時の賓客に對して相當の接遇もあり。不意の近火、負傷、病者等に出會ことあらん、これらも臨機の處分を爲ざれば、其の處分方法は、一定の規則を以て之に應ずる事決して出來ぬものなり。斯る事柄に對する處理の呼吸……消息は到底實修の上ならでは解決すること能はざるものなり、もしこれを實地の試驗とすれば非常に好き問題にて生徒の力を練るには無上の材料ならん。

以上の事柄は中流若くは下流の家庭にのみ比較的多からんも、若し之を學校の問題とすれば、生徒として答案を拒むことを許さゞるなり、敎師は生徒の身分や貧富に就て問題を區別するが如き事をせざるなり。

貧乏身代の遣繰は、如何にも辛苦ならん。富豪の婦人には殆んど夢想も及ばぬ苦勞があらん、家令や執事や老女任せの、所謂權門富家の家庭にはそれ等の事柄を研究するの必要は無きかも知れず、然し苟も家族あつて家庭を形つくる以上は富家には富家相當の主婦の職分あれば、富家の婦人に向て裏店の妻君の職分を研究されよとは強いざるなり、只各自の身分に相當せる程度に於て、この職分を實地に修練されん事を望むかくして、この夏期休日中一ヶ月乃至二ヶ月間の家庭の仕事を擧げて、その父兄が令孃に一任さるゝなり、婦人の方より云へば、この一二月間を學校にて修得したる家事科の智識を家庭に於て試み、家庭の方より云へば新しき小主婦の君を夏期の間、戴きてその指揮命令に服するなり、これは實に興味もあり、經濟上の利益もありて、一種の消息法ならん今其の方法として余輩は

左にその日課幷に規則の概要を示さん

▲日課

▲起床　午前五時

多少の遅速は、その家風によりて相違あるべきも早起の習慣は、一家の風紀を保つ上に於て尤も大切なる要件の一ならむ。さしぐしの晩起は黒髪のながきいのちのはじめなりけり、と云へる楓の内侍の詠歌は、こよ無き家庭の福音たるべし。況して、晨起の價値は、夏季に於て、その一倍を加ふると云ふに於てをや。

▲運動　自五時至五時半

食事前の運動は衛生上、必要の條項たるを覺ふ、運動の種類は素より多種なるべし。後園の芝生に出で丶體操を試むるは、尤も妙、庭中の掃除、盆栽の手入なども興味ある一種の運動法に數へて可ならむ。其他、氏神の朝詣、氣も心もすが〳〵しくなりて心身の衛生には無二の良案たらむか。

▲修容　自五時半至六時

運動終れば主婦が身だしなみとして第一に務むるは修容なるべし。あながちに顏料を用ひて濃厚的化粧を爲せと强ふるにはあらざるなり。皮膚の淸潔と美麗とは微温湯の拭擦、及び磨擦、新鮮なる空氣浴などの簡易なる方法に依りても、能くこれを保ち得べし、其他毛髮の整理、衣服着裝、要は淸素と典雅の風丰を整ふるを旨とせば可ならむ修容終れば、神佛の拜禮、家長に對する挨拶を爲して後食案に對ふなり。

▲朝餐　六時

食事の時刻は殊に正確を要す。婢僕ある家に在ては先づ彼等が食事を了りて、さて主人に及ぶを宜しとす、こは江川坦庵先生の家範として人の稱嘆する所、唯に業務上の便利なるのみにあらずして主從の間に無限の情愛を湛ふるとを疑ふべからず

▲休息　自六時至七時

食後の休息は食前の運動に對比して尤も大切なる事項なるべし。衛生的觀念の幼穉なる、我習俗の

これを輕視するは勉て之を矯正させるべからず

▲洒掃　自七時至八時

▲室内裝飾　八時

洒掃終れば、居室の裝飾を爲すべし。床の間の掛幅の整理、棚飾の安配等、裝飾上の知識を養ふも一種の娯樂と云ふべからむ。經濟上、花瓶の花を日毎に插し変ふるを許さゝる家庭にても、せめては、その水を取り代へ花に水打そゝぐなど、花神の化粧も又忽せにすべからざるなり。

▲學科の復習　自八時半至九時

この暫くは、臨時の主婦が、元の學生に復るの時にして、豫め定め置きたる日課に就きて、これが温習をなすべし、温習の時間の多きは宜しからず、多くとも一日一二時にて事足りぬべし

▲休息　自九時至十一時

▲割烹　自十一時至十二時

平生習ひ得たる割烹實修の時間とも謂つべきか。

▲晝餐　自十二時

▲休息　自十二時至午後三時

▲洒掃　四時

▲割烹　自五時至五時半

▲入浴　五時

▲晩餐　六時

▲記錄　七時

此時を以て家庭にて今日一日の收支を帳簿に記入し、月末に至りて、之を計算して父兄に報告するの資となすべし、收支の記帳終れば、翌日の献立を考へ之を記して其の原料の購入すべきものは之を購ひ、厨房の整理をなし置くを要す。

▲巡視　九時半

門戸の鎖鑰、火爐の注意等、その過失なき事を期せざるべからず

▲就眠　十時

以上は日課の大體なり、此外一週に二度位は洗濯日を定め置て、衣服の洗ひ、すゝぎも爲ねばならず。稀には親族知人の家を訪問もせねばならず。其間には來客もあるべし。新主婦の生活は中々に多忙ならん。併し新ふ日課を定て、順序よく處理すれば、然までの困難は無きものにて、家事の實修には實に好箇の資料たるべし

## 女子と結婚（成女雜誌所載 鳩山春子女史）

結婚後の女子は己の意志を押通す可からず、克く夫と一致して家庭の幸福を計るべきなり、家庭の調和を害して迄も己の意思を貫かんとするは善からぬ事なり、たゞ子女教育家庭整理の如きは自己の考を定め其通り勵行しても差支なかる可し。彼の活潑なる西洋婦人は交際の自由を有し公共事業にも彼此と奔走すると雖、我邦にては事情の許さぬものあるより、强て斯様の眞似をなす時は、或は夫の疑を招き家庭の平和を破るに至る、故に女子の舞臺は家庭と心得て、之を完全に治め、而る後餘力あらば出でゝ社會に交り公共事業に盡すも可なり。スチーヴンソン曰く、結婚によりて男子は大概價値を減じ女子は價値を增すと、此語簡なりといへど味あり、其の故は婚姻すれば男子は俄に責任重くなり、自由も希望も制限せられ抱負も勇氣も減じ小さき人物と成る者多かるに、之に反して女子は男子保護の下に家庭整理其他の事に當り、結婚前よりは數等の進歩をなし智識を啓發し、人情を研究するの機會を得て其の價値を增せばなり、誠に至言と云ふべし。又た或人は最も興味あり最も精通したる仲間を得んと思はゞ獨身の男子と善良なる既婚婦人とを選む可しと言へるが、此の語頗る翫味すべし、女子は此の如く結婚によりて男子よりも多くの利益を得るものなれば、徒らに不平など起すは宜しからず、西洋にては男子にあれ女子にあれ獨身の生活をなすもの多かるが、是は社會の爲め自身の爲め甚だ惜しむべき事なり、此の現象は生活の困難にも因る可けれど、一つには女子が餘に見識を取り過ぎたる爲なるべし、余の考にては、女子は不具者ならぬ限りは、相當の配偶を見出さば結婚したる方勝れりと信ず。第一日本にては獨立せんと欲するも女子に適當なる職業少ければ、なまなか獨身社會へ出でゝ働くよりも、結婚して克く家庭を治め子女を養育するの功多きに若かず。さりとて從前の如く女

子は是が非でも結婚せざれば恥辱の如く考ふるは大なる間違なり云々

## 成功と結婚（實業之日本 マーカス氏）

早く結婚して早く妻子を有する青年の多くは生活の困難に苦められ、家族の係累を生ずると共に自由の活動を妨げらるゝものあるより結婚時期を成るべく後年に延ばしむるの傾あり、輙ち彼等は曰ふ、薄資薄給の時代に於て結婚するは死地に陷るものなりと、然れども困苦の原因を精査する時は罪は結婚にあらずして全く他に在ることを發見せん。

（一）彼等の夫妻は身分不相應なる家賃を拂ひ、不相應なる衣服を纏ひ不相應なる食物を食へり。

（二）彼等の夫妻は煙草を喫へり酒を飲めり菓子を食へり。

（三）彼等の夫妻は生活費を豫算せざるなり有るに任せて使用し得るに從つて散費するなり。

（四）彼等の夫妻は懷中少しく温なるや乃ち比較的不必要の物品を無暗に購求して顧みざるなり。

（五）彼等の夫妻は勤儉の念なし日に一錢の貯蓄を馬鹿らしと冷笑して之を濫費し去るなり。

（六）彼等の夫妻は忍耐の氣力に乏し收入少しく増加すれば直ちに生活を高くして目前の安逸を貪らんと欲するなり。

故に彼等の夫妻にして協力して事に當り、以上の缺點を戒め、大なる注意を生活の上に拂ふに於ては如何に薄資薄給の者と雖も、決して結婚の爲に生計に窮することなく、まして負債を生ずるが如き悲境に陷ることなし、否な却て成功を助くるものなり、結婚して爲に成功を妨げらるゝが如き者は結婚せざるも到底成功する能はざる者なり。

## 割烹と科學の關係（東京教育時報 赤堀峯吉氏）

人は飲食によりて人躰に必要なる營養分を吸收するものなり、故に調理の法は衛生幷び生理と關係あり、其の調理する所、如何程美味なりとても、衛生に適せず生理に反くものならば、何の効かあるべき、かるが故に調理者にして此の衛生生理の心得有ると無しとにては、食物の配合に大なる差異を生ず、在來の割烹は大概習慣に基きたるものなれば學理上より之を分析して悉く營養分の配合宜しきを得たりといふ可からざる

ものあり、されば一家の主婦は勿論下婢といへども大畧生理衛生に就て研究せんことを欲す、然るに今日の有様にては、此等の學科と　割烹とは果して親密なる關係を有して世人の注意を引きつゝあるか、否、世人の注意はさまで引かれ居らざるなり、是畢竟家庭に於て兎も角も其の日暮に間に合ふを以て能とし、敢て調理の技學科の研究等に至つては捨てゝ顧みぬに因る、又た、普通教育に於ても、生理、衛生、物理、化學等の諸學科を課すると雖、食物調理とは何の關係をも保たざるものゝ如し、こは時間の都合上より專門的に詳しく教ふること能はざるにも因るならんが、今少しく詳しく之を加味して教授せしならば、女子教育の上に多大の効果あるべきを信ず。

生理衛生の智識に暗くして、割烹を行はしむるは甚だ誤れることにて、而も危險なり、余の言ふ割烹は、庖丁を手にし食物を調理する事のみの謂にあらず、割烹の範圍内には臺所は無論、割烹に關する生理の有様、衛生上の注意等は總て屬し居るものなり、されば此の智識なき者の割烹に從事するは、誠に恐るべき結果を見ることあり、例せば、良人に胃病あるを知らば之が妻たるものは胃病に對する注意の大要を知りて、消化し易きものを選び、強き刺激性の物を避くるとか、激酒を止むるとか、種々なる注意を要す、然るに之に反して良人が好むからと謂て、妻は、其の好むがまゝに其病に害あるもの迄も喰べさせるといふは危險なる事なり、或は小供の病氣にしても、之と同じく、それぞれ其の病に對して。與ふべき食物の注意を怠る可からず、かの忌はしき傳染病患者を吾人の家庭に生ずるも、所詮は食物の不攝生より來る罪なり、是に據て見ても、割烹の實地に並行して、理論の側に於て此等の知識を修め置かざる可からざるなり。

## 少年男女の病弊（時事新報　星つれ子女史）

此頃世上に少年少女の自殺を報ずる聲頻なり、其原因の那邊に在るかは未だ究めずといへども、新聞の傳ふる所によれば、某家の少女が自殺したる原因は、自分

の思ふまゝに就學を得ざるにありと、こは其一例に過ぎざるも、或は思ふことが協はぬとか、或は世間がわからぬとかいふやうな薄弱の理由の下に大切なる生命を棄つる少年男女の事を屢々耳にせり、かゝる現象はその原因は兎もあれ宜しく研究すべき問題なりとす、又た一方より言へば、此節は少年少女の學生に神經衰弱症多く、某々の中學校及女學校の如きは生徒の神經衰弱症に陷るもの頗る夥しと、其原因は確に敎師に解り居るも、如何に親密の師弟間なればとてあらはに打出して誡められもせずと云ふを聞けり。是に因て余は神經衰弱と自殺とは大に關係あることを知りぬ。されば其の原因は兎もあれ、潑剌鮮魚の如くにあるべき年頃の男女が、神經衰弱を起すといふに就ては敎育家及父兄は宜しく注意すべき事なり。此の病弊を矯むるには、先づ第一に體育を盛んにし文弱を避け理的觀念を養ふやうにすべきなり、殊に女子に至りては多少の文學趣味はあれど理科的趣味は皆無なり、然るに文學趣味の人は兎角室内に垂籠勝にて運動も碌々せず一生懸命に考込むやうになりたがるが弊なり、されど理科趣味の人は同じ勉强するにも郊野に出でゝ花鳥を尋ね花卉を摘んで研究するといふ風なれば、自然體育の助にもなるなり、其他動物、物理、化學の如き實驗的の學問には常に運動の伴ふものなれば女子の趣味を此方に向くる必要あり、又た男子にしても文學的趣味を持つものは動もすれば神經衰弱に罹り易く、從つて色色の疑惑を抱き妄想を描き、注入的に多讀の結果迷ひを増すものなれば、敎師殊に家庭にある父兄は此邊に注意あらまほしき事なり云々

## 慈善事業と廢物利用（二六新報　瓜紅氏）

細君の瑣細なる注意に依り、亭主のポッケットを探らざるも容易に行ひ得べき慈善の方法あり、第一は細君各自が廢物利用の法を知ること是なり、歐米にて謂ふ家事經濟は理化學の應用を主とし、理財の上に於ては素より儉約を尊ぶと雖、廢物利用法、漂白法、調製法の如き應用化學にも及べり、然るに我邦の女子は毫も

理化學の嗜好無きのみならず、日用品の始末法すら辨へざる者多く、殊に舶來品、洋風器物、食料、藥品等の使用法と來ては、皆無處置方を辨知せず、隨つて無用の費を嵩ましむ、故に主婦たる者は斯る方面の智識を得ると共に、廢物利用法を學びて從前の濫費を補ひ又た之に依りて慈善の資を作らば、細君の手一つにて如何やうに仁惠をも行ひ得べし、但し今の細君は前述洋風器具等の使用法に無智識なるを以て、廢物ならざる物も廢物となすもの多し、是等は廢物利用に非ずして單に使用法によりて、その處置整理の方法を知るべきなり、第二は世の細君たるもの聯合して廢物を利用し之を慈善の資に供すべし、其の法は數十百戸互に協同して、常に廢物を蓄へ置き、今の屑屋の如きものに、時日を定め毎戸を巡廻して蒐輯せしめ、以て賑恤の資となすにあり、此會を預れる者は其蒐集し來れる物を處理し、貧民病者に施與し、又は漂白し補綴して施與す、此の如き博愛慈善の事業は細君の神妙なる心掛一つにて容易に行ひ得べし、世には亭主に二重三重の重荷を負はしめ、婦人の虛飾、虛榮の爲に、男子を過勞せしむるものあり。斯の如きは今日世界の通弊とは言へ、餘りに心無き業なれば、これからの細君は此の世界的通弊を洗刷するの心掛を以て、務ふて工夫作覺し一紙半錢の資を作るの覺悟あるべし、是れ廢物利用法を慫慂する所以なり。

# 獨逸博士の長命術

（東京市教育會時報　野村泰亨氏）

凡そ人長壽を保たんには消化機の尤も健全ならんことを要す、胃健全ならざれば老齡に達すること能はざるべし、胃は精氣保養の主因にして恰も一切の營養物を調理する料理人のごとし、若し胃にして健全ならんか精神上の憂愁苦悶も、肉體上の病患も、且つ一時の傷痍の如きも概ねその害毒を逞ふするを得ざるべしこれに反して胃の腑微弱ならば、容易に鬱悶し激怒し以て肉體を傷ふに至る是れ所謂命を絕つの斧なり、疾病はその始めまづ胃の腑を侵すものなり。その胃に故

障あるは是れ即ち發病の前兆なりと知るべし。されば胃の健全は唯々食慾の熾なるを以て滿足すべからず、何となれば不法なる人爲の所作を以て食慾を激發せしむことを得べければなり、故に消化の極めて容易なるを以てその健全なる明證となすべし、而して消化を容易ならしむるには晩食後、直ちに睡眠すべからず、又窮屈の所作を爲すべからず、朝起きて屢々唾液を吐出すべからず、又よろしく務めて一定の運動に從ふの習慣を養ふべし歯の健全ならざれば消化よろしからず、故に歯は尤も大切にすべし、良歯は長命に欠くべからざる要具なり、既に歯を失ひたる人は人生の半生を喪ひたると同じきものなり。西醫の説に歯は寶玉よりも貴し、生命の根本は歯牙にありといへり

胸部及呼吸機の完全、胸膈の幅廣くして隆起し、呼吸は長きに耐へ、音聲に力ありて咳嗽の希なるは肺と呼吸器との健全なるを證するものなり、肺は不潔の諸原素を血液中より排泄するの用を爲す、故に健全なる肺を具ふる人は老齢に達するの一大要素たるべし、次は心臓の平穏なり、吾人の體内には間斷なき血液の循環ありてよく身體を保つ、而して一分時に百の脈搏ある人は五十の脈搏ある人より二倍の血液を消費すべき割合なり、故に脈搏危迫なる人は瑣少の刺戟を受くるも(例へば一滴の酒を飲むも)鼓動激しくなりて恰も熱病になやめる人の如し、この如きは決して長命の人ならず、斯る人はよろしく酒色類を謹むべきは勿論なるべく、心意を平靜にして天壽を傷はざるやう勤むべし、間斷なき動作、運動、作業、すべてよく身體を動かし支肢を練磨するは長壽の秘訣なり、不斷使用する處の庖丁の腐朽せざるをも以て知るべし次に生活力の増加を以て生命を長ふするものなり…いふは晩近盛んに行はるゝ所ろの説なり、之れに由れば生命の長短はその日數の多寡を以て計るべからず、宜しく生活上快樂の額如何に依らざるべからず、行動及び快樂の他に二倍するものは、之に比して二倍の長壽を保ちたるものなりと、是れ謬見なり何となれば短かき年歯を以て復雜なる百般の事業を成就すると難し、是を成就せんには可成長き歳月を累ねざるべからず、短日月に長年月の事を成せば勢ひ精力を暴費せざるべからず、その結果は即ち生氣の消耗、智力の妄用に畢らざるべからず云々

# 家庭日記

玉柳

六月七日晴れ、待にまちたゝ女學世界は來れり、されど妾が文は沒書となりぬ、いかなればかくも文才のなき失望せずには居れず、和歌のみはほんのお慈悲に佳作の處へされどかゝるこしなれなも丁寧に添削なしありたりうれしともかたじけなし、午後早く仕立て上て女學世界ゆつくり讀んと黨の單衣急ぎ縫ひ居る處へ母上おこし遊し曲瀨の乳母が來りぬとの仰せ餘りの不意に一時は驚きしかど妾は、折角ですがあひませぬときつぱり答ねぬ、思へば別れてより爰に十年さすがに懐しけれど今は乳母とも思はぬ汚女妾が十歲の時淋しからんとて彼が送り吳し慰めらん計のざくろを汝の如き人非人に物もらう吾でなし以後は乳母とも思はぬからと子供ながらも見ごとつき返せし吾の今更何としてあはるべきや情に於て忍び難けれど眞心の命には背くを得ず歎き計りが女にあらずよしよし思切て追ひかへさんと心決せる折から、お嬢樣おなつかしうご座いますとすべり入るは微かすかに見覺のある乳母杏春妾は覺ねず居づまゐ正して、これ吾お前は何と思て來たのときつとなれば早や涙ぐみて、お嬢樣私はもう戀しうて〳〵とあとは得云はず頭をおほひぬ、それ程妾しか可愛のならなぜ私の頭へ土をぬるやうな事をしておくれたと吾知ず泪はら〳〵こぼせば彼女は堪ねかれてわつとなき伏しつゝ、お嬢樣すみませぬ一言の申わけも……皆此乳母が不心得から、どーかお許し遊して今はふつゝり改心致しました。ねゝお嬢樣只つた一言許すと仰てと擧かみしめて泣き伏しぬ、あゝ妾が心は遂に飢たり許すと云しが否今は吾ながら覺ねず彼女は今宵宿る事となりたり。



夜貧爽にもらひし女禮式大全見せやるに、あゝ奥樣がお離し遊したらどんなにかお喜びなさいませうに奥樣もお歌が大變お好でご座いましたからとの事今度は妾先づ泪こぼれぬ、げに小説其まゝ戀いやら情ないやら。

八日晴、わが庭の五月花三分計開く上なる若竹にはへて一入うつくし、九時過乳母は歸りぬ、昨日の事はよもや忘れまいれとだめをして置く、後母上の單衣縫ひ初め午後四時仕立上げたり、昨日宇治より屆きし新茶入るゝに香はよけれど以前のより味は下るやうなり暫く雜談の後ち綠陰にて女學世界よむ靜なれば心は只た文の林をわけ入るのみ翠香大町の諸先生の教へいつもながら身にしみて有難し文藝には尾上先生の源氏物語解も出るよし早く來月になれば宜いに待ち遠き事よ、婦人界へ和歌投書す兼題は月と燕、長屋の老人より螢二百匹程もらひたれば早速かごに入て椽端につりぬ夜に入ての美しさ無數の寶玉のきらめくやうなり。

なでしこ樣とやらの御文章どれもこれもご立派なの計りほんにおうらやましい奥樣かやはりお嬢樣か知ん、氣分何となく惡しければ浴後たゞちに床に付きぬ。

## 朝顔日記

伊勢なでし子

連日の雨、夜の間に晴れて、有明の月影涼しう、名殘の雫にきらめきたる朝。例になう夙く起出て後園を見逍れば、數十の朝

頭鉄面白う並びたる中に、嬉し　一輪、彼の大空の星にも似て、
淡き紫の言はぬ方なきか咲き初めたり。
されど、待ひし父君は在さず。弟はかりそめの病に臥しぬ。
花もさぞ、物足らぬ思ひやすらむ。
紅絞の大輪、二つ咲きぬ。
嬉にかゝる夢を見て、狂かに事なかれかしと祈りつ。そと、其
花に口づけして、はしたなき我れを恥らひたりき。
底紅の中輪、五つ。牡丹葉の曲咲、一つ。それにお鳥目程の眞
紅なるが三つ四つ綻びぬ
今朝は弟も機嫌克く臥床を離れて、嬉しげに花の数を数へつゝ
父君の還さことよ、と嘆きぬ。實に、父君は如何にし給ひしぞ。
心こめたる花は咲きて、今日か明日かと待ちつゝあるを。
紅も、紫も、白も、絞も、今朝は大方咲揃ひぬ。群星爛爛の景
色たとふるにものなく、天工の美、人工の美、殆ど伯仲の間に
あるが如し。
昨夜、久しき旅路より歸り給ひし父君は、此美しき色彩を見て
満足の笑みを洩らし給ひき。
友は來りぬ、茶菓もてなして、自然の彩筆を評し合ひぬ。
通知あり。明日、某家に於て品評會を催すと、父君更に、一層の
笑みを湛え給ひて、入選疑ひなしとほこらかに嘆き給ひぬ。
蝶一つ、何處よりか舞ひ來りて、其紅き花に神秘を囁きぬ。
あゝ、光榮多き今日の朝日よ。

よし子



白木兎見物の重詰めは随分窮ですから機嫌よく取合はして可成奇麗にそして可成好滞にやらなければなりませむが取立てて云ふ程の料理ではありませむからぬきにして茲には唯平生の惣菜を二三種皆て見ませう。

〇うぐひす味噌焼

赤味噌をよくすり、木の芽を入れ、味淋を少し和して充分に混和し、うぐひの骨切りしたるを加減よく焼きたるに塗り、味噌を焦さぬ程にして用ふ。

〇百合焼出し

傷り傷のなき百合を一片づゝへきとりて水にてよく洗ひ、暫時水をきり置、恰好の鍋に油を少し投じ、火氣の充分にまはりたる時を見計らひ、百合根を投れて煎りつけ、醤油にて加減よく味つけ、胡椒又は木の芽杯添て用ふ。

〇生芽漬

新生芽の茎を二寸程残して切り、水にてよく洗ひ、一度沸騰せる湯に突込み、直に上け置、梅酢に少々砂糖を調合したるものに漬けて、二三日後用ふ。

〇茶碗蒸

鰻蒲焼を程よく切り、味つけたる百合根、松露、新牛蒡、銀杏など取交ぜて茶碗に盛り玉子よくかきまぜたるを入れ、蒸籠の中にて蒸上るなり。

〇豆腐餡かけ

豆腐をよき加減に切りて湯煮し、葛の煮出にて煮上げ、後、葛粉を水にて溶かしたるを調和し、生姜を擦りて添へ用ゆ、胡瓜又は小茄子など入るれば尚可なり。

談叢

# 洋行の話（五）

巖谷小波

▲留守の心得

さて、洋行の話も思ひの外長くなつたから、今回は洋行者に對する留守居の心得を少し書くとしやう。其父、夫、兄、弟、親戚、友人などの、遠く海外にある人々に、少しでも參考に成るならば、大いに滿足に思ふのである。

前からも云ふ通り、住み馴れたこの故郷を辭して、海山萬里の異郷に赴く者、目に珍らしい物を見、耳に珍らしい事を聞いて、樂しさは又格別であると同時にその間また故郷を懷ふの念は、片時も消えるものではない。

さる以上は、その鄕愁を醫し、その客情を慰めるべく、常に心得て居らねば成らぬのが、取りも直さず、本國に留まる者の義務であらう。

さてその客情を慰めるには、常に音信を絶やさぬ事これがその手段の隨一で、その無事を證する爲めには寫眞を送るのが一番である。

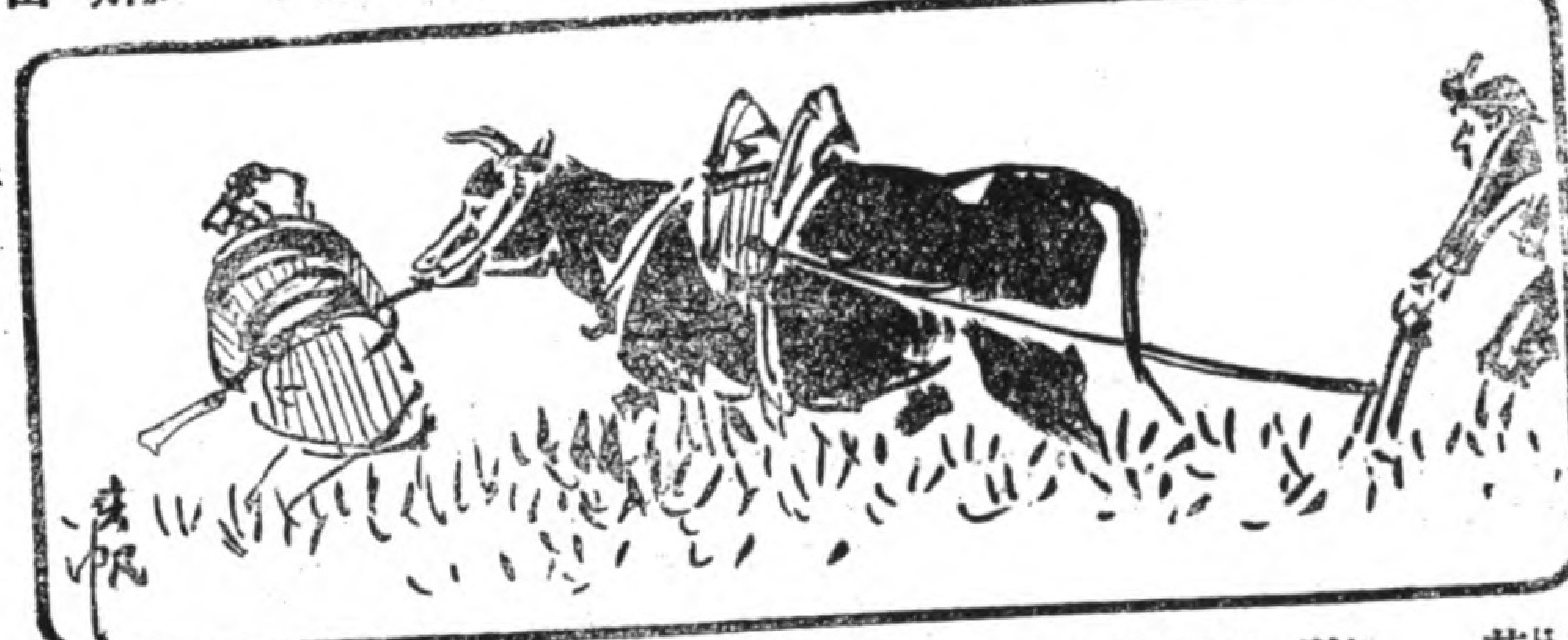
遠く離れて會い度い時は、月が鏡に成ればよいと思ふ。が、月は兎角曇り勝ちで、よく人の顏を寫してくれないから、それよりは郵便と云ふ、文明の利器の便を借りて、互ひに情を通ずるに如かずだ。

で、その郵便の行路にも、印度洋便、米國便の二種あり、米國便にも桑港便や加奈陀便など、種々あるが一番早いのは加奈陀便で、これだと一ヶ月以内で屆く事がある。これを印度洋便の、一ヶ月半乃至二ヶ月もかゝるのに比すれば、どんなに便利であるか知れない。

例へば印度洋便で、歐羅巴へ出立した人に、横濱か神戸で別れて、その後一週間程經つてから出した手紙でも、うまく加奈陀に間に合ふと、その人より先に歐羅巴に着いて居る。否、今少し手廻はしをよくすれば、子ープルスかマルセーユで、直ちに乘船へ屆ける事さへ出來る。何と便利なものでは無いか。

また日本に居る人の中には、各地に公使館や領事館のあるのを知りながら、之を利用する事を知らない者がある。即ち其地に向つて出發した者の、まだ到着の報を得ない中、若くは宿所のまだ解らない中に、音信をしたいと思ふ場合には、公使館か領事館宛に出せば、安全に本人の手に達するのである。

それを少しも氣付かず、まだ宿所が解らないから、出し度い手紙も出す事が出



來ないと、遠慮して手を引いて居るのは甚だ迂濶な次第である。

何所の國でも、公使館か領事館のある以上は、此地に踏み込む程の者の、それに宿所を屆けないのは無いから、なまじ間違つた宿所を書くよりは、此等の役所宛に出すのがよいので、親切な役人の居る所なら、直ぐにそれ〳〵書入をして、その宿所へ配達させるのである。

さうで無くとも、公使館の應接室へ行くと、到着の郵便物が、A、B、C、別にして集めてあるから、自分で探して持つて歸る事も出來るのだ。

イヤ、洋行して居ると、故郷の音信が何より樂みであるから、郵便日をちやんと調べておいて、其日には公使館や領事館から、送つてもらうのを待ち兼ねて、此方から先を爭つて取りに行く位であ

るのだ。

其所でその故郷の者が、洋行中の者に送る手紙の書き方に付いて、爲念少し云はうか。

元より親疎の關係に依つて、その書き方も異ふのであるが、兎に角その手紙は恰も親しく會つて話して居る心で、成る可く細く、成る可く有り體に書くがよい。義理一遍の時候の挨拶や、無沙汰の謝罪位でしまふのは、受者に取つて頗る呆氣無い。況んや時候の挨拶の如きは、萬里も地を隔て、一ヶ月も時を過ぎて居るのだから、一向効驗が無いのである。

それから又筆豆な人は、議會の有樣とか、社會の出來事など、わざ〳〵細々に書いて送る人もあるが、此等の事は、新聞や雜誌を送つてやればよいので、手紙の中に書き立てるのは、寧ろ無駄骨と云



つてよい。

それよりは、一家の有樣、知友の異動乃至自家の感慨などを、隨分懇ろに書く方がよいので、それもなまじ文章を飾つて、爲めに意を盡し兼ねるよりは、言文一致で思ふ存分、縱橫に書き盡した方がどれほど喜ばれるか知れないのである。

それに今一つ注意すべきは、洋行者から來た書信に對しては、成る可く叮嚀に返事をしてやる事で、洋行者の身に取つて見ると、折角出した手紙が、鐵砲丸の使者に成つてしまふのが、此上も無い不愉快であるから、其邊はよく察してやらねば成らぬ。

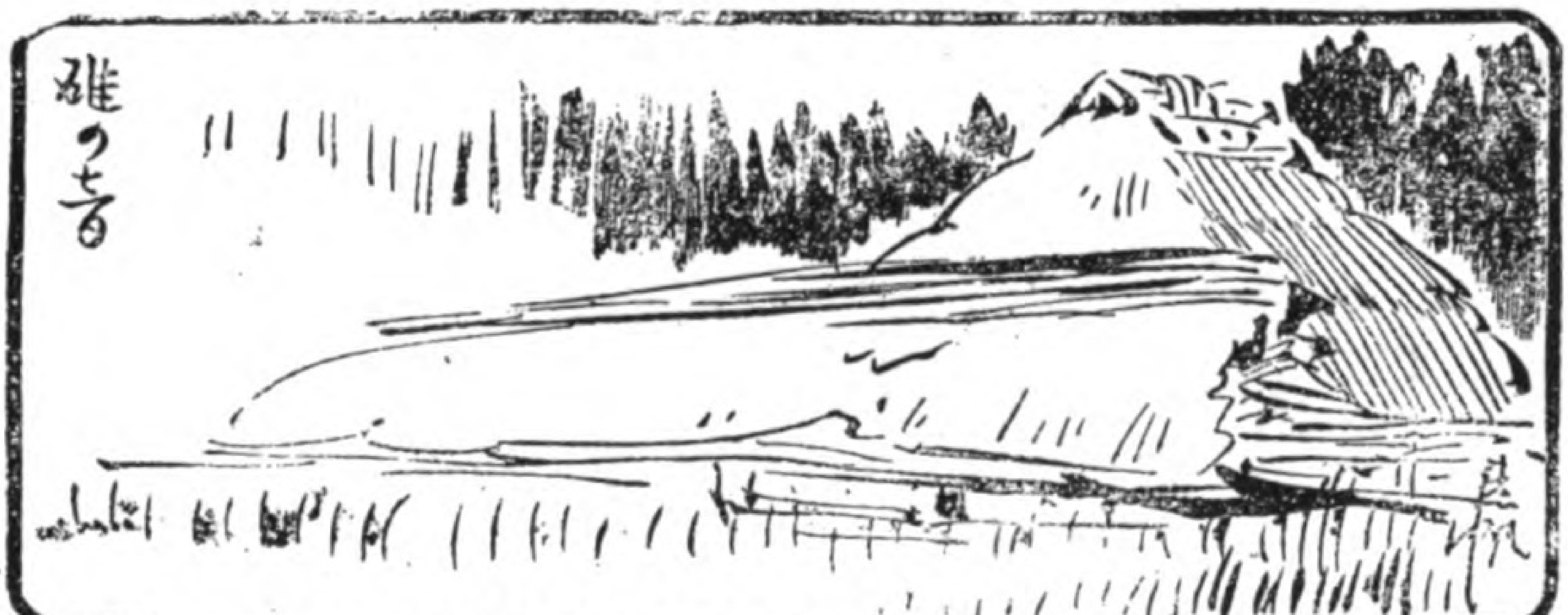
時として又、洋行者に物を送る場合があらう。例へば衣服、書籍、日用品、食品、此等の物を送らうと云ふのに、何だか甚だ億劫に思ふ事があるが、これも隨

分注意の要る事で、元來此等の物には、多く税金を課せられ、而もその税率が、日本の樣に品質によらず、皆重量に依るのであるから、つまらない物でも目方が重いと、殆んど元價程の税を課せられる事がある、余の如きも、曾て八十錢の茶に對して、六十錢の税を取られた事がある。

又或る人は、家から大島紬のどてらを送つて貰つた所が、税關の役人が、絹か木綿かの鑑別が付かず、（木綿は無税）暫らく考へて居たが、遂にその端を解いて緯糸を一筋拔いて、火に入れて臭氣を嗅ぎ、初めてその絹たる事を知ると、今度はそのどてら全體を衡にかけて、遂に二十麻克（金十圓位）ほどの税を取られたと云ふ事だ。

尤も嵩の低いもので、數の少いもので







そして開封の出來るものならば、商品見本として、無税で通過させる事が出來る。余も或る京都の友人に頼んで、婦人持の小さな絹地扇子を、三本送つてもらつた事があるが、即ちその商品見本で、郵税二三十錢で濟んだのである。

書信の事は是位にして、さてその洋行者が、いよ〳〵歸朝すると云ふ場合の、留守居者の心得を少し云はうか。

早くて半年一年、長くて五年十年の間外國の風土に慣れて、新たに歸つて來るのであるから、その風俗、嗜好、事によるとその性行まで、多少の變遷を爲して居る事は、勢ひ免かれ得ぬ所であらう。されば之を待ち受けるものも、豫めその覺期して、その變遷に伴ひ得る樣に――委しく云へば、新歸朝者をして、成る可く不滿足を感ぜしめない樣に、心掛けて

居らねばならぬのである。

例へば、今まで軟かい寢臺に慣れた者を、薄ッペラな敷蒲團で寢かさうとしたり、微温い風呂計り入つて居た躰に、熱い朝湯を强ひたりするのは、甚だ同情の無い次第である。

また日常の習慣やら、進退の度、果は處世法、社會觀の點に至るまで、洋行前と洋行後とに、必ず多少の異動があるとすれば、之に接する者に於ても、又それ相應の進歩をして居らぬと、甚だ調子が合はぬ事に成る。

就中人の妻として、その夫が洋行した場合、只後生大切に、留守宅の番人計りして、それで任務を盡したと思ふのは、まだ十分とは云へないので、夫が海外萬國を視察して、新空氣を吸ひ、新智識を得て歸る以上は、自分もよく心掛けて居て、留守番中の時間を利用し、出來得る丈新空氣を吸ひ、新智識を得る樣にするのが、妻たる者の義務ではあるまいか。

無論一方は海外の實地を踏み、一方は日本に居殘るのであるから、元より同一の進歩は出來ないが、それでも心掛次第に依ては、それ相應の權衡を取つて、夫に滿足させる位の事は、決して出來ない事はあるまいと思ふ。

それを、夫は折角洋行までして、智識も見識も變つて來たのに、妻は相變らず呉下の阿蒙では、遙々樂しみにして歸つて來た家庭が、却つて温かならぬ事に成る。なんと慮へねば成らぬではないか。（完）

## 支那婦人　寄宿舍生活

支那婦人の始めて日本に留學せるは今より三四年前のことなりしが纔豐女と呼べる少女が某女學校に入塾し居りしと云ふの外は餘り世間に聞えたるものなかりき然るに時勢は端なくも深窓に閉居せる女子に智識啓發の必要を迫り近來は彼の國に於ても西洋人等の設立せる學校へ通學する婦人少からざるに至りたる由にて就中財豐に事足る向は日本留學を企つるも多く現に下田女史の督せる帝國婦人協會附屬學校寄宿舍へは七名の同國婦人寄宿し居れりさて此留學女生徒は日々如何なることを學びつゝあるか風俗生活の全然別樣なる我國へ來り寄宿舍生活の模樣は如何に恐らくは未だ多く世に知られざるべきを以て同塾舍監に就き聞き得たる所を左に紹介せんとす（時事新報）

目下當寄宿舍には七名の支那婦人が寄宿して居ります勿論其中の一人錢豐女といふは他から轉校して早い前から入塾して居つたのですが餘の六人は昨年の六月から七月に掛けて這入りました爾來僅に五六箇月の淺い月日ではありますが既に日常の會話には殆ど困らぬ程になり自分から話す力は未だ充分とは參りませんでも聞く方は好く了解し得られますから此工合で進歩致したならば一年の後には大分役に立つであらうと存じます。

さて寄宿舍生活の狀態を摘んで御話致しますれば何分風俗習慣は違ひ殊に是れまで少しも世間を知らぬ妙齡の人達が急に他國人の中に這入つたのですから嘸や不自由の事と思ひ遣られますが之を取扱ふ方も亦なかなか困難を感じました種々の故障を排斥して兎も角も最初から一般寄宿生同樣の規則を守ることにしましたが只座居丈けは此人々に取りて非常に困難なことであるのみならず數百年來の習慣のある我國人の間ですら既に其弊害を認め漸次改良の聲も高まりつヽある今日强ひて此風習に從はしむるのは決して得策で有りませぬから是れは特別にテーブルと椅子を用ひさせ食物も和洋折衷位の處に致して居ります但し自修時間とか睡眠時間とか外出時間とかは無論一般の規則通りに致し又衣服、髪の結方などは他の生徒と同じに總て日本の風に倣はせて居ります、即ち髪は毎朝獨で梳いて束髪に結びそれで袴を着けて居るのですから一見少しも日本の女子と變りませぬ、それに下田校長から何事も規則通り初めから勵行しなければならぬ斟酌して却て惡い習慣を殘すやうなことがあつてはならぬとの言がありましたから翌日入塾すると云ふ今夜一同を聚めまして貴女方は日本に遊びに御來になつたのではなくて知らぬことを覺え今よりは一層立派な婦人になつて本國に御歸りにならなければならぬのであるから嫌なことでも務めてしなければなりませぬと懇ろに言ひ聞かせ翌朝から直ぐに他の生徒と共に雜巾を取り箒木を持ち拂塵を掛けて掃除をさせることにしました處が皆喜んで今日までも毎日それを繼續して居ります洗濯も肌衣・

足袋手巾など皆銘々に洗はせます入浴は一週二回の極めで御座いますが之に就て我々日本人が自ら顧みて耻しく感ずることがございます、と申すのは彼の國人の風習として肌を顯すことを大變耻に致して居る、從て入浴も何分多勢の生徒ですから二人位宛此方では入つて貰ひたいのですが何んな親しい友だちでも決して一所に這入らない必ず一人で這入つて其間は戸を堅く閉て決して人の入ることを許しません入浴の時間は日本人と大抵同じ位ですが併し風呂の中には餘り入らな



いさうです食物も初めは牛肉魚肉などを嫌ひ又豚肉も調理の違ふ爲めか喜んで食べない只何でも油で揚げたものを好んで食べましたが今日は最早や大抵なものを食べる樣になりました。

それから身體ですが體格も日本人よりは遙に宜しく風土の差、食物の違ひがあるに拘はらず一日として學校を休んだ者は有りませぬ從て食量などは日本の婦人に比べて先づ倍位と申して宜しいでせう。

次に學業の成績です是れまでは會話を主にして居りましたから其成績も區々でま

だ判然とは致しませんが其中にも秀で、出來るものが二三人ありります其他のものも決して惡い方ではありませぬ只今學校では讀書は小學讀本の五、算術は分數を致して居ります中に一人擢んで、學問の成績が好いので自ら他を下視す樣な傾きの見えるものが有りましたが或時校長から懇々と說諭を加へられましたので原來怜悧な質だけに少しく面を赧め頸垂れて承つて居りましたが其後は好く注意して滅切行ひを改めて參りました。

又一般の性質を申すと總て良い方です支那婦人が悉く爾うであるか何うかは別として唯今此處に來て居ります者は日本の婦人に比べて確に勇健な意志と大膽な氣象とに富んで居るやうに思はれます一番年下のは僅に十三歲で御座いますが誠に決心が堅く故鄕の事杯想ひ出して泣くなと、云ふことはツイぞ一度も有りませぬ斯うして他國の見ず知らずの中に來て嘸心細からうと此方では察して居りますが本人達は割合に悠然として居ることが大膽で御座います丁度好い例が有るから御話しますが支那婦人が來るに就て寄宿舍で歡迎會を催しましたその時寄宿生の二三人が祝辭を述べますから答辭が無くてはならぬ貴女方の中で何方か答辭をお述べなさいと申しましたら初めは互に顏を見合せて居りましたが頓て胡氏(十五歲)が進み出て私が述べませうと答へましたけれども此年少者が答辭を述べては少しく順序を失ひますから窃に呼んで其事を聞かせ今日は他の御方に御讓りなさいと申しましたら快く其意を了したやうでしたソレから陳氏(二十歲)が述べることになりましたが何にせよ生れて始めてのことで有りませうから何うわらうかと見て居りますと端然として演壇に立ち少しも恐れ耻らう樣子もなく簡單に立派に答辭を述べた其態度と云ひ其語と云ひ誠に確乎として居りました我國の婦人の弱點は兎角物に臆すると云ふことで人の面前では口も利けなくなるのが先づ普通ですが未開と云はるゝ支那の婦人は確に我に勝る素質を備へて居ることを見て轉た自省の念に堪へませんでした此頃私が窃に考へますのに丁度明治の初めに日本

人が自由と云ふことを取り違へたが如く多くの支那人の中には或は少し此點を取違へて居りはせぬかと思ひます。と申すは近頃又一人の支那婦人が寄宿を許して呉れと申込んで來ましたが其婦人は歳が二十で良人と共に日本に參つたもので酒は飲む煙草は喫む殆ど持て餘しの我儘者と聞きましたから寄宿舍に入るには是れ是れの規則に從て酒を飲んではならぬ煙草もならぬ外出するにも制限があると申しましたら其婦人の言ふには私は豫て日本は自由國である何事も束縛を受けずに思ひ通りに暮すことが出來ると聞きました然るに貴女の御話のやうでは私の國よりは尚は干渉が甚だしい自分の金で酒を飲み煙草を喫んだとて何の差支が有りますかと云ふ樣なことを申しましたから是れは斷然入塾を謝絶しましたが斯樣取違へをして居るものが必ず外にも有ることゝ思ひます併し幸に只今寄宿して居るものは好く規則を守つて勉强して居りますから校長を始め何れも大に望みを囑して居ることで御座います御承知の通り我國の衣食住の點に就ては我自ら其改良を感じて居るので從て他國の人を遇するには其衝に當るものは事の行ひ易からぬ點も有り又不行屆の評を免がれ難いかも知れませぬが其段は御察しを願ひたいのです日本に參つてから見物をしました場所は遠くでは箱根山横須賀船渠軍艦進水式近くでは帝國大學上野淺草等ですが其中最も珍らしく感じたのは淺草だと申すことです云々

## メキシコの美人

メキシコに遊びしものは、誰しも其國婦人の美貌なるに一驚を喫するなるべし。我邦の如く、細長きあり、丸きあり痩せたるあり、鼻の天井を向けるあるなどの事なく、殆んど同一の型にて、ノッペリとしたる丸形の美形なり。我國の美人の色の少しく黒きものと思へばよし。これが殆んど全國を通じて一樣なるといふに至つては、我國人の同國に遊ぶもの丶皆注意するも尤至極なり。(口繪參照)



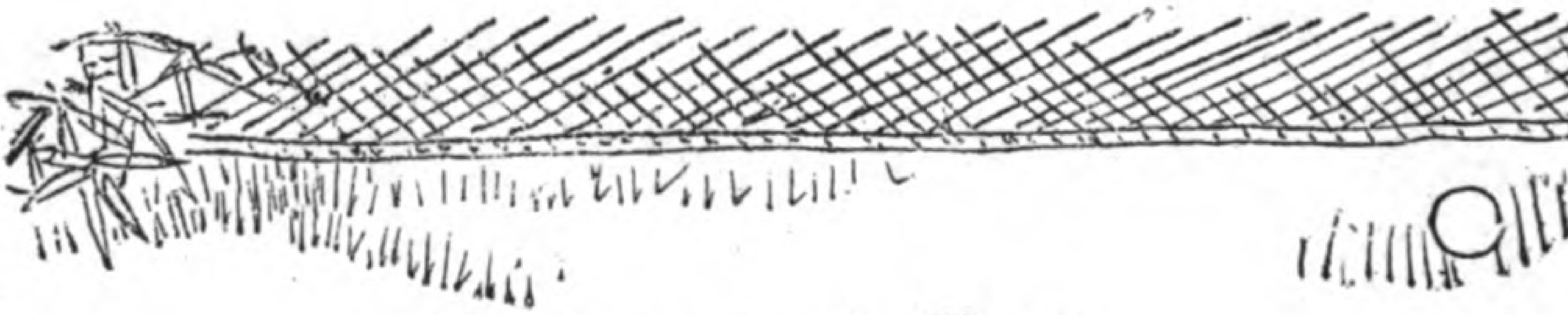

ネットを渡る風につれて、
テニス、コートの心地よし、
いざや嬉しき敵味方、
心をたまに遊ばなん。

打てよ攻めよ勇ましく、
たまは心のまゝなりや、
受けよ守れよ勇ましく、
心はたまのほかになし。



かけよ跳べよ思ふまゝ、
筋骨こゝにきたふべし、
攻めよ守れよ恐れなく、
精神こゝにきたふべし。

ラケットはらふ衣手に、
今日の疲れを慰めて、
きたへて身をも心をも、
テニスの遊び面白や。



# テニスの遊び

鹽井雨江作歌　（ニ調四拍子）　白井規矩郎作曲



# 日本の少女に一言す

先頃の萬朝報英文欄にエー、エッチ、エス生なる名義を以て日本の少女に警告したる一文あり、所論極めて、剴切なるを以て茲にその譯文を載録す、曰く

結婚とは何ぞや、日本の少女中に其眞の意味を知れる者幾人かある、彼等が結婚を呼びて「片付く」といふは彼等が如何やうに之を解するかを示すものにして、彼等は結婚する前は片付かざるなりと考ふるなり、彼等のうちには一生獨身にて暮らすは不幸なりと思ふ者すらあり、かくて彼等は唯結婚の爲めに結婚し、他に何等の希望も考もなくして家庭を作る。此國に於ては婚姻の結びのしかく屢ば打斷たれ、日本の家庭に離婚の慘事を見るはこれが爲めなり、余はこゝに公言す、結婚も家庭も少女の目的に非ずと、戀愛は相愛する人の幸福を増進する一の方便に非ずして何ぞや、家庭も亦然り、いかにも家庭は最も幸福なる所なり、而して樂しき家庭を有するは可なり、然れども若し彼等これなくして眞の幸福を得ることを得ば、若くは一歩進んで、若し彼等獨身にて暮らし、以て國民若くは人類の爲めにすることを得ば、余は敢ていふ、彼等は毫も結婚するの要なしと、其主張する主義の爲めに自己の幸福を犠牲として一生獨身にて暮らせし男女は多くあり、余は思ふ、日本の少女は自ら低くすること餘りに過ぎ自己の自由及び獨立を思ふこと餘りに少なく、却て餘りに多く男子に依頼すと、彼等は夫が其妻を遇するに其助手としてよりは寧ろ一種の厄介者とするを全く責むる能はず、いかでかゝる結合より幸福なる家庭を豫期することを得んや、眞の自由なくんば偉大なる男女は出でず、此國に偉大なる婦人の全く無きは、否な稀なるは怪しむに足らず、余は少女等に結婚を無視せよと勸めんと思ふに非ず、唯余は彼等が自己の自由を大に思はんことを望むのみ、そは然らずんば彼等は結婚すると否とに拘はらず眞の幸福を享くる能はざればなり、且つ婦女子に與ふるに社會に於ける相當の地位を以てせずんば偉大なる婦人を豫期すべからず、偉大なる婦人なくして國に偉大なる人物は現はるゝことなかるべきなり。

## 文藝

# 源氏物語の梗槪（二）

文學士 尾上柴舟

前々號に桐壺の梗槪を陳べて源氏の生立を畧叙したり。桐壺に次ぐは、乃ち帚木の卷なり。生長に從ひて接觸する處、漸次多方面に涉るを叙して、甚だ妙なり。此卷中、最初の、雨夜、雨三人、相共に女子の品等を論ずる處、實は、作者の女子に對する見解を發表せしもの、乃ち、紫女の女子敎育私見とも、云はゞ云はるゝものなり。而して、其事、殆んど源氏一篇にかゝる。猶、此中、心の穩やかに、靜かなる女を可しとせるは、源氏の室紫上の出現を豫告し、また、頭中將の女の行方を失ひたる物語は、夕顏の卷の地をなし、更に、玉鬘の卷の因をもなせり。事事相連り、聯珠の狀ある處、作者の苦心を見るに足る。

### 帚木（光源氏十七歲、卷の名源氏と空蟬との歌より取る。歌は此卷の最後に在り）

源氏、頭中將等と、女子の品等を論ず……馬頭、頭中將、式部丞の物語り、……源氏、方違の爲めに、紀伊守の中川の家に赴く、……始めて、空蟬を見る、……源氏、再び、中川の家に赴く。

長雨時間なき頃、宮中の御物忌（籠むべき事ある時、人の出入を止めて、齋戒するを云ふ。）うち續けば、源氏は、此處にのみありて、退出なし。左大臣の方には、恨めしと思せど、萬の御裝飾、調度など奉り、其子供は、皆出でゝ事へたり。その中、頭中將（桐壺にては、藏人少將と云へり。）は、殊に、源氏と馴れ親みたれば、夜晝、學文をも、管絃の遊びをも、共にせり。つれつれと降る宵の雨に、殿上にも人少なゝれば、うち寄りて、いろ〱の艶書など引き出でゝ、物語らふ程、頭中將、ふと、「難のつくまじき女はなきものなり」と云ひ出づれば、源氏も、うちほゝゑみて、されど一能も

なき女、世にあらむや」とのたまふ。中將「取る方もなき女と、勝れたる女とは、その數等しかるべし。種姓貴き人は、人に尊重せられて、その欠點も蔽はること多し、中位の人にこそ、その心の程も見えて、その良否も、あらはるゝものなれ。下位の人は、聞くに足らぬものなり、」とて、限なく心得たらむ如くに云ふ。源氏「さらば、その上中下の品等は、いかにして、定むるにか、」とのたまふ時、左馬頭、藤式部丞、うち連れて參れり。頭中將、待ちつけて、この品等につきて云ひ論ふ。馬頭、「不時に出世したる人、また、本は、貴けれど、今は、零落したる人、いづれも、中品なるべし。受領(國守なり)の中にも、中品にわたるべきもあり。又、非參議の三四位(參議に任ぜずして、公卿にあらざる三四位の人)の家富み榮えたるまゝに、かしづける女の、貶しめ難きもあり。」といへば、源氏「さらば、家の富たると、富ざるとに由りて、女の品等は、定まるべきが、」など、爭ひて、笑ひ給ふ。馬頭、猶、「上品の上は、われらの及ぶべきならねば、それは指さぬ。さて、荒れたる蓬の門に、思の外に、美しき人あるは、心とまるものなり。年老いたる父、憎げなる兄ある家ながら、一二の才藝ある女あるは、上品ならねど、中品には置くべし。」などと云ふ猶、樣々の人の口を語りあはせて、馬頭「すべて、わが妻として、頼まむ女は、これぞと定め難きものなり。猶、男子は多けれども、國家柱石の臣たらむ人は、選り難きが如し。上は、下に扶けられ、下は、上に靡きて、始めて、世は靜なるべし。されど、一家の内は、あるじ一人の計ひにて、主婦の足らはではあしきこと、殊に多ければ、定めがたきなり。世に、我心に合はねど、もとの契をすてざる人は、信實あるやうに見え、女の方も、奥床しく思はるれど、猶、心にくきこともなし。すべて、女には、艶だちたる、あはつかなる、種々あれど、いづれも、欠點ありて、これぞと思はるゝはなし、」など云ひて、さすがの馬頭も、打ち嘆きたり。馬頭、猶云ふ。「今は種姓をも、容貌をも云はじ。偏に、信實にて、もの靜なる女をぞ終生の配偶とは定むべかりける。一かどの才藝あれば、それ

にてよしとし、その上に、猶あらむことをば願はじ、たゞ、心だに、穏やかに靜かならば、才藝は自づから生ずべし。女の、男の心を知らぬやうにして、深き山、世に遠き海邊などに隠るゝがあれど、わざとがましくて、よしとも思はれず。また、男を恨みて、出家するもあれどこれも、後に、男の心の程を知りて、額髪を探りて、後悔などするも、あさまし。すべて、女はみだりに嫉み怨むべからず。穏やかに何となく、その事をほのめかし出さば、男の情も増しぬべし。されど、また、あまりにうち放ちて、何事も知らざる樣ならば、男は繋がぬ舟の如く、漂ひ去らむ。さにはあらぬか、」と云へば、中將は、うち點頭きたり。さて頭中將「女の、男の心に違ふ節あらむとも、男の、のどやかに見忍ばむに増す事あらじ。」と云ひて、暗に、我妹



（葵上）の事にあたれりと思へば、源氏の、打ち眠りて默し居たまふを、寂しと思へり。馬頭、「工匠の物を作るに、臨時の玩物などは、誰もよく作れど、定まれる式ある物を、難なく作り出づるは、上手ならでは能はず。又、繪所に、畫師數多あれ。蓬萊の山、荒海のさま、怒れる魚、猛き獸の形、鬼神の顔などは、誰もよく畫く。されど、普通の山、水の流、目なれたる人家を畫くに筆勢他に超えて、めでたしと思はるゝは、上手の仕事なり。書にても、また同じ。達者に走り書きなどしたるは、見事なれど、猶、法を守りて、細かに書きたるには及ぶべくもあらず。はかなき事にても、此の如し。女も、表面の情あるは、賴むに足らず。眞實ありて、才の走らざるぞ終身の伴侶とはすべきなり。好色がましけれど、我經驗せし事を申さむ」と云へば、

源氏も、目を塞したまふ。馬頭「まだ、下臈たりし時慕へる人侍りき。この女、嫉妬の念強かりしかば、何となくうるさくて、自づから、遠ざかるやうにもなりぬ。女は、わが心に違はじと勉めて、常に、眞實を盡したれど、たゞ、この嫉妬のみ心ゆかざりき。ある時、懲るばかり嚇して見ば、すこし、この方も止まむかと思ひて、殊更に、情なき風を示すに、例の如く、腹立ち怨ずれば、「かく云はるゝ程ならば、これを限りにて、絶えて、また見じ。もし、行先永く相見むと思はゞ、つらき事ありとも、堪へ忍べよ、」など云ふに、女は、すこし打ち笑ひて、「君が立身して、人數にも入りたまふを待つは、苦しくもなけれど、君のつらき心を忍びて、思ひ直らむを待つは、いと〳〵苦しかるべし。されば、今は、互に分るべき時節なり」と嫉げに云ふ。我も腹立しくなりて、憎げなる事どもを云ひ勵せば、女もえ堪へずして、我が指一つ引き寄せて、嚙み附きたり。「かゝる疵さへ出て來ぬれば、世の交らひもなし難し。遁世すべき身なり」など云ひて、猶、「さらば、今日限りにて分るべきなり」とて、われは、指を屈めて歸りぬ。されど、內心には絕え果てむとは思はざりしか、日頃經るまで、消息も遣さず。所々廻り歩きたりき。臨時の祭の調樂（臨時の祭とは、賀茂の祭、十一月酉の日その調樂は北陣にてなす十一月午の日）にて、夜更けて、甚じく霙ふれば、人々分るゝ處にて考ふるに、猶、彼の女の外には、行かむと思ふ處もなし。されば、其後の有樣をも見むとて、雪うち拂ひつつ行きぬ。何となく、樣惡く恥かしげれど、さりとも、今宵、日頃の恨は打ち解けむ、と思ひしに、燈ほのかに點して、柔かき衣ども、大なる籠にかけ、几帳の帷などうち上げて、今夜や來ると、待ちける有樣なり。されば、こそ、と思ひて、女房に問ふに、「親の家に今夜は行きたり、」と答へたり。さは云へ此女の我を思ひ放つことはあらじ、と思ひて、その後、文などやりて見角云ふに、女返事しながら、「たゞ、もとの儘の心にては、逢ひがたし。改めて、長閑になりたらば、相見むと云ひ來れり。我はさりとも、女の思ひ離るゝ事はあるまじと、思ひければ、改めむとも云はず、爭ひて見

せし間に、女は、疾く、悲み歎きて、遂に果敢なく成りたれば、戯れも云はれぬものと覺えたりき。實に、此女に、異實ありたれば、妻には、かゝる人を、と思ひ出らるゝなり。裁縫は、殊に、上手にて、龍田姫とも云ふべく、棚機つ女にも劣らざりき、」など云へば中將實に、よき女はあり難き世なり。さる女は稀れなり、」など云ひ囃す。馬頭、「さて、また同じ頃通ひたりし女は、琴、歌、書、みな、たと〳〵しからず。心ばせも勝れたりしかば、屢罷り通ひしが、馴るゝまゝに、浮華なる處見えて、頼むべくはあらざりしかば、絶え〳〵になりたりしが、別に、此女は、心を通はせる人ありたるやうなりき。神無月の頃、月面白かりし夜、内裡より退出するに、ある殿上人同乘したり、此女の家、道なりければ、築土の崩れより、池の水影など見ゆ。車より下りて、此殿上人、門近き廊

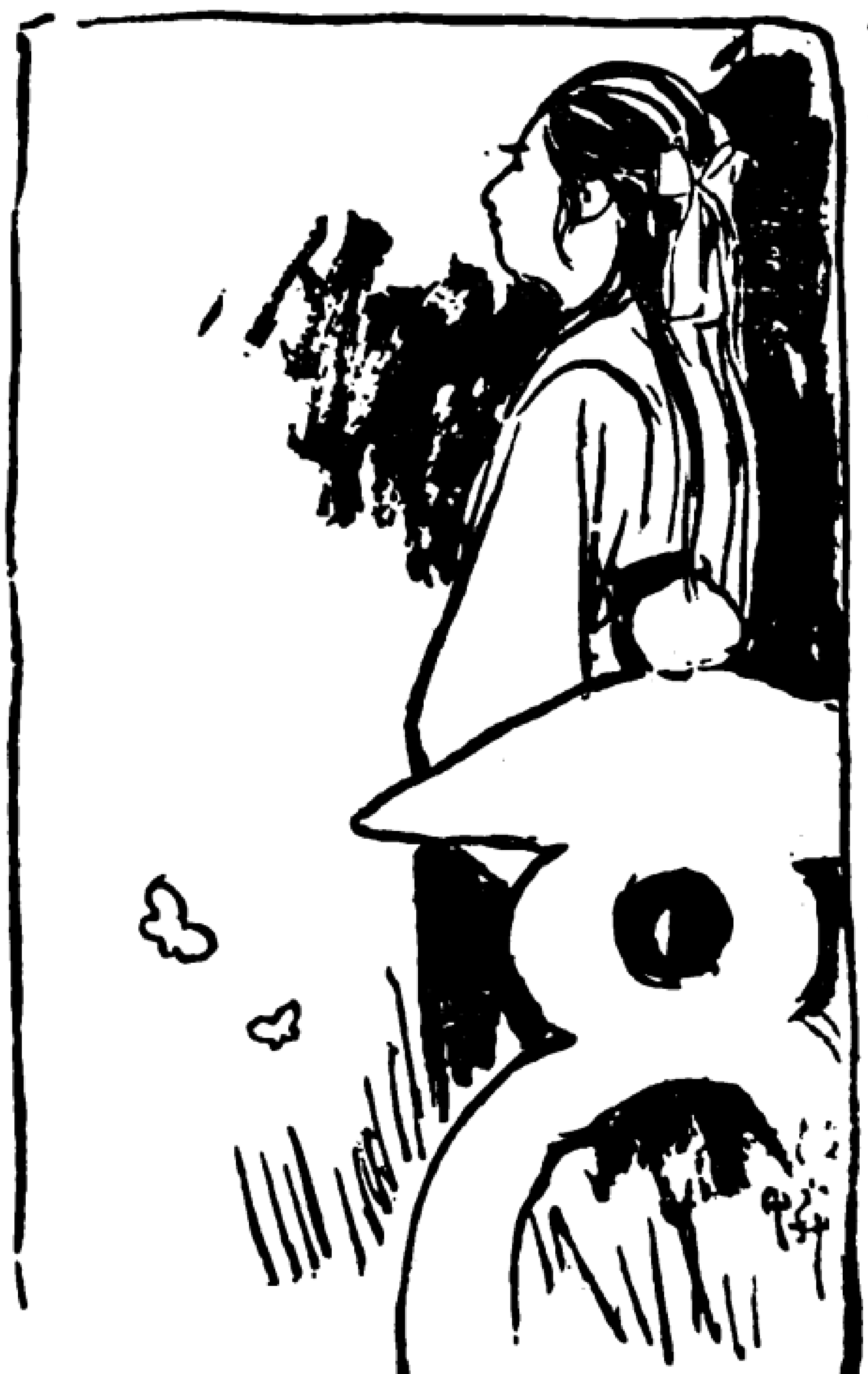


の簀子めきたるものに、腰うちかけて、笛とり出して、吹き鳴らせば、女は、内より和琴を調へ合せたり。さて、此男、女と挑みかはして、かにかく云ふに、女、又箏の琴を盤渉調にしらべたり。爪音今めかしくて、聞き處あれど、何となく、まばゆき心地して頼もしげなければ、この夜の事につけて、遂に、通はずなりぬ。此二つの事につきて、若き心にもさし出でたるは賴しからず思ひき。今より後は、愈々しか思はるべし。君だちも、今七年あまりの程には、思ひ知りたまふべし。わだめきたる女には心おきたまへ、」など云へば、中將、例の頭點く。さて、中將、「我は、わが癡れたる物語をせん、」とて云ふ。密かに見染めし人は彼方も賴む樣も見えて、時には我を恨めしと思ふこともあらむかと思ふ事もありしかど、何事も、謹みて、表にあらはさぬ性なりき。此女は、親も無かりしかば

我を「此人こそは」と思へる樣、らうたけなりしが、久しく音信れざりしに、女は、無下に、思ひ萎れて、撫子の花を折りて寄せたり。それに添へて、「山賤のかきは荒るとも折々に哀はかけよ撫子の露」と幼きものゝあれば、云へり。これに思ひ出でゝ、一度は行きしかと、また、と絶えたるほと、何處ともなく跡を隱したり。今世にあらば、はかなき世に流浪ふらむ。かの幼兒の愛らしかりしかば、いかで、尋ねあてむ、と思へど、いまだ、求め得ず、」など云ふ。中將、更に、「式部が處には、興あることもあらむ、語れ、」と責むれば、式部、「何事をか申さむ、思ひ廻らすに、まだ、文章生に侍りし時、ある博士の許に、學文に罷り通ひし程、その娘に云ひ寄りぬ。娘は、常に、學問の道、何くれとなく敎へくれたれば、腰折文作ることなど、習ひ得たり。さはいへ、學才なき我の、惡びれたる行狀など見られむには、耻かしくて、心置かれたり。さて、久しく行かざりしに、物の便に、立ち寄りて見るに、常とは異りて、物越しにて逢ひたり。我を厭ふにや、絶えむには、よき折なり、と思ふに、女早りかに、「月頃、風邪にて、極熱の草藥を服して、いと臭ければ、え對面せず。されと、所用あらば、承らむ、」と云ふ。云ふべきこともなくて、只「承りぬ、」と云ひて歸らむとするに、女、「此の香の失せなむ時、また、立ち寄りたまへ、」と云ふ時、その藥の匂さへ高ければ、逃目を便ひて、「さゝがにの擧動しるき夕暮にひる（晝間 蒜）ま過ぐせと云ふがあやなさ、」女、直ちに、「逢ふことの夜をし隔てぬ中ならばひる（晝 蒜）まも何かまばゆからまし」と返したりと語る。君だち、「何處にか、さる女やあるべき。猶、少し、面白き事を云へ、」と責め給へば、式部、「この外に何も候はず、」とて、退出したり。馬頭、「男も、女も、惡き人は、己れの僅に知れる處を皆、人に知らせむ、と思ふてそいとほしけれ。女の、文に眞字を多く書きたる、剛々しく讀まれて、心づきなし。歌よむと思へる人も、五月、九月の節會など忙しき日に、むつかしき心を詠みておこせたるも、心後れて見ゆ。すべて、知りたる事をも、知らず顏にもてなし、云ひたき事も、

一つ、二つは殘すやうわりたきものなり、」など云ふにつけても、源氏は、藤壺の御有様の、こよなきを思ひつゞけ給ふ。而して、此論は、何れに定まるともなくて、遂に、夜明に至りぬ。

長雨もやう〳〵止みたれば、源氏は、退出したまへり。左大臣も來て、物語しまふかくて、暗くなる程、今夜は、中神、内裏よりは塞かけたり、と聞ゆ（中神は天一神なり。陰陽家の說にて、此神のある方を、塞がりといふ也。此日、他に行きて、避くるが、此當時の習慣なり。）「二條院もよき方角ならねば、せん方なし。紀伊守の中川の家、此頃、水堰き入れて、涼しければ、其處やよからむ、」と人々申せば、紀伊守にしかのたまふ。守、「父の伊豫守の方に、謹しむことわりて、女房移り來て、いと狹ければ、無禮なる事もや侍らむ」と辭めど源氏は聞かで、いと忍びて入りたまひぬ。紀伊守、寢殿の東を明けて、御



調ひしたり。風涼しく、螢飛び、虫啼きて、いと風情あり。君は、彼の中將が、中品と云へるは、かゝる家にやとおぼさる。また、此家には、思ひ上れる女（空蟬）あることをも思ひ出で、いと床しければ、耳留めたまふに、西面に、人のけはひ、衣の音なひなどす。相語らふを聞けば、我上なりされど、異なる事も無ければ、聞きさし給ひぬ。さて、端つ方に臥させたまへば、人々も靜まりぬ。紀伊守の子、伊豫介の子、數多あるが中に、あてやかにて十二三ばかりなるもあり。「誰の子ぞ、」と問ひたまふに、紀伊守「これは、故衛門の督の末の子なり。幼なき程、父に後れて、姉なる人を頼みて、此處に來れるなり。」と申す。源氏、「此の子の姉（空蟬）や御身の後の母か、」紀伊守、「さにて侍り、」源氏「似氣なき母を設けたるものかな。世の中は、定め

なきものなり。」などのたまふ、人々は、皆寐ねたれど、君は、打解けても寐たまはず。北の障子の彼方に、人のけはひするを、空蟬ならむ、と御心留めて、起き出で丶、立ち聞きなどし給ふに。げに、夫なり。かくてある程に、女ども丶、皆寐ね靜まりたるさまなれば、入り給ふに、女は只一人にて、臥したり。立ち寄り給ふに、驚きて、顔に、衣を當て丶音をも立てず。源氏、年頃思ひかたりつる心の中、聞え知らせむとて來りたるは、淺くはあらじと、思ひ給へ、」などのたまへど、女は、侘しく、淺ましくてそは…人違にてこそ侍らめ、」と云ふも、息の下なり。源氏「否、人違にはあらじ、などのたまひつ丶、掻き抱きて、障子の下に出で給ふに、侍女の來逢へば、また、奥に入り給ひぬ。女は、死ぬばかりの心地して、汗になりていと苦しげなり。かにかくに、慰めたまふ程に、雞も鳴きぬ。人々起き出で。紀伊守も出で來ぬ。雞猶屢鳴けば、源氏、情なさを恨みもはてぬしの丶めにとり（雞取）あへぬまで驚かすらむ」女夫伊豫守の、思はむことも恐ろしく、

「身の憂さを嘆くにあかで明くる夜はとり（雞取）重ねてぞ音もなかれける、」内外、ともに人騒がしければ、引き分れて、源氏は、顧みがちにて出で給ひぬ。歸り給ひても苦しければ、紀伊守を召して、「彼の中納言の子をば、我に得させよ。身近く使ひて、主上にも奉らむ、」と宣へば、承りて、五六日ありて、此の子（小君といふ）率て參れり。召し入れて、懐しく語らひて、空蟬への文を托したまへば、女は淺ましさに、涙を催したり。翌日、源氏、小君を召し給ふ、小君參るとて、返書を乞へば、空蟬「されば、な參りたまひそ」と云ひて、返事せず。されど、源氏は、猶絶えず、文を送り給へり、女は、哀れと思はぬにはあらねど、他に漏れては、と思ひ、また、我身の分限をも思ひて、御返事も聞えざりき。源氏は、戀しさに堪へずして、方違にとて、俄に、又中川の家におはしたり、紀伊守は喜び畏まりたれど、女は、思ひ亂れて、「心地惱ましければ、」とて、渡殿なる、中將といふ女房の局に隱れたり。源氏は、小君して、消息せさせ給ふ、小君、所々、求

め歩きて、やう〳〵、尋ねあてたれど女は、「悩み烈しければ」と云はせて、逢ひ奉らず。源氏、甚う呻きて、「帚木の心を知らでその原の道にあやなく迷ひぬるかな」とのたまへは、女、「數ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木」と聞えたり。(本の題號此歌より來る。)さて、源氏は、此夜小君を傍に臥させて、明したまへり。(帚木終)

附言、空蟬と、小君とは、權中納言なりし人の子。而して空蟬は父失せて、伊豫守が後妻となりしなり。此故に小君も來りて同居せるなり。猶、空蟬の夫、伊豫守は、任國に赴きて、當時、在京せざる事を忘るべからず。

作法問答 **新派和歌**

與謝野鉄幹

(一)問ふ。新派の歌とは如何云ふ事を申すので御座ります。

答。新しい歌と申す事で御座ります。一體文學美術と申しますものには、何の國へ參りましても、昔から有り來りの規則を守つて、少しも新しい作り方を致しませぬ人達がある、其れを舊派と申します。又從來の規則に縛られて居ては技倆を揮ふ餘地が無い、何も古い規則を何時までも守るには當らぬと、自ら新しい作り方を發明しまする人達がある、是を新派と申します。

(二)問ふ。新派の歌の種類は。

答。形で申すと二つ御座ります。一つは長い歌で、之を新體詩と名づけます。一つは從來から有る三十一文字の短い歌で、之を新派和歌と申します。

(三)問ふ。日本の舊い歌には名高い女詩人が澤山御座りますやうに、新派の歌も私どもの女子にも作れませうか。

答。勿論作れまする。中にも短い方の歌、即ち三十一字の方が私共女子には作り易いかと存じます。さう申しても御才の有らつしやる方には何れでも御作れに成りませう。

(四)問ふ。女子に新派和歌の方が作り易い譯を承はり度う存じます。

答。形の短い歌には大きな思想を十分に歌ふ事は出來ませぬ。其れは長い形の新體詩の方が自由に歌へまする、其れで短歌の方には、何を歌ひましても其事柄の全體では御座りませず、其の一部の最も自分が面白いと感じた事を歌ひまして、其外の部分は讀む人の想像に任せる方法を取ります。然う成ると、男子の性質は大きな所へは觀察が行き渡りますが、細かな、小さい所へは屆きかねまするに、女子は反對で、大きい廣い上には眼が及びかねまするが、微細な男子の氣の着かぬ所は能く見つけまする。之が第一短歌の女子に作り易い譯。又微細な感情、些細な事柄を歌ひまするに、男子の方が御歌ひに成れば、輕浮であつたり、女々しくて可笑しく成つたり、平凡な事に成つたり爲て、歌に成りかねまする材料が、女子が歌ひますると女子の歌として能く完美した歌に出來上りまする。之が第二の女子に作り易い譯、又歌の詞づかいでも、男子の方が優しい歌を御作りに成るよりも、女子は優しい情を表はしまする便利な詞を澤山有つて居りまする。之が第三の女子に作り易い譯。

(五)問ふ。其の三つの作り易い譯は承はりましたが、例を引いて御聽かせ下されませんか。

答ふ。第一の例は、

流したる四つの笹舟紅梅を載せしが殊におくれて
往きぬ

おほ皷かゝへかねたる其のころよ美き衣きるをう
れしと思ひし

斯様な事は一寸した事で御座りまするが、女子の方に餘計に氣のつく、男子の方には見逃しておいで成さる事柄かと考へます。第二の例は、

たまくらに鬢の一すぢきれし音を小琴と聞きし春
の夜の夢

人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと云ひてか
かへてにげぬ

下京や紅屋がかどをくゞりたる男かわゆし春の夜

の月

庭下駄に水をわやぶむ花わやめ鉄に足らぬ力をわびぬ

卯の花を小傘にそへて褄とりて五月雨わぶる村はづれかな

是等は女子の作りました歌なればこそ歌に成つて居りますれ、男子の方の歌としてはにやけた歌、きざな歌、平凡な歌に成りまする。其れは女子が

うばひたる敵砲五十さらにすゑて大野まもれば雪高う降る

と申すやうな歌を作りましては柄に適らぬと同じ事で御座ります。第三の例は、

神よとはにわかきまどひのわやまちとこの子の悔ゆる歌きゝますな



中の子は佛性わさゝ春の御堂紫衣の御姉を梨花にねたまぬ

したしむは定家が撰りし歌の御代式子内親王は古りしおん姉

そのなさけかけますな君つみの子が狂ひのはてを見むと云ひ給へ

松かげにまたも相見る君とわれえにしの神をにくしとおぼすな

是れはほんの一例に過ぎませぬが、ます、御姉、おん、おぼす、などの敬語は女の平常の詞にも多く用ゐまするのは、情の優しさを濃やかに表はす爲めで、女子の歌に之を用ゐまするのは誠に便利で、歌をば至極優しく致します。若し之を男子方が御用ゐに成りまする大抵の場合、歌がにやけて失敗で御座ります。

（六）問ふ。新派和歌は何を手本に致して作りまする。

答ふ。手本は御座りませぬ。舊派では古今集とか萬葉集とか手本にして、其の手本の規則を眞似て計り居ります。夫故舊派の歌は幾百年たちましても手本より進んで佳い歌の出來る見込は絕えました。御覽わそばせ、舊派の方の御歌を拜見致しますれば、十人が十人、歌の思想も、歌の句法も同じやうで御坐ります。春が來れば若葉とか霞とか、秋が來れば虫の音とか七夕とか、歌ふ事が略ぼ定ッて居て、其れを歌ふた句の姿も、春は來にけり、霞たつなりと云ふ風に、版で押したやうに定ッて居ますする。其れでは去年の歌も今年の歌も、他人の歌も自分の歌も、少しも進んだ跡、異ッた跡が見えません。

（七）問ふ。では初め如何して作りまする。

答ふ。色々の御心得が要りまする。すッかり舊派の歌を作る御考へを棄て丶御聞き下さらねば成りません。第一、歌は文學の一種の『詩』の中の又一種で、何處の國にも有りまする美術です。誠に氣高い價のもので、總ての科學、哲學の上に置かれます。之を作る人は詩人と申して、大詩人に成りますると神の化身のやうに敬はれまする。日本の從來の歌のやうに、風流な御隱居樣の恭將棋の御慰み、若い女子の琴揷花の稽古同樣に取ッては、雪と泥との相違で御座ります。第二、歌は有りの儘を寫す寫眞や散文とは違ひまして、眼に見える景色でも、眼に見えぬ心の內の事でも、又何千年むかし何萬年後の事でも、知る事の出來ぬ神、ほとけ、地獄、惡魔の上でも、何事でも詩人の頭腦に入れて、美くしい、面白い感を惹く所だけを撰り拔いて、其れを文章とは異ふた美くしい面白い詞で表はすので御座ります、舊派の歌のやうに、何でも出任せに歌に作る其の詞は文章のやうで格別餘情が無いと申すやうなのが多いのは、詩では御座りませぬ、詩の贋物で御座りまする。第三、歌は必ず自分の眞實に發明した歌で無ければ成りませぬ。新派歌人と申しますけれど、新派歌人同志が互に眞似の歌を作ッても、最早新派とは申されませぬ。新派歌人は各々に自分の詩才を磨いて、

歌の思想も形式も自分が發明を爲なければ成りません。然うして日々月々年々に歌が進んで、新しい佳い作を出す事に努めるので御座ります。從來は狹い日本の内の歌でしたが、今後は世界の歌と比較べられるものを作る心掛が要ります。第四、斯う申して參りますと、歌は中々貴い六つかしい事に成りました。何人にも作れるとは申されません。眞實に詩才の御有り成さる方で無くては出來ませぬ。併しお案じ成される程では無い、長い方の詩とは違ひ、又一部の感情を歌ふので御座りますから、女子の作る詩として　短歌が適當と存じます、第五、才がある計りでは歌は作れず、必ず學問と閲歴とが要ります。從來の歌人は歌の書物（それも澤山は見ません。）の外に殆ど何も知らぬ、俳句も小説も淨瑠璃も知らぬ、支那の詩も知らぬと云ふ風



で御座りましたから、自然思想が乏しい、止むを得ず古歌の眞似ばかりを致しました。今後は普通學の上に、日本の文學は勿論の事、西歐の詩や繪畫の趣味も學びたく、進んでは宗教とか哲學とか申す事を心得たいもので御座ります。又閲歴と申すと大仰に聞えますが、然う無くてすら世間知らずの私共女子の身分です、何卒旅も致し、種々の階級の人樣にも御交際致して、社會の狀態から各地の風景が知り度う存じます。見聞が狹いと想像も自然伸びません。自分の知ッて居る範圍で歌を作りますから、歌が進みかねます。第六、餘り學問に熱心に成ッても歌は出來ませぬ。新派歌人は舊派の歌の進歩せぬ點を嫌ひまするが、從來の歌は舊派の人よりも深く廣く研究致します。けれども從來の歌に心酔は致しませぬ、全く參考までに研究しまするの

で、萬葉集に醉うて萬葉集風の歌を作るやうに成ッては、進歩では無い、退歩で御座ります。

（八）問ふ。私は只今高等女學校の三年生で御座ります。舊派の御歌は隨分澤山拜見も致し、又拙いのを作りも致しました。醫科大學に學生で居りまする兄から、西歐の詩の話は端々を聞き噛ッても居りまする。御話で新派和歌が從來の御歌と異ひます譯も能く心得させて頂きました。今後は全く新しい歌を作り度いと存じまする其れは最初に如何致せば宜しいやら。

答ふ、舊派の歌の御下地が有ッて、其上御兄樣が然う云ふ御趣味の方で有らッしやれば、貴姉、屹度面白い御作が出來ませう。其れで新派の歌集を御持ちで御座りますか。

（九）いゝえ、未だ一冊も。

では歌集も御參考に御讀み遊ばせ。又御兄樣に御問ひ成されて美學、修辭學の御本も御讀み遊ばせ。初めから前に申上げた心得を呑み込んで、拙くても宜しい、人眞似で無い、眞實に貴姉の御感じ成されました事を貴姉が、之を表はすには斯う云ふ詞や句や調子が適當して居て、之は自分の發明ですと御信じ成される歌を御作り下されませ。

（十）問ふ。景色の歌から作りませうか。

答ふ。何からでも御作り成されませ。景色と申しましても、景色ばかりの歌は作りにくい。如何しても景色とか或る事柄を主にして感情を加へ、例へば

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

春の神の愛娘うぐひす嫁ぎくると黃金扉つくる連翹の花

油のあと島田のかたと今日知りし壁に李の花ちりかゝる

人の歌を口ずさみつゝ夕よる柱つめたき秋の雨かな

あやしむなわれと焔に燒かれては姿ぞほそきひと重芍藥

白虹の秋の日をさす眼は父に春のうれひの母おび

し眉と云ふ風に歌ひまするのが宜しいやうに存じます。之を叙事詩又は叙景詩と申して居ります。

（十二）問ふ。叙情詩の短歌の例を御聞かせ下されませ。

答ふ。種〻に分かれて居ります。一寸引きますると、

ゆあみする泉のそこのさゆりばな二十の夏を美くしと見ぬ
水に飢えて森をさまよふ小羊のそのまなざしに似たらずや君
のろひ歌かきかされたる反古とりて黒き胡蝶をおさへぬるかな
人の子にかせしに罪かわがかひな白きは神になどゆづるべき
胸の清水あふれてつひに濁りけり君も罪の子われも罪の子
花みなに眞紅さかする夏のちからいつ移りてと血に驚きぬ
くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪かつ思ひみだれ思ひだるる
あめつちの戀は御歌にかたどられ完全かるべくさゆら花さく
少女なれば妾は羞ぢて君によろ夢は天ゆく日もありぬへし

是等は普通の例です。未だ〳〵複雑なのが御座りますが、御自分で御研究下されませ。

史傳

# 小宰相局

小畑いく子

生者必滅は世のならひ、會者定離は天地の常道と、只一扁のふるき諺に、いひ消ちぬれば、はた罪も恨も長きよの夢なりけりと、云ひ過し、見過しても終ぬべけれ、さはいへ同じ流れの末の世も、渡りわづらふ夢の浮橋、さばかりならぬ障害にも、忽ち胸つぶれ、身をきる思ひのせらるゝは女心の常なるを、ましてや、義に折れ、孝に砕け、忠に縮め、愛に断ちし玉の緒の、長き恨みの跡を見ては、誰か同情の露のとゞめあえべきや、はた史に泣くと共に、

身を修め、子女を導く枝折となせばあはれをかしのわざかなと、天かけります亡き魂も見ましやすらん。いたましきかな小宰相の局、鴛鴦の衾暖ならんとして、風波たちまち起り、一族滅亡の悲慘に逢ひて、偕老の契こそはあだなれ、なじかは久しく送れめやと、萬腔の思ひを西海の波に沈めて、苦節を全くせしより、こゝらの春は重ねれど、月日の數にかはり〳〵て、きさらぎの、霞める月も其世の形見と、忍ぶに餘る筆の雫、はかなきすさびも、まづ此君よりと、ものしはじめぬ。

「我戀はほそ谷川の丸木橋」とは汐汲む蜑も、草苅る賤も、はては紅燈綠蔭のあやしき巷の末までも、唱ひはやして傳ふれど、其誰れの作たると、いつの世よりてふ事などは知る人其半にも及ばねぞ、はかなき。之れこそは越前三位通盛が、小宰相の局に送りし歌の上の句なれ。

そもや平氏は、其上延曆の帝に出でし名流なれど、世と共に移り行きて、いとも微々になりたりしを、刑部卿忠盛に至り、内の昇殿を許されしは、誠に家にとりて珍かなりける事にして世の人々も怪しがりし程なりき、淸盛は其長子なり、幼きより物に敏く行末見えて賴母しかりしとかや、されば長ずるまゝに其偉才一世を壓し、身を立て家を起して遂に其一門にして公卿たる者十六人、殿上人三十餘人、諸國受領衛府諸司などに至りては六十餘人の多きに及び、其守領は天下の半に達せりとぞ、げに其全盛おもひやるだに餘りあり。淸盛の弟に權中納言敎盛とて、多き兄弟の中にてもいと〳〵兄なる淸盛に愛せられたるありけり、其邸宅をさへおのが六波羅邸の總門の側に築かしめたりければ、時の人門脇宰相、門脇殿などいひてかしこがりしとかや、通盛は其敎盛が嫡子にして、文武ともに備りて血あり勇ある武士なりければ、世の用ひも大方ならざりけりとぞ。

通盛いまだ左衛門佐なりける春の頃、上西門院北野に御幸ましましける日、通盛も其供奉の一人なりき神垣も近ふなるまゝに、御車の小簾もる風にそよとばかり

吹き入るゝ梅が香、其いにしへのあるじを慕ひて、千里を飛びしふる事をさへ思ひ浮べさせ給ひて、そと見出し玉へば遠山の端の殘の雪、まだ春淺き薄霞をもれてみどりの松が枝は、常盤の色のいと深きこれぞ一夜に生ひしてふ千本の松かかしこしな、現人神の御社もほど近しとて、御車を下りさせ玉ふ、平家世ざかりの頃なれば、男女のわかちなく華麗をきそひ、驕奢にふける折なるに、ましてや今日は御幸のともあらん限りを盡したる女房達の、われも〳〵と下りたちたりければ、百花の一時に咲き出でたらん如くにて、めざましなんといふばかりなし、色に秀でたるあり、香にほこれるありて、いづれ怪しうはあらざれど、御側につと添ひ奉る年いと若き女房の容姿あでやかに、艶かしきがうちに、神々しく匂ひこぼるゝ花の袂、霞の間より見え隠れするがごと、紅葉の錦薄霞につゝむかとも見えて、咲きそろひし百花も忽ち色香を失ひ、木傳ふ鶯もしばし音をとゞむるばかりなるに、皆人目ばゆき人のけはひや誰やらんと互に問ひ合はぬぞなかりける。

これぞ小宰相の局とて前刑部卿藤原憲賢の女なるが、幼き頃より上西門院に仕へ奉り、ことにめでたがり給ひける宮中第一の美人とて、其名隠れなき女房なりけり。

還御ありし其夜より、獨り思ひに沈めるますら男ありけり、弓矢とりては一騎以て千兵に向ふべく、一族中重きを置き、さすがの相國さへ深く恃み給へる權中納言が嫡子通盛なりけり、過ぎにし北野の御幸の折から、かひま見し局が面影、夜となく晝となく夢にまぼろしに忘れんとすれどいやまさり、自ら心を叱すれど、更に効こそなかりけり。

思ひあまりて乳母の女房を召して、心を語りてすべを求めけるに、こは思ひもよらざる御事にこそ、彼君は女院の暫時も離し給はずとこそ聞き侍るものを、いかでかさる御事のなるべきやと共に困じ果てゝぞ見えければ、さらばせめての思ひ出に只一筆の文をだに通はん道のつてもがなといともせちなる思ひの色にあふれ

けれは、乳母の女房も、あはれの御事や、只それのみの御事なりせば、兎にも角にもよすが求めてんとぞ申しける、いざさらばとて、

吹きおくる風のたよりに見てしより
　雲まのつきにものおもふかな

とぞものしたりける、彼乳母の女房、さま〴〵に思ひはかりて、局の許にぞ參らせける、局はかゝる事とは思ひ設けざりければ、何心もなく披き見れば、此歌なり、驚きまどひて、せんすべもしらず、人もや見るとうしろめたく、如何でかゝるもの披き見しぞ淺ましとて、御返しなどは思ひもよらず、只其まゝにさし置かれぬ、通盛はこれを便として其後絶えず通しける事、茲に三年を重ね、送りし文は千束にも餘れど、只一度の返り事だになし。

小宰相の局、まだいとわかくて、さそふ水あらば、いなんばかりの齢の程なるに、はやくも、分け行く道をあきらめ、いかなる異草のさはりにも迷はでたどる心の程こそ、類ひもなう有がたけれ。

さばかり時めく平氏の一族、殊に花あり實あるますら男の、三年をかけし思ひの糸、誰れかあだにや見すぐすべき、ましてや局は年こそ若けれ、物のあはれはなみならず知るものから、はた身はかしこくも女院に仕へまつり、殊に御おぼえさへめでたきに、其人の上をのみあはれがりて、兎角の返り事などせば、ひたすら猥りがはしき、ふるまひとやなりぬべし、と自己を制して深くも愼みしこそ、げに〳〵めでたき心にこそ、かゝればぞ、波の底まで思ひ入り、自ら世を早うして後の鑑とあふがるゝも宜なりかし。

さても通盛は一門屈指の武將とて、よせおもき身ながらも一度、局を見てしより、思ひの烟絶えやらず、送りし文は千束に餘れど、只一度の返事さへなく、空しく三年を過しければ、人の心のつれなさに遂には世をもはかなみて浮世の望も絶えし心地しぬれば、是れを最後の文とおもへば、置く筆にさへ名殘の惜まれつゝ書きつらね、例の人傳に此度のみはいかにもしてよきに計らへかしと、くれ〴〵もいひ含めてければ、使人

も千々に心をくだきけり、折ふし局は里に下り居たる程なりければ、力なく、まかりける道すがら、女房の車に行き合ひたり、ゆくりなく是なん小宰相の局の参上りのそれなりけり、よき折なれとは思へども途すがらの事なりければ、とやせんかくやと思ひめぐらすうち、はや車は近うなりぬ、今は力及ばねば行き過るさまして、車に近づき物見のひまより、



そと投入れて足ばやに通りける、局怪しき事に思ひけるまゝ供人に問ひけれど、皆誰がいつのまに入れたるをしらねば、只々しらずとぞ答へける、局手にとりよく〳〵見れば通盛よりのなりけり、淺ましと思ひけれともせんすべなし、やがて内にぞ參りける、此文車に殘して下りんかとも思ひつれど、そもつゝましく、流石に大路に捨てん事も人目をいかにせんと、思ひ迷ひぬれど、先ず後にこそ如何ともなす折あらんと袴の腰に挾みてぞ下りたりける。

女院待ちわびおはする事とてやがて御前に侍ひ居にけり、隙なき御前わたりにまぎれて、そゞろき渡る程にいつしか彼文落してけり、所もあるべきを御傍なりければ、女院ひそかに拾ひとり給ひて御袖に秘め給ひつゝ、御遊びなど果てさせ給ひて後、女房達召させられいと珍らしき物見付てけり、落しゝぬしや誰とはの見せ給ひてければ人皆知らぬ事なりければ、神かけてさるものしり侍らじとぞ申ける、其内にも小宰相のみは只々ゆゝしき事と思ひ迷へる色の自ら、それを知しめされけるに、彼三位が深くも思ひをかけゝりと風の便りに聞しめされつる事など、思ひ合せ給ひ、程經て小宰相一人を、ひそかにめさせ給ひて猶問はせ給ひければ、包まん事もかしこければ、そは通盛が、とのみわれかの狀にて奏しける。

女院さらばと披きて御覽ずるに、綠の薄葉の色殊に深きを、むせぶばかりに焚きこめたりける香もなつかしく、匂ふばかりの筆のあといみじう、あてはかに書きまぎらはしたり、餘りに人の心强さも今は中〳〵うれしうて、などありてその末に

我こひは細谷川のまる木橋
　ふみかへされて濕る袖かな

とぞものしたりける、女院これを見そなはせ給ひて、あはれにおもはし玉ひ、局に仰られけるは、餘りにも人のつれなきは罪深きものとぞきく、彼小町が例もありけるものを、是はまた太政入道の子孫の内にても、いとよせおもき者とこそ聞け、何にたらはぬ事ありてかかくはする、とて硯めしてかしこくも

たゞたのめ細谷川の丸木ばし
　ふみかへしては落つるならひぞ

とぞ遊して下し給ひける

かくて女院の御媒もて局は通盛の許に嫁ぎてけり、此上西門院と申し奉るは、鳥羽帝の御二女にて二條院の御准母に渡らせらるゝ聰明の聞え高き女院にこそましまし〳〵ける。

通盛もとより世の常のあだなる波に思ひをくだき、あるかなきかの陽炎のはかなき戀に、あくがれしならで、思ひ入りては幾年も只一日の如くなりき、局は殊に情ふかき性なれど、只かしこき邊に仕へ奉身を顧て、只私のふるまひを深くも愼みたりけるのみにて、人の心はうれしみよろこび居たるなれば、かくなりての後のかたらひこそ琴瑟も啻ならざりけり。

花時風雨あり、明月雲に掩はるゝは浮世の常とはしるものから、げにこそ好事の魔多きや、かゝる契りも束の間の、さしも時めき渡る平氏の一門、恃む小松の枯れしより、常盤の色もあせそめて世は刈菰と亂れあひ

昨日は東、今日は西、赤白の旗空を掩ひ、櫻かざしゝ大宮人の舞の袂をひるがへす鎧の袖に置く露の嵐にきはふあやうさよ。

治承四年といふ頃よりは絶え〳〵なりし源氏の流れも蓬斷草枯の時去りて、とくる氷の春風にうち出る波も花やかに、一旦高倉宮の宇治に敗れ玉ひ、石橋山の戰利を失ひしも、中〳〵同志を集むる烽火とはなりにき忽にして富士川の水鳥、平氏の眠りを破りしも猶其夢よりは出づる能はざりにき。

遷都、還都の事よりしていよ〳〵上下の心を失ひ、東北近畿の源氏、先を爭ひて鎌倉に馳せ參じ、日を經るまゝに其形勢すさまじうなり行きぬ。

昨日は淵のあなたにのみ聞きたりし矢さけびの聲、今日ははや花洛の中に狼藉たり二十餘年の榮華に馴れし身は繋げる馬に鞭つならひ、九重の御調度さへ具足し玉ひもあへぬ俄の行幸、上には御幼冲にましませば只何心もなくて渡らせ給へと女院二位殿をはじめ奉り、月の袂や雲の袖しぼりもあへぬ涙と共に都を後に出で

給ふてそ、ことわりせめてかしてけれ。

妖雲空明を閉し醒風天地に充滿て、年の明暮をさへもわかず、年中の行事全く廢れ果て今はいつてを都とも鄙とも定めぬ世のさまに、福原、須磨や一の谷、よるべ定める浪の上の御船を假の皇居にて、浮寳とは名のみなり、うき寝にぬるゝ袞龍の御衣の袂もひまぞなきさしもの平氏も運きはまりて今日より昨日よりと、一族の失せ行くてそはかなけれ、宗盛父子をはじめ、多くは船にわりつれと、彼通盛兄弟は一の谷に止りて茲を屍の埋め所と身を忘れて守り居たれと、名にし聞ゆる蒲の冠者、九郎判官の兩大將、隨ふ者は勝に乘りたる坂東武者、多年の恨、父祖の讐、道なしとてやためらふべき、足立惡しきをいとふべき、凡そ鳥一羽、兎一匹にても通はん限りはとて難所を物とも思ねば、ひた攻めに攻めたてける。

壽永三年二月六日の夜通盛つく〴〵思ふやう、明日の戰てそ味方の大事、兄弟の命の際ぞかし、せめては今生の別れを惜まんと兼て舟に移し置きたる最愛の妻小宰相局を假屋の内に呼び迎へ、萬一の事あらん後なとをそれともなく語りつゝくるに、春の夜いつか更け渡り能登守が思はん事も心苦しければとて、つきぬ恨をかこちつゝ局を舟に、自らは戰立ちをぞなしたりける明る七日の戰に平氏いよ〳〵利を失ひ、薩摩守忠度、越中前司經俊、藏人大夫業盛などをはじめ一門の公達多くは討たれ或は捕はれの耻をさへ受くるもありけり越前三位通盛も茲に武運やつきたりけん、湊川の河口にて遂に無慘の最期をぞとげられける。

百年の苦樂他人を侯つ、はかなきものは女性なり、ましてや九重雲深き大内山に生ひ立ちて、小簾もる風をもいとひし身の定めなき世のさまとはいへと、恃む影さへ荒磯の浪に漂ふ此年月、其かぞいろの居まそかる都の方の音信も道ふさがりてまゝならず、沖の鷗や島千鳥、枕に騷ぐ浦浪を寝覺の友と聞きなして、布苅鹽やく身ならねと、袂にひまぞなかりける。

かゝれば今は鴛鴦の契りの程も淺からぬ三位の御上いかにぞと、夢にも祈らぬひまなきに、過ぎにし宵の御

物語、常にもましてこまやかなりしが、翌る七日の戰に、御方の敗れと聞くもうし、三位の御行末も覺束なしと、身も心に添はで音信をのみ待つ程に、瀧口時員となんいへる三位の侍、如何にもして存らへて我最後の摸様を告げよとの、嚴しき仰せに辭むすべもなく、惜しからぬ命惜みつゝ、辛じて、此船に漕ぎ上りぬ。如何に〳〵と待ちわびし身に中〳〵つらき此音信、共に消ゆべく絶え入りてぞ泣き臥しぬ、此局には乳母子の女房只一人ぞ傍さらず侍り居にける。

かに角と詞を盡して慰め參らすれど、其後はつゆ詞もなく、物をも參らず只泣きに泣きて沈み臥したるまゝなりければ如何にすべきと女房もくれ惑ひ居たりけりさる程に二月十三日の夜半ばかり、人靜りたる後局はやをら起き直りて、乳母子の女房に語り玉ふは、此程瀧口の、三位の御最期を告げ知らせけれど、方々の落ちのびさせ給へる事など、風の便にも聞ゆるに、もしやとかけし希望の綱も、はや今となりては詮なきぞ、それは七日の晝の事、今日十三日夜も更けぬるに、いづこよりも、我待つ便のあらぬのみか、彼前の夜の御別れ、常より異に曰ひける事の心細さに今まで包み居たりし我たゞならぬ身となりける事などをも告げ參らせければ、通盛三十になりていまだ子なしと思ひ居たりしに、初めて見る事のうれしさよ、それに付けてもまたさま〳〵に、思ひなやむ事にてそとて御淚をさへ浮べ玉ひしが、かゝらんとての御驗にもやありつらめ日數經で生れし形見を見るにつけ、いとゞ思ひも增すらんものを中〳〵なる身なりかし、かゝる憂世に存らへて命あらば如何に心の外なる事の出で來なんもはかられね、もしさる事もあらば、草葉の蔭に何とて君に見え參らすべき、故鄕にかくと聞しめしなば御歎きもいかばかりぞとは思へども、兎ても角ても幸なき身、いつ迄かくは物を思ふべきと、いひさしてよゝと泣き玉ひければ、女房いとゞ驚きて、思ひもかけぬ事承りぬるものかな、たとへ水の底まで思ひ入り玉へばとて戀しき君に逢ひ玉ふべきにもあらねば、まづは平に御産の紐をも解かせ給ひ、稚き人をなき御形見と育

みおはしまし、御身は墨に染めかへさせ給ひても亡き御跡を訪ひ玉ふこそ異の道とも思ふなり、賤しき身なれど老たる者を殘しつゝかくならはぬ波の上の住居も只御傍を離れじとての願ひになん、萬一の御事をもせさせ玉ふとならば、如何なる浪の底までも、召し具してこそおはしませ、さらずばとこしへに恨み參らすになんとぞ申したりければ。

局もことはりと聞きなして、否とよさな思ひ入りそ前にいひしは悲みの餘りぞかし、かゝる身となりけるをいかでか月日の光にも逢せで闇より闇に送らるべき、かまへて心にな懸けぞ、今はいつ迄歎くとも三位の返りおはするにしもあらねば、今は身を惜みて只時の至るを待たなんのみぞ、かまへて心安かれとて臥床に入り玉ひければ、女房も其かひありしを悦びて御傍に臥したりけり。

春とはいへときさらぎの風冴えかへる浪まくら結ぶ浮寢の小夜更て、岸に碎くる波の音、磯山松の響ならでは沖に友呼ぶ千鳥の聲のそれより外の音信なし、焚きすたれたるかゞり火の影も小暗き舷に、忍び／＼に立ち出づる、これぞ夫にをくれし小宰相局なりけり。思ひ定めし事なれば、今は中／＼涙さへ出でず、靜にわたり見廻しつゝ、臨終のきはに今一度三位殿に逢ひ參らせんと、左手に持ちたる唐鏡とり直し、是れこそ故三位殿の朝夕見馴れ玉ひしそれなりけり、うつれる影は我ながら、只なつかしと打まもり／＼流石に不覺の涙とゞめあへず。

　さらぬだに朧月夜はものうきに
　　いとゞ涙のますかゞみかな

と泣々二度三度くりかへしつゝ小袖の胸を押しひらきて、其鏡を深く納め、又とり出す一領の鎧これはいつぞや三位の殘し置き玉ひしものなりければ、是れを今身に添へて行かば、三位と共にある思ひ、かつは浮び上りもやするとて、固く押し巻きて、茫々たる海原なりければ彌陀の淨土と聞きなれし西をいづこと知るよしなければ、霞ながらに入る月のそなたの空を伏し拜み、いと忍び音に念佛してありけるが今は是れまで

なり暫しとてや後るべきと、所は阿波の鳴戸の末なれば立浪・引汐はげしくて大渦小渦わきかへり物凄じき直中に南無と一聲を名殘りにて、あとしら浪となりにける。

此物音に驚く人〳〵さてはと胸まづとゞろく乳母子の女房、側を見れども居まさぬに、こはそも如何とくれまどひ、さてもつれなの御事や、今の先きまでかくの玉ひしものを、いかなる水の底までもなどて具してはたび玉はざる、さはいへ何じかは殘りて人〳〵に見え侍るべき、同じ波間に後れ侍らじと既に危く見えけるを、騒ぎ立ちぬる船の内なれば、多くの人にとゞめられければ心を定めて都に上り、所〳〵に此よし告げ參らせ、自らは形をかへて、三位、局の跡訪ひ參らするを己が身を終るまでの業とぞなしたりけるとなん。

局の如きはげに婦德を完くせる者といふべけん〳〵、其始め三年の戀にわくがれし通盛が千束の書も、猶局の心を動すよしなかりき、是そも〳〵只人のなし得ざる所殊更情をしらぬ性ならぬを。これ只其身の本分を忘れず、ひたすら婦道を守れる心の磐石も啻ならざるによる。されば一度公のゆるし得て妻となりにし後の局は琴瑟相和し、鴛鴦も爲にうきねを恨むばかりの契なりき、其末期に至るまで更に浮きたる思慮なかりしこそ、げに女の鑑とも見ざらめや、もとより平時の眼もて見る時ははた、かに角とあげつらふふしなきにしもあらざるべきもかゝる亂れし世の騒ぎにまぎれで、己が身の始末を誤らざりしは丈夫も猶恥なからめや。

（完）

## 精神病の原因

昨年中府下田端なる東京腦病院に入院したる精神病者の原因を調査せしに

| | | | |
|---|---|---|---|
| 財産上苦心 | 二六 | 迷信及宗教 | 七 |
| 相續上苦心 | 七 | 徴兵に關する苦心 | 四 |
| 事業失敗及損失 | 一九 | 神經系病 | 一七 |
| 失戀及嫉妬 | 一九 | 病氣及其苦慮 | 一九 |
| 離縁及結婚上苦心 | 一四 | 外傷 | 三 |
| 親族病氣及其死亡 | 二八 | 梅毒 | 一八 |
| 定内不和合 | 五二 | 酒 | 三七 |
| 處世上苦心 | 二六 | 房事及手淫 | 三 |
| 試驗失敗 | 一三 | 生來薄弱及變質者 | 二四 |
| 感動 | 七 | 身神過勞 | 一三 |
| 火災 | 六 | 不明 | 二七 |
| 訴訟及爭論 | 六 | | |

科學

# 梅雨の天地

佐藤禮介

前號に於て梅雨中の植物を記載しましたが猶引つゞきその御話をつゞけませう紅花は隨分効用の多い草である花は薊に似て餘り美しくはないが其の花からは臙脂を製することが出來る、この臙脂即ち紅は絲類や織物を染めたり繪具に作つたり又化粧にも用ゐられる。紅花の莖の五寸か一尺かに成長した時に摘み取つて野菜物の樣に煮て浸物にすれば食用にすることが出來る　昔は吾が國の各地方で盛に植えたものであるが今は支那產の紅に壓倒せられたのとアニリン染料の樣な廉價で且つ固着力の强い染料が澤山出來る樣になつたので是れを植え付ける地方が少くなつた、唯だ山形縣あたりで今猶植え付けて居る位である。紅を製するには朝早く花を摘み取つて細かに刻み之を臼に入れ搗き碎いて淸水に浸し次に丈夫なる袋に入れ壓し付けて黃色な液を搾り出すのである、一體紅花の花瓣には紅の色素と黃色の色素とを含んで居るが其の黃色な色素は不用なものである之が臙脂に混ずると臙脂の品質を下等にする害がある然るに此の黃色素は水に溶ける性質を持つて居るが之に反して紅色素は水に溶けぬから此の性質を利用して黃色素を除き去るのである。既に水に入れて黃色な液を除き去つた即ち搾り取つた殘りの物は紅色の糊の樣なものである之を餅の形に作り乾かして市場に賣り出すのである之を俗にせにばな又は紅餅といふ紅餅は未だ純粹の物でないから之を製して臙脂にするには尙一度手數を要する、紅色素は灰汁には溶けるが酸い液汁の中には溶けずに沈む性質があるから、紅

餅を三日間も水に浸し柔かにした上で袋に入れ灰汁の中で揉み動かせば紅色素は皆灰汁に溶けてしまふ。そこで其の液の中に梅酢か又は醋酸を入れゝば紅色素の純粹なもの丈が沈む之を取つて煉り製したものが本統の臙脂である

○家の後に高く繁つて居る栗の樹は今を盛りと白色の花の總を垂れて居る、此の花が過ぎて總が地に落つるのは梅雨の終りであるから地方によつては栗の花の落下を以て梅雨の終期のしるしだと言つて居る。夏になれば針を植え付けた樣な靑糸縅の鎧を着け猛き武士の頬をも傷つけんばかりの威風を示し秋になれば赤褐色の胸を開いて幼き兒供をも招き懷くるやうな姿をあらはす、このてはらしい栗の毬彙は、此の花の孰れの部分が變化成長して出來るのかといふと、それは花の一




と總を手に採つて覗ればわかる此花には雌蕋ばかりを持つて居る雌花と雄蕋ばかりを持つて居る雄花との二種がある、雌花は總の本の方に二つか三つ位着いて居り雄花は總の全體に澤山着いて居る雄蕋の數も澤山あつて芳しい香氣を放つて居る。此の花の花粉は風に依つて雌蕋に送られるものであるが蜂虻の樣な虫類も亦花粉を雌蕋に送る手傳をするのであらうと思ふ何故かといふに稻、竹、松などの樣な風媒花（風媒花とは風の力で花粉を雌蕋に送つて實らしむる花をいふ）では芳ばしい香氣もなければ虫類も寄りつかぬが、栗の花はそうでなくして芳香もあれば蟲類も澤山たかるからである、雌花の外面には鱗の樣な片が重なつて居り、花の時は少しも針が出て居ないが、後にだんく針を生じて毬彙となるのである、毬彙は總苞と名づけらるゝ

ものであつて其の内に通例三つの小さい花がある其の小花が悉く實のれば毬彙の内には所謂三つ栗が出來二つの小花が實のれば二つ栗となり一つの小花が實のれば一つ栗となり、實のらない小花は俗に箆栗と名づけられるものになる。花が過ぎれば雄花の穗は本から折れて地面に落ち、雄花ばかりが枝に殘つて栗の毬彙となるのである。

◎梅雨季に於て霏々たる細雨を侵し野に出て見れば畑には瓜や茄を始め豆類芋類などが皆青々として時を得がほに生ひ繁つて居る、田には農婦が一刻の時をも惜んで忙はしげに田植をして居る、今は農家が秋の收獲の資本を作る時であるから兒供や老人や苟も働くことの出來るものは皆喜ばしげに田植を手傳つて壯年の人と共に働いて居る、今植えつゝある稻の苗は四月の末に苗代田に種子蒔したものであるが六月の中旬まで僅に五十日許りに七寸餘に生長した、丁度十日間に一寸二分許りづゝ伸びた勘定であるから其の生長は、やゝ緩漫な樣であるが少しも休みなく伸びた結果は隨分驚くべきものである。歩を轉じて山路を辿り行けば此の頃の降り續きに草も木も多量の濕氣を得た爲に皆勢ひ良く伸び繁げつて居る。春とは違ひ花咲くものは餘程少くはあるが茜草、虎杖、などの白色の花や合歡の紫色の花、などが雨露をも厭はず咲き開いて居るから昆虫を餓えしめる程に花の蜜や花粉の缺乏することはない。しかし山林は植物のみが榮える場所でない。草木の枝には毛虫や青



虫が群り居て、芽や蕾などを容赦もなく喰荒して居る、若し是等の蟲が夥しく繁殖したならば草も木も皆喰ひ枯されるであらうと思ふ。けれども自然の配合は決して或る生物にばかり偏頗に恩惠を與ふるものでない、毛蟲や靑蟲が繁殖するときは之を捕て食べる鳥類も増加して害虫の蔓延を防ぐものである、害虫を捕食する鳥類は數多あるが杜鵑は其の重なるものである、殊に杜鵑はさみだれの夜に憂に沈める人をして腸を斷つの思ひあらしめ昔から詩に吟じ歌に詠じられ人口に膾炙したる鳥であるから今少しく此の鳥についてお話をしやうと思ふ、

◎杜鵑は諸國の深山に多く棲んで居る鳥であるが東京などでは梅雨の夜往々其の啼聲を聞くことがある、此の鳥は體の形鳩よりもやゝ少さく頭、脊、及び尾の上などは淡黑色で、頰や咽喉は灰色であつて少しく靑色を帶びて居る、胸や腹は白くて且つ黑の横線（即ち鷹文）がある此の黑い横線の幅は一分には達しないが五厘よりは廣い。胸や腹に斯様な斑紋のあるを見ると鷹類に餘程似て居るけれども實際は猛禽ではない從つて鳥や獸を捕つて食ふことは決してない唯、毛蟲、靑蟲などを捕つて食べるのみである、斯くの如く山林の樹木の綠葉を害する毛蟲類を餌食とするものであるから、林業家には甚だ必要な鳥である、其れ故に政府の法令で以て此の鳥の捕獲を禁じられて居る、しかし天蠶を飼ふ人に取つては杜鵑は有害な鳥と云はねばならぬ、何となれば毛虫や靑虫などを啄むと同時に天蠶の蟲までも捕食するからである、斯様な場合には特別に政府の許可を得て驅除しなければならぬ、

嘴は本が黃色で末の方は淡黑色である、脚は全體黃色であつて、脚の指は二本は前に向ひ二本は後に向つて居る丁度啄木鳥の脚の指と同様である。杜鵑は自分では巣を作らずに黃道雀、や鶯などの様に自分よりも形小さくて且つ蟲類を食べる他の鳥の巣に卵を産み落して置く性質がある、黃道雀や鶯などの如き小鳥は之を知らずに自分の卵と一所に杜鵑の卵を暖める、既に生れゝば杜鵑の雛は體大きく力も強いから小鳥の

雛を巣から追ひ除けて自分ばかりで巣を占領し小鳥の親が持ち運んで來る餌の虫類を貪り食して、成長するのである。是に於て思ひ當るのは、なぜ親なる杜鵑が形小さな鳥で、しかも蟲を食ふ鳥の巣を撰んで卵を産んだかといふことが分かる即ち形小さな鳥でなければ杜鵑の雛が生れた時に其の小鳥の雛を追ひ出すことが出來ぬであらう又虫を食ふ小鳥でなければ杜鵑の雛をば虫を以て養はねであらう、是を人間社會の事に譬へたらば隨分不德義な行爲ではあるが兎に角巣も作らず卵も暖めぬ鳥が自分の子孫の絶えぬ様に斯く都合よき他の鳥の巣を撰むてとを知つて居るとは實に奇妙である、

◎杜鵑は又ときはとり。いもせとり。とも云ふ。東京附近では「てつぺんかけたか」と云ひ關西では「ほんぞんかけたか」と云ひ或は「ぶッかいかけたか」と云ふのは皆此の鳥の鳴聲から名づけたものである。




杜鵑は深夜人靜まるの時、空を鳴き渡る鳥であるから人能く其の聲を知つて居るが其の體形を知る人は甚だ少ない。そうして郭公といふ鳥は形極めて、よく杜鵑に似て居る所から世人は往々此の二種の鳥を混同して居り、其の名稱文字なども相互共通せしめて居る様である、郭公と書いてほとゝぎすと讀むこともあるのは普通であるしかし「ほとゝぎす」といふ鳥と「くわくこう」と名づくる鳥が別々にある以上は郭公の文字は「くわくこう」といふ鳥のことにのみ用ゐる方至當であらうと思ふ、さて、郭公は如何なる形の鳥であるかと云ふに羽毛の色は甚はだ、よく杜鵑に似て居つて之を區別することが頗る難いほとである、頸や脊などの淡黒色なること胸腹の白くて鷹文あることなとは良く相類似して居る、しかし今其の區別すべき點を申せば次の通りである。

◎郭公は杜鵑よりは體の形稍大きく翼を折り疊んだ時翼の角から翼の端までの長さが郭公は六寸六分以上であるが杜鵑のは五寸六分以下である。郭公の胸腹にある横の黒線は甚だ細くて幅凡そ五厘であるが杜鵑の胸腹の黒線は稍廣くて幅凡そ七八厘である郭公は其の鳴聲「かっこう」〳〵と聞えるが杜鵑の鳴聲は前に述べた樣に「てっぺんかけたか」に似て居る。

以上は郭公と杜鵑との區別であるが此の二種の鳥は共に渡り鳥であつて春には我が日本に來り夏には他の鳥の巣に卵を産み秋には南方に飛び去つて支那印度等に渡るものである、郭公も杜鵑と同じく山林の害虫を捕つて食べる性質があるから法令で捕獲を禁示せられて居る保護鳥である。

（完）

# 博物小話

木村小舟

日本人は一體に自然界に對する、趣味智識に乏しくて、往々詰らない事に迷ふたり、驚怖れたり致しますが、之を矯正するには、先づ家庭の覇者たる、婦人連に向つて、充分に科學的趣味を有たせるのが肝腎です、で私は茲に理科小訓と題して、極切短かに目前の問題に解決を與へることゝ致しました、諸君そのお心算でお讀み下さつたならば、或は合點も出來ませう。

## 其一　人魚とは何でせう

むかしから海中に人魚と云ふ妙な動物が居て、時々漁夫の網にも掛るが、彼等はみんな恐れて逃かしてやります、若し一ッ之を捕つて内々隠藏として置けば、非常な重寶なもので、之を食ふと壽命が百年も延びると云ふ話です、又海邊の人は、春の夜の暖かくて、そして月の奇麗な晩などに、人魚が子を抱いて、乳を飲ませながら、月に浮かれて居る處を見るさうで、其恐しさ凄さは、到底二目と見られぬと云ふ、では其人魚と云ふものは、どんな形狀をして居るかと云ふに、形は

丸で海女の通りだが、腹から下の方は青い様な色の鱗で、足も全く魚の通りで、其れが潮風に髪をふり亂して居るのだと云ふ、之は日本でも西洋でも、話が全く符合して居る、して見れば人魚なるものは、人首魚體の怪物でせうか。

琉球の近海に產しまする、儒艮と申す海獸は、その形が一寸人魚にも似て居り、又その肉も脂肪が強くて甘く、且つ久しく保存することも出來るので、むかし琉球が支那の屬國であつた頃には、儒艮の肉が貢物の一種となつて居ました。






海牛も又幼兒を抱いて、頭を水面に出す時は、一寸人間の様に見えます、この獸は性質が至極温順で、何時でも大槪親子相擁して居ますが、漁夫は彼等を見るなり、先づ其雌を撲殺します、すると雄や子は夫れを悲しがつて、別に逃げもせず、其傍に泣いて居ますので、漁夫は譯なく、みんな

殺して仕舞ふ、とのことです。昔しから世間でやかましく言ふ、所謂人魚なるものは、全く儒艮か、但しは又此の海牛に他ならぬと云ふのが、今の學者の一般の定說です、して見れば半人半魚と云ふことや、その肉が長壽の藥となるなど丶は、何とも請取り難い話で、多分支那人の作事と思はれます。

### 其二　蚊柱は凶兆ではない

むかし戰國の世に、或一人の大將が御座いましたが、或る時隣國の大名と戰爭を開きました、時は丁度夏の事でしたから、其大將は城樓に在つて涼を納れて居ると、折しも夕暮となるや、城の濠の水の中から、白い煙が濛々と立ち上るので、大將は不思議に思ひ、自分の家來を呼んで、どうも怪しからぬ煙だ、もしや敵軍の者が、彼處に伏匿して居るのでは有るまいか、何は兎もあれ早く行つて見て來いとの事に、家來は命を含んで、濠中から立ち上る煙を驗て見ると、之は全く幾億萬とも數え切れない樣な、澤山な蚊の群が柱の樣になつて、飛び廻つて居るので、夫れを少し距つた處で見れば、恰も煙の樣に見えるのでした。

さて家來は、樣子を確と見屆けて、城へ歸つて斯くと大將に話しますると、其傍に居た老臣は眉をひそめ、嗚呼悲しいことで御座いまするが、蚊柱は凶事のある場合に際して起ると、漢土の書籍にも記して有ります、思へば明日の戰爭も、どうかこの凶事の兆が逆事になればい丶がと、申し述べましたが、果して其翌日の戰に於いて、見事この城は攻め落とされてしまい、大將も又討死となりました。かう云ふ昔話が今に殘つて居る故でもあるまいが、未だ世間には、蚊柱が立つと乾度何か凶事がある樣に思ふて、ひどく神經を惱ます人があるですが、抑も蚊柱なるものは、決して、さう云ふ奇妙な効能の有る物では御座いません。

併し蚊柱は溝渠や、濠の邊に立つことは事實です、夫れは又如何云ふ譯かと申すと、一體動物學上では、この現象を目して、雌雄陶汰と申しまして、蚊の交尾して產卵する前に、かう云ふ妙なことを演じます、それ

と云ふも比較的少數な雌蚊を、非常に多數の雄蚊が集り合つて來て、互に自分の物にしやうとするから、自然煙の樣に群つて見えます、又雄蚊は此劇烈な競爭に依り、一旦交尾してしまへば、體が弱り翅もつかれてみんな水に落ちて死ぬのです。

### 其三　間歇熱の妙藥キニーネ

四季の感冒、分けて間歇熱(をこり)などの熱病にかゝつた時、醫師は大概、キニーネと云ふ、眞に苦い散藥を呉れます、病苦のつらさには、苦さを耐えて服用致しますが、其効能の程も實に早く、流石に口に苦い丈に、よくきゝます、此のキニーネと云ふものは、南米のペリユーから產するものですが、之に就きまして、殊に面白いお話を一つ致しませう。

キニーネは、幾那と云ふ名の木の皮から、製造するもので、キナはペリユー語で、木の皮と云ふ事だそうです、而してこのキナは、學名をシンコナと申す譯は、和蘭のシンコナと申す人が、此のペリユーに滯在中、殊に輕からぬ熱病に冒された時、土人の好意に依りて、幾那樹の皮を得、之を服用して、直に平癒する事が出來たと云ふので、夫れから歐州ではシンコナを以て、この木の學名と致すことになりました、幾那は南米の特產では有りますが、我國の山に松や杉の叢生するが如く、猥りに多く有るものではなく、土人は險路峻坂を冒して、殆んど二十幾日は、蔦葛に身を託して偏に道を急ぎ、人跡絶えはてた深山に入りて、之を採集致し、更に歐州に送られて、初めて精製せられるとの事で、只一塊のキニーネと雖も、實はこの樣な苦心慘憺なる結果で出來るものですから、容易におろそかには爲りません。

### 其四　虻の退化翅

虻や蠅の類は、昆蟲學上から双翅類と申します、一體云へば虫には、翅が四枚あるのが本當でありますのに、この虻や蠅やは、たつた夫れが二枚しか有りませんので、扨てそかう云ふ名があるのです。

双翅類の後翅は、全く無いのでは有りませんが、之は退化して皺膜又は撥子の樣になつて居ます、昔しの人は之を見て、大抵目だと云ふて居ますが、其證據は何處にあるかと申しますると、若し虻を捕へて、其膜か又は撥を一寸針の尖か何かで突いて破るか、但しは取り捨てれば、虻は目がつぶれて、少しも飛ぶことが出來ないからだと申します。

前にも申した通り、之は退化した後翅ですが、之を取り去られた時は、虻や蠅やは、丸で沖中で舵を失ふた舟全然、行くべき處を定めることが出來ませんので、丁度糸目の佳くない凧が、地に落ちて水を汲む樣な態をして居ます、而も虻や蠅やの目は、複眼と云ふて、殊に大きな目を、頭部に有つて居ます。

一體複眼と云ふものは、數萬個の小さな目が集合して居ますので、この目には、一の物體の小部分宛を映し、夫れが集合して、初めて完全な一物體を作つて、神經に感ずるとの事です、何と奇妙な物では御座いますまいか。

## 其五　護謨の樹の話

近來護謨製の玩具や器物が、大分我國にも流行して來ましたが、玩具なども鐵葉や陶器と較べて、大さう品が好く御座いますし、又ゴム管なども勝手用、工場用として、眞に重寶な物で有ります。

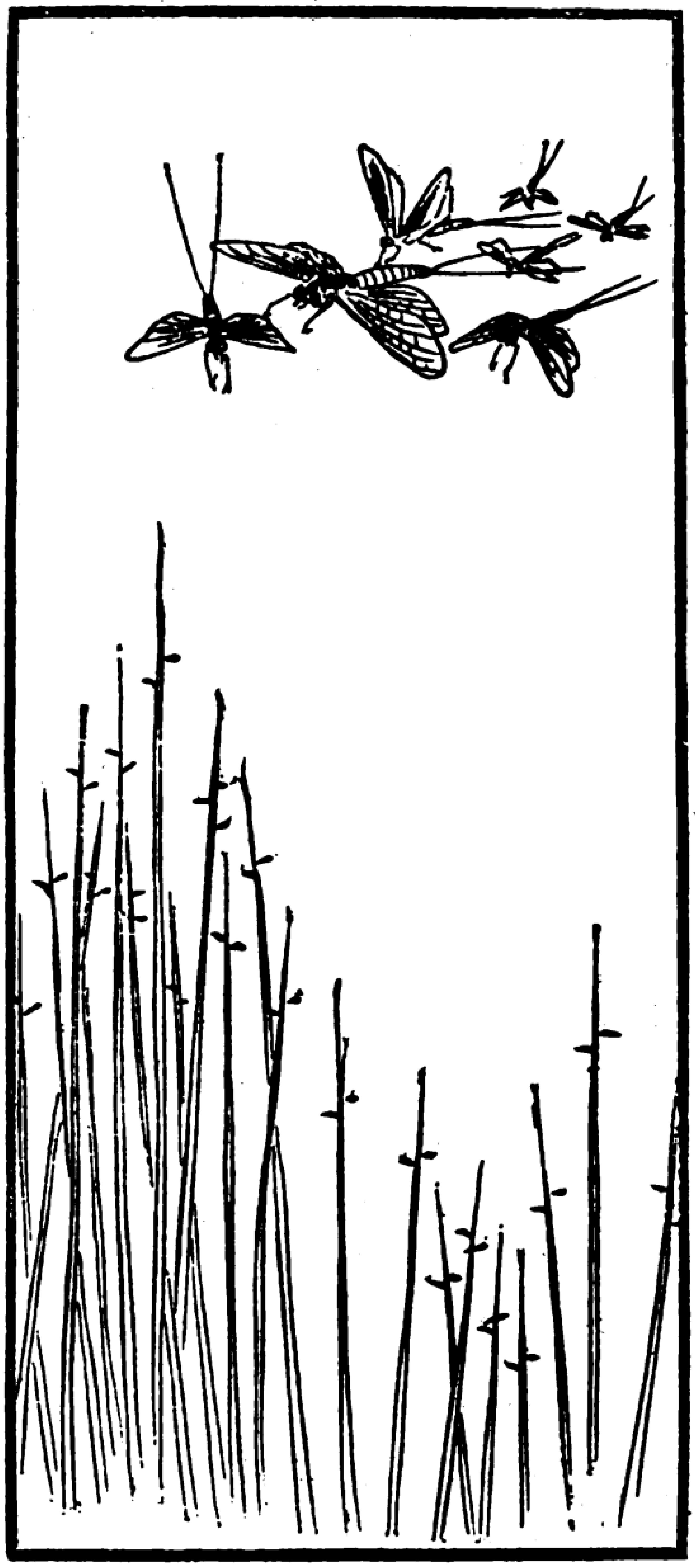
かう云ふ護謨は、桑科植物の護謨の木から採集されるのです、一體この木は南米の熱帶地に、最も多く繁生致しますが、近時は我が小笠原などにも、之を移植したと聞きます。

さて此の護謨の木から、液汁を採集しまするには、先づ手斧を以て、樹皮に多くの傷口を開けまして、其下の處には、一々鐵葉製の小さな桶を受けて置く樣な、仕掛を致して置きますれば、樹皮下から出ました汁は程なく其桶に一ぱいになりますので、更に大きな桶に移し、之を燻煙にかけて乾かし、いろ〳〵手を盡して後、初めて彼の彈力ある處の、調寶な護謨を作るのだと云ひます。

## 其六　蜉蝣の露の命

人の命の果敢いことを、朝露夕電だとか、槿花一日だとか、或は又蜉蝣の命と申しまするが、一體この蜉蝣と云ふ蟲ほど、果敢ないものも、世に多くは有りますまい。

夏の日の夕暮方になりまして、小川の畔などを散歩致しますると、非常に威勢よく群飛して居ますが、この虫は今やつと皮を脱いで、水の中から生れて出たばかりです。口はや、完全に出來て居ますが、花の蜜を吸ふのでもなければ、又草の露を吸ふこともなく、只漂々としてほんの二三時間、翅の力の續くかぎり、飛び廻つて歩き、雌雄相求めて交尾を致しますれば、雄は直に其場で死んでしまひ、雌も又水中に卵子を放產して置いて、時を移さず斃れるのです。



思つて見れば、眞に氣の毒な樣にも有りますが、而しての虫の幼虫時代は、實に又長いもので、今年の夏に卵から孚化した虫は、足掛三年目でなくては、翅を生やすことが出來ないです。で一旦翅が生へれば、夫れが即ち最後なので、云はゞ死ぬ前に立派に花が咲くので、蜉蝣は喜んで成佛する

に逢ひありません、かう云ふ哀れな虫ですから、口なとの必要もないものと見えます。

茲に面白いことには、駿河の靜岡邊では、この虫の事を、正雪蜻蛉だと申します、夫れは又如何云ふ譯かと尋ねて見ますると、昔し德川氏の此地に城を構えて居た時、民部少輔由井正雪なるものが、謀反を起して發覺したため、遂に此靜岡で殺されましたが、折角謀つた目的を遂げないで死んだ恨みは、哀れな蜉蝣となつて、毎年今に至るまで出るのだと申します、實に馬鹿々々しい樣なお話ですが、お笑草までに申して置きます。

## 其七　優曇華と甘露

前章に於いて、蚊柱のお話を致しましたが、此處には一寸、緣起の好い優曇華のお話を致しませう、一體優曇華と云ふものは、何でも大昔し天竺にでも御座いましたのか、誰も見た者は御座いませんが、たゞ三千年目毎に、たつた一度眞に立派な花を開きます、で其花が開けば、此上もない幸福ごとが御座いますさうです誰が何時頃から云ひ始めましたか、こんな重寶な花が、時々日本にも咲いたものです、之は或迷信家の處に、一夜に座敷の壁に以つて來て、而も十何本と云ふ優曇華が拔き出したので、主人は又大さう喜んで、近所親類を招いたり、酒を買つて祝ふたり致しましたが、さて幾日待つて見ても、蕾は一向に綻びさうもないので或日わざ〳〵増大鏡で以て、さも大切さうに、その優曇華を檢査して見ますと、花の開かぬのも道理で、蕾の頭にはみんな小さな穴が明いて、中はどうやら殼らしく、翼の向いて來る樣子もありませんで、とゞの詰りは酒など買ふて、祝ふてみた丈が損となつたのです今一つは之も昔しからよく云ふ事で、一家に瑞祥あれば、天は先づ甘露を降らすのです、一體この甘露と云ふものは、實に甘いもので、彼の單舍利別も三舍を避けますが、只惜しいことには、其量が少ないので、何の役にも立ちませんで、徒らに木の葉石の上などに降つてしまふのです。

優曇華と云ふものは、實際はどんな重寶な物ですか、甚だ要領を得ませんが、日本で俗に云ふ優曇華たるや、全く彼の草蜻蛉と云ふ蜻蛉に似た小虫の卵に外ならぬので、又甘露と云ふても、蚜蟲と云ふ小さな蟲の、乳の餘り汁なので、決して感心すべき物ではありませんから、無論之が瑞祥の兆など丶、騷ぐのは、論外の沙汰であります

## 子規子の家庭觀

不遇才人正岡子規の病床日記の内に家庭教育に關する事あり不幸にして家庭の滋味を解するの機會を得ざりし遉の俳句界の英傑が家庭觀又自から別種の味なしとせず曰く

家庭の教育といふ事は、男子にも固より必要であるが、女子には殊に必要である、家庭の教育は知らず〳〵の間に施されるもので、必ずしも親が教へやうと思はない事でも、子供は能く親の眞似をして居る事が多い。そこで家庭の教育は其子供の品性を養ふて行くのに必要であるが、又學校で教へ無いやうな形式的の教育も、極些細な部分は家庭で教へられるのである例をいへば子供が他人に對して、辭誼をするといふ事を初めとして、來客にはどういふ風に應接すべきものであるかといふ事などは、親が教へてやらなくてはならぬ、殊に女子にとつては最も大切なる一家の家庭を司つて、其の上に一家の和樂を失はぬやうにして行く事は、多くは母親の教育如何によりて善くも惡くもなるのである處が今迄の日本の習慣では、一家の和樂といふ事が甚だ乏しい。それは第一に一家の團欒といふ事の缺乏して居るのを見てもわかる。一家の幽欒といふ事は、普通に食事の時を利用してやるのが簡便な法であるが、それさへも行はれて居らぬ家庭が少くは無い。先づ食事に一家の者が一所に集る。食事をしながら雜談もする。食事を終へる。又雜談をする、是だけの事か出來れば家庭は何時迄も平和に、何處迄も愉快であるのである。是を從來の習慣に依つてせぬといふと、其内の者、殊に女の子などは一家團欒して樂むべきものであるといふことを知らずに居るそこで他家へ嫁入して後も、家庭の團欒などいふ事をする事を知ら無いで、殺風景な生活をして居る者がある、甚しいのは男の方で一家の團欒といふ事を、無理に遣らせて見ても、一向に何等の興味を感ぜぬのさへある。斯やうな事では一家の妻たる者の職分を盡したとはいはれ無い。それ故に家庭教育の第一歩として、先づ一家團欒して平和を樂むといふ事位から教へて行くのがよからう。一家團欒といふ事は唯に一家の者が、平和を樂むといふ効能がある許りで無く、家庭の教育も亦この際に多く施されるのである。一家が平和であれば、子供の性質も自ら平和になる。父や母や兄や姉やなどの雜談が有益なものであれば子供は其を聽いてよき感化をうけるのです。

# 英語實習

藤生貞子

## 英和俗語俗諺の類似

(英) Under one's nose.

(和) "鼻尖(サキ)で" (目前にて、などの意に用ゆ)

(英) Birds of a feather flock together.

同一の羽色の鳥は相共に群をなす。(同類相集る)。

(和) "馬は馬づれ、牛は牛連れ"。

(英) Wet as a drowned rat.

(和) "濡れ鼠の如く、びしよぬれ"。

(英) With one foot in the grave.

(和) "片足を棺桶につっこむ" (老衰して死に近し)

(英) To make a mountain of a mole-hill.

鼹鼠(もぐらもち)の起こしたる土を山にする。

(和) "針ほどの事を棒ほどに言ふ"

(英) To blow one's own trumpet.

(和) "法螺を吹く"

(英) To bait with a sprat to catch a mackerel.

(和) "鰕(エビ)で鯛を釣る"

兩者共に少しの物を與へて、大なる利得を占むの意。

(英) When at Rome do as the Romans do.

(和) "郷に入ては郷に從へ"

(英) To carry coals to New Castle.

New Castle は石炭の有名なる產地なり

(和) "遼東の豕" "釋迦に說法"

# 熟語用法練習

## As well as.

He became physically *as well as* metally ill.
あの人は肉体も精神も共にわるく成りました。
*As well as*—幷に、も同じく。

## At all.

I have no money *at all.*
私は少しも金錢を持て居りませぬ。
What is it *at all?*
一体それは何だ？
*At all*—少しも、全く、極めて僅すらも。
（此句は普通に否定文及び疑問文の意味を强ひるために用ゆ）

## At all events.

*At all events,* I will go to school to-morrow.
どうあつても私は明日學校へ參ります。
I shall start in the morning and be back, *at all events,* by sunset.
私は朝に出立いたしまして、兎も角も日の暮れ迄には歸りましやう。
*At all events*—如何なる事ありとも、兎にも角にも、必ず。

## At a loss.

I was *at a loss* what to say.
何を言ふてよいのか私は當惑しました。
*At a loss*—茫然として、まごゝして、苦みて。

## At any rate.

I think I've never seen him; *at any rate* I do not know him.
私はまだ一度もあの人に遇ふた事はないと思ひますが、まア其は兎に角、私はあの人を存じませんのです。
She determined *at any rate* to leave the school.
あの方は兎に角退校しやうと決心しました。
*At any rate*—何は兎もあれ、確に。

## At best.

*At best,* you will find some bad inns in that village.
其村では、稍々うまく行つた處で、わるい宿屋が幾軒かあるばかりです。
*At best*—頂上の處で、如何によく見積つても。

# 英和對譯

(原文は津田梅子女史校)

---

## Beauty and the Beast.

## 美人とけもの

前二號に於て、英文和譯の練習を掲げましたので、讀者もおほかた逐次語譯の法を御了解になつたと存じますから、今回よりは、前の美人のお話の續稿を揭ぐる事に致します。

Scarcely had he done so, when a terrible roaring was heard, and out rushed a fierce, ugly beast wearing a gold crown on his head.

その男が斯く致しましたや否や、恐ろしい吼ゆる聲が聞こえました。そして、頭上に金冠を戴いた猛烈な醜い野獸が一匹突出しました。

"Ungrateful man!" roared the Beast. "You shall die, for in return for my kindness in sheltering you in my castle you steal my roses, which I love better than anything else in the world!"

"恩知らず奴が! 貴樣の命はもうないものだぞ、城内にかくまふてやつた乃公の親切に對する報として、乃公が此世で何よりも可愛がつて居る薔薇を盜みやがつたのだから!" と、けものは、うなりました。

Then the terrified merchant fell on his knees.

そこで商人は驚怖して膝まづきました。

"O forgive me!" said he. "I did not mean to do wrong. One of my daughters wished for a rose, and seeing so many, I thought I did no

其男が申すには、"どうかお許しなすつて。惡事を働かう考は御座りませなんだ。私の娘が一人薔薇を欲しがりました。そして此樣に澤山(あるの)を見ましたので、

harm in picking one."

"Don't make any more excuses, for excuses will not save you. But if one of your daughters will give herself for you, I will spare your life. Go home now, but if none of your daughters will come, return to die."

Then the merchant rode home in great sadness, to say farewell to his children. When they heard his grievous news they were much troubled, but Beauty declared that her father should not die, for she would give herself to the Beast to save him.

So Beauty and her father set off for the castle. They galloped through the forest and over the meadows and at last reached the castle. They were welcomed by the Beast at the gate. Then the father said farewell to his daughter, and rode sadly home.

*(To be continued.)*

一つ摘み取ても構はないと思ひました"。

"言ひ譯をするな、辯解したつて貴樣は助からないのだから、併し若し貴樣の娘のうち一人、お前の身代りになるならば、命は助けてやらう。さァ家へ歸れ、が若し娘がひとりも來なければ戻つて來い、死ぬのだぞ。

そこで商人は悲嘆にくれて家へと馬に乘つて行きました、それは自分の小供等にお別れをする爲でした。小供等は父の悲しい報知を聞きました時、大に心を惱ましました。が美人は自分が、父を助けん爲め、獸に身を任すから、お父さんは死なしては成らぬと言ひました。

それで美人と父とは城をさして出立しました。森を通り牧場を過ぎて馬を急がせ、遂に城に着きました。兩人は門前で獸から歡迎されました。それから父は娘に告別して、悲しみながら家へと乘り行きました。

(つゞく)

# CONVERSATION.　會　話

## 英　文　和　譯

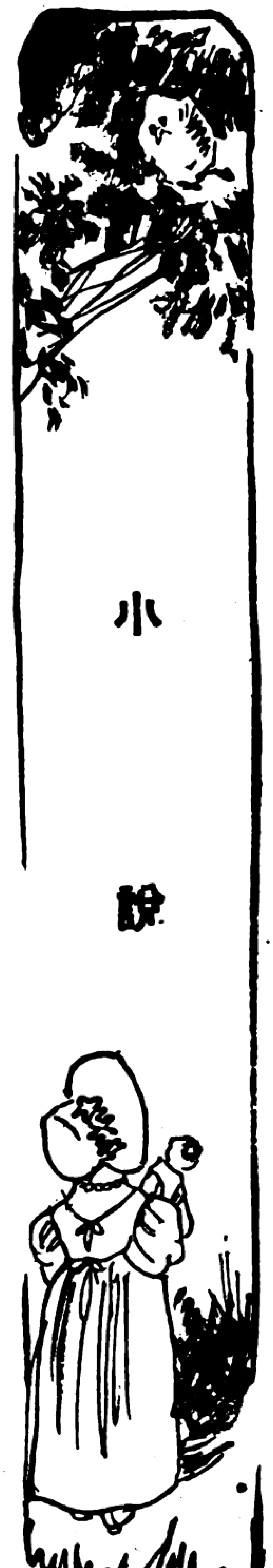
| | |
|---|---|
| Where did you get your pretty dress? | 何所であなたワおきれいな御召物をお求めになりましたか、 |
| I got it from Mitsui store. | 三ッ井から求めました、 |
| Haw much did you pay for it. | とのくらいお拂ひになりましたか、 |
| I have paid five dollars. | 五圓拂ひました、 |
| It was very cheap. | 大ソーおやすーございました事、 |
| I think I will make it for my Summer dress. | 私は一ト へ物に仕立様と思ひます、 |
| I am sure it is becoming for you. | あなたにはたしかにおにあいになりますよ、 |
| What Obi do you think will suit with this dress? | との帶が此の衣物にうつるとおもひなさいますか、 |
| I think that blue crape with black satin one will suit nicely. | あの淺黄ちりめんと黒朱子のがうつりがよかろうと思ひます、 |

# 會話

## 和文英譯

| | |
|---|---|
| 此の夏休みには何所へお出でになりますか、 | Where are you going this Summer vacation? |
| 海岸へ參いるつもりです、 | I am going to the sea shore. |
| お弟トヤお妹さん方もおつれになりますか、 | Are you going to take your younger sisters and brothers? |
| エー皆んな私と一所に參いります、 | O yes, they will all go with me. |
| 私は此のお休には私の田舍へ參いるつもりです、 | I am going to my Country this vacation. |
| いつまでそこにおとゝまりなさいますか、 | How long will you stay there? |
| 一ヶ月計と存じます、 | I think about a mounth. |
| あなたのおばー様がお出をお待ちになつて入らつしやいまショー、 | Your grandmather will be waiting for your Coming. |
| エーモー私の行くのをよろこんで待ち受けて居ります、 | Yes she is looking for me with great pleasure. |

小説



# 撫子の色

徳田秋聲

## 上

手擦際まで伸びた楓の枝が、そよ〳〵と朝間の涼風に戰いで、丸で水のやうに部屋まで流込んでゐる。机に向つて、手紙を書いてゐるのは、此頃文學博士になつた、主の影澤卓爾で、椽側の方へ顔を出して、今朝の新聞を讀んでゐるのは、妻君綾子である。

影澤は漸く三十四、柔和の相で、でツぷり肥つた色の淺黒い男であるが、綾子は其に反して、脫けるほど色の白い、悧巧さうな小柄の女である。

「何だらう、此分ぢや今歳の夏は避暑旅行にも及ぶまい。」

と影澤は手はさら〳〵と捲紙の上へ筆を走らせながら、口を利いた。

「眞箇でございますね。ですけど、なか〳〵這麽事ぢや濟みませんでございますよ。未だ貴方漸う六月でございますもの。」

「其も然うだ。――去年は恁うと、何月だツけね。」

「あら、八月でございますよ。もうお忘れなすつて。」

「然うか。早いものだな。もう一週年になるのか。――新婚旅行は隨分面白かつたが、今歳は行つたところで、あれだけの興味はあるまい。」

「何時だつて貴方、旅行は宜うございますよ。何しろ廣い世界で、自由に游ぶのでございますもの。」

「新婚旅行といへば、あのお前の同窓の……何とか謂つたッけね、沼津で會つた。」

「え、芳山契子さんでございますか。」

「さう／＼、新平民だとか謂つたッけね、あの婦人は未だ縁づかずか。」

「は、未だでございますよ。此間、貴方のお留守のまに、些と見えたのでございますが、其節珍談があるのを、遂貴方にお話し爲ませんでしたね。」と綾子は居住を正して、主が封書を書く手元を熟と見てゐた。

「珍談？、何云ふ……。」と卓爾は手紙を投出して、呼鈴を押すと、綾子は起つて、棚の上の小函から切手を取出して貼つけた。間もなく現れた書生に其を渡して、

「丁度増見さんがお出になつたのでございますよ。そして、色々三人でお話をして居つたのでございますが、何も私、増見さんの御様子が變だつたと思ふのでございますよ。」

「變とは何變なんだ。」

「いゝえね、何だか何時もとは調子が變つて、契子さんへ色々お話を爲かけたり何かなさる様子が、何したつて唯事ぢやないのでございますよ。」

「正可！だけど、増見も内々妻君を捜してゐるさうだから、或は其の契子といふ婦人が御意に入つたかも知れない。」

「乾度然うなんでございますよ。其に違がなければ、私が一つ、橋を渡してあげやうかと思ふのでございますけれど……。」

「其は結構さ。然し、いくら美人でも、新平民と聞いたら、増見だつて引退るだらう。」

「然でせうか。那様のぢや、眞箇頼しくはありませんけれど、あの方のとですから、其邊に御頓着なさるやうな、そんな偏屈でもなからうかと思ひますが……。」

「むゝ、お前はまた、人一倍契子といふ婦人を贔負だ。それは理論上よりすれば、決して嫌ふべき所由はない。

同じ大和民族でゐつてみれば、お互に結婚もすべきだが、詰り人は感情の動物だから、嫌ふべきではない、といふ下から、餘り自ら進んで結婚をしたくもないのが人情だ。……むゝ、それは無論不合理だ。氣毒だ、だけど、何も爲方がないものだね。」

「だから矢張困るんですね。」と綾子は顏を曇らせて、溜息を吐いた。

「學校に居た時分だつて然うだ。誰も契子といふ婦人の宅へ、寄つかなかつた、といふのでも解る。お前が然して、兄弟のやうにして、同情を寄せてゐるのは、實に美しいといはなければならん。」

「では、増見さんにお話申しても、迚も駄目でございませうか。」

「其は何とも謂へんぢやらうぢやないか。若増見に、然云ふ意志があると見たのなら、一應話してみるのも可からう。」

といふ處へ、以前の書生が現れて、

「只今増見さんがお出になりました。」と取次いだ。

二人は顏を見合せて一齊に、「此方へ。」と命じた。

増見といふ文學士は、影澤よりか三ッ位弟でゐらう、中肉中脊の、些と氣取つた紳士で、洋服を着けて、柔い髪を、ぴッたり撫つけてゐる。

「やあ。」

「やあ。」と互に笑顏で迎へ、迎へられる。

「お噂をすれば影とやら、まあ能く被入やいました」と妻君は小褥を進める。

「然でしたか。何ぞ又惡口でせう。奥様はなか／＼お口が惡いから。」と手帕で口髯の邊を拭きながら、にこやかに言つた。

「何有、然うぢやございませんよ。」毎も恁う身奇麗にして被入るから、今に好い御妻君がお出なさるだらうと申してをつたのでございますよ。」

「はゝ、何とか仰い。」

「何だ、段々暑くなつて來たね。」

「然うさ、徐々我々の時代に成つて來るのさ。」

「だけれど、痩せてゐるから、必ずしも暑くないとい

ふ譯でもあるまい。」
「何だか妻君に聞給へ。」
「あら、私は痩せてをりますか知ら。」と妻君は茶を煎れながら、「それよりか増見さん、此間來てをりました芳山さんね。」とじろりと顔を見た。
「芳山？、」と増見は葉捲を啣へて、マッチを擦りながら、恍けた目容をする。
「あら、お恍けなすつちや可厭ですよ。此間の美人のとですよ。」
「はゝ、他ですか。」
「他ですかは、恐入りましたね、何です、好い女でせう。」
「先づ好い女といふんでせうね。けど、何だか淋しい。他は肺病では有ませんか。」
「御笑談 仰ッちや可けませんよ。」
「然うですか。」
「學校でも秀才の方だつたんでございますよ。然う仰れば、何處か少し陰氣ですけれど、物のお出來なさるよと來たら、衆が嫉むくらゐなんでございますよ。」
「然うですか。」と増見は冷淡らしく言つた。
「それで、標致は御覽の通りですし、性質は此上もない素直でございますし、其かと謂つて、一角の見識は丁と持つてをるのですから、妾と人に媚びるやうなとはありませんし、謂はゞ極氣象の勝つた方なんですけれど、平生は那云ふ順しやかな方ですから、誠に瑕のない好い方なんでございますよ。」
「はゝ、増見君が獨身だと思つて、そろ／＼媒介口を利くから、用心したまへ。」
「あら、貴方は混ッ返しては可けませんよ。然う申しても、決して過褒ぢやないんですから。」
「然うですか。」
「それで、財產が、しつかり有るんです、何です増見さん、あの方をお貰ひなすつては？、」
「結構ですな。」と増見は笑談らしく言つて、妙に笑つた。
「いゝえ、笑談ぬきにして、本氣に御相談申したいの

でございますか。」
「君も知つてるだらう。」と增見は影澤の顔を見た。
「むゝ、知らんともない。然し是は僕は與り知らんお話だ。まあ、妻と一つ……。」
「本當に增見さん、一つ御相談をしてみやうぢやありませんか。」
「結構ですな。だけど、其ぢや何だか好いとづくめで。僕なんかには、到底向かないでせう。」
「はゝ、然う謙遜するにも當らんさ。」
「ですけど增見さん、此に一つ、可けないとがあるんでございますよ。」
「はゝ、再縁ですか。」
「いゝえ、其はもう、初婚も初婚、立派な處女なんでございますけれと、少し申難い事情があるんでございますと。」
「豊夫、天刑病ではありますまいな。」
「はゝ、そんな貴方、天刑病なんかを、貴方に御周旋申して可いものですか。……格別病氣ぢやないんでございますけれど、詰り、少々外聞が惡いといふ……それも、單に從來の慣習からのお話で、實は笑ふべきとなんでございますけれと……。」
「それぢや新平民、然うぢやないですか。」
「はゝ、正に其だ。」と主が言つた。
「然うですか。成程然うですか。」と增見は連に頷いた。
「はゝ、然う感心してお了ひなさいますと、誠に申にくいんでございますけれど、貴方は矢張お可厭でせうか。」
「其は誰しも、好い心持は爲ない……」と主が又喙を容れた。
「然うですと、誠に失禮なお話ですけれど、從來の慣習さへ無いものにして了ひますれば、何でもないお話なんでございますから、其で一應申して見るのでございますけれど……。」
「新平民ですか。」
「まあ、大層御失望なすつて……。」

「いや、實は私も、あの婦人のことに就いて、今日は伺つた譯なのです。」

「然うでせう。其ならば尙のこと。」と細君は又笑顔に成つて「詰り地位のない人が、貰ひでもすれば、世間では何とか言ふでせうけれと、増見さんくらゐの學者の方がお貰ひになれば、反つて心ある人は感服しは爲まいかと思ふのでございます、又愚な人は、其ぢや、可厭がるべきものでは無いといふ處へ氣がついて、何のくらゐ後來の好いお手本になるか知れないのでございます。――何だか、生意氣のやうでございますけれど、外の人は卒知らず、芳山さんだけは、私眞箇惜しくもありますし、お可哀さうでもございますし、何



そして、世のなかへ出してあげたいと、いふのが、もう私の願望なのでございます。」
「ひゝ、然ういふ婦人を貰へば、大に感謝するだけでも、家庭が面白く行くかも知れない。少しばかり、外聞の悪いくらゐは、其で十分償が取れるかも知れない。」
「然うですとも。それはもう、屹度幸福なのでございます。寧ろ名誉ある結婚と謂つて可いのでございますもの。」



「其は大に然うかも知れませんな。新平民だつて、其人を取るべきならば、決して排斥すべき道理はないのですから……但世間では然うは思はない、財産に目をつけたのだと、恁う取るのです。其が困るんですな。」
「其點もあるね。」

「ですけれど、言ふ奴には、言はしておけば可いぢやございませんか。」
「然う言つたつて爲様がない。」と主は相變らず、にこにこ笑つてゐる。
「尤も然云ふとは俗論取るにも足らんですが、人は善く誤解され易いものだから。」
「ですけれど、増見さんは、兎に角御本人はお氣に召したのでございませう。」
「は、實際私は貴方にお談をして見やうと思つて、其で伺つた位です。」
「強ひてお勸め申す譯にはまゐりませんけれど、何なら一つお貰ひなすつては何如でございます。」
「然うですな。事に依つたら、御心配を願はうかとも思ふのですが、何うだらうね影澤君。」
「さあ、僕は別に何とも言ふ譯には行かんね。君が、あの婦人を貰へば、非常に幸福だと感ずるなら、貰つて遣りたまへ。吾々仲間ならば、君の爲人は十分知つてをるから、誰も何ともいひはすまい。君さへ可ければ、其で可いので。先方は又、此の結婚のために、非常な幸福を得るのだから、大した功德にもならうといふものだ。其點は妻の言ふ通だ。然し、君の感情、面白くないと思ふのなら、強いて貰ふにも及ぶまい。」
「まあ然うだね。」
「何か、貰つてやると仰いますれば、私は實に、這麼嬉しいとはございませんですけれど……。」と綾子は揉手をしながら、染々言つた。
「貴女が、其ほどまでに仰るなら、一つ話をして戴きませうか。別に心持が惡いといふ譯でもないのみか、實は其ばかりの事で……然し、先方だつて、希望もあるでせうよ。」
「いゝえ。ぢや増見さん、本當に話をしますよ。」
「はあ萬望。」
「は、到頭増見君を説服したのか。」

## 下

「其ぢやお前は、婚禮は爲んといふのかの。」と契子の

父惣兵衛は、今其居間の上座に坐つて、丁と膝に手を支いて、厳に、然し慈愛の籠つた聲で言つた。六十に近い、色白大兵の立派な老紳士で、目には一杯の愛嬌、口元から頬へかけて、ふつくりとした肉締で、全體が何となく悠揚した風采であるが、氣の所爲か、目の底に、一種の光があつて猜疑が多いといふ、氣味も見える。傍に坐つたのは、妻君で、年は五十四五にもならうか、是以て品格ある好夫人である。奚子は水際立つた高島田に薄化粧、縮の中形を着て、片手を支へながら、伏目になつてゐるが、頸脚から肩つき、通つた鼻に、片の好い目、口が少し締を缺いてゐて、謂はゞ生動の氣味の乏しい、稍ぼんやりした顔であるが、先凄艶な容貌であらう。

「然云ふ譯ぢやございませんけれど、私にも少し考もございますから。」と奚子は居住を正した。

「其考とは何云ふとか、阿父さんに言つて見るが可い。え。決して親に遠慮は入らん。——私の目で見たところでは、他ならば先將來有望な實業家と睨んだのだ。無論財産があるといふ譯ではないが、腕は確なものではあるし、標緻も十人並よりは少しは好い方だあのくらゐの夫を持てば、先お前も公然に世の中へ顔が出せるといふものだ。私は然思つて、必ずお前が二つ返辭で承知をしてくれるとと思つてゐたに、可厭だといふところを見ると、矢張相手が不足と見えるな。」

「格別然うといふ譯ぢやないのでございますけれど……。」と忸怩する。

「まあ、お前にも色々望もあるだらうけれど、餘り高望をしては、反つて宜くないから、大概なら考直して見ては何だい。其とも何ぞ又、是非可厭だといふ譯があるのなら、其はまあ、斷りもしませうけれど」母親が口を添えた。

「……ですから、私御婚禮なんか爲ないと、然う申したのでございます。」とほろりとして、又伏目に成る。

「其ぢや頓と譯が解らん。お前一人には解つてるやうかなれど、私共には薩張解らん。」

「解らなくとも、可いんでございます。」と低聲の顫へ

て言つた。
「はう、困るのう。」と夫婦が目を見合せる。良久あつて、勢子は手巾で目角を拭つて、漸く顔を擧げた。
「濟みませんが、左に右一旦お斷りなすつて下さいまし。」と明斷言つた。夫婦は又顔を見合せたが、惣兵衛が太息を吐くと同時に、母親は一ト膝前めて、
「其はまあ、斷りもしませうけれど、唯斷れと言つたつて、折角此まで進んだお話を、然う手輕に斷る譯にも行かないのだからね。」
「ですから、私先方の心が面白くわりませんから……」
「先方の心が面白くない？とは何云ふ譯だ。」
「詰り私を慾しいといふのは、第二段で、持參金に目を掛けるのでございますもの。」と言斷つた。父と母とは互に驚いて、少時は口を利かなかつたが、父は例の負けず嫌ひの、唇を顫して、
「そ、それは何れ慾を知らん人間はない。然云ふことは格別氣にすることでもないではないかのう。」
「い丶え、財産が欲しさに結婚をしやうといふくらゐの方なら、大概解つてをるのでございますもの。其では誠に氣細うございますから、寧そお斷りをして戴いた方が、私は心持が可うございます。」
「い丶、其も一應は尤だ。決してお前の考が曲つてをるとは謂はんが、然いつてをつた日には、可惜お前は埋木だ。本來を謂へば、縹緻から教育、先づ甚麼高家へ片附けても、可恥くはない意だが、悲しいことには、然う世間一般の相場で通らんのが、何よりの瑕だ。其處を考へたら、其位のことは、まあ我慢をして、設んば少しばかり了簡がさもしいと思つても、貰つてくれるだけが、有難いと思つて、辛棒せんけりやならん。恁はいふもの丶、先方だつて、一本立の壯佼だ、腕一つで隨分出世も出來やうといふ男だ。決して、財産に目が眩れた譯でないのは、私が保證をする……。」
「それは然うですとも。お前の勝氣から、然うお思ひのも尤だけれど、其迄に氣を廻さなくとも可いではないか。だから、今度のお話は矢張、御父さんのお心任せにした方が可からうかと思ひますが……。」

「いゝえ阿母さん、然う仰つても可けませんよ。縁づいてから、莫迦な目に逢ふのは、知れ切つたことなのでございますもの。那樣恥を掻くよりか、矢張此は斷つて戴いた方が可いのでございます。」と馨子の意は動くべくも見えなかつた。

「困りますね。」と母は溜息を吐いた。

「可厭だといふのを、私も強いて遣りたくはない。其ぢやまあ是非がない、斷ることにするが、さて何もな……。」と父は思案に詰つて、今更自分の運命を悲むのであつた。母親も、同じ念に胸を塞らせながら、兎角の辭も出なかつた。馨子が是までに、同窓から蒙つた侮辱は、彼女が屢學校を休さうと言出したのでも解るので、其が此頃學問を積み、年を取るに從つて、愈よ妙な一種の厭世觀を懷いて、樂しむべき運命をも自ら拒否するやうにはなつた。學問をさせたのが、反つて身の毒になつたのではないか、とも兩親は思ふのであつたが、然し馨子は偏したなりにも、一箇の定見を持つてゐて、肯て聊かも恟れぬのであつた。——三人相對して、暫く辭もなかつたが、狭き己が天地にかくも跼つてをらねばならぬ、幸の薄さを嘆く心は同じで、父は俯き、母は涙を拭ひ、そして綾子は齒を喰縛つてゐた。

良久あつて、人の跫音と思ふと、女中が怵々入口に跪坐つて、馨子が此世の一人の友なる影澤夫人綾子の來訪を告げた。

「お通し申しておくれ。」と母親は勢よく言つた。遽に座が氣色だつて、馨子は待兼ぬるかの如く、衝と起つて、出迎へる。

綾子が常から、馨子に一方ならぬ同情を灑ぐのは、雙親の染々嬉しく思ふところで、其來訪に接する毎に、有らん限の待遇に心を碎くと同時に、孤獨寂莫の情に堪へない馨子は、何如なる悲哀に沈んだ時でも、一たび其の活々した花顔、爽な輕い話の調子に接しては、忽ち限なき慰藉に浴する心地して、胸のすか〱しくなるのを、覺えぬことではないのである。若此女なかりせば、馨子は疾に學校をも退いたであらう。若綾子

が優しい同情なかりせば、敬子は此世に在るべき、一條の希望の光をだに有たなかつたであらう。三人が、ちやほや爲るうちに、綾子は手輕に挨拶を濟して、一つ二つ世間話の後から、

「何だか餘り出突でございますけれとお昵しい間ですから、早速申しますが、敬子さんを是非お貰ひ申したいといふ方があるのでございますが……。」

「へえ、其は、まあ。」と母は嬉しさうに、さて掛念さうに綾子の顔を戍つた。

「此方にも、色々お望もございませうけれど、此ならば先づ、御異存はございますまいかと、私然う思ひましたから、早速御相談にまゐつたので御座います　が……。」

「まあ然うでしたか。毎々どうも御心切さまに、お禮の申しやうも御座いません。」

「何致しまして。懇して、親しくお交際を願つてをるのでございますもの、お禮では反つて痛み入ります。實は先方は、文學士なので、影澤のお友達なのでございますが、此間敬子さんに、お目にかゝつてから、是非私に話をしてくれろと、懇いふんでございます。御本人同士もう、お會ひになつてをるのでございますから、お氣に召すか、召さないか、其處は大概敬子さんに、お考が着かるかと思ふのでございますが……。」

と敬子の顔を見る。

「はゝ、文學士、それは大したものだ。──然し此方の事情はお話し下さいませんでせうな。敬子の身の上を……。」

「いゝえ、失禮でございますけれど、其は丁と打明けたところを、お話をしたのでございます。」

「それでも欲しいと仰るので……。」と父親は思はず、相好を崩す。

「まあ然うですか。何といふ有難いお思召でせう。」と母親も聲が曇まんばかりの、恭悅である。

「敬子さん、貴女何如でございます。此間の、あの方は？」

「はい。」と敬子は胸を轟せながら、面を赧めた。

「が、無論持參金や何かのとも、詳細お話し下すつたでせうな。」と父親。
「いゝえ、其は反つて迷惑だから、單に慧子さんを、申受ければ、其で可いと仰るので。」
「然うですかい。」と父親は感嘆の聲。
「まあ、そんな結構な口が、又と有る譯のものぢや御座いません。」
「有繁は學者だ。見わけたものだ。」と父親は嬉し涙に目を潤した。
「慧や、お前默つてゐては、綾子さんに濟まないではないか。」
「はあ。」と額の汗を拭つて、
「綾子さん、何も御心配で、相濟みません。」
「あら慧子さん、……お氣に召すやら、召さないやら、解りもしないのに。」と綾子は世辭笑をした。
「何有貴女、貴女のお見立でございますもの、慧の氣に入らない譯はございません。恁う申しちや失禮に當りますけれど、氣心が、もう、しつくり合つてゐるのでございますもの、貴女のお見込は、慧の見込も同じでございます。」
「まあ！其なら結構でございますけれど、此ばつかりは、又然うばかりも言へませんから、ねえ慧子さん。ですから、遠慮なく仰つて戴いた方が可いのでございます。然うしないと、反つてお互に、氣まづい念をしなくちやならないのでございますから。」
「いや御尤です。實は今も今とて、矢張緣談の事でな、何か意見が衝突しまして……。」
「へえ、然うですか。」
「慧の言分では、財產が欲しさの申込だと恁う言ふので。其も一ト理窟ないでもないのでして、大に弱つてをつた處でしたが……無論此は文學士でもなければ、格別好い身分でもない。然云ふお話があれば、誠に望んでも無い好緣で、是といふのも、皆貴女の御親切で、いや早や、お禮の申しやうもない次第。定めし慧にも不足はあるまい。」
「慧子さん何如です。」

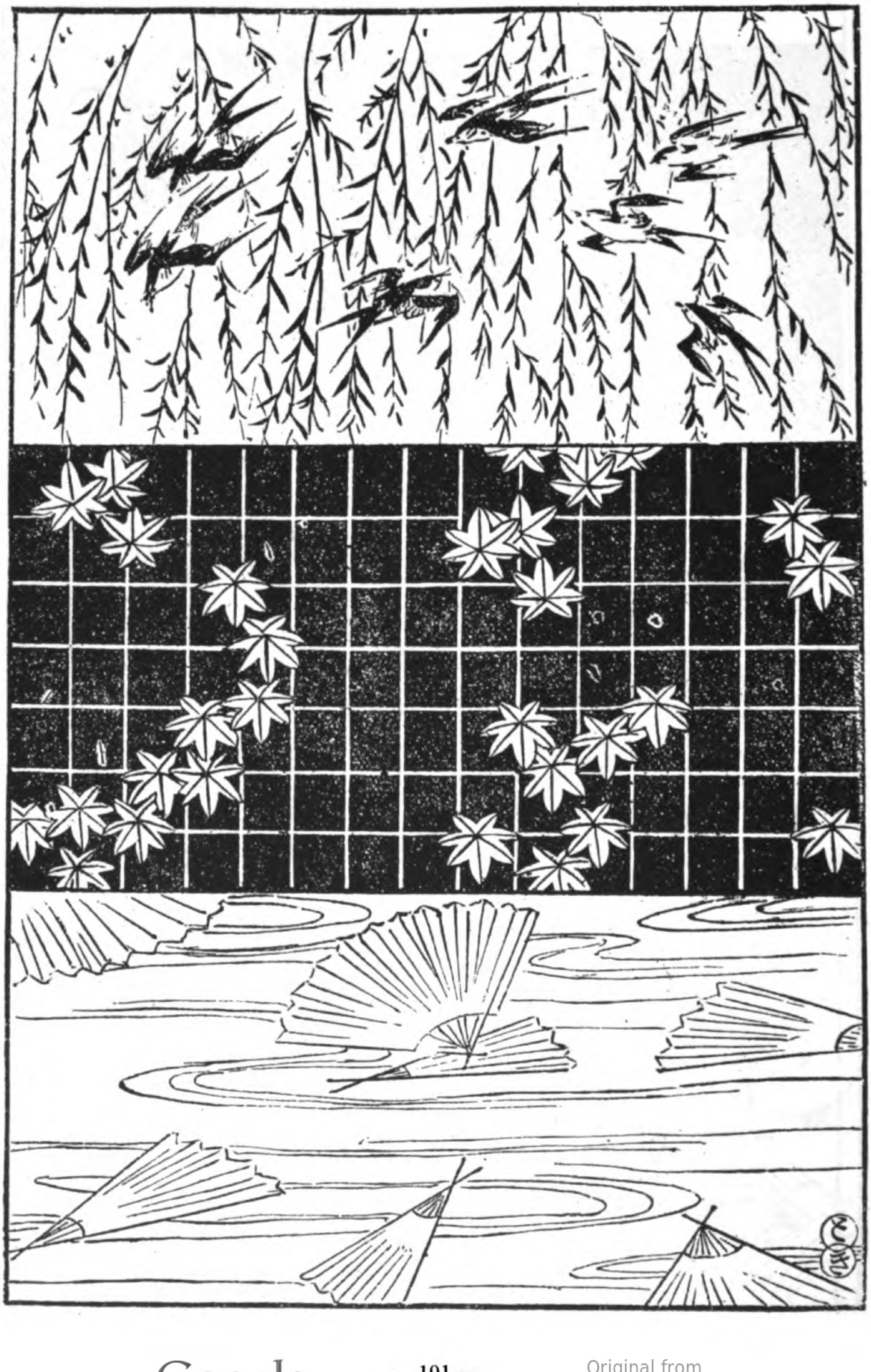
「はあ、私は格別係といふ考もないのでございます
から。」と極り恥い體で、伏目勝に言つた。
「それぢや、御滿足なのでございますからね。私も惡
くはないと思ふのでございます。何なら一つお取決め
になつては何如でございます。」と綾子は急に思出した
やうに、懷から一枚の寫眞を取出して、
「丁と持つて來ながら、お辨の方へばかり氣を取られ
て、はゝ。」と二人の前へ出した。父親は、些と戴いた。
「ほう、立派な男だ。」
「まあ、お立派ですこと。」
「何でございませう、善は急げですから、契子さんさ
へ、御不足がなければ、早速……。」
「萬望此上とも御盡力を持ちまして。」
「では、お辭に甘へまして。」
其處で、増見の身の上について、綾子は少しく辨じて、
略話を取決めることにした。

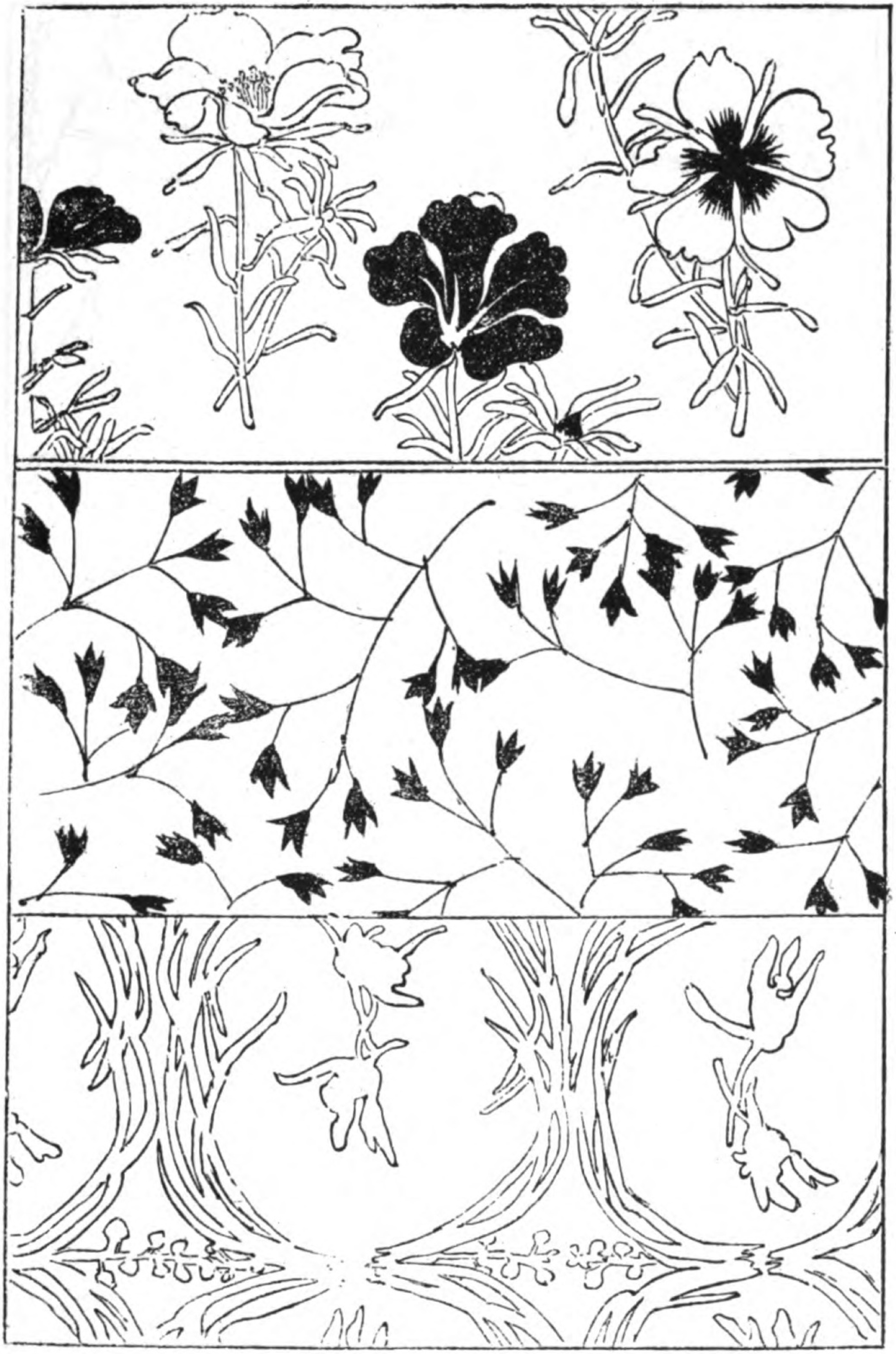
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其から十日ばかり、契子親子は掛念のうちに、望を屬
してゐた。
或夕暮のことで、契子は妹の廣江子と、庭の撫子に水
をやつてゐると、一封の郵便が舞込んだ。其は綾子の
手紙で、何れ不日伺つた上、お詫をするが、増見の緣
談は、其母親が何しても承知をせぬので、誠に殘念で
はあるが、一先お斷りをするといふ、先方の言である
とのこと。
契子の失望は何如ばかりであつたらう。彼女は今日が
日まで、望をかけた愚さを愧ると同時に、己が庭に、
濃く咲ける撫子の花の色の、世の花に變らぬを見るに
つけても、いとゞ身の果敢なさを、今も身に染みて怨
まざるを得ぬのあつた。（完）

図案







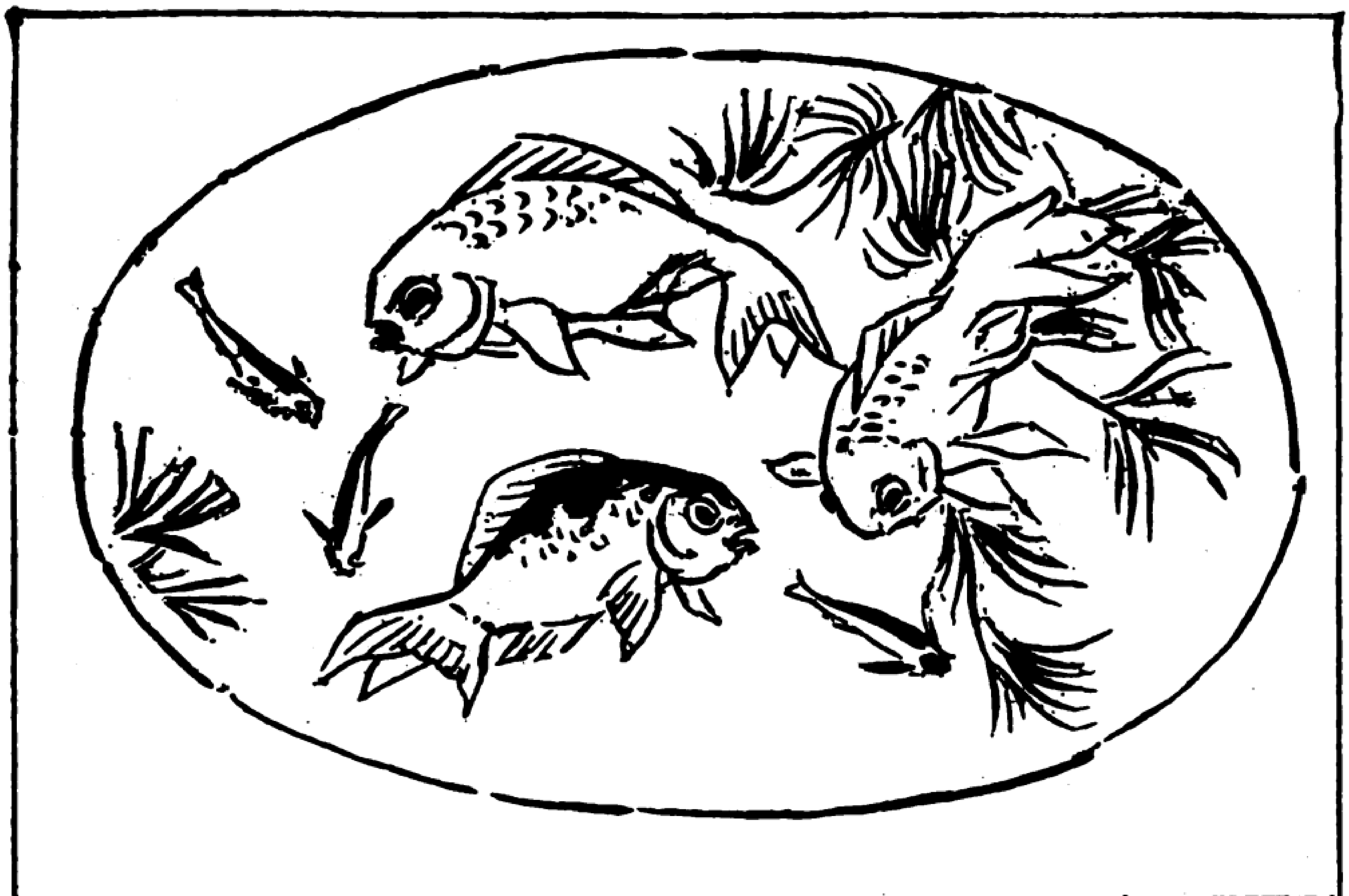
圖案

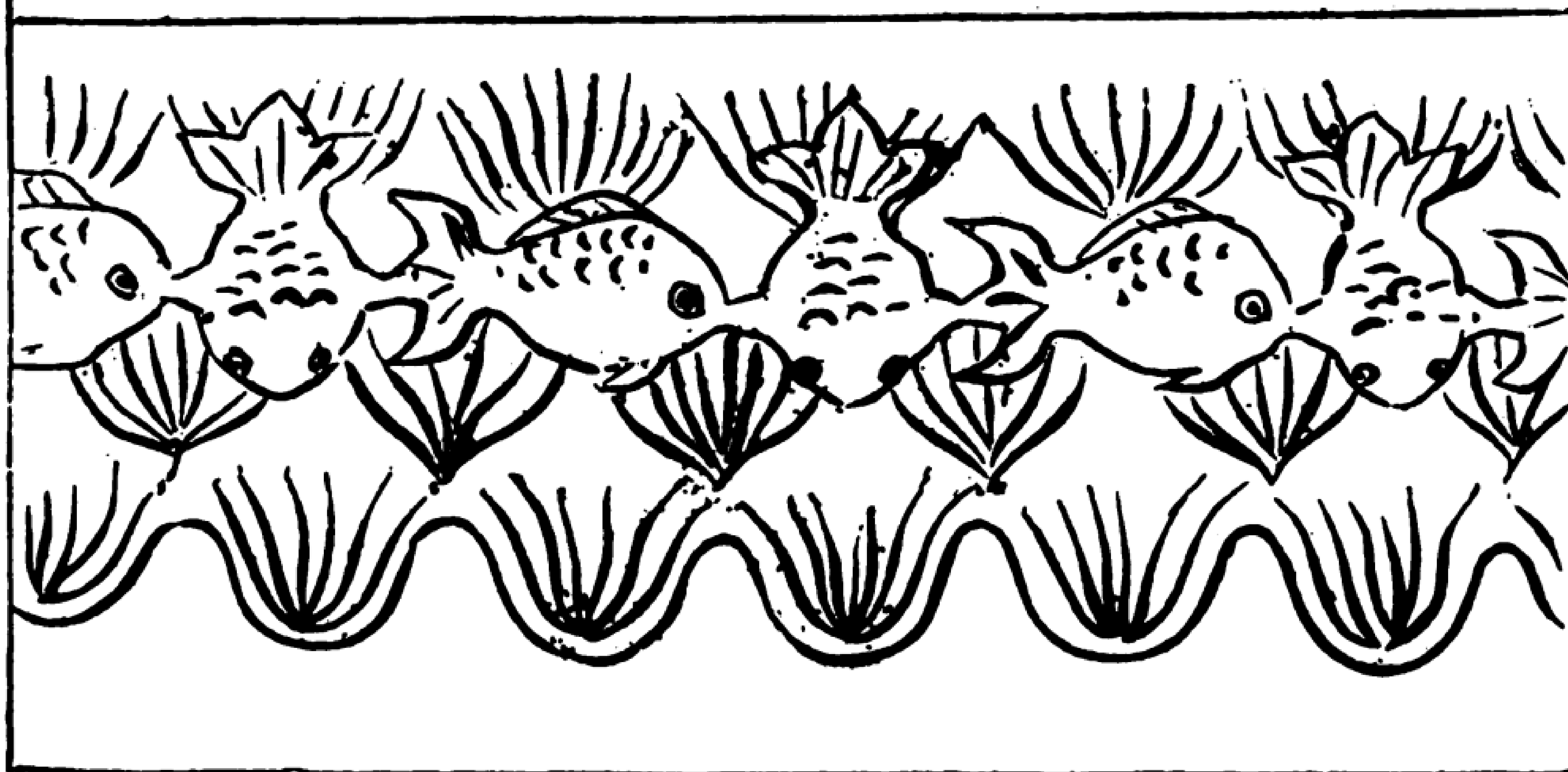


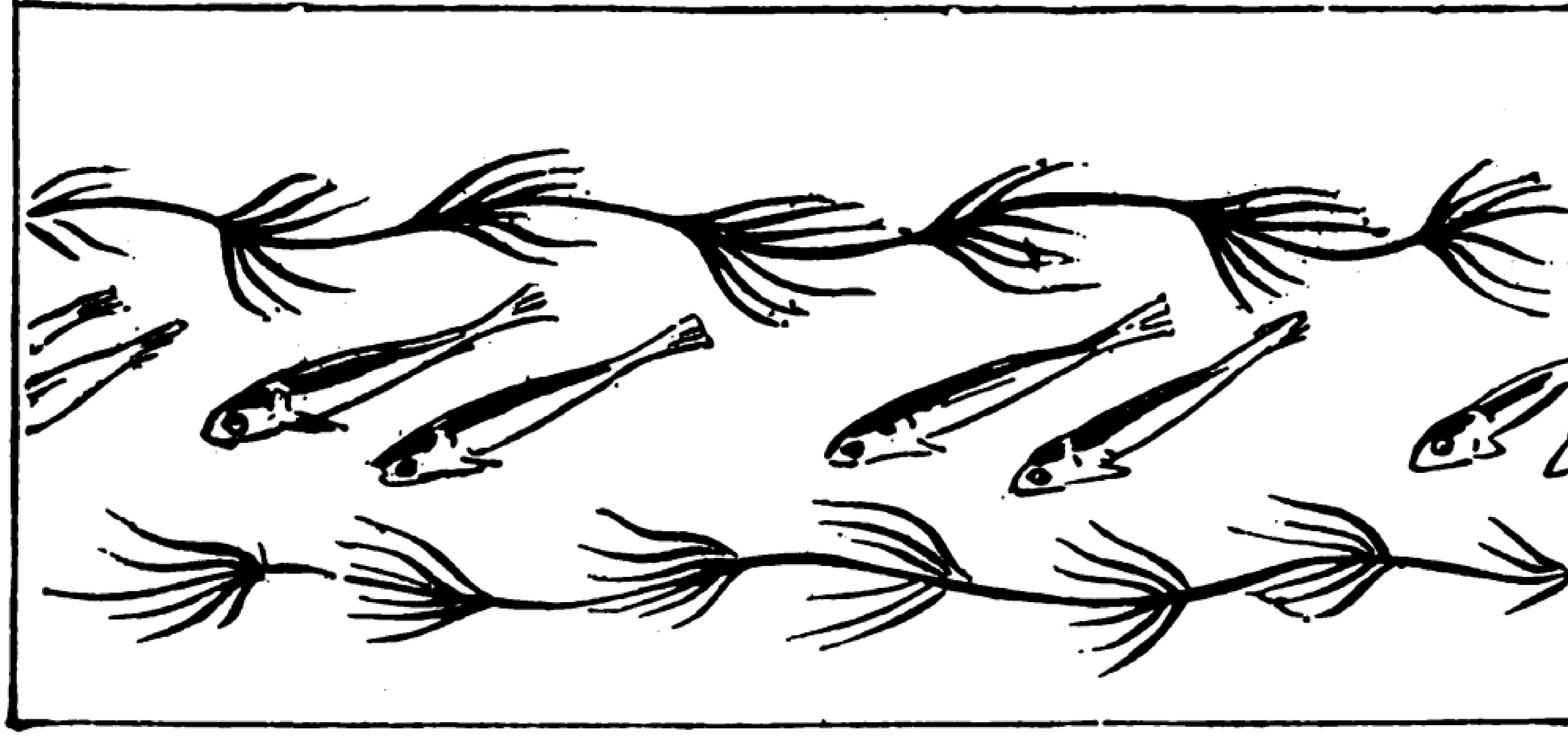












社交

# 貴婦人の嗜好

中村鈴

婦人社會の立て者を紹介致すとは、近頃の流行の一つのやうに見受けます、其處で私如きが、雜魚のとゝ交り致すのは、誠に耻入つた次第で御坐いますが、貴婦人の御嗜好など承るのは、私共に取つて有益な事が多いやうで御坐いますから、厚顔しくも諸方へ推參致し、御座敷の飾付、御服裝の縞柄色合、御化粧、飲食物、演劇、音樂、小說、新聞雜誌、詩歌俳諧、書畫骨董、手藝、旅行、飼養動物、草木花卉などの御話を伺ひ、續々紹介致す筈で御坐います、目的は趣味の紹介が重もで御坐いますが、理想や意見を紹介致すとも御座いましやう、

## 濱尾作子夫人

芝生の庭に槲幾株、江戸川町一帶を眼下に眺め得らるる學者好のする家屋、客間の屏風、懸軸、扁額などは墨書多く、書棚に「國華」など積み重ねられ、床の間に茄子形の香爐を据ゑられてあり、夫人はセルの單衣に藍鼠と黑の緞子の晝夜帶小さく結んで居られました、椅子に掛けられ一應の挨拶濟みて――

▲小說

毎日子供にばかりかまけて居まして、新聞を見ます位がヤットで御坐います、小說は好きでも御坐いませず娘達に見せて善くない物は置かれませんから……

▲講談

婦人に關する雜誌は方々から呉れますので、夜分などこれを見ますのを樂みに致して居ります、近頃の嫌な小說より寧そ新聞の續物にある昔の講談がマシかと思ひますよ、彼れは馬鹿げて居るやうですが、貞女とか孝子とかシッカリした人物がよく判つて宜う御坐いま

す、娘共に見せる本にも困りますネエ、理化學に據つた物ばかりでも面白がりませんし、滅多な小説も見せられません……

あの「そんな」なぞは上品な雜誌で御坐いますネエ、過日敎育會で羽仁なんとか云ふ方が著した「家庭小話」を貰ひましたが、われは善い本で御坐いますネ、

▲音樂

娘共は此頃ピアノを致しますが、私は矢張り元から琴が好きで、折々自分だけの慰みに……ハイ皆山勢さんに御厄介になりました、此頃は琴唄も八釜しくなりまして、山勢などでも江ノ島の貝盡しや越後獅子なぞ悉皆改良致しました、併し未だ如何かすると矢張り耳慣れた元の儘のが宜いつて師匠に小言なんぞいふ方があるさうですよ、何に致せ改良は肝心で御坐いますネエ、三味線も琴に合せるだけは品が善う御坐いますが市中で致します常盤津とか淸元とかは聽いて居ても冷汗が出ますと……

▲服裝

私は元から構はない方で……山脇さんの奧さんは御見立が御上手で、手藝會などへ入らしつても、沈厚で調和の好いのを御撰びになりますよ、

袴は衣服改良會其他の會へ出ます時には着けますが、羽織を着ない時に背後の格好が變でいけません、それにチョット生徒と同じに見えて困りますよ、マサカ生徒の樣にカシミアでも可笑しう御坐いますし……、先達て鼠の綾琥珀で拵らえましたが、チョイと宜しい樣です、

▲お化粧

束髮は最早疾うから……イヽエ獨りで結びますから世話は御坐いません、あの島田といふ頭も厄介で御坐いますが、高髷の格好は好いもので、鼈甲も髮の配合には一番ですネエ、

白粉で御坐いますか、大分此節やかましう御坐いますが、先日本人は止す譯に參りますまい、白襟で黒い顏でもオホヽヽヽ、

衞生會の弘田長さんなんぞ仰しやいますに、藝人のや

うに全身へ塗らなければ害は無い、顔と襟首位で鉛毒に罹る人は滅多に無いから大丈夫ですつて、娘共は蝴蝶園の白粉を用つて居ります。

▲旅行

旅行は大好で御坐います、毎年湯治や海水浴に出掛けます、昨年皮膚病の爲に大磯で暫く海へ入りましたらスツカリ治りました、其前は能く伊香保へ參りました、今年は初めて大阪から京都を見



濱尾夫人

物しましたが、京都の景色は實に好う御坐います、併し東京者の故か矢張り當地が……マア本當の御隠居さんになるなら京都ですが、若い人は永く居ると陰氣になりましやうよハイ神戸の觀艦式へも廻りました、其時小蒸汽に乗りましたが少しも船暈しませんし、箱根の湖水の舟でも何ともありませんでしたが、唯だ大磯で漁船に乗りました時は、實に酷

い目に逢ひました、

▲演　劇

芝居は好きませんが、老人が御坐います時分、伴を致して能く忠臣藏など見たとが御坐います、先達て慈善演劇で初めて壯士芝居を見ましたよ……左様で御坐いますネエ、なんですか見慣れない故か、鳴物は入りませんし、間が拔けて居る所が御坐います、成程江戸城明渡はシンミリとして居ましたが、東帶なんぞ並の俳優の方が着付がシックリ致して居るかと思ひます、

▲和　歌、家政學

和歌も少しは致しますが、他に是ぞと申す嗜好も御坐いません、よく女子大學で生徒を十二三人位よこして學校外の家政學を教えて遣つて與れなんと申しますが却々其樣な學問をなさつた方に教えるなんて……如何かすると卒業後は如何いふ方針にして好いか聞かして與れつて言ふ事が御坐いますが、これには困ります、針仕事は極好でよい物だけは私が致します、ほんに此貴い日をつまらなく暮しますのを惜しいとは思つて居りますよ、いつも鳩山さんの奥さんと、私達も漸々姑の株になるのだから、家内で下らないとばかり言つて迷惑がられない様に、年寄連の團體を作つて面白い樂みを始めたいなんツて能く御話し致します、御酒は主人も私もちつとも飲きません、肉類なら主人も私も好きで何でも食きます、

御話は先づ右の通り、お嫌ひで餘りなされない寫眞を漸く搜して戴き、高野槇の立並んだ玄關先から御別れ致しましたが、御主人前文部大臣は後園の畑を耕して居られました、

## 鳩山春子夫人

小石川音羽町七丁目に大きな標札を掲げられたは、有名なる鳩山和夫氏の門でありますが、門を入つて坂道を迂廻すると二回、廣庭に出て軈て玄關へ案内を乞ふので、玉突場を通り應接間に待つのです、

夫人は藍縞の單衣に博多の帯を結び、三日月形の銀製

襟留が目立つ外は、一躰にアッサリした姿で、應接間の椅子に倚り快く迎へられ、スラ／＼とした明かな愛嬌のある調子で左の通り話されました、

▲和洋折衷

衣服や食物は座敷を御覧になると判りますが、和洋混淆で適意にして居ります、冬分は家の内でも袴を穿いて居りますが、此頃は斯う云ふ風が勝手なのです、丸髷は禿げていけませんから疾うから結ひません、

▲間食は好まず

食物も旨くつて滋養になる品なら何でも、魚も新しければ随分用ゐますが、間の菓子類は嫌ひの方です、但子供等に行儀よく食べさせる事は、和夫が西洋で觀て來た通りにして仕込みました、

▲演劇

巴里や伯林其他方々で芝居も澤山見て來ましたが、歸つてから忙しくつて一向行きません、慈善芝居などへ母（和夫氏母堂）が參る時には、最早足元が危いと思ひまして附いて參る位で、別に自ら好んで見るとはありません、

▲小説

我邦の小説は嫌ひではありませんが、暇がなくつて……それに新聞でも必要の出來事を見て、小説は一番あとですから、善く覺えても居りません、又明日つゞきが見たいとも思ひません、雜誌も子供達（十九歳と十八歳の二令息）の話相手に必要の物だけは眼を通して置きます、

▲畫

畫は學校時分（女子師範校）、點が好かつたんで、洋畫を始めて見しましたが、二日ばかりでコリ／＼しました面倒臭くつて

▲座敷の飾付

ナアに座敷の飾付に心配りも何もありアしません、皆さんから御貰ひした品を只列べて置くばかりで、ゴッタクサですよ、

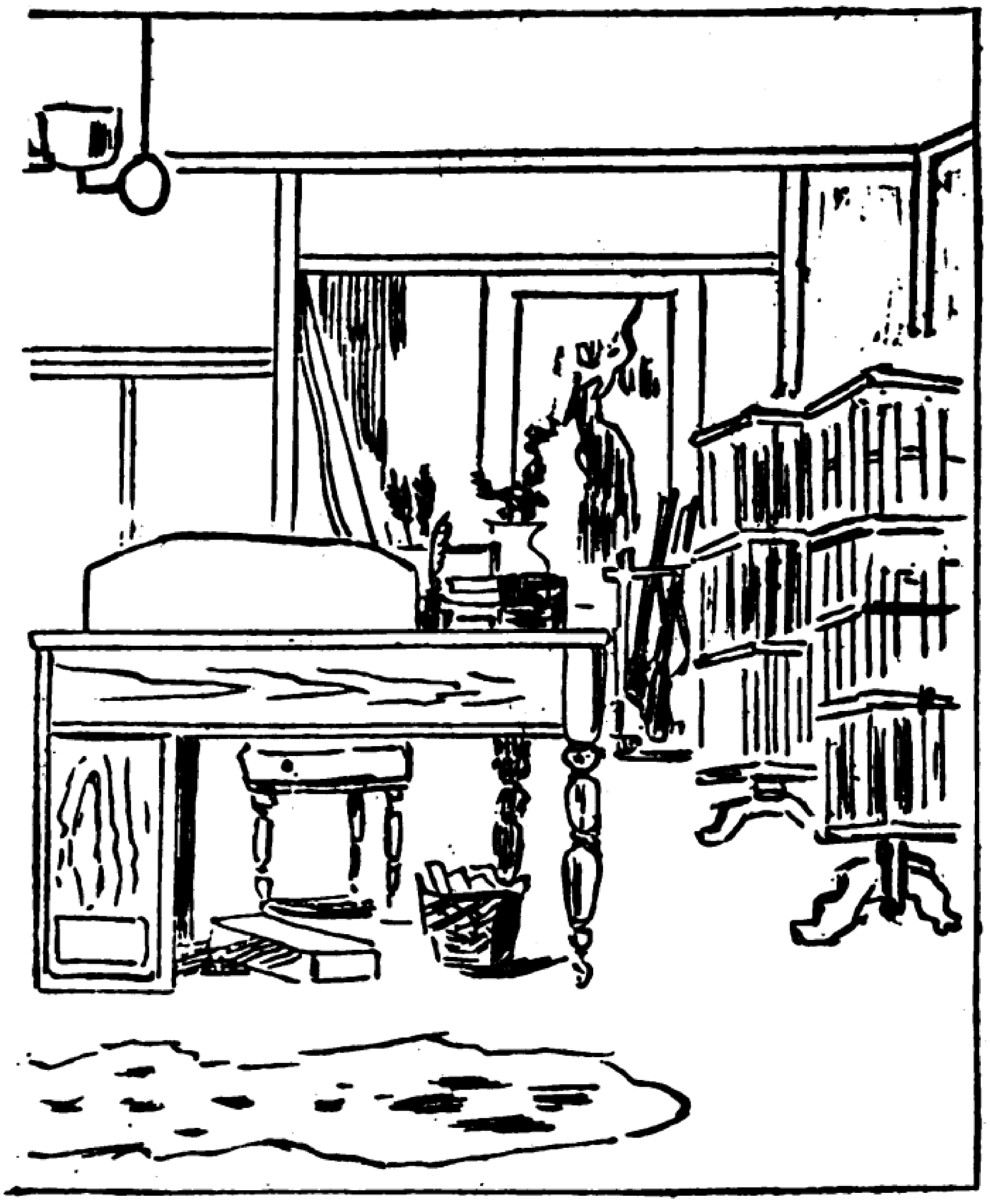
▲碁、玉突、ピアノ

和夫も子供達も、日曜は家で遊ぶのを樂みにして居ま

すから、一人で散歩と云ふ次第にも行きませんし、別に出掛けて見たいとも思ひません、其代り玉突もします、ピアノも彈きます、碁も遣ります、出來るだけの遊びをして皆を樂ませるのです、二兒ともピアノが名人ですが、小さい時からピアノをたゝいて守をした故かと思ひます、

▲父親の同情

子供等も仕合に私の望み通り育ちますから、此頃では世話も燒けません、エヽ朝の復習ですか、一時は隨分私が睡眠不足で痩せるほどに骨を折つて仕込みましたが、漸々考へまして、男の子は十八九にもなると母親に話しても判らない事があるだらうと存じ、父親に同情して貰つて慰められたら厭世なんて云ふ心得違ひが起るまいと思ひ、和夫に賴んで勉めて親しくして貰ひます、それで今では父親と非常に親密になつて、和夫が暇な折は、銃獵やら畑いぢりやら大弓やら、いつも父子三人一つ處なんです、



令息の

▲會話の練習

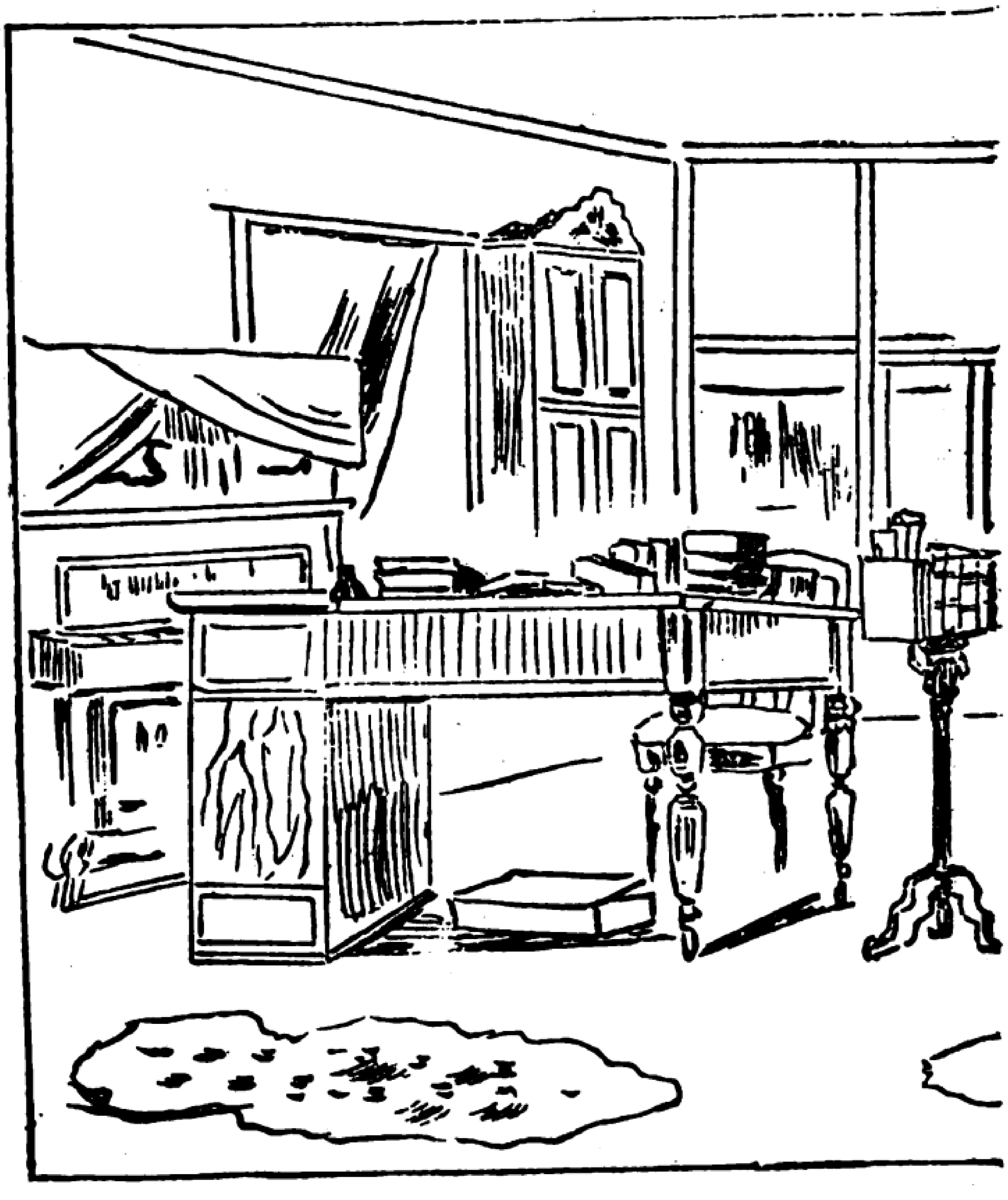
會話が達者になるやうに思つて、長男は米國のミス、アースボンとミストル、ケートに、次男は英國のミス、プリングルとミストル、チヤムレーに賴んで日曜毎に會堂へ遣りますが、兩兒とも日曜に出るのを父に氣の毒がり折角日曜だけ一處に居られるのに、兩人で留

守にして嘸淋しからうと言つて居ります、但教師にひとく可愛がられる故か、漸々深入しさうで心配です、けれども他の事でないから放任つて置きます、

此時一客の客間に入り來るわりければ、夫人は『オヤ／＼お客さんだ、コチラへ入つしやいナ』とて、記者の手帳風呂敷包など取纏めて、令息の部屋へ行かれました、

▲兩令息の小遣錢

小遣錢は大抵定めて遣つて置きますが、毎度金の責い事と父の骨折とを言ひ聞かせて遣りますから、却々皆さんの樣に遣ひません、併し守錢奴にはなりません子エ、節儉して貯めては私共を喜ばせる品物を買ひます、過日もピアノを五百圓で買ひました、施與などは何時も先驅で、青森の義捐なんか却て彼達に催促された位なんです、



勉强室

▲酒と煙草

酒と煙草は嚴しく戒めて居ます、阿父さんは酒も煙草も上るが、てれは戒める時代が過ぎたのだから汝達とは違う、又私も煙草は吸ふが、若し私の吸ふ爲めに汝達の邪魔になるなら今日から止めるが……と言ひ聞かせました、所が其樣な御心配なさらずとも宜しいつて、惡い癖だけは快く愼んで呉れます

▲接吻

日本では情を表すのを餘り無理に抑へると云ふ風がありますが、私は今でも子供に接吻もします、併しイタラ愛しても子供を買ひ被つては可けません、野蠻な者と思つて導かなければ、

夫人は客を窮窟がらせたりキマリ惡がらせたりせらるる事なく、絶えず快活に話し掛けられましたが、令息を導かるゝ御注意は最も熱心に話されました、令息の部屋は寫生の通りでありますが、御




鳩山夫人と令息

は他に御主人が発狀を手にしたる兩令息の間に立ち、肩に手を掛けて左も睦しげな寫眞や、令息が手づから掘つて各自の貯金でタヽキにさせた瓢形の池を見せられました、欄間へ飼鳩が飛び去り飛び來つてポー〳〵啼くなとは、鳩山さんに相應しい事と思ひました、

# 家庭日記

信州 成澤堯子

六月八日空晴れて風もない、例刻起床、今日は亡き祖母君の命日である、佛壇淸め、花を挿け、香を燃き、七時頃食終る午前袴裁縫、大路小路桑の運送で滿たされて居る、靈飼今が盛りとうぞ滿足の結果を得たいものであるよ、友から手紙がきた一節に「大食益々肥る許り」と大町先生の衛生美人を思ひ出して獨り笑を止め得なかつた午後萩の餅作り佛に供へ一同御相伴あゝ祖母君の世にいましてこれを見られたらどの樣に喜ばれるであろうあと片付終へて裏庭でテニスを初めた敵は弟二人此方は我と妹遂に彼の勝となつたゆゑ彼等意氣甚だ高く喜び勇むで居る夜伯母上來訪墓參を共にして十時臥した來訪五 往訪一着信十二發信八

献立

豆腐汁 かきたまご わか芽味噌汁
朝 さやゑんどう 晝 薄くず御生姜 夕 菊 豆腐
香の物 香の物 土佐醬油

五月九日父上の咳拂に目が覺めた如何に完全な善良な器機や時計でもこれには及ぶまいよ丁度五時を打つた涼しいがきのふに劣らず好天氣である厨の手傳坐敷の掃除終り朝食七時に濟むだ



午前ミシン臺に懸るたやすそうに動かして居る人のは度度見たが手掛たは今日始めて呼吸の容易でない事けれ共能く動くと面白く心浮立つ樣である自由に動く樣用ひられたる樣になつたらどの樣にか嬉しく有益であろう午後弟の學友五六名集まつた能く飲み能く談じ快活に愉快に聞く我さいも力を入れて居る學校の話運動の事折には外國語も聞ねるあゝあれが自由に解き得られたらと思つた夕飯を出した今夕のいへより調理にぎやかなのはこれゆゑである能く平げられる事驚く許であるが折角用意したもの手もつけないで歸られる人もあるが實に心地惡しい喜むで賞め食される今宵は誠に心地よかつた山椒の味噌漬を出したら存外好味であつた一年も二年も經てからでなければ好惡が知れないから漬物程心配の物はないであろう小遣帳附けて十時臥した來訪十往訪〇着信六發信八

朝 晝 夕
鯛味噌漬 ハムエックス チムレツ
香の物 香の物 鯛わらび にしめ
ビーフテッキー
インゲン豆
とうふ

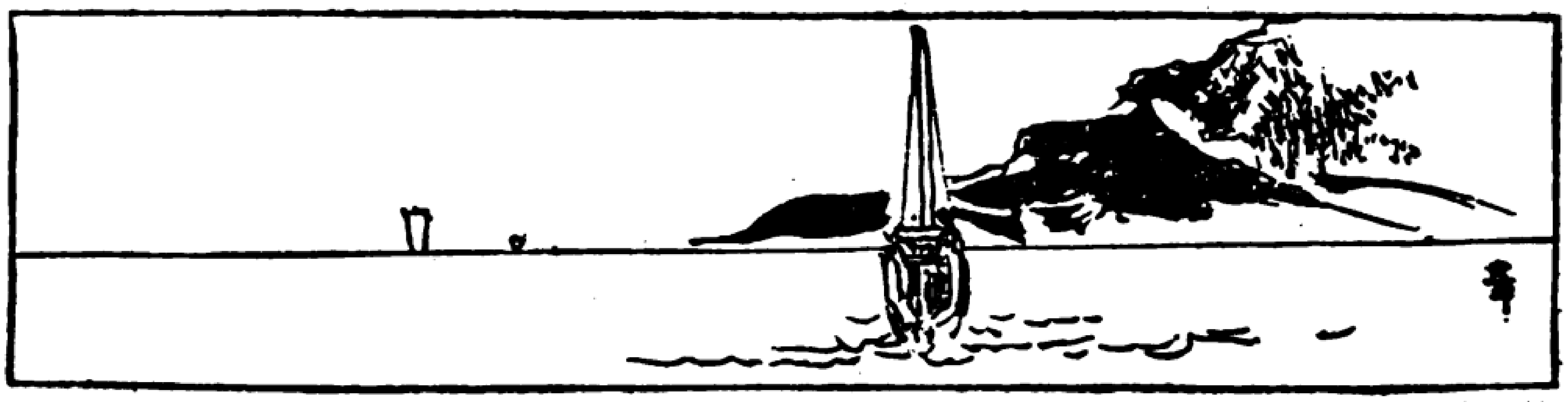
神戸 堀川はる子

六月七日五時半起床例の如く散歩す風涼しくて心地よし馬斎塲の前より海岸に出で磯ぎわにて休む見渡せば朝日にきらめく波美しく舟歌おもしろく歸りくる漁船も勇し

家に歸りて朝飯後朝顔に水を遣る昨日今日いと伸びたり今年は殊に珍らしきが廿六色ばかりあれば皆々揃ひて咲きなばと待たれぬ池の白菖蒲清らに咲きければ二三枝折りて御佛に供ふ今日はおぢい樣の御命日なりおぢい樣此上なら此花すき給ひしと嫁の語るもやさし

午後とみ子の君遊びにきましぬ箏取り出て互におさらいなす女學世界、婦女文藝など讀みて居たりしに門口に車遲りければたれならんと坐敷に至れば杉田の伯父樣なりくさ〳〵の土産賜はる夕方になりければ富子樣と共に夕食し丁度日もきれいに登りしかば運動かた〴〵富子の君を送る道々の景色ね（ママ）も云ばれず家に歸りて伯父上始め皆打集ひ御話など聞き十時頃床に入る

仝八日月曜朝の程は曇り居たれども十時頃よりよく晴れたりめつきり夏らしくなりたり下女達は洗濯物よく乾くとて大よろこびなり今日は　皇太子同妃兩殿下舞子より御還幸の日なり拜せんとて十時頃母上と共に鐵道側に至るはや學校の生徒は整列せり白き服赤き袴揃ひて奇麗なりやがて汽車は日章旗を交叉して進み來りぬ　皇太子殿下にには立たせ給ひ生徒の方見そなはし給ふいと有難き御事なり妃殿下にには御洋裝なり美しく拜しぬ午后自分の畢物二反張る石原氏より大きやかなる鯛賜はりたり料理し晩の膳に致す新らしければ味いとよし今晩の料理、鯛ふらい　胡瓜ざく〳〵と貝の二杯酢、潮汁、牛蒡の煮付等の物夏大根とまなのきざみ等なり夕飯すみて一同散歩に出づ月は十三夜ばかり物總くすみて磯原にきら〳〵と波



に譬ふ美しさ云はん方なし

松江市　岸崎いち子

六月六日　土曜六時前離床。朝の内は空やゝどんよりとしたりしがやがて晴れ行きついと美しき天氣とはなりぬ稽古日なれば花の師許行く。往き花屋に立寄りて夏菊求むひろき花園はたゞ紅き白き或は紫の涼き薄き花もて彩られつそゞろ立ち去り難き心地しぬ。

二人の君達は養蠶の忙ヶ敷きにや來まさゞりしかばいと淋しかりき。年老ひませる師の君には朝寒身にしみてや稍無打被り給へるいとなかし未熟なる身の指南いと難くて長時間の後漸う怪しげなる事に[illegible]しつ我乍ら情なき樣なりき。辭して歸りしは既に十二時、農夫の麥刈姿いと暑げなりき。家に歸れば既に晝飼は終りつるより急ぎかいこみて後直に花揷しつ中にして女學世界來りしよりそこ〳〵にして披き見ぬ口繪及文苑欄内雜と見たる後は母上の手傳して機の經通しす幾百條の糸を一本宛通す事とて面倒さ限りなしやがて夕つげたりしより中にしてやみぬ。

夜は女學世界及神戸より來りし每日新聞見て過す十時過就眠夕つ方よりぼつり〳〵降り出たる雨の夜に入りてもやまず軒の玉水靜に小田に鳴く蛙の聲一しきりいとしげし

七日　日曜五時半起床、雨やみぬ庭の砂の上すこし浮れて樹々の葉末の白玉朝日に輝きていひしらず美し家の裏

隈掃き清めして後朝露したゝる庭面に立ち出でつ緑深き樹の下蔭を辿り行けば冷き朝風さと渡りて名殘の雫はらはらと袖に衿にかゝれるたとふべくもあらずすがすがし夏菊石竹などの雨にぬれて打ふしたるなど一しほあはれ深きものよかし。午前の程は昨日の殘したる機の徑通及検となしゝつひる前漸う終へぬげに人の衣服の打被らるゝもの迄其手數そも幾許ぞやこを思は疎略に用ひらるべきにはあらじかし折から縫物し途絶しより編物を松子に送るべき袋漸う出來上りしよりよしに與ふべきをあみ始めぬ夜は又新聞紙女學世界など見つ清子の君より消息ありそゞろ其かみの事思ひ出られてなつかしさ限りなし祖母とばゞ住教會の講日なりとてばゞ具して詣で給へつ十一時迄漸く歸りたまふ半頃ねふる十日あまりの月やゝ圓かにいとゞしうさやかに緣したゝる植込を照しつ早や雞や出づるころのゝしりさわぐ聲聞ゆぬ。

兵庫　柳田暢子

六月四日、晴天、皇太子殿下姫路へ行啓遊ろゝに付き、父上御警衛として姫路へ行き給ふ、九時頃馬關姫路より客人あり、何れも博覽會見物の爲め十一時頃歸り給ふ、午後餘り天氣よければうらゝに出で妹とはりものす、日下部、村下の奥様き給ふ、一時間計りして歸り給ふ、夕方妹と池の水かゆ、如何なる故か金魚の鳳死せし故、父上五時半歸り給ふ、知人より生鯛一尾戴く、すぐ料理す、七時夕食すむ、八時頃迄ほどきものす、九時日記をつけ床にいる、此の日の買物、十錢妹弟の學校用品、六錢切手二枚、十錢みそ、十錢弟妹の郵便貯金、二十錢烏米二升炭三俵目方三十貫〆代價三圓十五錢、

五日晴天、父上七時半の汽車にて岡山へゆき給ふ、あとかたづけふきそうじす、都の友より手紙給はる、たゞちに返事差上ぐ、けふもはりもの及び洗濯す、今日よりかやをつる爲めほす、單物今日より皆きる、午後いつもより一日はやく女學世界來る、嬉しとも嬉し、讀みたきは山々なれど用すみてゆるゆる讀まんものと其のまゝにして用事する心の苦しさよ、五時父上歸り給ふ妹二人にはなはき水まく、何となう心地すがすがし、妾は父上夕食の用意す、七時すむ、あすよりは少しづゝ妹等に家事を習はしめんと其れ〱やや〱なきめぬ、九時頃まで女學世界ひもとく、先づ第一に才媛詞藻らんの和歌の部、もしやもしやと見もて行くに、あはれ今度も又せんにもれぬ、あな口惜しき事よ、家庭と新聞紙、稲譯先生流行の說、言語と品性、くり返し讀み味うあすは夫婦獨立大町先生の婦女雜觀讀まんと、樂しみにして日記をつけいつもよりおそく、十時床にいる、此の日の買物八百屋十五錢二十錢牛肉十一錢ふじくら十錢、のみとり粉又當日の調理朝わかめの味噌汁、鯛の味噌やき、香の物、ひる玉子のつゆ、カレーきうりもみ、夜オムレツチキンカツレツ、ビーフステキ、鯛のすいもの、鯛の味噌やき、うで玉子ひたし、



## 小間使のおつゆ

▲六月十日、朝御門たゝきてお出入の忠助爺、昨日御申附の大谷様へのお使に是よりまゐるべしと云ふに。一同あかつきの夢よりさめて其由を奥へ申し上げんとせしにかんじんの旦那様おはしまさず、奥様に伺へば知らずとのたまふおん聲ねむげなり。

▲お孃様も起き出で給ひて共々お館の内もとむるに、お庭口の柴折戸ひきはなたれてあり、さては例のこゝよりの御運動なるべしと一同心おちゐて、幸どんひとりお裏の山へと旦那様お向へにゆきつ、

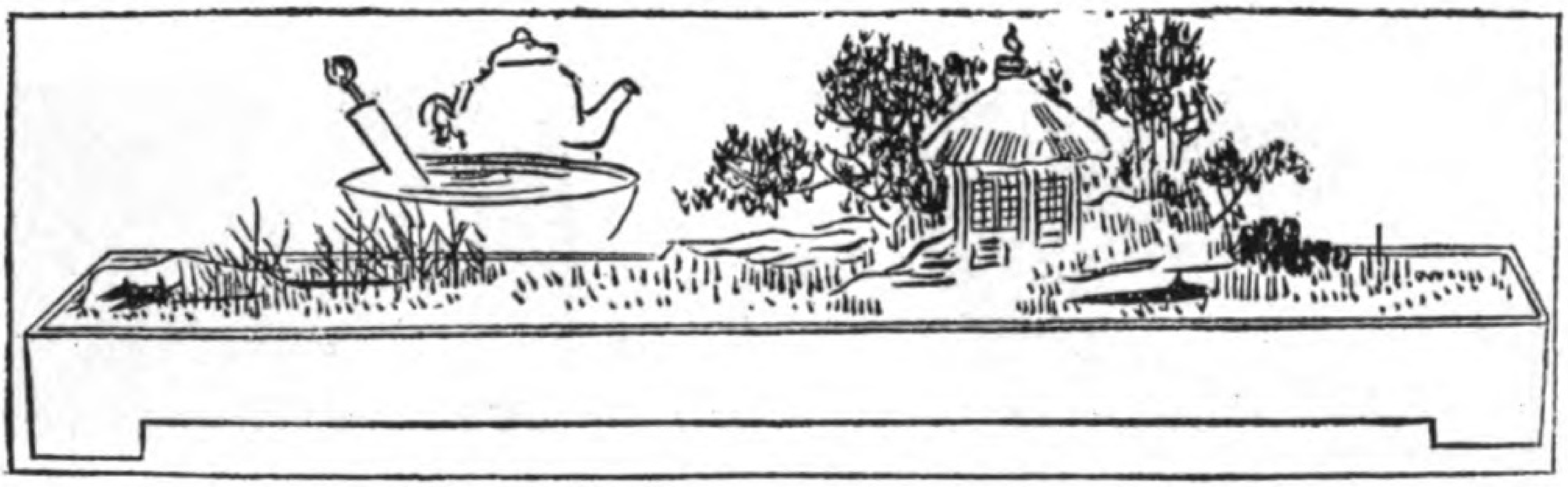
御無事のお歸りあやしきまでうれし、奥様はふたゝび絽蚊帳の裡くゞり給ふ、

仲働のお梅どんを相手に例のことゞもは定のやうなり

▲十一日、けふよりは梅雨の入りなりとか、きのふにも似ぬ空の雲ひくうたれて、軒の玉水しとしとの音なひ、心なき身も物憂さのかぎりなり、

おひる少しまへお居間の掃除すましてお玄関のこなた通りかゝるに、つゆやとのお聲、ハイと答へて何御用と伺へば、おなや、みだれては見る目あやなき花紅葉の、いま呉服屋參りて奥様お孃様、御帶と浴衣地の品定めにらちなきところなり、

つゆ、どれがいゝだろうねと、勿體ない「お好みぶりのそれにては美術思想とやらも大方ならずおはしまして、われわれ共のよりもふさはぬにおやさしう御相談かけて給はるお孃様、おほけなけれど其の髙撲樣、小雨のかげの一しほ優しきがと申し上ぐれば、お笑み美しう頷き給ひて、おん手に取らせ給ふ納戸地の花浴衣、み面わの白きに榮ねてはいよ〱おん品高う見上げらるゝわがお孃様よ



### 武藏　鳥居うめ子

六月八日快う晴れたり例の蠶は日毎に大きくなりて桑食べる事驚く許りなり一週間程前に四眠も過ぎて今日しきりに口より糸出して繭作る氣配見ゆければ別の箱に粟種のからなど用意して移しやる午前は何かと勝手元にて立働き下女の手助す晝飯かたづけ手傳ひて後自分の單物弟にゆづる爲め袖付直して筒袖となす五時出來上りぬ折しも空かき曇りてはげしき夕立あり人々洗濯物取込やら干物ぬらさじとあわてふためく様いとをかしければ思はず聲高に笑ふを母上に叱らる夜は今日求めし例の雜誌見ゝ口繪野口小蘋女史の筆に成れる雨後夏山の景目に浮ぶ心地す其の他皆面白く讀まれぬ家庭日記中には拙きながら我のも掲載しありて嬉し後小遣帳へ今日の買物「二十六錢空豆二升、一圓引換九升、きうり五ふれ十二錢」と記入して十時半床に入る

九日今日も晴昨日よりは餘程涼し朝早く祖父君上總なる姉が崎へ大師參詣の爲め赴かせらるお歸りは多分十三四日頃ならん

移せし蠶見るによべ一夜の内に繭五つ六つ作りていとゝうれしく手柄顔に母上兄にも見せ參らす妹も大喜びなり八時裁縫始む十一時來客あり茶などすゝめて親しき間柄なれば惣米にて晝飯も出す五時裁縫止めて坐敷掃除す日入りて空の月は晝も欺く許り冴ね渡る夜獨り隣家にて奏ずる妙なる箏の音聞きつゝゆあみす心地何となうすがしうなりぬ

雜録

# 岡山孤兒院

羽仁もと子

◎皆樣は岡山孤兒院を御承知でせう、石井十次といふ方はその院長で御座います。今は三十五六になつて居られますが、まだ十八九で岡山醫學校の生徒でゐつた頃、一人の可哀相な女乞食を助けてやつたのが始めになつて、今では九州の奥やら北海道のはてやらから集りました三百人のよるべなき子供から、阿父樣々々と慕はれておいでになります。

◎皆樣には阿父樣や母樣がチャントついて居られますから結構ですが、もしもその父樣や母樣がなかつたならどうでせう、親切にいたはる人も、敎ゆる人も、學校にいれて下さる方もありませぬゆゑ、良い子供でも段々つまらなくなつて仕舞つて、一生無學な人になつたり、事によると乞食や掏兒や盗賊や、恐ろしいものヽ仲間入をさへするのです。孤兒院はこの可哀相な子供たちの爲に、阿父樣阿母樣の代りになつてやる所で實に大切な所です。

◎石井さんは九州日向の國高鍋といふ所に生れた方で今でも御兩親は達者で高鍋に居られますし、幼さい時から何不自由のない方でありながら、威張つたり貧乏な人を賤しめたりするとが大嫌ひでありました。恰度石井さんの學校友達に親のない子が居りまして、お祖父さんと二人ぎり厩のやうな小屋に住まつて、お豆腐を賣りあるき、學校に行くのにも襤褸の着物一枚、書物は人に貸して貰つて筆紙すらもろくにないのでありました。石井さんは阿母樣に新しい着物を着換へさせて戴いたり、本やおもちやを戴くたびに、アヽあの子には誰も此樣なものを呉れる人がないのだと可哀相になつて來て、お菓子などは始終半分づヽ分けてやりま

すし、また時々阿母様に願つては御自分の古い着物をこの貧乏な子供におやりになりました。

◎その後石井さんもこの子供も共に大きくなりました。そして石井さんは、お金持のお子さんでありますゆゑ、間もなく御自分の志す醫學を修めるために、前に申した岡山の醫學校に出て來られたのです。その別れる時も貧乏な子供は大層悲しみましたが、恰度その折高鍋に中學校が出來るといふことでありましたので、どうにかして其校に入學するやうにと、石井さんはくれ〴〵も慰めて出發されました。そして翌くる年の暑中休暇に歸つて見ますと、友達は矢張お豆腐を賣りあるき、暇の時には他人に雇はれたりなんとして、學問がしたい〳〵と寐ても覺めても思ひながら、中學校にあがることがどうしても出來ずに居たのです。石井さんはこの有様を御覽になつて氣の毒でたまりませぬゆゑまづ阿父様に願つて若干のお金を出して頂き、次に村中の誰彼を御自分に話しまわつて、とう〳〵此友達のために中學校にあがる丈の學費を集めておやりになりました。

◎夏休みも過ぎましたから、石井さんは再び岡山に歸へられました。とかくする中秋も去り冬も十二月の半ばといふに、故郷の高鍋から一人の可哀相な書生さんが訪ねて來ました。その志を聞いて見ると、いかにも不便に思はれましたから、是非助けてやりたいと種々お考になりますけれど、御自分一人の學費で以て二人が勉强する譯にも行かずどうしやうかと、二日三日は夜の目も寐ずに思案なさつた末に、思ひあたることがあつたと見えて遂にその人を助けることを約束されました。此の貧しい書生は勿論石井さんのお恩を難有思ひますけれど、それは多分お家から澤山の學費を貰つて居らるゝので、その中から自分にわけて下さるのであらうと思つて居ました。

◎スルト間もなくビユー〳〵と木枯の吹くのも厭はず毎夜々々岡山の市中を一人の書生風の按摩がおそくまで笛を吹いて廻るのです。顏は頭巾で掩ひかくしてありますがその姿かたちより誰いふとなく、あれは醫學

校の石井であらうとポツ〳〵噂をするやうになりました。噂はいつか校長の耳にもいりましたから、學校の手で探つて見ますと、果してそれに相違ないといふことであつたのです。校長は常々石井さんを並み〳〵の人ではないと思つて居られましたから、何かそれには仔細のあることであらうと思ひ附いて、誰にも云はず石井さんを御自分のお宅におよびになつて、段々おきゝになりますと、初めはどうしてもお話になりませんでしたが、校長の御親切に流石の石井さんも包みきれず、實はこれ〳〵と貧しい友達を助けて居ることを打明けました。校長は感じ入つて、是非明日から私の宅に來て下さい。そしてあなたの是迄下宿屋に拂つたお金をその友達にやるやうにと申されました。此校長と申すのが醫學博士の菅之芳氏でありまして、その頃より引續き今も猶同校の校長をつとめて居られます。

◎またその翌る年の夏休みには、石井さんは岡山近くの田舍に遊びに行かられ、暫くそこに泊まつて居られました。そして毎朝散歩に行く途に一つの祠がありました。或時二人の子を連れた女乞食が、その椽の下に泊つて居るのを見つけました。よく見るとこの女は近頃はじめて乞食になつたものらしく、餘程可哀相な有樣でした。石井さんはひどく氣の毒に思ひまして、毎日氣をつけて居りましたところ、行き場のないのか四五日經つても、乞食は矢張立ち去りさうな樣子もなくいつも〳〵母子三人悲しさうに寄り添つて、椽の下の薄暗がりにシヨンボリとして居るのです。石井さんはとう〳〵堪らなくなりまして、その身の上を尋ねますと、女は涙ながらに夫の病氣のために、四國の金比羅樣に願がけに行く途中、病氣が俄に重くなつて、とう〳〵こゝで亡くなつたといふことを話しました。そしてなほ「他家樣に洗濯にでも雇つて頂かうと思ひましても、二人の幼兒の居るために、使つて下さる方もなしとう〳〵この樣な身の上になりました……私一人はどうでも宜しう御坐いますが、この子供等が可哀相で………」と泣き伏して仕舞ひました。石井さんは世にも氣の毒な身の上もあるものだと、同情のあまりに遂に大

さい方の男の子を、御自分に引受けて育てゝやらうと決心されました。女乞食の母親は石井さんの情けに感じて幾度も禮をいひながら、母子の別れでありますゆゑ、幾度も〳〵見送りがちに「それでは早速人に頼んで下女奉公でも致しまして……」とそのまゝ何所かに行つて仕舞ひました。

◎間もなく石井さんはその子を連れて岡山に歸りました。そして今度はわるきたない家に下宿して、學校から戻ると直に、種々の内職などをしてこの子を養つて居りました。一年ほど經ちまして或日のこと、知りもせぬ小奇麗な内儀さんが訪ねて來まして、石井さんと子供とが仕事をして居る前で、物も云はずに泣いて居るのです。あまりの事にあなたは誰ですと云ひますと、お忘れになりましたか私はこの子の母で御坐いますと申しましたので、二人とも喫驚してよく〳〵見ますと成程先年祠で別れた女乞食でありましたから喜びながら、その後のことをきゝますと、女は石井さんに一人の子供を引取つて貰つたゝめに、早速奉公口が出來まして、そこで一生懸命働いて居る中に、他人の世話で田舍で鳥渡財産のある家にお嫁に行つたのだといふことで「若しもあの時あなたにこの子を救つて頂きませんでしたら、何所に行つても雇はれ口もありませず、今頃は多分あのまゝ三人が乞食になつて、何所を悲しくさまよつて居る所でありましたらう」と拜まぬばかりに云ふのです。石井さんが一人の子をお救ひになつたゝめに三人が幸福になつたのです。石井さんはそれよります〳〵可哀相な人を助ける事の大切なことをお感じになりまして、遂に孤兒院をたてることを決心なされました。日本一の孤兒院として外國にまでも聞えて居ります岡山孤兒院のはじめがこれであります。

## 北國婦人の生活

中村諦梁

越前福井地方は佛敎の盛なる處ろにして熱心なる信徒の多き處なるが今其婦人並に家庭生活の狀態に就て記

せば一奥樣、二黒人、三女學生なり、奥樣の中官吏の奥樣は外來のもの多ければ東京わたりの官吏のそれと敢て異る所なし、町家の奥樣は一體に藝者崇拜ゆゑ藝者見る樣な姿をして髮だけを丸髷にせしものと思へばそれにて間違なし一體に婀娜ッポキ方なり、黒人形とは云ふ迄もなく藝妓風にて此土地は嘗て敎育の行き屆かざりし結果にや良家の子女が藝妓となるを名譽とする風あり、實に嘆ずべき限りにこそ、近來は縣令を以て藝妓居留地を規定せられたれど火災前は中筋とて東京で云へば日本橋より京橋へかけての如き市の中心に良家と共に散在し居りたれば、此風俗全福井を支配せしは是非もなし、さりながら藝妓の風は一體に田舍めきて素人臭き所あるは京坂地方と此土地と大に異る所なるべし、女學生風とは此風は近來盛に行はれて海老茶袴に揚卷の女が日曜にても平日の午後にても市中を徘徊するもの大に目立つ、他に羽二重製造の盛なる所とて工女の一派あれどこれは外出の時なともさすがに藝妓風を爲眞似る餘力なければ極めて下品なる卑猥の風を爲せり、

▲婦人の敎育　は亦日本の他の諸國と同じく何れかと云へば敎育のなき方なり、然れど近來は女子敎育の必用を一體に感せしと見へ女子の學校に通ふもの年一年と增殖する傾あるは實に喜ぶべき事なり、唯高等女學校卒業後更に進で高等の學科を修むるものなく學校の免狀をもて婚禮資格とするの傾あるは厭ふべし、

▲婦人の技術　は先づ第一に指を羽二重及び奉書紬を織ることに屈すべし、されど上流の婦人には機を織らざるもの多し、裁縫は惣體に行亘り居れるが、料理も一通り心得居るもの多し、三味線は藝妓の外は甚だ不器用なりと知るべし近來は茶と花が流行、化粧は京風の厚化粧を學ぶ能はずして大阪風の白粉の塗り方に近し、

▲婦人の髮　福井の婦人は昔はチヤンと區劃あり、士分は片はづしに結ひ、若きは丸髷に結ひ、町家は笄髷に結ひ眞宗寺院の妻は押づとに結ふ事となり居りしが近來は一般に東京風となり居れり、併し髮を先ふ事は

京阪に似て甚だ少なし、少なきは年に一二度多くとも年六七回を超へず、それに付て面白き事あり昔は柴新地の娼妓は七月七日打揃ふて足羽川に出で雲鬟を洗ふを例とせし由にて當日早朝三千の遊女緑髪を水に流す時日光水と髪と艶姿とに映じ水は益　緑に髪は愈黒く而して美人白き事脂の如く實に絶世の奇觀なりしといふ惜むべし今や此事癈絶して復再興せんとするものなし、

▲婦人の言語　此國の言語は京阪語と關東語と土語と打交りて語尾を細く長く引くを例とす、サカイといふ京阪語があるかと思へばゴザンスといふ關東語ありモーツケナイといふ土語あり、特に目立つをアクセントの尻上りすると語尾の長きとなりとす男子も然りと云へとも婦人は最も耳立つ也、「アノオ、お惡ふもゴゼエせんかアー、此間は結構なものをー頂きいしてー難有ふ御坐んす」といふ工合にて福井言語の特長は語尾をダラ〳〵と長く引くにある也、而して京阪に近き割合には婦人の方言中々消滅せず、あんにや(下女)あつぱ(人糞)あんさん(自分の夫)おんさん(叔父又は中年以上の男)おつぺい(淫賣婦)くだい(下さい)こつぱり(澤山)やだ(徒ら)うなじがわるい(不仕合せ)てんぽ(噓)できない(苦しい)せんば(十のう)もうつけない(可愛そう)等は常に上流婦人の口よりにても斷へず聞く處の方言なり、今は新聞小説や雜誌小説を讀むと横濱市場との徃復繁きとにより追々中央語に近づけりと雖も言ひ馴れたる熟語と語尾を引くこと　は變ることなし、

▲婦人の生活　婦人の生活は槪して云へばあまり高尚ならざると同時にあまり勤勉ならず、大體は日本の他の諸國に異ならざれども此國の婦人が日常生活の課程として特有にして他の國になきもの三あり、一は寺參りする事なりこれ甚だ美事なれとも極めて卑近なる事のみを聞かん爲に參詣し高尚なる說法は聞くことを欲せざるが如し、二は夏日晝寢することなり越前の晝寢といふは結城中納言秀康入國以來名高き事にして午餐後二時過まで、盛裝の孃樣艶姿の奥樣達がごろ〳〵と

或は丁の字或はくの字或は一の字に困臥したまひ燕脂紅粉の身空洞革嚢に異ならず、紅裙裾もあらはにして人に見すまじき所迄も現はして知らざるものあるに至ては第一風俗を害するは云ふ迄もなく以て福井女の品性と覺悟を猜視さるゝなり、三は冬は此國の風習として一般に置炬燵を設け四角なる蒲團を其上に覆ひ、客あれば初對面にあらざる限りは此室へ招き主婦も令孃も客人も亭主も男女入り亂れて炬燵の四方より足を入れ對坐して遊ぶなり、寒國の事故是非なき事なるべきも手も足も蒲團の中にあり而して玄冬三伏此室のみは温暖春に勝る、男女兩性相近づくすら已に危嶮なるに手觸れ足觸れ終に心と心の琴線相觸るゝもの少なしとせず、福井婦人の淫奔多きは之に原因するもの多だ多きが如し。

▲婦人の服装　婦人の服装は夏と冬とによりて殆と別世界の人なる如し、冬は積雪の爲に外出するもの少なく上に述べし如く炬燵にのみ入りて家居する制となりあるを以て衣服も丈夫なる而して質素なるものゝみを着、又外出する時も防寒と防雪との爲に羽織よりはバテ(袢天)を着るゆゑに一見山間僻地の田野婦人の如く冬期は市街婦人と村落婦人の區別甚だつき難き也、然れとも東風消息を傳へて殘雪名殘なく消へ青帝駕を命じて天地春なるに及では此素樸なる田舎風は忽ち變じて奥様も孃様も乃至後家様も皆藝者風したる素人といふ粹な衣服となり婀娜ッポクなりたまふなり、福井婦人の服装は冬期と夏期とに非常の相違ありといふべし又帶に付て此國は他國には見ざる習慣ありそれは引上げ帶と稱して細き事男帶と同じ位の者を後ろにヘンテコに結び居る事なり、此帶は全市一體に若きも老たるも用ゆる所にて冬期の常に用ゆるは云ふ迄もなく、夏といへとも使用する也、而して狹斜の地亦之を用ひ一般に半花(東京の半玉)の子供は此帶をなし居れり、遊女がシダラなく細き帶をしめ居る如くあまり見善きものにあらず併し身體の爲には此方がよかるべし

▲婦人の快樂　福井は市街も大ならざるだけ娛樂場も多からず昔は濱町に芝居小屋一つありしも其後は馬場

に照手坐と云ふ劇場起りそれ一つのみなりしもこれも當春の大火の爲に燒けたり、劇場寄席（寄席は加賀屋といふもの一つありしも之も當春の大火に燒けたり）等の少なく又夏期九十九河原神明社天王社等へ來る小屋のチョンガレ輕業等に過ぎざるより見れば福井婦人の快樂に付ての嗜好は槪して其程度低きが如し、此土地は雪の爲に男女とも其快樂を室內に求むる傾わるは劇場等の發達せざる所以にして、室內快樂を求むる結果は賭博と淫猥との二種となるなり寺參りの流行するも後生の爲よりは坊さん若くは共同行に對する一種の快樂の爲なるもの多きが如し悲しむべし。

▲婦人の品行　婦人の快樂は上述の如きゆゑ婦人の品行は無論類推すべし工女といへば必ず私生兒を聯想さるゝ也、後家といへば必ず父親の異りたる子二三人を思ひ寄らるゝ也、人の妻といへば必ず秘密の情人が想像さるゝ也、女敎員といへば男敎員が對句に出で來る也、新聞は三つある事なるが每日々々の三面種が不品行種を以て滿つるには我等直接に新聞に從事するものは實にイヤな〳〵氣がするなり、東京わたりにて他國より入りし者が妻を娶らんとするは大事中の大事なれど此國にては朝飯前の茶漬なり、官吏新聞記者等他國より獨身にて入り來りし者には皆勸めて善い鹽梅に妻を授けるなり、現に予の知れる新聞記者にて此幸福に預りしもの四名も五名もあり皆今は夫婦同棲と洒落れ居るなり、我の如き宗敎を信ずるを一生の快樂とせんと企望し一夫一婦を文明の眞義ならんと思ひ居るものには實に珍らしく感ずるなり、將來第二の母となるものに此癖をつけたくなし以上述し所により我は別に品評を加へずして是非を讀者の判斷に乞ひ以て他山の石とも般の鑑ともしたくせられたく思ふなり。（完）

▲女子の王國　家庭は女子の王國なりといふ觀念を以て、家庭の主權者たる女子を標目とし、居家處生の事より、家政事務の事より、交際往復の事より、敎育の事より、結婚の事より、其他百般の日用行事を巨細に論述說明したるもの、論旨質實、文辭流暢、新進の女子たるものゝ宜しく讀むべき書なり。（著者龜田秋畏發行所麻布南風社）

# 園藝

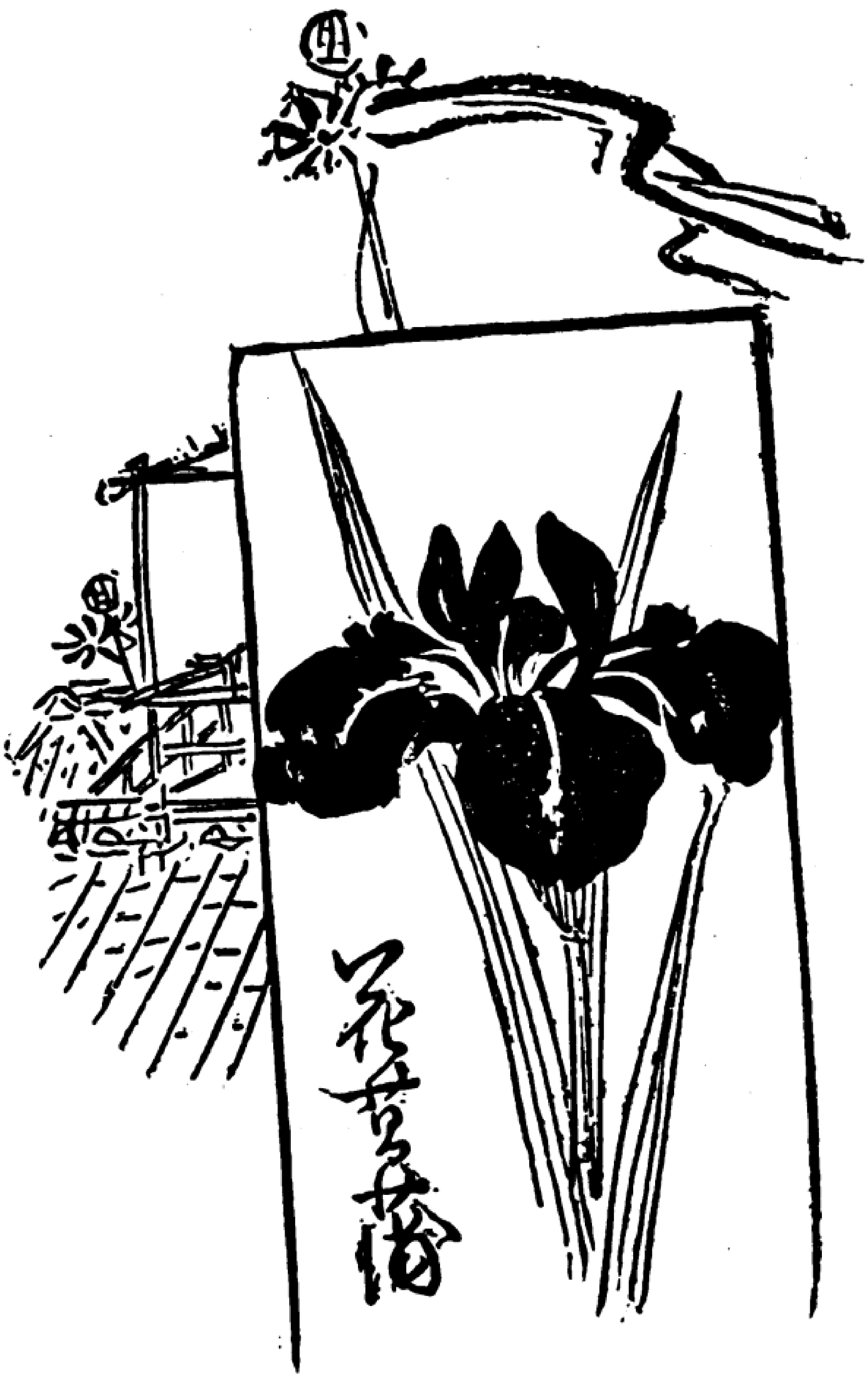
## あやめと燕子花

小畑いく子

古は言語の数も少く何事も單純でありましたから只今の様に渓蓀菖蒲、燕子花、紫羅傘、馬藺など、種々に分れては居りませぬ、總て鳶尾科の植物を總稱してあやめと申たものと見えまして端午の節句に献菖蒲といふ儀式がありますが、歌などには只あやめかりふく、あやめひく、或はあやめの輿、あやめ色などゝのみ申して別に菖蒲との隔はつけてありませぬ、扨端午と申す事は午は五に通じ、端ははじめと申す字ではじめの五と申す事でつまり月の五日と申事であります、さればあながち五月に限り用ゆべきではありませぬから漢土では他の月にも往々端午と申事は見えてありまして「月惟仲秋在二日端午一」と宗璟が八月の表にも申てあります然し端午の節句と申しますと、五月に限られてあるのです節句は三月三日、七月七日、九月九日などゝ同じく、五月五日もやはり陽の日の重りたる日でありますからこれらの日には或は山に登り或は海に浮び、天を祀り、祓を行ひなどして災厄を免れん事を祈ると申す事が古く唐土に行れて居たのであります處が我國のむかしは何事も唐風に摸擬したも



ので一時盛に唐風輸入が行はれて我古典と混同した慣例の遺風であります、唐には桃を仙境の花と賞し我國には神代より桃は惡魔を掃ふといふ傳へがある即ち、伊邪那岐命が黄泉比良坂で「汝我を助けしごと葦原中國にあらゆる靑人草の苦瀬に落ちて惱む時は助けてよと告げ給ひて意富加牟豆美命に告げ給ふ」云々といへる處に照合して遂に三月の節句に桃を用ひるやうにしたのと同じく九月に菊、五月に菖蒲と必ずしも節句には植物の添ふ事になりて居りますのは、或は一種の迷信から來たのでもありませうが、季節の代表たる植物を調和したといふは大に事を優美ならしめた一つであります



そこで献二菖蒲一といふ御式は五月の三日に行はる丶ので、五日に用ふべき藥玉の料にとて菖蒲、艾などを輿に盛りて南殿の階の下に奉ります、是をあやめの輿といひます、又五日には、天皇武德殿に出御なりて宴會を行はれ群臣に酒を給りますが、其日は人々菖蒲蘰をかけます、又典藥寮は菖蒲の御案を奉ると申す事もあります又群臣に藥玉を賜はると申事もあります、其他さま／＼の儀式もありますが、いづれも菖蒲を用ひられて居ります。

聖武天皇は天平十九年に、「五月五日には必ず菖蒲の蘰をかけしむ、之をかけざる者は宮中に入るを許さず」

とさへ詔らせ玉ひしと申す事であります、それ故宮殿の軒端も悉く菖蒲を葺き、女房なども皆菖蒲のさし櫛をさします、又之を酒に浸して呑めば邪氣を拂ひ、煮出したる湯に浴すれば百病治すなど丶所謂、蘭湯に浴し芳草に沐する的の事を上下擧りて致しましたものであります、其他粽を食する事などもあります此粽につきましての傳説もありますが、くだ〳〵しいから略きます、此粽と申すは菰、茅などに團子をつゝみて蒸して作るもので、是






にも篠ちまき或は柏の葉に包むのもありまして、幾種類もありますが、昔は菰を専ら用ひたものと思はれます、萬葉集に

今日よりはみきはの草もなかりけり
あやめは軒にてもはてもまき

といふがあり、又拾遺集にも

けふ見れば玉のうてなもなかりけり
あやめの草のいほりのみして

とあるを見ても、いかに其頃の盛に菖蒲の賞美られたかゞ窺はれます。

扨前に申た通り、あやめ菖蒲など丶委しく區別のしてなかりし昔は兎に角、只今ではそれ〴〵立派に區別が出來て居りま

すから混じぬやうにしたいものです、然しもと同種のものですから、花の摸様、葉の形なども皆同一でともすると混同し易きものでありますから挿花などをする人はよく〳〵其特性の處を見て置きて、一目に其いつれなるかを知らるゝやうの注意が肝要であります。

燕子花は春の末、即ち四月の中より咲き初めますが花は紫、白、紫斑などありまして、渓蓀よりは葉の巾少し廣く、花も少しは大きく咲きます、是は水邊の草で池沼田の傍などに生ずるものでありますが左様な所では別に肥料を施すにも及びませねど、鉢植と致しますには、干鰮、ごまめなどを少しづゝ與へるがよろし、又水はあまり深か



らぬやうにせねばなりませぬ又四季咲と申しまして四月七月十月に咲くのがあります、併し春の花が一番大きく出來るものであります、渓蓀は、燕子花よりは葉の幅も狹く、且つ薄きもので花も小さく凡てがまことに、やさしく出來て居ります、花の形色などは燕子花と異る事もありませぬが筋入りといふ一種は葉に白の筋が入りて居ります、又翁あやめといふのもありまして、是は葉の色が至て薄綠で殆ど白に近き程でありますから名つけた物と思はれます鉢物としては一寸珍らしきものであります、燕子花は水邊に限りますが是は、水なき園の中にも育つものであります。

馬藺は殆どあやめと變りませぬが花が極薄紫なのと葉の幅が狭ひといふちがひがあります。

紫羅傘、是もあやめに似て居りますが、花は小さいが葉の幅が廣く且つ葉組の摸樣が日扇に似て居ります、此肥料は皆燕子花と同じ事でよろし。

花菖蒲に至りましては花も葉も大く殊に勢のよい處が特色であります、是は全く夏の物で五月頃より咲きそめますが、名花といはるゝものは六月に入らねば咲きませぬ、是も燕子花と同じく池沼など凡て水邊に生育するもので、一切かまはずに捨て置きましても年々花は咲くものですが培養方宜しきを得ますると非常に立派なものが出來ます。近來大に此培養法が研究されまして、色々珍花を出すに至りました、都下でも堀切なとは有名なものであります、白、紫、絞、藤色、瑠璃色などは隨分古くよりありましたが淺黄、空色、鼠色柿色殊に、突羽根、初からすなど申して黒色の物に至りましては實に變種中の變種であります。

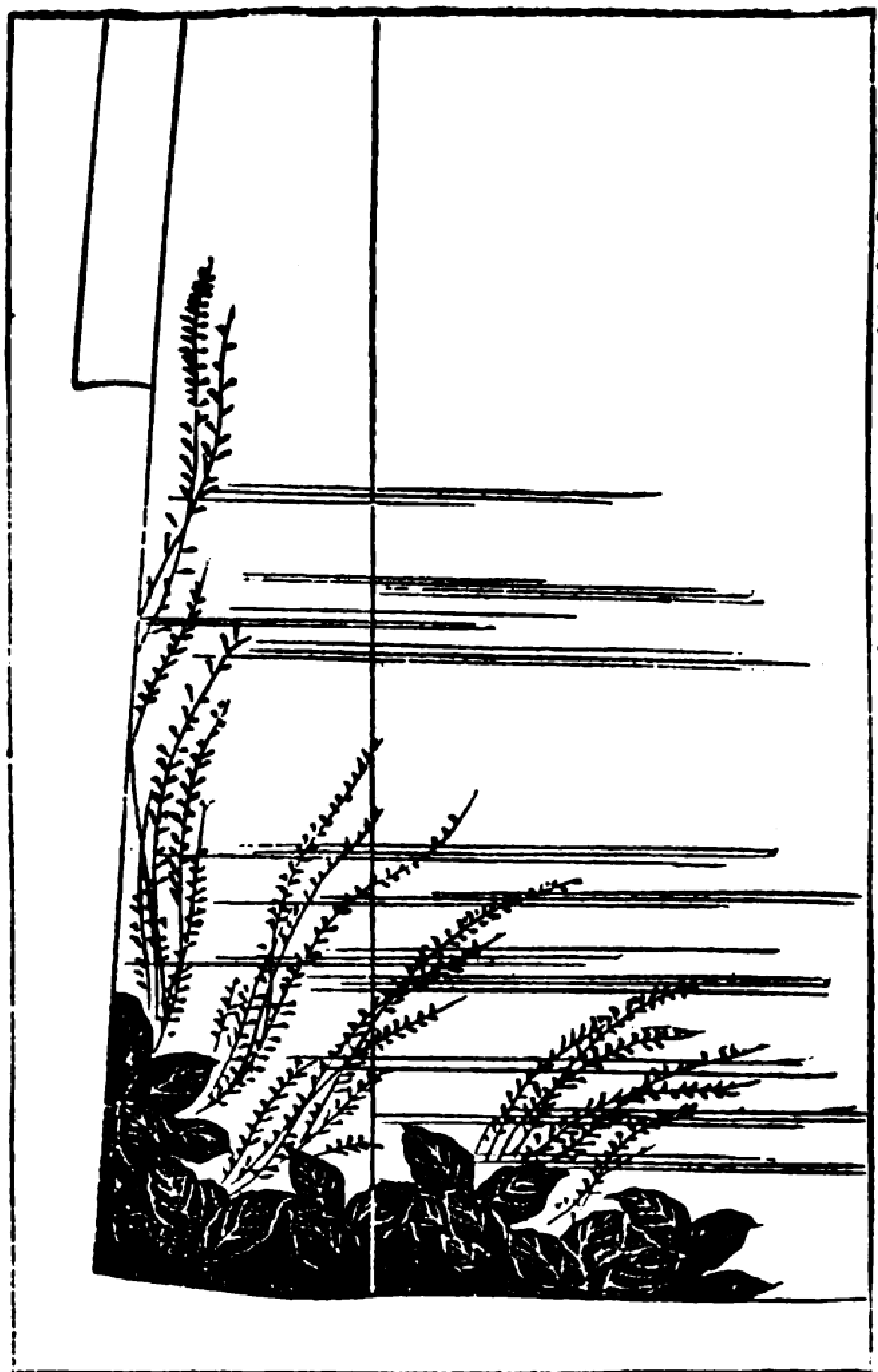
今其培養法の大畧をきゝますに、凡そ一尺乃至二尺程づゝ間を置きし田の畦の如きものを作りまして其上に一株づゝ植ゑ付けて、水は常に畦と畦との間に湛へ置くのであります、花期後はなるべく水の過ぎないやうにして不絶耡りて雜草の生せぬ樣にし冬期に至れば漸漸水を断ちて、寒中などは藁を敷きて根元の氷らぬやうに保護しなければなりませぬ、春に至りまして彼岸頃になれば耡きかへして肥料を與へ水を送るやうにするのです、其肥料は油粕、乾鰛それに燐酸肥料を少し加へて用ふるのであります、尤も是等はある一部の培養法で地方々々によりてはまた多少の差はある事でせう。（完）

# 四季のよそほひ

観風子

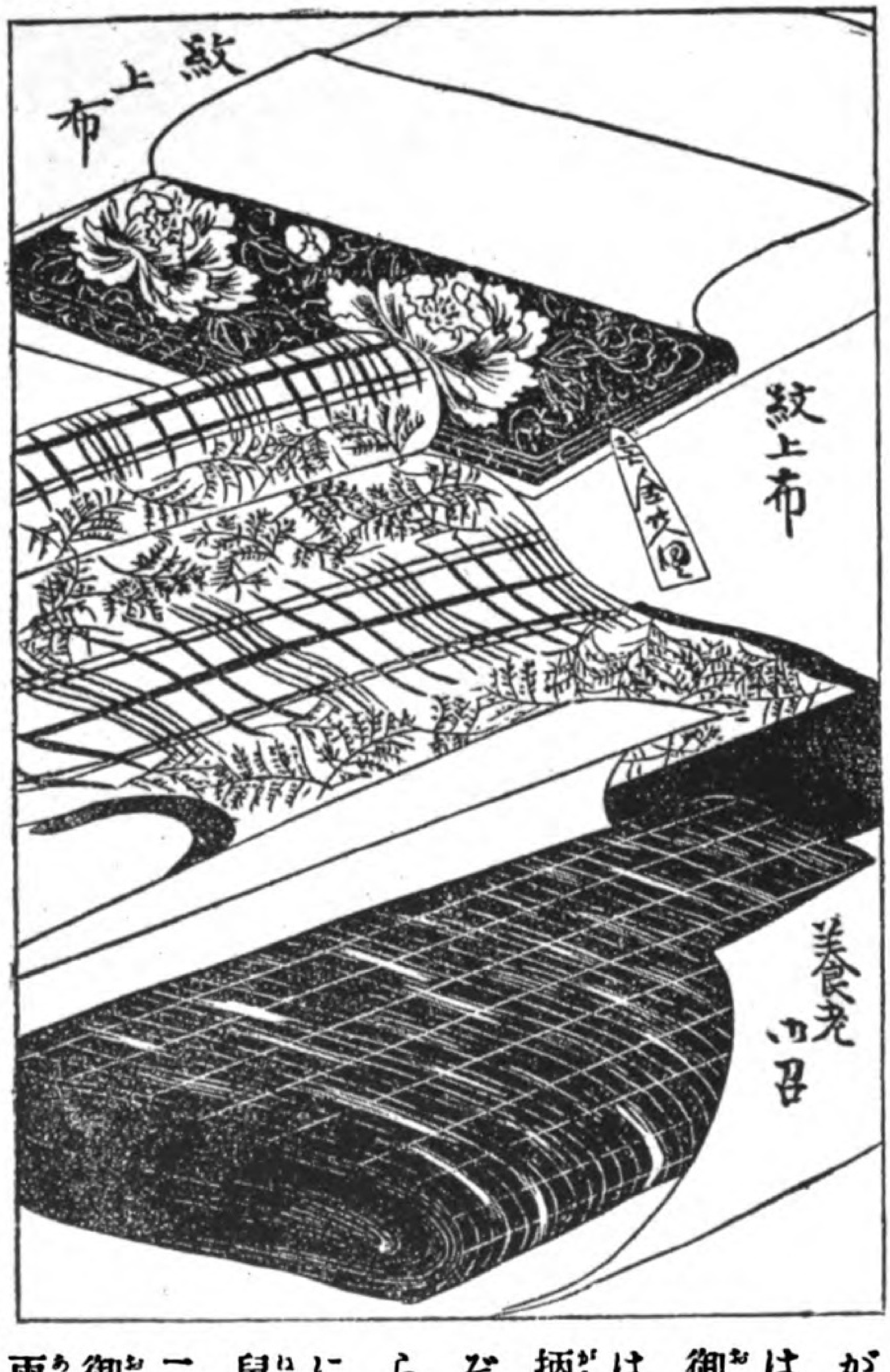
夕づけゆく風の小波に袖裏返すうすものゝ輕きを纏ふ其の夏衣裝のいろ／＼を薄御納戸地のアッサリと案内申さん。

▲夏の晴衣　令閨向の儀式衣として最も高尚なるは絽の襲なり、去る日芝公園にて見受たる令閨の着し玉ひし絽襲は頗る品あがりて奥床しきものなりき、其の上着は絽の裾摸様にて大きさ九分程の五ッ紋付、地色は薄葡萄の珍色、裾の摸様は薄霞に水引草を地落染にしたれば、至極贔張したるものなり、摸様褄下は一尺二寸位、裏襟は緋の絽縮緬を用ゐたるが如し、襲と對の品にて重ねたれば是許にても算盤を取つて見れば白木屋仕立にて三十五六圓のものはあるべし。此を透き通して映り出づる絽の長襦袢は白地に蛇籠の摸様を染め上げ、袖と裾に忍草をあしらひたるを着、綵羅織の丸帯を御太鼓に締めたる姿の美しとも美し。


絽地裾摸様よそほしきさまの図

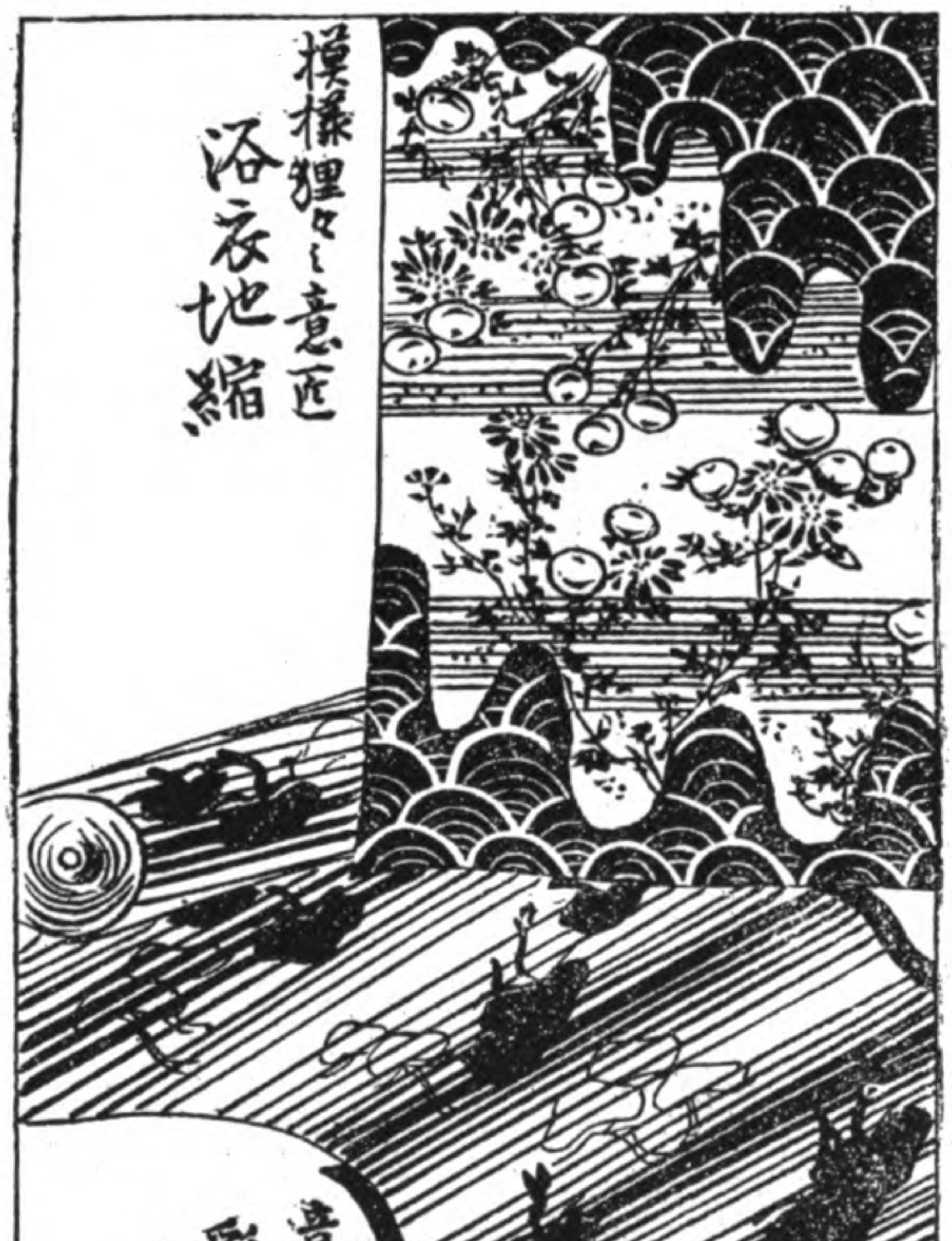
▲新流行の帷衣　帷衣にしてよきは養老御召なり、こは曾て二十年以前に流行したる事あるものなるが、一昨年あたりより昔に返りて弗々行はれ初め、今年に至りて愈々流行の度を加へぬ、今此品の新流行につき二ッ三ッを言へば、花葡萄に白地格子の熨斗目は品の善い柄にして家敷向の令孃に適し、葡萄鼠に子持縞の中柄なるは二十才前後の婦人に適するものなれと

何方かといへば意氣向なり、又た鼠地に子持細格子を染め出したるは粋にして上品を兼ねたれば何れの方面にも人氣あり、此外に二十四五才の婦人に愛用せらるるは地色栗鼠に白の辨慶縞なり、これは少しく派手向なれど最も流行を極めつゝあり。次には紋上布なるが今夏流行の新柄は(一)薄牡丹地に大小牡丹の二側摸樣——十二三の令孃向にして優美斬新の柄なり(二)御召納戸に波菊を顯はし其間に鯉を扱ふたる上品な物——十六七の令孃向(三)御納戸地に忍草を顯はし、白地に翁格子を顯はしたるもの——十四五才の女子(四)鐵納戸に吉野井桁——二十才位の意氣向(五)濃花地に匹田つなぎ——二十四五の年增向(六)濃花地に翁格子を出し其間に猫絣をあしらひたる面白き柄——二十四五の婦人に適するもの。是等なるが三十四五の婦人には小紋上布にて色は御納戸か濃花地、又は鐵色、薄葡萄にて柄にはヨロケ雨絣なぞ、最も似合はしからん。次に又た明石にて高尚なるは薄梅鼠に縞の斜絣。二十二三の意氣好みには御召納戸地に大小の雨絣など宜しかるべく、又た人柄を粧はんとならば栗梅に子持縞の吉野格子など面白かるべし。透谷は涼しきものとて今も昔も流行廢りなけれど、其の色は御召納戸、栗鼠、鐵納戸



壁鼠、素鼠を多く見受け、柄には絣、縞、又は縞絣の何れはあれど、小柄なれば一樂透谷、壁透谷などをよしとす、これらは見よげの品なる丈人も多く好むなりけり。

▲浴衣　贅澤なるは七本絽を用ゐて銀鼠地に鷺と太藺を墨繪摸樣にしたるものものなり、是に風を含ませては涼しさ言ふ許りなし。然し一般に流行するは進歩織といふものにして、紅梅地に白紺の大名縞とか又は鐵地に白の棒縞、白地に鐵の薩摩筋、錆茶のヤタラ縞等なるが何れも人の目に付く柄合なり。扨て是より縮の新柄を見んか、そは大方次の如し。




（一）白地に淺黄を以て瀧縞を出し其上に所々絞風の風車を浮べたるもの

（二）御納戸地の翁格子に亂桐を搦めたる白抜摸樣。（二圓五十錢位なるべし）

（三）白地に青海波と夏菊をわらはし地を熨斗目に織りたるもの——此の意匠は謡曲の猩々より來たるものにて年頃は十五六の上品なる令孃向。

（四）地色の薄御納戸を白抜にし横霞の間に光琳の松を陰陽に顯はしたもの——淡疎にして意氣な柄なり。

（五）御納戸地に濱邊の松を大形に出したるもの——

十四五才の少女着として品格よし。
眞岡にて面白き柄は淺黄地に白をもて木目を出だし蝙蝠を陰陽に出したるもの、又は淺黄地に水藻と立枠を染め出したるもの、共に素人の間に賞玩さる、尙ほ又た潮染といふ新奇の染方此頃に至りて世に顯はれたり余の見たるは珍色の淺黄地に松川菱と翁格子の熨斗目なりしが、いかさま潮のやうに淸く凉しく着心よげに思はれたり。




片輪車に水杯の彫込▲簪　玉附は漸く廢氣味にて當時の流行は金銀の平打、目方も輕きを好む者多し、令嬢向は大さ六分位、十八金にて造り、光琳の水、古代牡丹、古代菊を透彫せるもの淡白にして上品なり▲花簪　本年の流行は總て西洋草花の摸造にて、材料は紋羽二重か繻子を用ゐ、多くは房無しの物なり▲束髪用ピン　金銀製にて、形は月に星、菫、楓、櫻花、葡萄の葉等にて眞珠若くは寶石類を配合せし物、さなくばパラ斑又は黒甲にて雪月花、百合花等を彫刻せし者、昨今の流行也、

▲頭の物　▲櫛笄は操形黒鼈甲の木地に靑貝、丁貝、又は金銀にて吉野立田、竹垣に六花、水草に鷺、

# 日用雜俎

○日本固有のエキス

「エキス」といふ言葉を始めて聞き、「エキス」といふ物を始めて見たる人々の、異しみ驚ろき、稱贊してあはれ、我が國にもかゝる調法なるものゝ製法あらまほしけれなと、思ひ、わざ〳〵肉液をしぼりて調製を試むるものもありとかや、されど我國には古來松魚節といふものあり、格別珍らしき品にはあらねど庖厨の用を辦くるに是れ程調法なるものはあらじ、年來使ひ馴れたる事とて何人も其の物の珍らしくおもはざれど、三度の食に米の必要は第一ながら家々の臺所に松魚節なくては事缺くべし、是れを携帶して旅行する人の萬一の時の口糧とも爲さんか、實に其時の効用は測り知られざるなり、先年清國と戰爭の砌、或る士官が物に試しある其の母の注意もて、數多罐詰の外に薄く削りたる此の物の佃煮一と包み大行李の間に收め置きけるが、三伏の暑さに行軍に疲れたる將士の大方は肉の臭味鼻を衝きて何分にも喰はれざりし其の折、松魚節の佃煮とて一と撮みづゝ賞翫なせしに何れも大きに食味を辦け意外の好結果ありし試しは今猶其向の人の語り草として殘りぬ猶又食物の養分に就いて年來研究し來れる何某學士の話しにも松魚節の煮汁は生牛の液ほどに効能なしとするも食味に異臭を厭ふ病人などの之を用ゐなば鷄卵、米粥などより優りて滋養になるべしといへり。それも日本人口より出でし事とて有難からずおもはゞ或る西洋醫士の言を引いて言ふべし、曰く松魚節は日本特產の肉「エキス」なりと、反省して其の効用のあるを知るべし。

○竹工細の器物

竹細工は日本特有の工藝なり、笊にも作り、箕にも作り、籃にも作ること、いにしえより傳へ習はせる細工の器用一々いふまでもなし、何程調法の品なるべきかは、假りに家の內より竹もて造れる器を除きて見ての不便もて知るべし、臺灣、若しくは支那の南方に竹を產する多けれど、大概は椅子、寢臺、床几の如き室內

器具のあらましに過ぎず組みては行李に造り、夏の敷物となし、編みては簾となし、笋の子となし、贅澤なるは下駄の表に作り、撓りたるは食籠に、拵らへ、軸にも、管にも、團扇にも、花活けにも印籠にも、茶盒にも、又た大きなるは竹刀より、小さきは耳搔に至るまで、杖ともなり梯子ともなり、直ぐなるは雨樋となし、筧となし、曲げては輪となし、箍となす、千百と數ある植物の中に就て竹などに器用の廣くして効用の大なるものあるを知らず、西洋の人が鐵を自由に使かふ程に日本の人は竹を自在に扱かへり、

○熱病患者の好食餌

或る新聞に苺に就ての話が記されてありしが、この苺が病人の食餌として適當なるよしは左の記事を讀みて知るべし「苺は單に生果の儘食するも宜いが之れに砂糖及牛乳を加へれば一層の美味なので年中の食用に供せんとするならば凍膏を作るのでそれには先づ果の熊く熟したものを選び其の蔕を去り水で洗つて此の果一斤に付砂糖一斤(砂糖に代ふるに蜂蜜を以てするもよい)を鍋に入れて少しも水を加へずに文火で煮て其煮上つたものを取り糖汁のみを能く煮つめて之に前に上げた苺を入れて壜又は鉢に移し其冷へるのを待つて密封貯藏するのである併し之れを煮るべき鍋は銅鍋の如きものは魚肉鳥肉などを煮て害あるのみならず凡て酸味を含んだ果物を煮るときは非常に有害であるからして之れに用ふべき鍋は其の内側に陶器に用ふる釉料を引きたるものか又は土鍋を撰ぶことである又藥用としては熱病患者には少し宛幾回も與へて功ありとのことで營養衰へ顏色の憔悴せる少女には日々少量の苺を與へて之れを恢復せしめることである」

○婦女子と運動

我國の婦女子を通觀するに下等社會のものは勞働充分なりと雖も、中等以上に至りては一般運動その當を得ず、身體强壯を增進し筋肉を强固ならしむるは手業に若くなし深窓に生長せる貴女子に至りては運動不足なるが爲め分娩を見るに概して難産あるものなれば必ず適宜の運動を心がくべし第一朝夕箒又は播塵を把りて

運動に換ゆるは運動の一法にして我國にては少女の毬を弄するは殆ど習慣となれりこの技や四肢の運動をなし筋肉を強壯ならしめ皮膚をして潤美となし病害を驅除し骨盤の發達は分娩に適切とならしむこれ生理學上の證するところなり然れども過度の運動は却て害あり又食後直ちに運動するは消化を妨げ却て害ありと謂も習慣となりしものは大害なしと云ふ、さもあるべし。

金に飽きたる米國婦人などの花に費やす金は夥しきものなりとぞ。此頃新約克の富豪の夫人宴會を開きけるに、食卓と客間を飾る花の價に四千弗を費やしたりとぞ。有名なる金滿家ヴアンダルビルト夫人の如きは來客少なき平日にても、一ケ月千弗位は始終花屋に拂ひ居れば、客多く宴會しげき時節は入費も思ひやるべし。「オルチット」など云ふ蘭の花に似たる花は、一個二弗もすることとなれば、或婦人の此花を以て園遊會に食卓の上にさしかけし大傘幾個を盡く此花にて飾りしなど、其の費用の夥しきを知る可し。

○盜品の發見奇事

露西亞帝アレキサンダー三世戴冠式の時倫敦タイムスの新聞通信員としてモスコー府に赴きたりしチャーレス、ローエ氏が近頃テムプル、マガジーンに寄せる一奇談あり氏は記して曰く戴冠式の當日予は式果てゝ旅館に歸り疲勞の儘睡眠中机上の懷中時計と手帳とを何者にか盜み去られ翌日眼を覺ましたる後ソレと知り種々詮索したれとも竟に之を得る能はず愈々本國に向て出發する日に迫まれり其日予は尙は臥床し居たるに予が室の戶を叩くものあり尋で入來れるを見るに客の服の裝飾によりて其人はモスコー府知事の副官なりと知られたり予は怪訝の念に堪へざりしに之にも增して驚きたるは餘事にあらず其人はポケットより曩に予の盜まれたる時計と鎖とを取出し是れ足下の品にあらずやと云ひ扨その說明したる所によれば予が竊盜に逢ひたる風說は露國新聞紙に記されたるに其記事は偶然にも露帝の目に觸れ帝は直にモスコー府知事に此事を通じタイムス通信員は朕の賓客なり費用と手數とを厭はず其時計を搜出さゞるべからずと命じたり、由て知事は

モスコー府の盗賊の巨魁株數人を目前に呼び其方共は同類が他の品物を盗み之を始末するの方法など知らずと云ふてとあるべからず若し時計の在家を速に發見せざるに於ては其方共を犯罪の當人と見做し西比利亞に放逐すべしと嚴かに言渡したりと云ふ然れども此時計は何者が如何にして盗み取りたるや一旦盗賊の手に入りたる時計が何處にありしや如何にして發見されたりや予は今に至るも尚は之を知る能はずと。

○山家の女

中央鐵道開通して甲州の事情の新聞に見ること繁くなりしが、玆に俳人子規隨筆の中に同地の婦人生活に關する事を記したるものあり婦人の職業を見るのよすにもとて玆に其一節を出さん、「甲州の吉田から二三里遠くへ這入つた處に何とかいふ小村がある。其小村の風俗習慣など一五坊に聞いたところが甚だ珍らしい事が多い。一二をいふて見ると。

總て此村では女が働いて男が遊んで居る。女の仕事は機織りであつて即ち甲斐絹を織り出すのである。其甲斐絹を織る事は存外利の多いものであつて一匹に二三圓の利を見る事がある、尤も一疋織るには三日程かゝる、併し此頃は不景氣で利が少ないといふ事である。一家の活計は其で立てゝ行くのであるから從つて女の權利が強く且つ生計上の事に就ては何も彼も女が辨じる事になつて居る。男の役といふは山へ這入つて薪を取つて來るといふ位の事ぢやさうな。

甲斐絹の原料とすべき蠶は矢張其の村で飼ふては居るが其だけでは原料不足なので、信州わたりから絲を買ひ入れて來るさうな、其出來上つた甲斐絹は吉田へ行つて月に三度の市に出して賣るのである。

甲斐絹のうちでも蝙蝠傘になる者は無論織り方が違ふ。

機を織るものは大方娘ばかりであつて既に結婚した程の女は大概機を織る迄の拵えにかゝつて居る。其が爲に娘を持つて居る親は容易に其娘の結婚を許さない。成るべく長く(二十二三迄)も自分の内に置て機を織らせる、其結果は不品行な女も少くないといふ事であ

る。

古來の習慣として男子が妻を娶らうと思ふ時には先づ自分の好きな女に直接に話し合ふて見る其女が承諾したならば其から仲人の如き者をして双方の親達に承諾せしむるのである。女の親が承諾しないといふやうな場合には男は數多の仲間を語らいて其女をかどわかし何處かに隱してしまうといふやうな事がある。併し此頃ではさういふ事が少くなつたさうな。

此村は桑園桒畑抔は多少あるが水田は無い、又燒石が多くて木も草も無いやうな處がある。

此邊の習慣では他人の山林へ這入つて木を樵つて來ても咎めないのである。柿の木などがあれば其柿の實は誰でも勝手に落して食ふ、干柿などがあれば其干柿を取つて來て食ふ。さうして何某の內の柿を取つて食ふたといふ事を公言して憚らないさうな。

此邊は勿論食物に乏しいので、客が來ても御馳走を出すといふ場合には必ず酒を出すのである下物は桒漬位である。女でも皆大酒であるといふ事ぢや。

此邊は固より寒い處なので其の火燵は三尺四方の大きさである。併し寢る時は火燵に寢ないで別に設けてある寢室に行て寢る。其の寢室は一人一人に一室づゝ具はつて居る狹い暗い處であつて布團は下に藁布團を用ゐ、別に火を入れる事は無い。さうして其の布團は年が年中敷き流しである。(寢室の別に在るところは西に似て居る)。

寢室に限らず餘り掃除をする事がない

客が來ても客に煙草盆を出すことは無いさうな若が卷煙草でも飮もうと思へば其處にある火燵で火けるか、又は自らマッチを出して火を附けるかす其吹殻の灰を疊のへりなどへはたき落して置いて平氣のものである。

前いふた樣に機織の利が多いのに外にこれといふ贅澤の仕樣も無いので、斯んな邊鄙の村でありながら割合に貧しくないといふ事である。

此村には癩病は多い。其が爲めかどうかは知らぬが、今迄は一切他の村と結婚などはしなかつたといふ事で

ある）中々に面白き風俗といふべし。

○レモンの効用

レモンは誠にいろ〳〵の効能ある果實にて、顔に少さなつぶ〳〵のできる人は、一週に三度づゝもレモンの汁をぬれば奇麗になをるのみならず、色を白く滑かにし艶を生ず。餘り外出せざる婦人などは額鼻唇等血液の循環わろく垢しみ易きものなるが、これは石鹼などにてはなか〳〵落ちず、されど此汁にて洗へば直ちに奇麗となるものなり。西印度あたりにてはレモン湯ありて、身躰を清浄にし强壯劑として最も効ありといふ。沐浴に用ふるには先づ五六個のレモンを各二ッに切りて水の中に入れ置き、入浴三十分前に取出すべし。又食後コップ一杯に一匕のレモンを入れて口中をそゝげば、葱煙草等の臭氣をさり、清涼防腐の効あり。又髪を洗ふに用ひて最ともよし。先づ髪を微温湯に浸してレモンにて擦り、のち又微温湯にそゝげば毛髪の艶を出し、よくふけ、あぶらを去る事石鹼などの及ぶ所にあらずといふ。

○夏の飲料

勞働者などは多量の水を服用するも大害なしこれ汁となり發すればなりされど婦人の如き家にあるものにして猥りに多量の水又は氷水等を服用すれば輕くは腸胃加答兒重きは「コレラ」「チフス」となることあり、注意せざる可らず、又汲置の水は必ず用ゆべからず汲はてとてあまりよろしからず、一度煮沸して用よもしその間に合はざる場合あれば「コップ」一杯に稀鹽酸二三滴を加へて用ひられよ。

氷水は寒冷にすぎ齒痛を起し又は胃腸を害することあるを以てよろしからず少量を清水に加へて用ひよ

「ラム子」も近來非常にあしきものなり。玉ラム子一本を飲む刺激する甚しよく見るに硫酸を以て配劑せるものなりき、これは大に害あり併し普通これを撿定し難きを以てなるべく手製のものを用ふべし。

適宜の「コップ」に適宜の砂糖（單舍利別なれば一層可なり）を加へこれに清水を加へ別に重炭酸曹達を「コップ」に溶解せしめ又別に「コップ」に枸櫞酸若くは酒石酸を溶解せしめ重炭酸曹達と酒石酸なり枸櫞酸なりを三と一との比に滴加せしめよ最もこの二劑は何れをさきになすも可なりこれは夏中客來の時は細君の御手際にもならんか



# 才媛詞藻



《天》濱　丹後國宮津町字 鶴賀山崎發文方　片島小やぎ

をり〳〵は網にひらめく魚しろく
　人影わはし九十九里の濱

《地》螢　埼玉縣北埼玉郡屈 津村百八十五番地　羽島松子

初螢逐ひし昔を思ひいで〻
　そゞろ都の君ぞ戀しき

《人》濱　北總　白ゆり

さりかねてた〻ずむ濱の夕もやに
　君います船の影ぞきえゆく

○選者吟　左川子

螢飛び蛙きこえてふるさとの
　川べ戀しきよはにもあるかな

## 秀逸

濱　明石町　原米子

とことはに枝さす松もよる浪も
　まよくつきせぬ濱の眞砂地

螢　豐前　伊東けい子

そことなく川の流る〻音はして
　夕月わはく螢とぶなり

濱　熊本　羽田豐子

夢なれや月にうかれて明石がた
　君とまひこの濱のあけぼの

螢　長野　竹下もと子

いづこにかほたるよぶらん弟の
　つくりし籠はかたみとなりぬ

濱　長野　さくら子

ひらさきの潮ゆた〱松一里
眞砂くだくるあけぼのゝ濱

螢　小石川　渡邊すみ子

ふる里の門の小川やいかならむ
螢とひてふ學びやのまと

濱　山口　齋藤秀子

菊が濱志都岐の山に夕日落ちて
小畑へ急ぐ白帆うするゝ

螢　明石　原米子

あけまきのおひつゝとよむ聲はして
里川つたひ行くほたるかな

濱　岩代　伊藤よし子

濱一つ又た濱一つ横に見て
いつしか船は沖になりける

螢　眞岡　山邊春子

うちなびく柳の影も見えずなりて
螢あやなす夜となりにけり

濱　熊本　金津愛子

語りあひて君と舞子の濱つたひ
月にふかしゝ夜半もありしを

源實朝　河内　大矢たね子

鬼あざみしげれる中に一本の
なでしこさけりかまくらの原

螢　岡山　豊崎ゆかり

涼しさを人にさゝげておのれのみ
もゆるは夜半の螢なりけり

濱　上總　齋賀うめ

夕しほのあらひ清めしあと見えて
今朝わたらしき濱のまさご路

源實朝　横濱　長谷川さく子

浮雲を拂ひもあへず月落ちて
まことの影を知る人もなし

濱　土佐　ますえ

忘れては稚兒かいいだき急ぐなり
迎へなれにし夕ぐれの濱

螢　東京　奥野咲子

このうちにひそむほたるはうき草の
しげみかあたりこがれわふらむ

源實朝　千葉　櫻田靜枝

山はさけ海はあせなん世なりとも
君が言の葉いかで消えまじ

## 佳調

濱、螢、源實朝

ありし夜のその夜にゝたる由井ヶ濱思にたへぬ吾が思かな　秋田　佐藤千代能子

●

思はずも友の門まで迷ひ來ぬ宇治の川岸螢迯ひつゝ　京橋　吉田竹子

●

位やまのぼりつくしてまたさらに死出の山路をふみわけし君　上總　米良錦

●

ふれのうちの追分節も身にしみて蹄風さむしゆふぐれの濱　大阪　田中喩璞子

●

闇に虹のしづみしさゝ川の青葉堤は螢になりぬ　三重　伊藤ふさ子

●

いく代へて春を忘れずつるが岡をしみし梅の香り匂ひけり　香草女

●

苫船の夕餉の煙低う見ねて眞砂路十里夕ぐれの濱　本郷　栗林はつ子

●

夢とのみ思へど稚子は世にあらず今年さびしく見ゆ螢かな　三重　桑鵬雲子

●

一撃に千代の恨やこもるらん鎌倉山に暗くほとゝぎす　麴町　上山貞子

●

砂白き濱の夕風露ちりて松原十里月になりゆく　伊勢　なてしこ

●

去年ゆきし妹が愛するほたるかご誹のみそのに螢いますや　秋田　吉村まさ子

●

絕ゆぬべき流としりてくらゐ山高きに道をいそぎたりけん　牛込　鈴木吟子

●

夕立の晴れしみ空に虹たちて濱に遊べる人うつくしき　大阪　田中しゆん

●

ゆくりなく螢追ひつゝ來りけりつれはちらふ君が門邊に　京都　青柳紫子

●

鶴が岡千代のよはひのはかなさをことの葉ことにしのばるゝ哉　明石町　原米子

●

只ひとり熱海の濱にてる月をながめて泣かん頃とはなりぬる　日向　山下梅子

●

川添の道たがひけむ二ッ三ッ螢大路に螢とひこふ　京都　新妻

●

つるが岡のいてふの椅月すごし君がうらみや猶こもるらん　長崎　ふよふ

●

いさきませともに語らむ凉風に蹄濱一里夏の夜の月　長州　智子

●

鯛寄にあれし田の面のゆふやみをこゝろ有りけにとぶ螢かな　京都　三の宮露子

●

位山のぼるこゝろは一すちの髮をかたみとおもひしりきや　越後　坪井わか子

●

賤の男に踏ますも惜しゝ白妙の濱の眞砂のうるはしくして　岡山　在本眞喜子

●

亂れ飛ぶ螢の影をながめつゝ草津へかへる馬と興作と　山本藤子

●

若宮の銀杏のもとに來て見れば君が姿の面影にたつ　米澤　佐藤みとり

● 麹町　神谷よし子
由井ヶ濱はまべをちかみをさなごの目覺めの側の貝拾ひする
● 波津子
小夜ふけてひとりはしゐの庭もせに靜けさ添てとぶ螢かな
● 大阪　くさなぎ
鶴か岡のあらしに花はちりぬともかをりと共に殘る昔の薫
● 長門　今藤欽子
黒ふれの髪ひしあとも白浪や音しづかなる夕々眞濱風
● 芝　川井きく子
橋の上を螢追ひゆく少女子のもすそ涼しく河風ぞ吹く
● 東京　美野咲子
いさましき大和心の花ちりて獨こそ匂へ殘る昔の薫
● 神奈川　川井あさ子
あまの子が網ひく聲も靜まりて夕月白し濱の眞砂地
● 弘前　平山ちい子
ときめきし長者が家はかたぶきてあれたる庭に螢とぶなり
● 埼玉　三上靜子
千とせまで醉ひへぬへき鶴が岡に夕の露と消し君はも
● 麻布　蜂須賀あい子
夕烟あまがとまやにたちそめて濱べ三里は日も暮れむとす
● 高知　北井すて子
まくら邊に螢籠をきてほゝゑみて弟はうせぬ小雨ふる夜に
● 眞岡はな子
君しまさば寄せくる濱の路もなくきよき流れの絶ゆざらましを
● 攝津　つる子

濱づたひ貝ひろひゆく乙女子のたもと涼しく潮風の吹く
● 芝　つた子
あつめてもふみよむ人はなくなりて影のみめづる世とそなりぬる
● 福岡　とも子
みなもとの末のながれもしら浪の夜半のあらしにきこゆしあはれさ
● 東京　かも子
しら浪のよせてはかへす濱の邊は盛なりけり時ならぬ花
● 弘前　平山ちい子
背の君とそゞろ涼みの川堤螢流るゝ青柳の風
● 牛込　村松三次子
位山のぼりて千代と鶴ヶ岡祝ふこゝろもあだし野の露
● 名古屋　鈴木禮子
母君の逝きましてより小貝籠に滿ちし時なししほにおはれて
● 大阪　堀塲うさ
汐あみし人はかへりて住吉のうらさびしくも螢とぶなり
● 岐阜　山内ゑい
敷島の道ふみわけしますらをがよるのあらしにあふぞはかなき
● 小石川　しらゆき
竿をかたに今日も背の君ゆきましぬ濱の夕潮たちいでゝ待つ
● 愛媛　熊代すゑ子
背戸川に夕食の器洗ひ居れば清き水の面螢流るゝ
● 福島　齋藤こずゑ
水浴みし勿來の濱をとめくれば昔をかたる關の松風
● 淡路　しま子
打ちみれは夕だちはれしちぬの海に白帆かゝげてかへるもゝ舟

●君がふれゆくへ知れずと聞きじより七日を濱に泣きあかしけり　日向 山下玉子

●そのかみにならへと老のあやぶきに螢あつめて孫におくりぬ　大阪 田中瑜毬子

●やまひいねてわが背と二人語りつゝはまべあさりしゆめを見しかな　長門 杉山たくの子

●思はずもほたるおふ子に打ちまぢり夜を更かしけり川ぞひ堤　長門 今藤欽子

●妹と濱べに出てゝ見ひろふ秋にかろく夕風の吹く　山名 滑川さえ子

●ものゝけのいつろけはひの柳原はたるおひつゝ過くろうなゐ子　岩代 菅野和子

●亡き人のたまかと見ねて新しきそとはのかけに螢とむなり　麹町 某女

●濱風やたつとしもなき小波にくだけていづる夕月のかげ　岡山 橋本芳子

●茂け合ふ草の若葉に露見ねて涼しき窓にとぶ螢かな　本所 酒井鈴子

●なみの上も黄金まはゆく色めきてはま風涼しなつの夕暮　伊勢 池本しづ子

●夏深きよもきか中の眞清水の行へしらせて飛螢かな　長門 内田まし子

●立ちならぶ濱の松原かげ清み涼みがてらに貝ひろひせん　伊豫 片山孝子

## 和歌兼題

蓮
山居眺望　（〆切七月十五日）
軍艦　（披露八月五日）

## 文章

▲家庭日記　（〆切六月十五日）
▲寫生文　（披露八月五日）
▲雜文

▲各地料理（募集）

**投書文規程**

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ケ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界させらるべし▲投書原稿一切返却せず

# 夏の夕

伊勢　なてし子

堪え難かりし暑さは、一しきりの村雨に洗ひ去られて、名殘なく晴れ渡りし夕べの空心地よう。門田の早苗そよ〳〵と波立ちて豐かなる世を囁く嬉しさ。籬にかゝりし虹の橋は遠き〳〵尾上に薄れ行きて、聖けく匂ふ豐旗雲の搖曳も次第〳〵に光を收めつ。軒端飛交ふ蝙蝠の影より、樂しみ多き夜の色のひろごり來れば、涼みする子の浴衣美しう、紅き、白き、扇ども弄びて、あどけなき物語に自然の興を添ふることよ。

と見れば、野末の一里は、早や蚊遣火の烟に暮れ初めて、安息に勇む牛の聲幽かに、桔槹のきしる音やうやう途絶えて、鮮やかなる月は山の端にほのめきぬ。

あはれ、いとしの弟よ。今宵は線香煙火の遊びを止めて、淸き川遊を逍遙せずや。

見よ。彼の汚れなき露を踏みて、詩の神のみ手を觸るゝを厭はずや。

いざ行かんとよ。

さらば行かん。

嗚呼、彼の汚れなき露を踏みて。

# 飯事遊び

大阪　田中瑜瑳子

風通りよき道具藏の石段には小さき鍋釜鉢を初め世帶道具一式じゆんぢよ宜く飾られて朝顏の染付の小鉢には撫子美人草乙女菊など美しくもられぬ其前にはあらき、むしろ打敷て妹の廣子、藁を頭に出入の小娘二三人打興じつゝ何やら、いかがはしげなる樣子、

大和だましいの丸をこめ一度にづどんとうつてやる、と勇しき軍歌謠ひながら酒藏のかなたより足並正して出で來るは山羊にまたがり、ぶりきのサーベルがたつかせて意氣揚々たる弟の茂雄を前に續て旗持ラッパ吹きあとはお手の物なる三尺計の青竹を鐵砲の代に肩にのせたる一隊の勇士、

おや兵隊さんのお宿りだつせ・と誰やらの聲の終らぬうちに早やとや〳〵とむしろの上に大將も雜兵も共に座しつゝ、あゝ暑い今日の演習は格別だつたね、と口々に云ながら兵兒帯で汗拭くもあれば桐の木に山羊くゝり付るもあり、お暑おましたやらう、とさすがは女の子の後より小さき團扇で風送りやるもおかし・何にもおまへんけれどとずらりと前へならべし御馳走のかず〳〵卯の花に紅黄の薔薇きざみてふりかけしお酢よもぎの餡餅、小梅、苺に桑の實の組肴、木の葉をうらむけにのせたるお燒物、

やあ大變なご馳走ぢやないかむゝ苺が甘まそーだぞ一つもらはう、それよりや桑の實が宜よ、僕は口がかわいてたまらないから青梅にしやう、みる〳〵うちに折角のご馳走はあとなくなりて猶物たらぬ樣子なり、

嬉たる此樣はるかに眺むる妾はそゞろ昔の春おもひ出されて懷舊の情に堪えず、われのかゝる事して遊しはいまだ昨日の如思へるに早くも母と脊くらべなすやうなりけるとは、げに三日見ぬ間のうつり變りは花のみかはなぞと思ひつゝ尙もかなたをみつめ居れば何心なく此方をむきし薫の我姿みとめて、まあ姉さんがホ……さつきから其所におこしなしたの、ほゝ笑みつゝさけぶ妹の聲に驚きけん彼等は同時にふりむきて、やあお孃さんだ〳〵何かまた話を敎えてもらはうぢやないか、おい君たのみ給へ姉さんだよ、ふむよし、と茂雄はうなづきつゝ、姉さんそんな處に立てずと爰へ來て皆に話を聞して下さいな。

妾は遂に拙辨ながらいつぞや女學世界でよみしかのジヤンダークの物語なしやりぬ、彼等の輝く線は妾の舌頭に集りて小さき兩肩をそびやかしつゝねつしんに耳かたむけゝり。

あな勇しき少年、やさしき少女、これ未來の日本帝國軍人、後日の良妻賢母なり此中より第二の秀吉、ナポレオンも、楠夫人ナイチンゲールの如き賢母女丈夫の出でんとも限らざるなり・希望に輝く少年！少女！あゝ神よ彼等の多望なる前途をまもらせ給へ。

## 下等車室

和歌山　藤田いさを

文明利器の汽車に三級の車室あるこそ心得ね。

我れは上等車室に乘るを好まず。是れ高貴の方々乘り給ふ所なればと遠慮せばなり。中等車室なほ嫌なり、そは藝妓、墮落議員、俳優、詐僞師、放蕩息子等最も多く乘り、香水、コスメチック、ハイカラー、鼻眼鏡被布、絹服、金時計、金指輪、溢るゝばかり跋扈する所、恐ろしければなり。下等車室、何ぞ其の名の卑うして其の實の愛しきや。我が乘るを好むはこゝにあり。見よ、奢侈こゝに無く、倨傲此になく、柔弱此になく、虛飾こゝになく、國家の元氣、國民の精髓、剛直、質朴、堅忍不拔こゝにあり何ぞ愛せざるを得んや。

我れは只、蜿々たる長蛇の如き車室、皆、下等汽車のみならんことを願ふもの也

## 女生徒の服制

沼津 紅葉波子

髮飾り衣裳等に氣をもみて。智識の半分。財産の半分を外貌のかざりに入るゝは。女學生に限らず一般婦女子の常ならんか。殊に我が縣下各種の女生徒は尤もこの弊風に染まりて。學校を以て服裝の共進會のやうにおもひ。髮のゆひかたか惡ひから缺席するとか。衣裳が氣に入らぬから。卒業式に出られぬとか。さまぐの口實を設けて。父兄を責むるもの多く。瘦世帶のものは。到底女子を敎育するとわたはずとの嘆。當地到るところに聞てゆる有様なり。尤もいづれの學校にても。その規則の中には。衣服は務めて質素たるべし。との心得を記るさゞるはなけれども　實際に於てはさらにその効能をあらはさゞるこそ。嘆かはしけれ。某視學これを嘆じて曰く。質素の風習を養成せんとならば。すべからく各學校において一定の制服を設け。必ずこれを着用せしむべし。男生徒の制服は。醜態を防ぐにあり。女生徒の制服は。華奢を制するにあり。目的は替はれども。歸する所は一なりと論じたりと。或新聞に見えたり。駿東高等女學校生徒は結髮を一定し。加ふるに。冠帽と靴とを禁じ。純然たる日本風に制定せりと。おもふに駿東の女生徒は。一段の氣量を増さんか。

# 雨

滋賀　細野かう子

雪か雲かとわやまたれし梅櫻杏の雨にうるほひたる姿いとえんなれと色のあせゆく惜しさましてながめをへぬに。めなれたる庭も小雨ふる日は珍らしう若葉の緑り色そへたるにつぼすみれの雨にぬれつゝ匂ひたるいひしらすいとゝうれし。折り〳〵は椿の花の落る音してわたりお暗き春雨ふる夕暮蛙の聲の聞ゆるなどいと物すごき心地せらるれと晴れたる間にはの〳〵と花の梢に匂ふ月影いとゆかし。むしあつき夏日の夕立稲妻の光雷の音のおそろしけれと晴れし後木蔭にいこへる時の心地よさひるのあつさも忘れられて涼し。若竹を洗ひて落る雨の雫百合の花雨を帶びて月宿したる見るからに心地よき。紅葉を誘ふ秋雨は情ふかき歌人に哀を催さしめつゝれさせてふ虫にひかれて冬の用意をさ〳〵怠りなきに降りつゞきてははしためのいかりにふる若しそれ大雨を流すときは數日ならずして堤きれ橋はをろか田畑家屋をも流し見る間に青海原と變りはつゝいまはしく恐ろしき限りなれと雨新の聲始りてはいと心細し。

# 港頭の朝

松濤女

朝の清め終りて後松子をそゝのかして程近き諏訪山へと散歩しつ朝の氣清き頂のベンチに腰を下しぬ。

波静なる茅渟海はやゝ曇りたる空の例よりは霞淡し東南遙に幽かに打續くは泉州わたりなるべし西の方近く海煙模糊たる間には淡路島いと明かに浦傳なる清き濱邊は須磨鷹取わたりとぞ松子は敎へぬ眞帆に片帆に漕ぎ行く船の遠きは宛然薄き墨繪の如く近きは船歌も聞えつべき許り港頭に集へる商船郵船の檣頭林をなして其數かぞふべくもあらず吐き出す黒烟風に靡きていひしらず勇ましき景色なり。

東の空やゝ高う雲の間をもれて輝き出たる幾條の金線は次第に晴れ行く海づらに金波紅波を漂はしつ泊れる船の何れも朝日受けたる樣、況して折から碇船中なる富士艦の雪の如白きそが船體に映じて光輝燦然壯觀限りなし埠頭を放れ行く黒船の滿船朝日の光浴びて出行く姿の勇ましく見る〳〵遠かり行きて一條の船路ぞそが名殘

りなるやがて和田岬あたり今や入り來る白船のまともに美しき朝日をうけて波を蹴りつゝ進み來るなど此好景を繪にも寫さまほし暫しは我を忘れて眺むる折しも汽笛の聲に驚かされて其方を見やれば今し神戸ステーションを放れたる汽車は市中を横ぎりて宛然長蛇の如く見えつ隱れつ三宮指して進み行きぬ。

再び海の方に目を移せば日漸く高く昇りて今や和田岬なる舊砲臺をば照しつやがて轉じて白く鮮かなる兵庫の炭庫に其光を落しぬ。朝霞漸々晴れ行きて見渡す限り海も山も樹も船も皆此美はしき朝陽に浴して一入の美を添えて我等を迎ふるが如く覺えて煩ひ多き此世の事をも暫は打忘れつ心地あやしうすが／＼しうなりぬ漸々時移りしより惜しき此景色に打別れつ「觀艦式」の歌など共に口ずさみつゝ袖を列ねて山を下りぬ

## 雨後のけしき

岩代　横山きつ子

降くらしたる五月雨も、天津日にや恐れけむ、やう／＼晴渡りぬ、雨後のけしきをながめんとて、朝食を終へて、日頃むつべる、友がきとうちつれて、山家の野邊を見はたせば、とほき山々の峰にかゝりし雨くも、ぬぐいし如く、きゆるにつれ、四方八方に生立るくさき、遠くへだちし村さとまで、あり／＼とあらはれ、日の光り、まばゆきばかりにてらしたる、其けしきのうるはしさ、たとうべき物なし、かゝるさまをば、誠の日本晴れとや云ふならむ、ことに、一しほたのしくゆかしきは、田うえ歌にて、少女等が赤きたすきをかけて、うえてはうたひ、こゑをもそします、うたひつゞけ、さながら、天女のくだりし如くに思はる、かゝるほどに、日光は益々高くさしのぼり、うえしさないに、みどりのいろ深く見へて、國の富こそ知られけり、かくのごとくうるはしく、榮ゆる御國故に、畏こき、御祖の神も、豐あし原のみづほの國と、名付玉へるもうべなり、そらをとぶすゞめは、常のこゑと變り、誠に愛らしうさへづりつゝ松、すぎ、ひのき、などをかけあそび、たはむれ、あめのはれしをよろこぶなるべし、山家は、さびしきときは、さびしけれど、又かゝる景しきは、都會には、あらざる事なるべし、などゝ、かたりたるほどに、思はづ、あそびすごし、家にかへりて時計を見れば、十時といふにをどろきつゝ、家事にかゝりぬ、いけのみぎはに、咲きしあやめ、あまり、ゆかしきまゝに、二

本みもとたをりて、友の御もとに、まいらせぬ、

## 我家の眺望

ゆづる

住めば都とは誰が言ひ初めにけん言の葉や實に草深き山陰の庵人氣稀なる里居たに馴るれば中々に都にしらぬ心長閑さもある物をこゝは昔しも今も其名にしるき神奈川の里元より萬づ足らはぬ勝なる借住居家は平沼に沿ひたる幾尺の崖上に在れば廣濶なる芝生の園冷然たる泉水眺床しき庭面瀬とてはなけれど水天其と分け難き茫々たる海原につゞく横濱灣の水漫々として數しれぬ巨艦大船檣交はし僑影ゆたかに時ならぬ砲の音汽笛の響黑暗々たる煙は空に漲る何れの國の船舶出入をや報ずらんいといさましきに目もはるなる碧の洋上消えては見ゆる白帆の影實に面白の景色哉灣沼の境を縫ひて汽車の轣轆の音日に幾回といふをしらず萬籟関として草木も眠るらん眞夜中にも折ふし聞ゆる貨車の響實に開け行く代の事の繁さもおし斗られてなん分けても飄々たる春の朝風霞を拂ひて遙か東天に金色の雲匂ふと見る間もなくて壯嚴なる影まばゆき斗りさし上れば海は錦の波をたゝへ風は慈愛の清氣を傳ふ夏は夕立の雲遠くなるまゝに名殘涼しき夕陽のかげ南本牧の岬を左に淡々たる房州の山々薄墨もて畵きたらん如くかなたにほの見えてさだかなりし野毛掃頭の山々又た手にとる斗りなるを遙か西の空には富士の遠峰嚴然として夕日に匂ふ氣高さ仲々にゑがゝむ筆のなきぞ悲しまる月すみ渡る秋の夕吹雪にくるゝ冬の夜の樣とりどりの捨て難く桃咲き匂ふ彌生の頃には大汐干待ち得て里のうなゐ少女らとりどりの姿作りて此沼に下り立ち貝拾ふ樣の又なくおかしきなど仲々に都の人に見せまほしき心地ぞせらる後の丘を過ぐれば幾町つゞく田畑のゆたかに花紅葉の眺望さへ乏しからずと聞く物をこゝ古しへの神奈川驛の本道なりとぞ近きはたりの翁が得意顏にありし昔の都路の樣など語りいづるも仲々に興ある物ぞかしあはれ斯る眺望や樣や名ある風光に富む地に比べては何のおかしき事もなけれど誰に憚る物もなく朝な夕なに一家樂しき團欒の裡我物と獨り占めても樂しむ事の嬉しくて來ん休暇にはあはれ涙と共に都に殘しつるかの友の誰彼招ひ參らせて一夜を語り明しなば實に夏なからまじといざや採る筆暫時止めて眺むればさとふきくる風いと涼しくてまた

宵闇の垣根に見えては消ゆる螢のかげいと哀なり

## 創校紀念日を祝ふ詞

富山 松田つや

あはれめでたしや今日の席今日しも本校創立紀念日とて此にそが祝會を催ふされぬ時しもあれ五月の半なれば見渡す限り白紅の躑躅今を盛りと咲きほころびて今日の席に一入の花を添へ見をろす四方の稲田には老いたる若き田植女のまだうら若き緑の稲をゆがみやせんしぼみやせんと心して植うるなり豊けき實りを見むとてや實に今日の會にも因みて一入感情をましところにほぎ歌ふ聲はそよ吹く風のまに〳〵静けき呉山に鳴り渡らんそも女郎花の一時をくねるといひけん昔は知らず今や學術技藝日に月に進み平和の戰は東西に絶えざる今日如何で物學びせずして其任務を全うし得べきまいて女子は長じて一家をとゝのへ夫を助け亘第二の社會にたちて雄歩すべき子女を教養する重き務めを有するに於てをや

古より一藝に達し一枝に熟し名を後世に轟かしたる人にして妻の助をからざる人やはあるまじと其子女を教育するにわたり習慣は第二の天性なりとせば偏に母の手に鑄造せらるゝものといふべしされば母賢なれば其子の賢なること古今の實例に徴して明なり而して社會の光は家庭の影にしあれば其隠映明暗はたゞ一つに吾人が家庭の清濁により相消長するものなり誠や先哲が治國の本は齊家にありといひりしも宜なるかなあゝかゝる大任ある女子をして如何で昔日の如く學ばずして可ならんやされば女子教育の如何により其國の盛衰に係る事實に多大ならん聞く佛帝拿破崙かつて或婦人にむかつて社會の德義を進めんには先づ何事より着手せんと問はれしにたゞ(母)なる一語をもて答へられき此に於てか大に悟る所ありて直に女子教育の擴張を計られきと實に理りなんめりされば此の理のあまねく行はれてより

畏くも我皇后陛下をはじめ女子教育を奬勵し給しかば遂に今日の盛んを見るに至りき幸に本縣にもさる有志の東奔西走して遂に去んぬる明治三十四年五月十六日本校を開かれぬさるに月日の流れ早くしてはや三年の星霜を經て今日此にかく盛大なる會を催されぬ嬉しといふも言葉足らずめでたしといふも心殘れりいでやかゝるめ

でたき校をしてさゞれ石の巖となる迄も限りなく呉山の躑躅の七重八重にもまして盛にみちたらひよと今をことほぎ後をこひのみてかくなん。

## 野のこゝろ

和歌山　藤田いさを

○燈火

家路はまだ遠し、日は落ちぬ。たど〳〵しき夕ぐれを麓の道たどり來し時、ふとかなたに豆の如き燈火二つ三つ閃滅するを見る。夕やみの中にも一きは黒う立てる小やかなる農家のいくつ、そが窓をもるゝ光ぞ。これ等の火の下には、一家團欒、樂しき夕げの箸やとる。喜色滿面、孫笑へと云ふ老農夫やある。妻の手酌に一日の勞を忘るゝ夫もあらむ。平和の光りの紅一點二點、樂しからずや、愛らしからずや。とばかりイみて思ひ入りしが、聯想いつしか、人の血をすゝり、僞善を議し、詐僞を謀る罪惡のこゝろのみ高き塲裡を照す電燈のまばゆさに至り、悚然として目を掩ひぬ。見かへり見返り行く。野路の末の燈火よ。光の薄きを耻づる勿れ。身の小なるを思ふ勿れ。とこしへに平和なる家庭を照すべき己が天職をな忘れそ。

○煙

黒朦々天日を掩ふ工塲の煙ならず。其の面の物はしげに、色あせて眉ひそみ、其の目には偸盜の如き光ある人面獸心の怪物の腹肥さん爲めに炊ぐ煙にもあらず。こは只、美食ならずとも、己が勞苦を以て得たる眞の平和の賜を朝げ夕げの料にど、親の爲め、子の爲め、夫の爲め、思ふ心のあつきより燃え出づる一縷の煙ぞ。小川の流れに沿うて、點々立てる農家より・徐々悠々、末は雲と消え行く幾すぢの煙、朝夕に望む時よ、高き屋にあらねど、卑しき身にしあれど、歡喜の思ひ、そゞろ塲へ難き哉。

# 螢

静岡　栗田よし子

小窓の下に文繙きて涼しうそよ〳〵と吹き來る夜風を友として樂しき讀書に餘念なき折しも池の邊に幼き少女等の愛らしき聲して螢來ひ玉虫來ひと呼び叫ぶに心うばわれて窓押し開け庭の面邊を眺むれば五月の花は色濃やかに咲きみだれ大空は晴々として月の笑顔は涼しう冴へ渡りて夜景のなか〳〵に面白ければ何となう籠居のいぶせければしばし散歩せんと立出でゝそこはかとなくさまよへば水中に宿る月影豊かに舞ひ交ふ螢火何れも風情ありてげに〳〵ゆかしう心地よければ思はず時を移しぬあゝ妙なるかな金剛石の玉のごとく雲井に住める星の如く清き身の光りをいかにして得しや我も是れより文よむ業をはげまんと立歸れば文机の挿花に愛らしけの螢心ありげに一際強く光り居たりあな面なきよ恥かしの極みなり免してよゆるしてよ今我れは怠りて宿をわしを汝は我が文机の文を守りてらしてうますず學べかしとの告げなるらんげに得まほしきは身の光りにてよいかにか樂しかるらん螢の身は

# 夏の樂しみ

大阪　富士田章子

たれこめて春の行え知らぬまに、花染衣はいつしか色あせ、霞の袖もうつろいはてゝ青葉の梢涼しげに茂りたる、緑りの色深き夏木立の景色こそ、花にもをさをさ劣るまじけれ。前栽の草木とも雨を帯びて、梢の翠滴らむばかり幾多の瑠璃の玉をつらね、そを心ゆく計り晴渡りたる大空の月、斜に庭を射て萬顆の白玉、一時にイルミチーションの如き美観を表してわたりまばゆげなるも、一入の眺めにて面白くもまた趣味おほけれ、一雨毎に緑深くまさり行けば、花橘の追風につれ匂ひ渡りてそがえならぬ香を、文窓に送りきたるもいと快し。早苗とる頃田家は雨をまち、得て忙はしげなる中に、乙女の、青き水の面に紅裙の影を寫して働らけるもいと愛らし、此の頃遣り水の邊に螢の香もせでみだれ飛ぶを見れば啼く虫よりもいと哀れ深し。夏山の氣しき蒼翠たる高き峰相つらなりて雲上に聳えたるを見るこそ殊に勝れて神心を爽快にする眺めなれ、或るは親しき友どちと共に涼風を逐ひて松の木蔭に休らひ、手に〳〵冷き岩清水を掬ひつゝ遊ぶもいと〳〵面白き業になむ、あるは

泥の中よりぬけ出し蓮花濁りに染まずして紅白とり〴〵に咲きそろひ、そが清けき香の朝風に匂ひて芳しき人をしてそゞろに心深き思ひを浮ばしむる心地ぞする、日頃照りはたゝきて、身もやけんばかりの暑さいと苦しく、なか〳〵堪へがたきに夕立の一しぐれ音なへば、さしもの蒸暑さも夢の如く洗ひさられて名殘り涼しきもいと爽やかなり、げに心行くものは春の眺めにあらで夏の樂しみにこそ。

## ゆふべ

公文益枝

鳥は鳴いて緑の床にやすむべく森の方へ飛び行きぬ。青々と生ひ出でし稻田に彼方此方とはい廻りし早乙女の笠も、一群二群とかへり去りて、夕映あかゝりし西空はいつのまにか紫の雲たゞよひ、蛙鳴き立つ小田の縁より暗うなりぬ、門田の堤にさながらゑがける如く淡く〳〵、葉櫻の梢にかゝりし月かげ、やう〳〵すゞしげに冴へまさりて神々しうかゞやき出でし明星のまたゝきもいちじるしうなりぬ。あゝかくも美はしく樂しげの夕ぐれに、悲しくも亦思ひ起す昔の夕べ。

暮るゝを待ちかねて螢狩にうかれあそびし愛らしの妹や戀しの姉君、たへがたき夕、かの月清き堤にかたみになぐさめられて、木のまにさゝやく星の光にはかなき望をつなぎつゝ行末までもちぎりにしなつかしの友。

あはれ、つれなき嵐の二たび三たび、この夕ぐれにすさみくるひしより、螢は幾度か若草に、星は夜な〳〵み空にかゞやけど、いかにせむ戀しきはらからは再び……なつかしの友も亦。

あゝかなしき胸をおさへて門べに立つに、夕べほど我につらきものあるべしやは、

## 夏の山里

信州　小林つね子

牧場に行くなる童の草笛の曲面白う夜は明け放れて只見る前山滿眸の杜鵑花宛ら燃ゆらん斗りなり。山の端彩る紫の雲次第々々に薄れ行くあたり、殘月淡く若葉の梢に懸る。泉水のほとり逍遙へば半ば雨に褪せたる杜若

の水に映れるさま假令ふれば老女が薫失せたる我佛を鏡面に移してありし昔の春を偲ぶものゝ如し、折しも、物のけはひに驚きぬらん樂しげに泳ぎ居たる鯉緋鯉の勢よく刎ね上りて餘滴は杜若の花びらに止まり、恰かも紫の帛紗に水晶の玉を載せたらん如し。盆栽の百合の花、小首かたげて思案顔の婀娜姿をあはれ何にか假令ふらん。朝顔の蔓日毎々々見違ふ斗り伸び行けど、なか／＼に莟だに見出すべうもあらず、さはれ頓て咲出でなん其時よ脊戸の桔槹のほとりに置きて園女が心を忍ばんものを。あらかねの土も裂くてふ日盛りを、ものともせず道の邊に咲き出づらんを、心なき馬子に踏み躙らるゝ晝顔の花の運命いと憐れならずや。軒端に巣喰ふ乙鳥の雨の朝も風の夕も子故に撓まず餌をぞあさるめり、あゝ盲ひし雛の兒の軈て綠の翼濃茶の胸おぼろげながらも稍々親の姿を現はし來るに身心の疲勞も忘れて一しは忙しく翔け廻る其心には實に希望の光ぞ充つるらん。門邊に打出でゝ眺むれば今ぞ田植の眞盛りとて、このもかのもに白き笠五つ六つ斗りづゝ宛ら雨後の松茸のそれにも似て、折々妙なる聲に謠ふ鄙名物の田植歌、清き少女の口より洩れ出でゝ田守の神に讃美を捧ぐめり。夕暮近ふなりぬれば里川のほとり夕暗を綾なして飛び交ふ螢の影、その影を逐ひて少さき影の團扇片手に彼方此方に狂ふさまのいぢらしく、『はたーるよ、はたーるよ』の優しき歌も聞ゆなり、やがて山の端に月さし上れるに獲物も籠に滿ちぬらん家路を指して歸り行く天使の一群。いぶせき賤が家の蚊遣の烟怪しふ立ち上りて軒端にたなびきしに夕月の淡くぼかされたる却々に風情あり。隣家にて風呂立てたればとて呼ばるゝ儘に能りて馳走になる、半ば破れたる夕顔棚の下に自づからなる腰掛形の石に身を下して霎時湯上りの涼を納る、門田の蛙、自然の樂を奏で、遠ちの里川に鳴くは水鷄か次第々々に家路を近ふ、やがて月中空に懸かれる頃は我門の戸をも叩きて、さらでも夢なり難き此夜頃を仇せんなどおもほへつ。十時頃家に歸りて寢に就く、折しもあれや雲隱れにし月を掠めて血に鳴く杜鵑の一聲、これも又無限の詩趣ならずや。

## 納涼

周防　中谷鳥羽子

さすがに長き夏の日影もいつしか天神山のかなたに。しづみはてゝ空には清き星影三つ四つ。風は涼しく漣池

の面を渡りてえならぬ香を誘ふ心地よさ。いざ晝の暑さを忘ればやと幼き弟をいざなひつゝそこはかとなく歩み行く程にいつしか千歳橋のほとりにいたりぬ。同じ心にや橋の彼方には白たへの涼しき袂を風にはらませつゝ年の頃十五六とも思しき少女子の數多集ひて團扇片手に涼み居たるなり。

川向の岸にのぞめる家々のガラス障子にうつりし燈火の光其まゝに淸く流るゝ水面にうつりて美くしき光りを長く漂す狀なか〳〵の風情なり。

折しも後ろの方より氷々と叫ぶ聲もかすかに聞えて涼しげなり。橋の此方には深網がさに顏かくし身には白地の浴衣の筒袖に小倉袴をこだかくはきたる壯士らしき若者三たり。月琴に尺八。八雲琴を合して、勇ましき聲はりあげて流行歌ふし面白くうたふなど一入涼しげに覺ゆる折しもさつと川風おもむろに吹き來りていとも涼しく。晝の暑さはさながら。いづこにひそみたるかと思ふばかりの涼しさ身にしみ渡りて心地よきまゝ彼方此方を眺め居たる折しも東の山端より、ニヨッと出でたる月影の松の梢にかゝりし狀えもいはれぬ景色なり。あゝ此美くしき眺めよ。涼しき風よ。とこしへに我を慰めくれよ。あゝ此幼き弟も

## 今宵の嬉しさ

名古屋　長谷川　ちやう

うちつゞき降る五月雨のをやみなければ川々の水まさりてかの根なしぐさはゆくへも知らに流れゆかんばかりに淋しをさらぬだにいぶせきわが庵のさびしさいよゝ覺えてちぎりおかぬ人だにまたるゝぞをかしき軒の玉水たま〳〵訪つるゝ人もなければ只獨り窓にこもりて聞くひともあらしと琴とりいでゝけしきばかりかきならせとその音さへいよゝしめりがちなりとあるほどに雲井に一聲時鳥のなきつるあなめづらしと思ふまもなくその方を見やればはやその姿は目にみえずして下弦の月のみあはれにのこれりげにいつやみなんと思ひわびしさみだれの今宵ははれて夜毎々々にあかつきかけて待ち渡りし時鳥の初聲をさへきゝつればつれ〳〵の思ひも今はいづち行けん夢ときえて嬉しさいはむかたなくなむ。

# 臨終

長門　植村せい子

美代子の君は靜に床の上に臥したまへりしが、おもむろに衰へたる身體を起して、吾が方を見てほゝえみつゝ「あゝ吾は今はの時來りぬ、天國は近かるべし、此世に於ていとも親しき君と別れざる可らず、げに悲しき事のようにしあれど、神の命なれば致方もなく、まして吾が常より信仰したる神のいます天津御國に赴くはいと喜ばしきことの限りなり、君も吾が遠き旅立ちを祝ひたまはれかし、別に遺言し置く事はなし、たゞ吾は神の迎へ給ふを喜び謝するなり、願はくは吾が爲めに聖書の一節を讀み聞かせ給へ」

これ美代子の母君より其の病あらたまりし由使をおこせたまひし故、あわていそぎ參りて君の床の傍に坐りしときの君の言葉なりき。

あはれ君の深き信仰によりて胸に靜けき平和を得たまひしことよと思ひつゝ君を見守れば靜に神に祈を捧げ給へるなり。頰のあたりは瘠せ衰へ美はしき綠の髮は艶きえうせたれど祈を終へ給ひし後の眼は一の望の爲に輝き渡りしなり、吾はほとりの聖書をとり上げて、先づヨハネ傳の一章をよみ初めて終りしに君は「尙一節を」とかすかなる聲にていかにも滿足したらんげに言ひたまひぬ。

されば更にロカ傳の一節をゆるく讀みつゝ靜に君を見れば目をとぢて居たまへり、漸く讀み終りて書を置き君の名をよびて祈を共にせむといへど返事なし、嗚呼君は吾がロカ傳朗讀の中に天の御國に赴き給ひしよ、安らけく平和なる臨終なるかな。

# 田舍の夏

美濃　淸水ろーきん

朝ぼらけ、いともかまびすしき燕のうたに、夢とけて、グラス窓はらへば、まづ心地よきすゞ風の、胸のあたりを洗らひぬ。見るとはなしによもやもの景色をうち眺むるに、パノラマのごと、しら雨の餘波をとゞめて、をぼろげなるが、眸の前にひろごりて、若葉しげれる山々は、さながら杳かに、さみだれの中より生れ、みど

りの水、ぱた〳〵と滴らむばかりなり。白樂天がいへりし「眼を放にして青山を見る」とは、かくのごときをいひしにや。あるは朝ぎりのぼんやりと立ち罩めたる、たゞずまゐ、から國にありと聞く桃源郷もかくやとをもはる。まいて軒近く實れる梅やサクランボーの、南風に雨の雫のはら〳〵と滴りて、愛らしき實の二つ三つ、さと、あてやかなる朝顔の上にをちたるなど、をかしからずや。

○

かしましきは蟬の聲かな。油鍋のいりつくがごとけれぱ、油蟬とや名づけゝむ。ひくき庭の檜の青葉に來鳴けば、梢のすゞ風もこれにをぢて、うごくべうもあらず。あなむし暑きかな。土はかはきて、あくまで白かるをさらぬだに松の葉の一すじのみ、立ちたる。まことや、五体をもとろかさむずる、けはいは、いと心にくきわざなり。げにたふときは神のみなさけかな。一しきりの雲の峯、いづことはなく、起させ玉ひて、をり〳〵五体を清めらるゝもうれしく、青簾かけたる出窓のもとには、晝寐の夢に通へとかや、風鈴のね、かすかにひゞき、露ふくめる白百合、さては、はな薔薇の、しほらしげにうち笑めるも、心ゆくなり。

○

しら雨の、篠つくばかり、ふれるあとより、青海原のごと、大空のはるれば、入日の雲のうるはしく、雫をふるふ木々の青葉に、くれなゐの虹霓の、あざやかに、架りつ。いざ詩集もとじなむ。蜩の聲のいと淸く、杜のをちこちに、うちつれて、聲々に、けら〳〵とあはれに鳴くも、なにやらん、泪のつゆの、さしぐまるゝ、まいて亡き父のことゞもの偲ばるゝをや。かはふりは、忙しげに飛びかひ、梟の蚊を吐く聲につれて、蚊遣火焚く煙のいや太々と軒端に立ちて、雲霞のごと蚊柱のくづれ行くもをかし。浴水のいとも心地よく、やう〳〵夜の暮のくだりぬれば、うちは片手に螢火を撲ち、天の河原に月かたむくまでとや夜を更かす。

## 田舍人の生活

京都　矢野路子

錦の衣こそは身につけざれ。山海の珍味にこそはあかざれ。浮世の紅塵の外に天命をたのしみて住まへる、田

舍人の生活ほど樂しきものはあらざるべし。ゆふべには星を戴き、あしたには月をふみて畑にくさぎり田に耕やし、或る時は花笑ひ鳥うたふ春の野に、ある時は枯枝にまでおかしう六花をかざせる冬のあした、自然の畵中の人となりて廣漠たる天地に浩然の氣をやしなひ、わらやに歸りては親子夫婦一家團欒して手製の濁酒に終日の勞を慰し、家の内のくま〴〵までも平和の香に滿さる。たゞに平和はわが軒のみならで一村に汎くさゞめきわたり、村内の人々は艱難相あはれみ相救ひ、苦樂を共に別ち長を敬ひ幼を愛しさながらに同胞の交りの如し。

或人曰はく、現世の人情は紙の如くうすくかつ汚れ表にのみ錦をかざることを知りて心中はこれに反せりと。これ浮世の内容をよく云ひつくせりとはいふもの丶、鄙の人には用ひられぬ語なり。まことにうれしききわみにこそ。うはべに錦をかざる浮世の人よ、願はくば田舍人の心中にかんがみて心のおくに錦をまばゆきまでにかゞやかし給はんことを

## 心ゆく夕

東京　井上芳子

心ゆく夕や……湯あみして團扇片手に門を出でんとすれば折しも澄子の君訪れ給ひぬ同じ心にうちつれて我が庵を出でしは根津神社のみやしろの上に明星一つきらめく頃なりき

さていづこにか行かせ給ふ田端わたりは近くてよからめと問へばげにもと答へ給ふ

夏の畵工は田にも丘にも林にも皆一樣に綠の彩色をほどこして夕風ゆるく渡る毎に丘の綠まづゆるぎ林の綠ついでゆらめきはては田の面の新麥にもさつと綠の波を描きて終にわれらの浴衣の袖をひら〳〵と飜かす。顧みては語り語りてはほゝとうち笑みつゝさゝやかなる土橋を渡り黑き蛇ののたれるが如き細道を行きて行きてやがて廣やかなる原野に出づ此處ぞ田端なりける水車の廻ぐる音かしましく聞ゆ何といふ川にやあらむ水は濁りたれど其調べさながら詩の神の夕暮れのすさびに無絃の琴を奏づるに似たりそこに沿うて逆上れば兩岸より枝垂れてはと〳〵水にふれなんとする新樹影を倒まにす崖の下につながれたる小舟は水のまに〳〵漂ひつゝ夏し

らぬ樣なり主は誰れぞわりやなしやなと思ふ折しも風一陣さと吹けば岸の楊柳よれつもつれつ……枝は枝とすれ合ひ葉は葉とさゝやきてはうなづく……水面の楊柳も亦同樣なり木の根のいとうはびこりたるに腰うちかけてしばし憩ふ。ふと澄子の君を見れば。しきりに頭傾けつゝ案じ給ふ樣子なるに「やよ澄子の君。とくりの樣に首ふり給ふは何事に侍る。」と伺ひ參ゐらすれば「あはれ可笑しき事をの給ふよ」とて袖に顏を埋めて泣くやうによゝとばかりに笑ふて暫には答へ給はずしばらくして妾は「澄子の君。妾は今始めて悟り侍り……さてさて風雅人(みやびと)はちがふもの哉願はくはそを聞かせ給ひてよ」と云へば「否々決して左樣な事にては候はず」などゝいやに隱し給ふも倘聞かまほし誠や和歌には妙なる御うはささへ有るものを」

左の方は田畑いと廣う續きて森林田畝數多ありそこの蔭に農家の燈ほのかに見ゆあゝ。あはれ。あの燈かしこの下には勤勉なる農夫の夕げたうべつゝあるやらむ……美しきホーム。……一家の團居……などそれよりそれと思ふ折しも澄子の君の「一寸。一寸。彼方の景色を見給へ何んと美しからずや」指さし給ふ方を見れば實にもてそ。……そは田の面の綠と。森の黑きと空の桔梗色との間。點々。燈火の星のやうにきらめきたる其趣の優美!。名工の筆。名工の鑿。いかで及ぶべき。あはれ燈火の美!斯かるをこそとは始めて覺えしか。」

水はむせびつ橋の下を流れ。岸の草樹は絶えずさゝやく、螢一つ向ふの岸邊を縫うて夏草の茂みに入る。二人共。無言。……其の幽かなる水の調べ其の些やかなる樹の葉のそよぎに思ひをひそめて茲に暫。夏なき里に住みぬるぞいといとう嬉し。」

仰げば星。やがて數を増しぬ——あな。吾は。また心なくも長居しけるよ父君母君。さぞや案じ給ひつらむはた女の身の有るべきに非ねばと急き先き來し途に至れば浴衣白う着て團扇うちふりつゝ來る人々に逢ふ。」

噫心ゆく夕や……いとも樂し……是ぞ是れ夏の命——。

## 病める友の許に

千葉　平川遊巖子

五月雨の晴れ間なき此の頃は、すこやかなる身も兎角頭重うおぼへ侍るを、ましてや御いたづきの床におはす

御許様には、み心のくさ〴〵し玉ふことの多からむと推し上まゐらせ候、さて此のほどは、花菖蒲拜見にまかりて母君のゐつき御もて成しに預り有り難く、いくえにも御禮申上まゐらせ候、その折は花の美しさとおもて成しのうれしさに、心なき永居致し、御病中の御許様にはさぞや御疲れなされし御事と存じ候、その爲め御障りはゐらせられずや、御伺ひ申上まゐらせ候、この文と共に贈りまゐらす螢は、昨夜五月雨の晴れ間をはかりて妹と、小田のゐせ道に狩り捕りしものに候、今年は未だ肌寒うおぼへ侍れば、螢の出も遲く、僅か二十ばかり御目にかけ申し候、病の床におはす御許様の、み心の幾分を慰めまゐらせなば、妾のこよなきよろこびにてそ、まことは自ら持ちて御病氣御見舞ながら伺ふべきに候へと、昨日より弟の袴の仕立てに取りかゝり、ゐすは學校に着け行かんなど申し、傍らに就き居り候まゝ、本意ならずも使にて差し上げまゐらせ候、ゐなかしこ

## 遠く隔れし友のもとへ

京都　矢野路子

さても其後は海路平らかに越え給ひ、今は佐賀の都に御けしきうるはしう暮さるゝよし御祝申上候。山水殊に明媚なる土地と承りては、いよ〳〵そこに住みたまふ君のうら山しう、以前の如くならば直に走せ行き參らすべけれど、山海幾百里を隔つる遠國と相成候てよりは、何事も思ふにまかせず、以後はやさしき温容を拜しみなさけゐつき慈しみを受け能はぬかと思へば、かなしく心ぼそく、暗中に光明を失ひし感じの致し候。思へば一昨年のけふにて候ひしよ、吹くかせに四つの袂をひるがへし、旭の川邊に螢狩して多く得、ふくろに盛りつゝ車胤の故事を追想して、互に學びの業をいそしまなんと誓ひ候ひぬ。昨年も昨年にて恰もけふの日、保津の川に舟を泛べて、舟遊びを催しゐるは金波の上に細鱗のおどるをすくひ、或るはふしおもしろきうたをたからかに歌ひ、樂しく愉快に一日を暮し候。其折ちぎりをきたる今宵の月見、待ちに待ちたる月日はたがへずめぐり來れども、來らぬ君を如何にせん、かゝる事實に遭遇しては尚更に共に遊びし昔の忍ばれて、いづれも涙の種ならぬはこれなく候、ゐはれ君には今宵の月を、如何にながめさせ給ひしか。願はくば御いとまのふしには、心にうかべさせ給ひつる事とも御洩し給ひ鄙の奥にたゞ一人、取り殘されし我を慰め給ひてよ。かしこ

# 友の許へ

周防　中谷登羽子

花子樣相變らず御勉强ですか、久しくご不沙汰致しまして誠にすみませんどうか許して下さい。先日發行の女學世界に大町先生の　文はやりたしかく手は持たずとは古への教育なきもの丶述懷。さるに今の世の婦女子は手紙かけざるにあらざるも。美事にかけざるためにやりたき處にもやらず、かいてやるも、たゞざつと用事を記するのみにて、筆を十分にのばす能はざるもの多く候と申されましたがほんとうにそれは私の事です私は耳いたくて耻かしくてたまりませんでした。これ迄もなく是非お伺ひしやうと思ふて居ながらもついいつはかつはと兎角に月日を過しまして誠に申わけもありません。これからはどーか幼ない昔の事を思ひだして親しう度々御樣子を聞かして下さい。私もこれからは何もかも打明けてお話しいたしますから今日はこれで失禮いたします、　左樣なら

# 郭公聞きに行かむとて友の許に

名古屋　長谷川ちやう

うすくこく棚引し霞の衣やれはて丶雲かとばかりささ匂ひたる花の袂はみどりの色にそめかへして恨みつる風の音もそゞろなつかしう覺えそめて郭公またる丶頃となり侍るをいかにすごさせ給ふらん今宵も月清うさしのぼりて花橘のそこはかとなくかをりてたゞならぬに端近う進みいで丶時鳥までともかひなくわまりうらめしかればわす假に須磨のなところへ物せばやと思ひたち侍りぬげに一の谷のわたり松の風なみの音にまがひてはのかに名のり出たらむにはいかにをかしく心ゆくわざにか侍らんさせるさはりもおはしまさずば必ずともにゆき給はんはと一へにねぎまつるになんわなかかして

## 彙報

### ◎常宮殿下と大阪博覽會

常宮昌子内親王殿下には御見學の御爲として大阪博覽會を御觀覽あらせられたる由なるが、大阪御發途の前日、山脇博覽會事務官御禮として御用邸に參候せし砌、三日間の博覽會御巡覽にて、如何なる列品が御心に適ひ玉ひしやと伺ひ奉りしに、初めは却々に打明けて仰せ給はざりしも、重ねて伺ひ奉りしに打笑ませ給ひつゝ、わが心に適ひし第一は郵船會社の出品なる汽船の模型にて、彼は實物と露差はず其儘に作りしとの事なれば、船の構造を研究するには此上なき者なるべし、殊に船には姉妹の名もありていと床かしければと仰せつゝ、周宮殿下の方を顧りみさせられ、更に第二に心に適ひしは美術學校出品の圖案なり、但しては花にまれ蔓にまれ仔細は顯微鏡試驗を行ひて、纎維組織等を解剖して圖案とせんには一層の妙を極むべし、自らも學びの暇に試みたる事あり、その參考として見る如きものこそ欲しう思はゆれ。第三は農業館の福岡縣出品區に掲げられつる縣下の模型地圖なり、米の產地は米粒を、麥は麥を、石炭は石炭を、生絲產地は繭をつけて一目其生產力をさへ瞭然たらしむれば、地理の研究には此上なきものぞかしと語らせ給ひたりとぞ。斯かる御志にて在しけるより、御巡覽中も深く殖產興業の諸表、さては海產林業、滋器採鑛、農業館機械館なんどに思召をかけさせ給ひしといふ。御齡わづかに二八に在しましながら斯く國本養成の事に御心を用ひ給ふはいとゞ畏き事にこそ

### ◎赤十字社篤志看護婦人會

同會第五回修業證書授與式は去月十七日同社總會の席上、皇后陛下御臨御の際、北白川大宮妃殿下より修業證書授與あらせられたり。今回の卒業者は名譽會員東伏見宮周子殿下梨本宮伊都子殿下を始め奉り、正會員男爵夫人松平すま子以下廿九人にして、柳谷千代子氏總代として證書を受領したりと。

### ◎日本赤十字社婦人會員

日本赤十字社に於ける婦人會員は同社總會の時發表せし統計表によれば全國を通じて總計二萬九千五百九十

五人にして、最も多き府縣は東京の二千七百九十八人、愛媛の二千三百六十五人、神奈川の千七百四十八人等なりといふ。

## ◎珍奇の趣向

近頃紐育に於てシー、ケー、ヂー、ビリングスと呼ぶ人の催したる宴會は頗る珍奇の工夫なり。その趣向は原頭馬上の宴會に擬したるものにて會場は去る大貨席の階上を用ゐたり。來客は豫め何等の注意を受けざれば何の氣なしに定めの時刻に設けの席に至り見れば宴會の室は恰も是れ一個の原野を現出し草木花卉を植込み草舍を建て天井は蒼空に擬したる幕を張り下には草を敷き向は中央の森林を繞りて主客の數に相應したる卅二頭の馬あり馬上には小卓の設けあり馬の側には踏臺ありて馬に乘るに便せり來客は何れも乘馬に試驗あり殊に馬は乘馬學校に於て訓練されたるものなれば物に驚かず妄に動かず斯くて客は馬上にて自由に飮食し何れも主人の趣向に驚嘆し滿足の意を述べ宴會は大に成功したりと云ふ又た風船乘を以て有名なるサン、ヂユーモン氏の催しに係る宴會は空中に於ける宴會に擬し場所は巴里の或料理店の一室にて室の全體を空中の如くし月及び星の懸るは勿論紙鳶も飛揚し風船も來往するの裝置を爲し扨テーブルは高さ七呎にて椅子も之に準じたり又給仕は何れも竹馬に乘り之が爲めに宴會の一週前より練習したりと云ふ此宴會も甚だ成功したるが最初卓に就きたるときは來客は何となく危險の感ありしも落付きては些かの掛念もなく一同歡を盡して散會したりと珍奇の趣向といふべし。

## ◎博覽會行學生乘車賃大割引

鐵道作業局にては夏季休暇を利用し、博覽會を觀覽せんとする各學校生徒の便利を計り、團躰乘車の場合には、三等乘車賃金に限り左記の通り低減する由なれば、我が女學生諸姉にも此際旅行を試みて見聞をひろむを可とす。

○割引區間　東海道、北陸、中央西線各驛より大阪驛行又は大阪驛より以上各驛行

○期間　乘車券の發賣は本月廿五日より七月三十一日迄

○貸金低減額(但し哩程は片道)

| 人員 | 百哩未滿 | 百哩以上百哩未滿 | 二百哩以上三百哩未滿 | 三百哩以上 |
|---|---|---|---|---|
| 十人以上 | 二割 | 三割 | 四割 | 五割 |
| 五十人以上 | 三割 | 四割 | 五割 | 六割 |

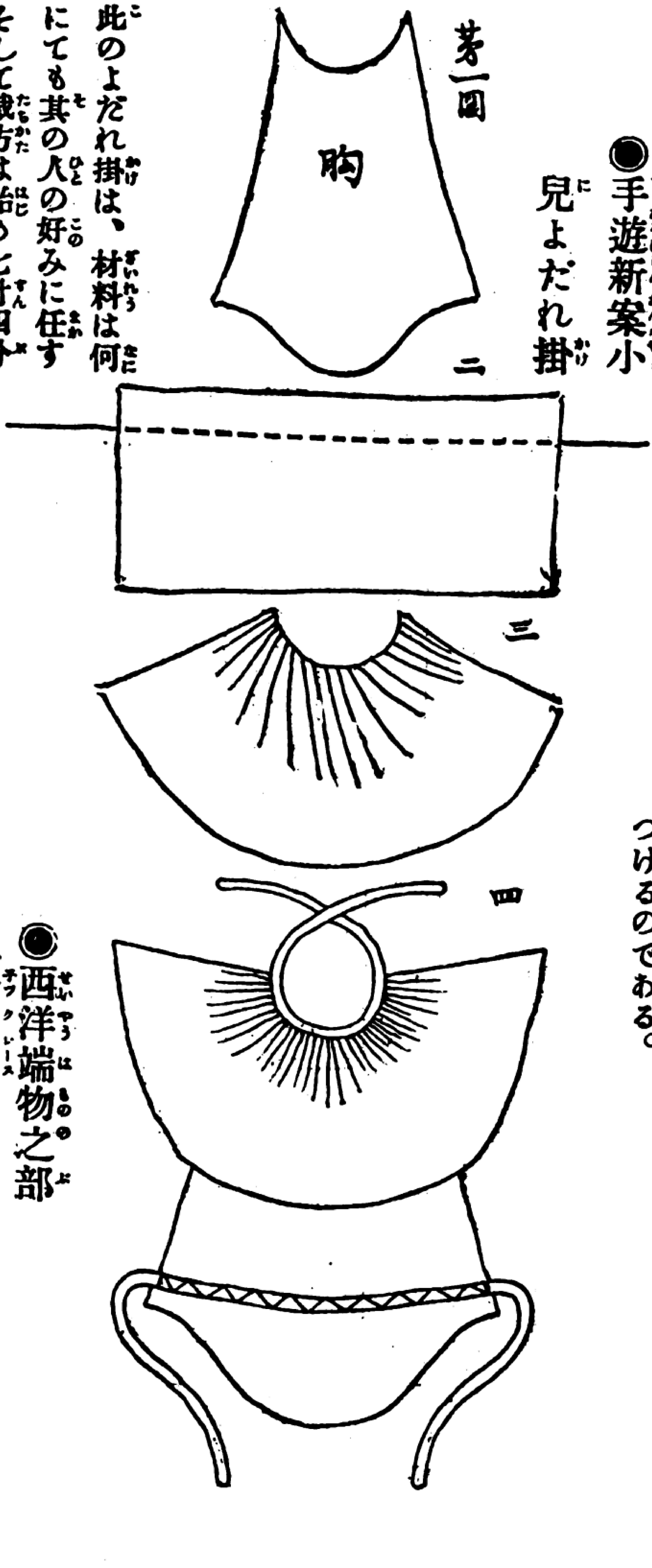
右の人員又は哩程に達せざるも所定の人員及び哩程に相當する乘車賃金を支拂ふ時は、前項の割引を許す、

○途中下車驛(規定の途中下車驛に限る)を指定する場合は五十哩以上百哩未滿は一回、百哩以上は二回下車の便を與ふ

# 裁縫實習

女子裁縫高等學院長　小出新次郎

## ●手遊新案小兒よだれ掛




此のよだれ掛は、材料は何にても其の人の好みに任す、そして裁方は始め七寸四分位ゐの布二枚を中表に重ね、第一圖の如くなりを付けて、裁切て、それを縫ひ合せ、次に第二圖の如く、四寸巾一尺ばかりの布をザク〳〵と大針に縫ひ、それを縮めて、第三圖の如くにして、次に其の二枚を第四圖の如く縫ひ合せ、それに紐を付け、又下の處にも紐をつけるのである。

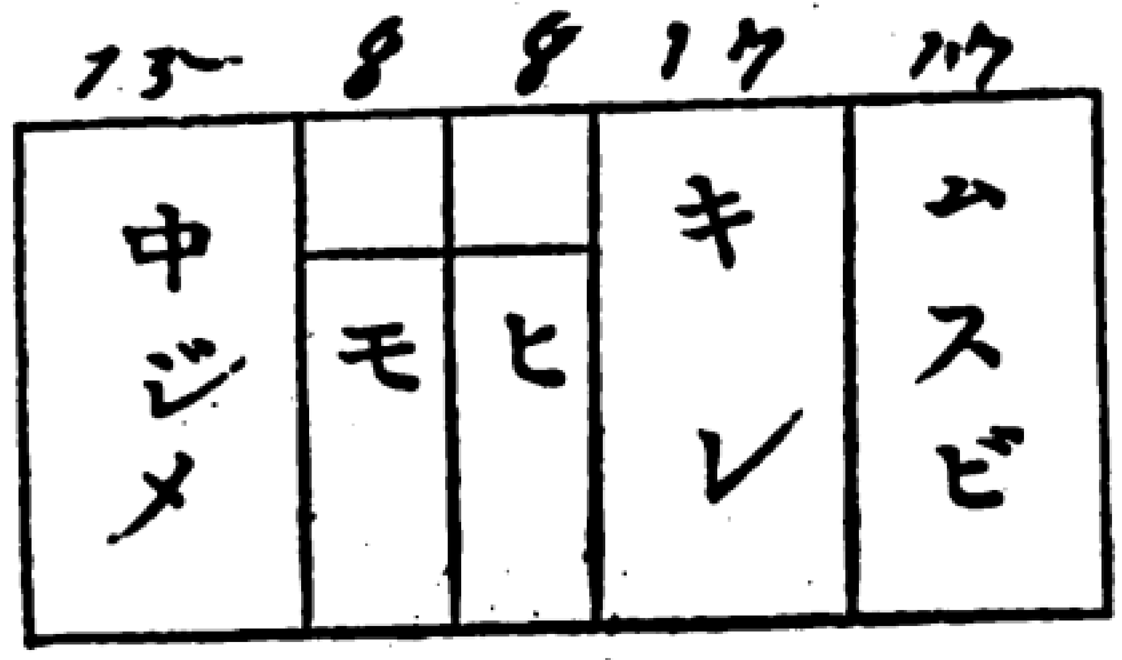
## ●西洋端物之部

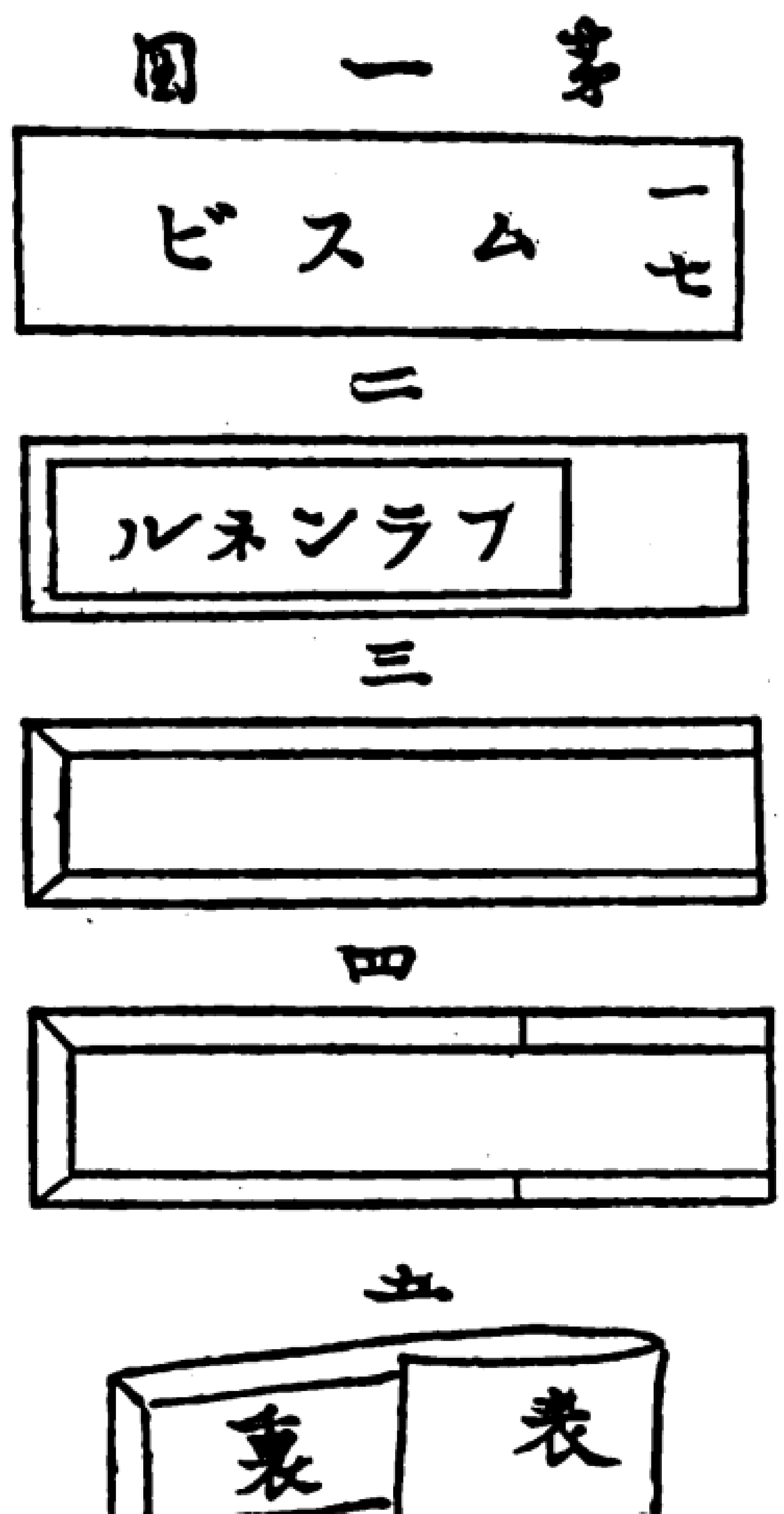
### ▲衿飾

先づ表裂凡六寸五分巾四寸七分はとを以て、第一圖

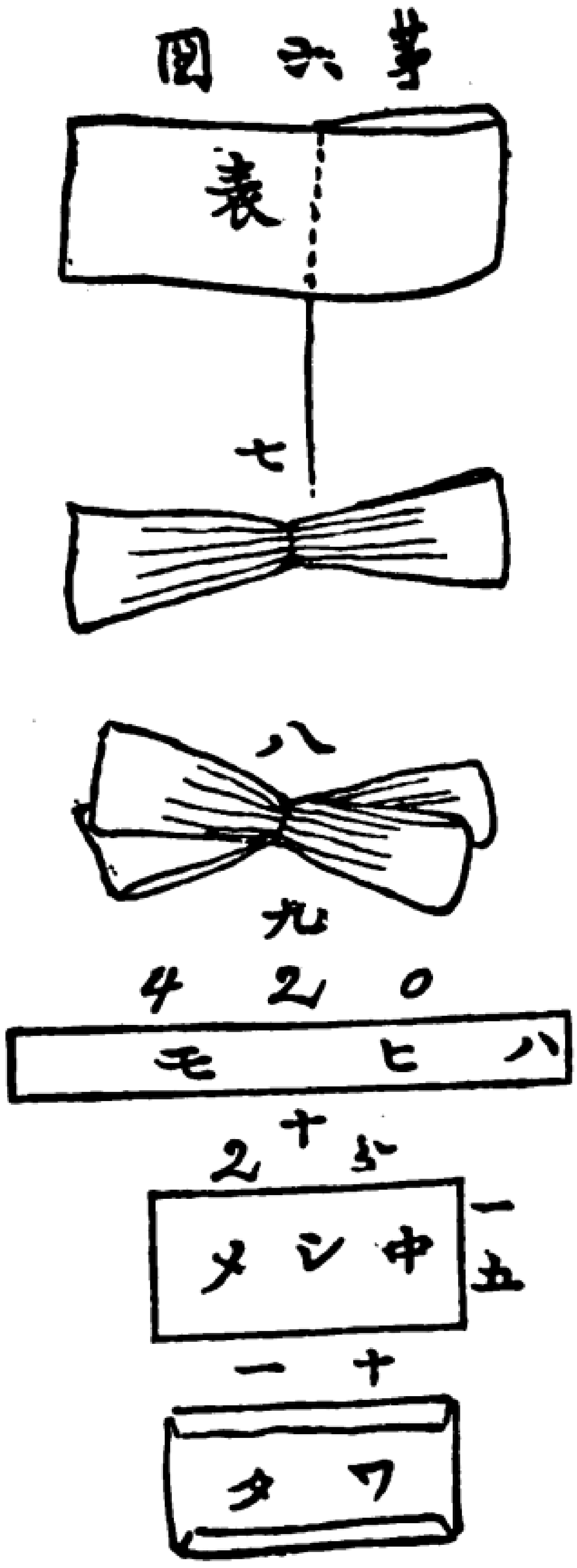
の如く、巾二寸長さ五寸として、結びにきれ二枚をとり、次に巾八分長さ四寸二分として紐きれ二筋をとり、次は一寸五分巾長さ二寸五分として中締のきれをとるのである。

次は長さ三寸五分巾一寸三分位ゐに綿フランチルを二枚眞にきるのでわる、夫れより第二圖の如く、裏を上に出して、其の上に綿フランチルの眞を圖の如くのせ、次に第三圖の如く、三方を折返し、小てゝ充分くせをつけ、夫れより裏ぎれを程よく造り、第四圖の如くにのせ、夫れをくけ、次に第五圖の如く右の布はしの方を三分の一ばかり折重ね、二寸七分として、其の布はしを圖の如くかゝり附、次に第六圖の如く中間を縫ひ、且つくゝりをつけて、第七圖の如くにして、又一枚も同様に造り、夫より第八圖の如く二枚重ねてとじつけ、夫より第九の如く巾八分長さ四寸二分

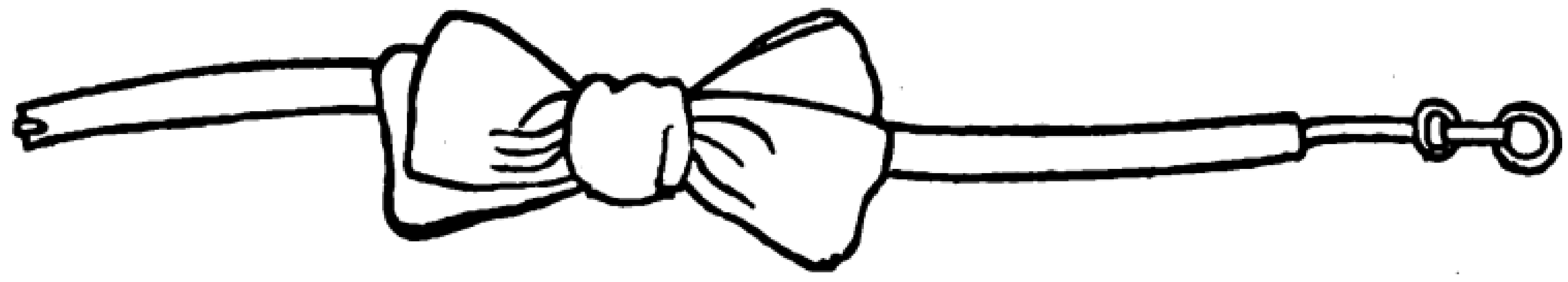



づゝのきれ二枚を以て、前同樣綿フランチルの裂を眞に入れて、四分巾に紐を造り、其の兩はしを第八圖の裏に縫ひ附け、夫れより第十圖の如く長さ二寸五分巾一寸五分のきれに、第十一圖の如く綿を眞に入れて兩はしを折り返してくせをつけ、次に第十二圖の如く、



其のきれを以て、中間をくゝり、其の兩はしをくゝりて、仕揚するのである。

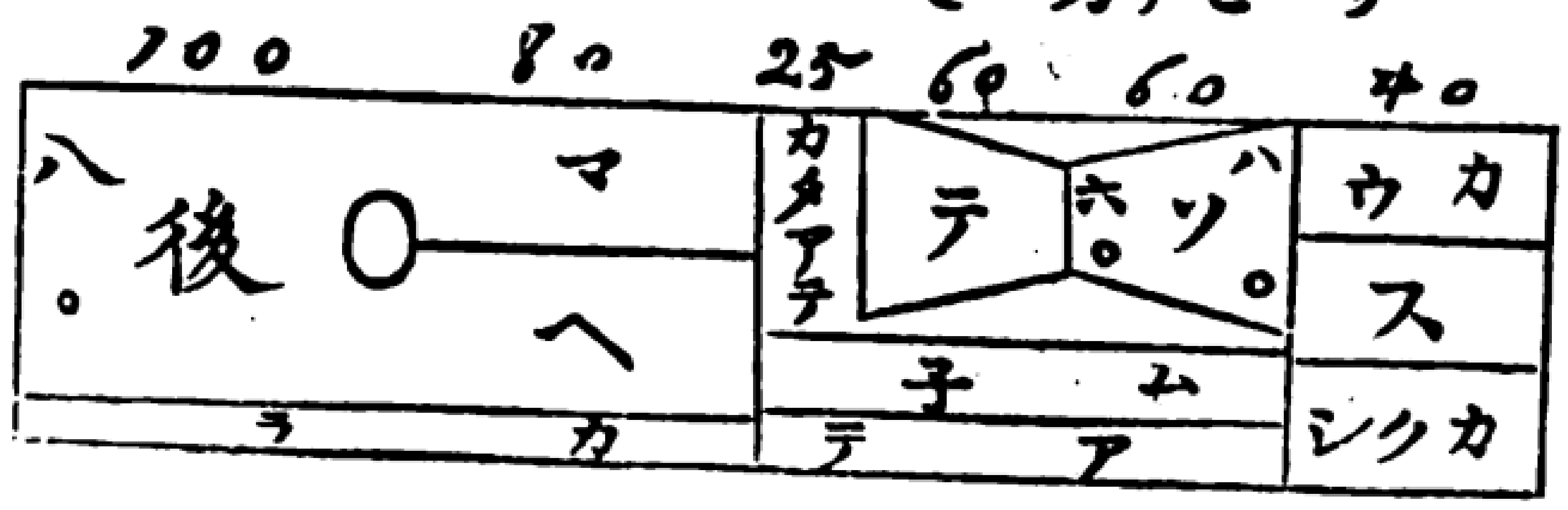


## ▲三四歳小兒のシャツ

一尺巾の布三尺八寸を以て、三四歳の小兒シャツ裁方。

### ▲同　裁　方

先づ身頃用布一尺八寸をとり夫の片はしを一寸五分かきとり、衿巾とし、殘りの廣き方を縦に二つに折りて正敷をき次に殘りの一と巾のきれにて肩わて二寸五分と袖丈六寸五分宛二倍とをつゝけとりて、其布はしを一寸五分巾かきとり、兩みかへしとなし、夫れより肩わてを二寸五分きりとり、殘りを横に二つにをり、兩袖とするのである。

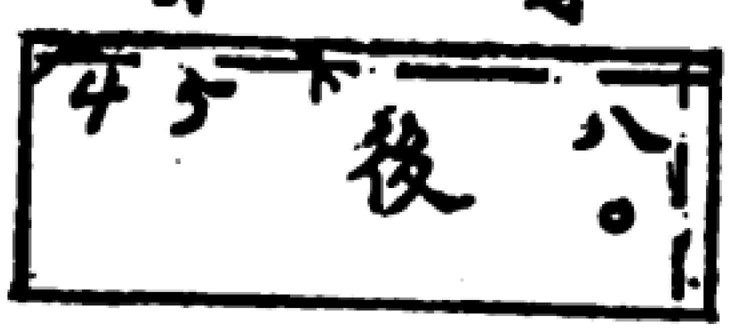



次に殘りの四寸五分斗りのものを三寸づゝ二枚とりて袖口きれとするのである。殘りの四寸巾位の布を以て「カクシ」裂にするのである。

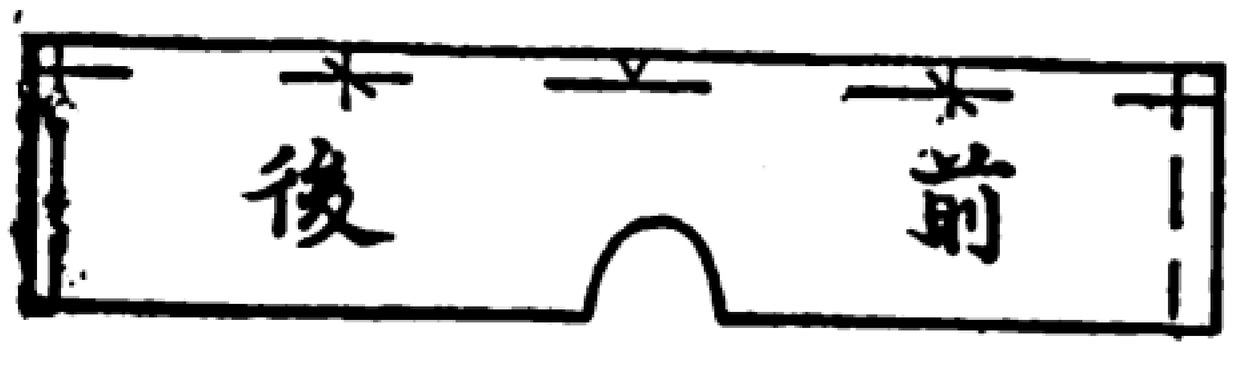
### ▲同　篦　附

篦附は先づ身頃用布を第一圖の如く縦に二つにをり、尚は横に二つにをり、後身の方一寸五分ほど長くして上に乘せ、輪を左にして正敷をき、夫より左の輪の方より後丈を一ぱいに計り、布曲りを正し、五分のくけ代の篦をつけ、夫れより左の向ふにて袖附三寸五分と篦をつけ、次に馬のり三寸と篦をつけ、夫れより後巾

第一圖




二




三

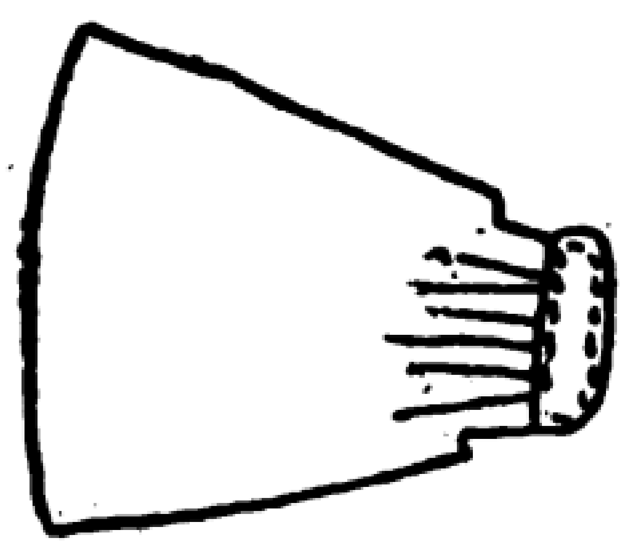



四

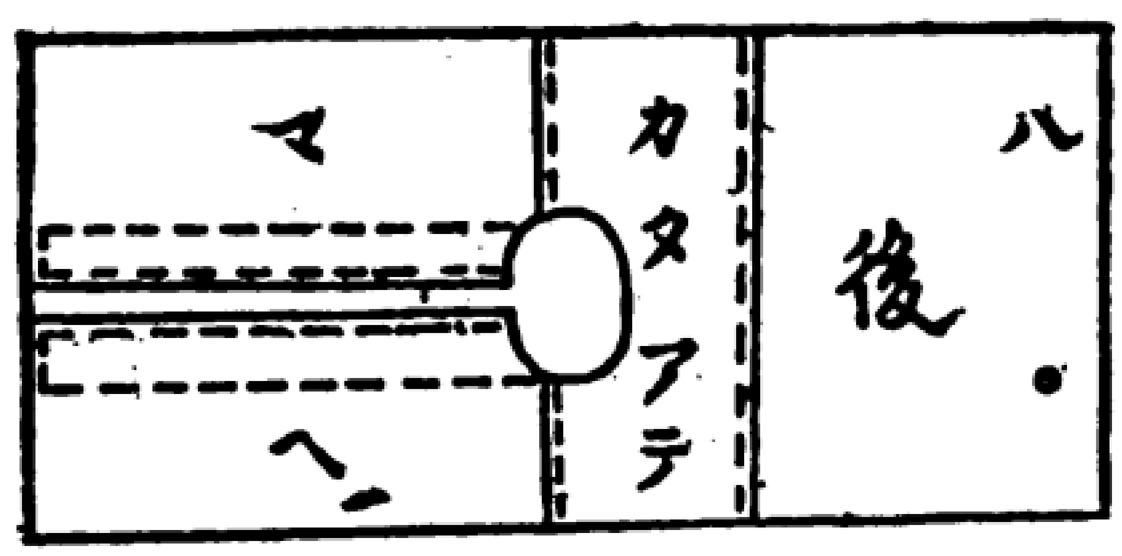


を一ぱいにつけ、夫れより左の向ふにて肩山の篦をつけるのである。次に第二圖の如く後身を左へ除き、右に殘れる前身の手前なる衿肩の處にて、向へ一寸六分右へ一寸六分と篦印をつけ、夫れより圖の如く襟肩をくり、次に前の縦なる輪をさくのである。

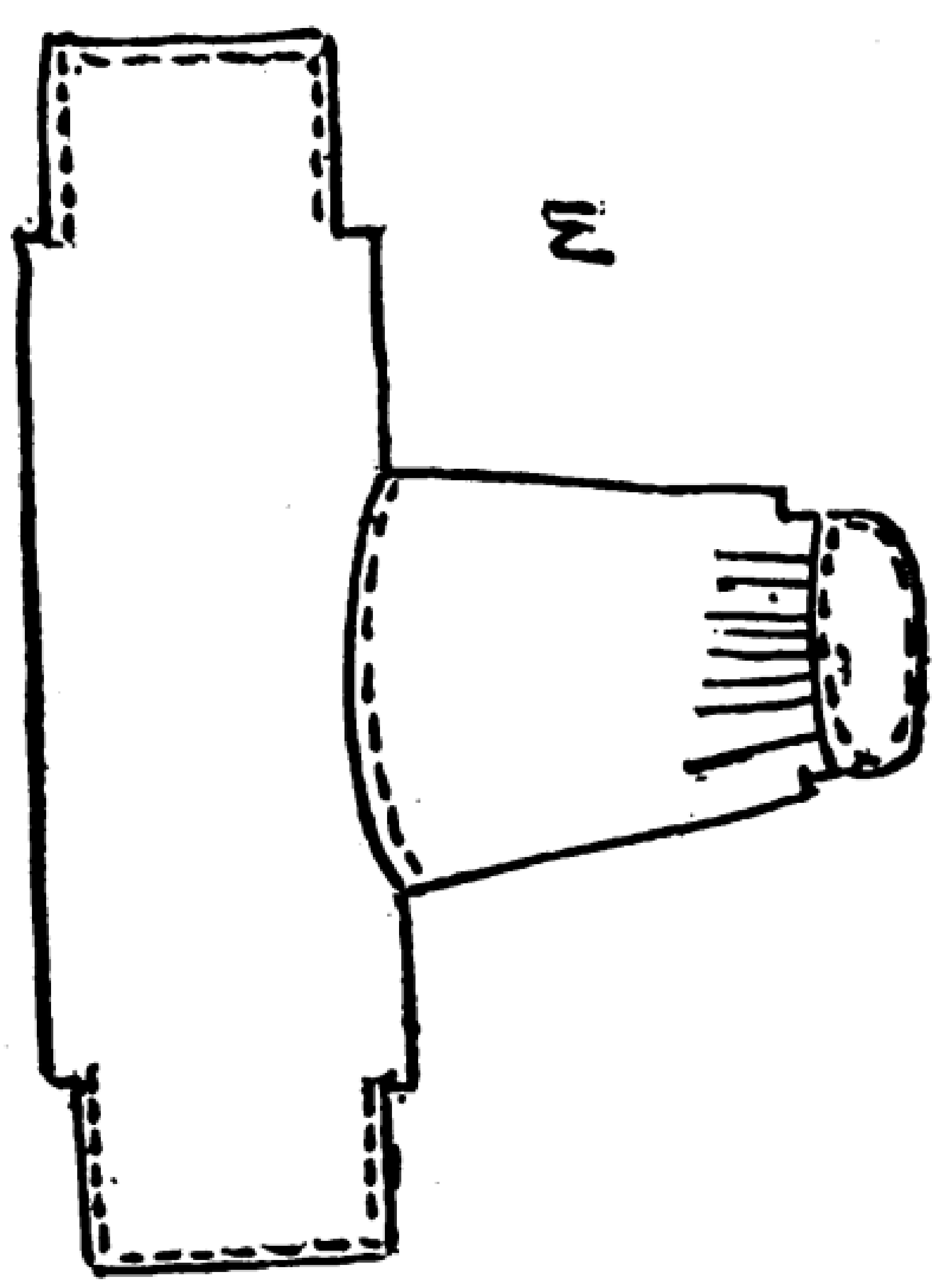
第一圖



二




三

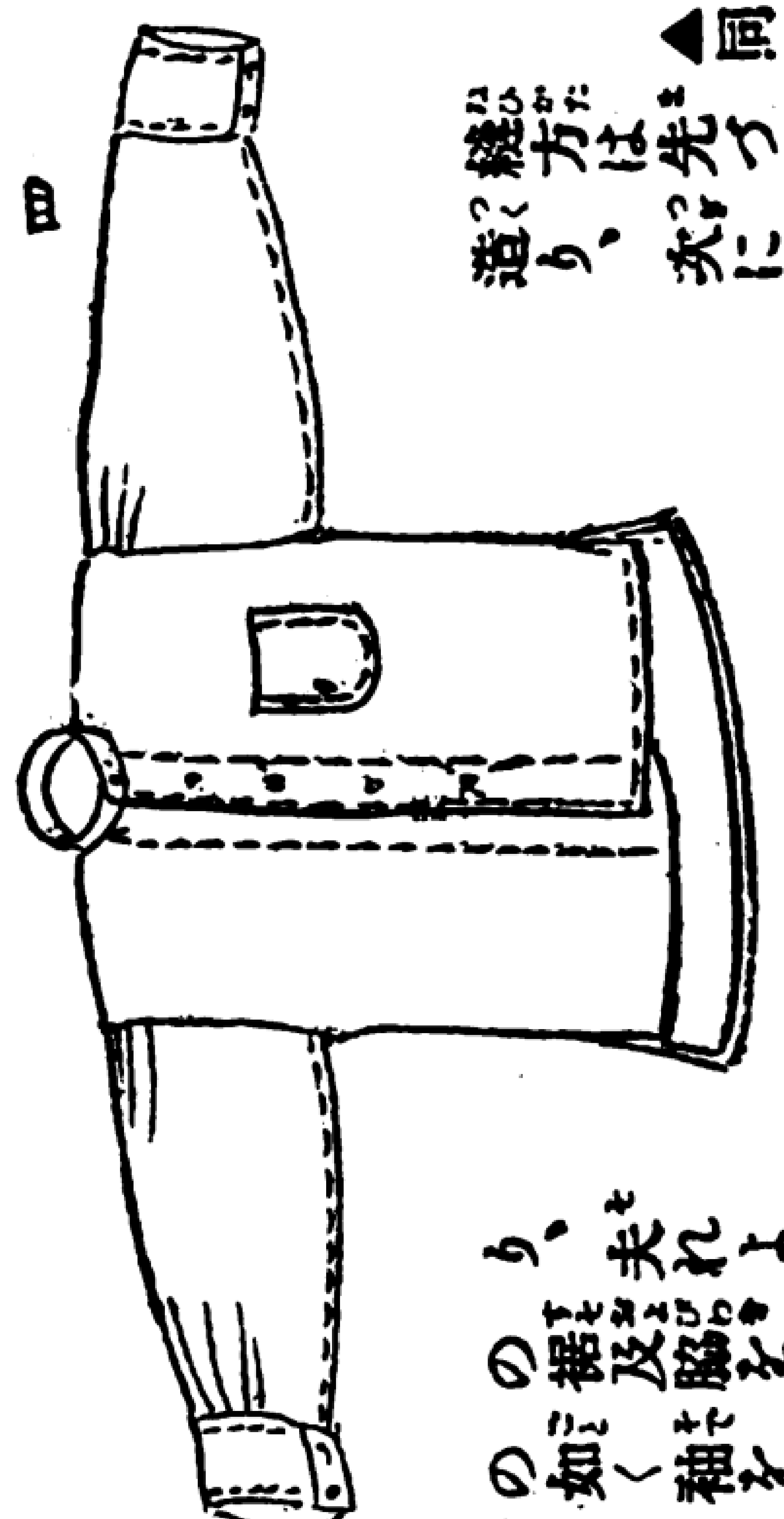


次は第三圖の如く襟の篦附であるが、襟は中表に二つに重ね、尚ほ横に二つにをり、夫れより左の輪の方より三寸七分と襟丈の篦をつけ、次に手前にて衿附の縫代を二分として篦をつけ、又左の襟丈の處にて二分わげて篦をつけ、次に衿巾を六分位ひにきめ、篦をつけ、次に山篦をつけるのである。

次は第四圖の如く袖口であるが、袖口は先きの三寸巾四寸五分の裂を各一枚宛中表に縦に二つに折り、尚ほ横に二つにをり、縦の輪は向ふに横の輪は左にして二枚重ね、正敷をき、左の輪の方より袖口一寸五分ときめ、次に巾を一ぱいにきめ、右の向ふのはしの角をとり、全體に縫代の篦をつけるのである。

次は袖の篦附であるが、袖は先づ八寸巾六寸五分のものを第五の如く横に二つに折り、尚ほ縦に二つに折り、夫れより右の布はしの處にて、袖附一ぱいにきめ、又左の輪の處にて縦の輪より向へ袖口巾三寸と篦附をつけ、次に其の二寸の篦より圖の如く斜にかきとるのである。夫れより袖口の處の輪をさき、兩袖とするのである。之れにて裁切篦附を了り

たれば、之れより縫方に移るのである。




三四オ小兒ワシヤツ

▲同　縫方

縫方は先づ第一圖の如く袖口裂を造り、次に袖口裂を縫附、夫れより衿の向を縫ひ、且眞を入れ、引返して正敷をき、夫れより第二圖の如く左右の前身に見返しをつけ、夫れより肩あてをあて、明きの處を身比に習ひてくり、夫れより衿を附け、次に前後の裾及脇をくけ、夫れより第三圖の如く袖を縫ひつけ、袖は袖尻を縫ひ、又脇を縫ひ、夫れよりカタシをとり附り、正敷して第四圖の如く仕立上るのである。

## ●試験問題

壹尺六寸巾の布壹丈五尺を以て袖丈壹尺六寸五分身丈弐尺六寸あがりの本裁女羽織を造るのには如何なる裁方にすればよいので在ふか且並巾裏布何尺いるで在るか

罫引及積り方の算式を示されたし

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 九〇 チ | | ツ | | 六六 | 前 | 後 | 九四 |
| チ | イ | チク | アツ 三五 | | | | |
| 四五 リ | | ヌ | | 九四 | 後 | 前 | 六六 |

用布　袖丈　衿布　身丈　下り縫代

$$150\times2-\{(170\times8+680)+(265\times8+130)\}$$

解

先づ表用布壹丈五尺を弐ばいして更に袖丈を八ばいして袖の裏表總体の要布を知り夫れへ衿布六尺八寸を加へ更に又身丈弐尺六寸五分を八ばいして夫れへ下り縫代の壹尺三寸を加へ其双方を合せたる用布總体より先きの弐ばいせし表用布を減さて残りたるものが裏用布である

# 次號記事豫告（第三卷第十號八月五日發行）



## 每月五日發行

### 定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册　増刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

### 廣告料

| | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 二十四字詰一行 | …… | 四十四錢 | 三十六錢 | 二十九錢 |
| 半頁（卅二行） | …… | 十四圓〇八錢 | 十一圓五十二錢 | 九圓二十八錢 |
| 一頁（六十四行） | 割引三十三圓 | 割引二十七圓 | 割引二十二圓 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

### 注文規署

◎本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
◎御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
◎郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
◎總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。


不許複製

明治卅六年七月五日發行　第參卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千八十八番　二千六百二十番

## 名勝案内

# 日本名勝地誌

全部十二冊洋装中判紙数五千頁
正價一冊三十錢六冊一圓七十錢
全部三圓卅錢郵税一冊六錢ツヽ

### 本書目次



發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

（後付の一）

# 消夏讀

| 著者 | 書名 | 冊數・製本 | 價 |
| --- | --- | --- | --- |
| 巖谷小波君著 | 洋行土産 | 全二冊 洋布上綴 | 正價各壹圓廿錢 郵稅各十二錢 |
| 大橋乙羽君著 | 歐山米水 | 全一冊 特別上綴 | 正價壹圓五十錢 郵稅八錢 |
| 大橋乙羽君著 | 歐米小觀 | 全一冊 洋布上綴 | 正價四十錢 郵稅四錢 |
| 鎌田榮吉君著 | 歐米漫遊雜記 | 全一冊 紙皮上綴 | 正價四十五錢 郵稅六錢 |
| 水田榮雄君著 | 大英國漫遊實記 | 全一冊 紙皮上綴 | 正價七十錢 郵稅十錢 |
| 松井廣吉君著 | 米國漫遊雜記 | 全一冊 紙皮上綴 | 正價三十八錢 郵稅六錢 |
| 飯島榮太郎君著 | 米國渡航案內 | 全一冊 紙皮上綴 | 正價四十錢 郵稅六錢 |
| 石澤文學士著 | 西伯利亞漫遊 白山黑水 | 全一冊 紙皮上綴 | 賣價二十七錢 郵稅六錢 |
| 內藤湖南君著 | 支那漫遊 燕山楚水 | 全一冊 紙皮上綴 | 賣價二十七錢 郵稅六錢 |
| 村井弦齋君著 | 小說 酒道樂 | 全二冊 洋布上綴 | 正價各五十五錢 郵稅各八錢 |
| 依緑軒主人著 | 社會主義新小說 文明の大破壞 | 全一冊 洋裝並綴 | 正價四十錢 郵稅十錢 |
| 大橋乙羽君著 | 花鳥集 | 全一冊 洋布上綴 | 正價壹圓 郵稅十八錢 |
| 大橋乙羽君著 | 初子集 | 全壹冊 洋布上綴 | 正價四十錢 郵稅六錢 |

(後付の二)

發兌元　東京市日本橋

# 物廣告

| 著者 | 書名 | 體裁 | 價 |
|---|---|---|---|
| 大橋乙羽君著 | ●風月集 | 全壹册 洋布上綴 | 正價三十五錢 郵税六錢 |
| 若松賤子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂 | ●忘れかたみ | 全壹册 洋布上綴 | 正價壹圓 郵税八錢 |
| 饗庭篁村君著 | ●聚寶盆 | 全壹册 紙皮上綴 | 賣價二十五錢 郵税六錢 |
| 江見水蔭君著 | ●避暑の友 | 全壹册 紙皮上綴 | 正價三十五錢 郵税六錢 |
| 巖谷小波君著 | ●女波男波 | 全壹册 紙皮上綴 | 正價四十錢 郵税八錢 |
| 巖谷小波君著 | ●笑 | 全壹册 紙皮上綴 | 正價三十五錢 郵税六錢 |
| 江見水蔭君著 | ●戀 | 全壹册 紙皮上綴 | 正價三十錢 郵税四錢 |
| 江見水蔭君著 | ●星 | 全壹册 紙皮上綴 | 賣價二十五錢 郵税八錢 |
| 鶯亭金升君著 | ●福 | 全壹册 脊皮上綴 | 正價三十錢 郵税六錢 |
| 江見水蔭君著 | ●月と梅 | 全壹册 紙皮上綴 | 正價二十五錢 郵税四錢 |
| 樋口一葉女史著 | ●一葉全集 | 全壹册 洋装並綴 | 正價四十錢 郵税十錢 |
| 若松賤子女史譯 | ●小公子 | 全壹册 洋装並綴 | 正價三十五錢 郵税八錢 |
| 幸田露伴君著 | ●露伴叢書 | 全壹册 洋布上綴 | 正價貳圓五十錢 小包送六百匁 |

（後付の三）

區本町三丁目 博文館

# 書類

大橋乙羽君著

## ●紀行文集

正價六十錢
郵税十六錢

### 本書目次

●東遊記
●西遊記
●日本行脚文集
●諸國軍人談
●東遊記後編
●西遊記後編
●築紫記行
●奥の畑道

岸上質軒君校訂

## ●續紀行文集

（續帝國文庫第二十四編）

正價六十錢
郵税十六錢

本書収むる所の紀行文長短四十七編年代を以て之を次序す變遷沿革の跡を考ふるに便せんが爲なり貫之朝臣の土佐日記は紀行文の祖と稱せらるゝも單行の文も少からずはた文詞古晦にして解し難きふしもあれば之を省き嚴島御幸記を以て卷首に掲けぬ

岸上質軒君校訂

## ●續々紀行文集

（續帝國文庫第卅五編）

正價六十錢
郵税十六錢

遠くは鎌倉時代より、近くは徳川時代の末に至るまで、學者の紀行文中、最も趣味あるもの數十篇を集む。艱難を極めたる旅行記あり、壯快なる冒險談あり、風流なる遊記あり、一篇自ら一篇の妙味を具へ、而も通觀すれば時世に伴ひ、風俗志尙の轉變を見るべし、娯神臥遊の絶好伴侶なり

佐藤飯人君校訂

## ●俳諧紀行全集

賣價二十錢
郵税八錢

### 本書目次

●發句七則
●俳諧紀行全集提要
●日本行脚文集
●野晒紀行翠園抄
●奥細道菅菰抄
●奥細道拾遺
●椎の葉
●陸奥千鳥
●摩詰菴入日記

本町 博文館

（後付の五）

# 各宗本山名所圖繪

石倉重繼君著寫眞銅版卅四葉入
## 本派本願寺名所圖會
●全壹冊正價六十錢郵稅十錢

本派本願寺は吾國有數の大刹にして古來皇室に厚き緣故を有し其信者亦多衆を極む本書は仝寺の沿革及變遷を古記錄によりて之を詳說し尙足らざる所は寫眞にて補ひ以て世に公にせるもの

石倉重繼君著石版密畫及寫眞銅版十六葉入
## 大谷派本願寺名所圖會
●全壹冊正價四十錢郵稅八錢

東本願寺は顯如上人の創設に係り西本願寺と共に吾國名刹の一なり本書は著者が周到なる用意と流暢なる行文に加ふるに寫眞を以てし仝寺の百般に關する事項の名所沿革を詳說せるもの

石倉翠葉君著寫眞銅版十六葉挿入
## 佛光寺名所圖會
●全壹冊正價二十五錢郵稅四錢

本書は佛光寺派の本山たる京都佛光寺の事蹟を編述したるものにして一々現況と歷史に照し精密に考證記述すれば同寺の事蹟を知るは蓋し本書に措て他にあらざるなり

石倉翠葉君著寫眞銅版廿四葉入
## 日光名所圖會
●全壹冊正價六十五錢郵稅十二錢

日光の偉觀は世界の嘆賞する所其輪煥の狀殿宇の壯殊に其地の山紫水明韓柳の筆も委曲を盡し得ざるべし本書は著者周到の用意により文を補ふに寫眞を以てし日光の眞景を寫せるもの

石倉翠葉君著寫眞銅版廿二葉挿入
## 日蓮宗各宗本山名所圖會
●全壹冊正價五十錢郵稅十錢

本書は日蓮宗各本山の名所舊蹟靈場等を詳述せるものにして小は一片の墓標より大は各寺の由緒沿革に至るまで委曲洩すなし殊に數十面の口繪は行文を補ふて餘りあるもの

石倉翠葉君著寫眞銅版廿三葉挿入
## 成田山名所圖會
●全壹冊正價三十錢郵稅六錢

成田山新勝寺は今を距る千年前の建立にして京北唯一の靈境なり著者例の靈筆を呵して其沿革由緒を叙する詳にして精一讀して幽邃なる絕景に入り再讀して其皇々しき高德を仰くに至る

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

◀博文館發行▶

# 見よ都會の表裏見よ

## 東京

正價二十五錢
郵稅二錢五厘

目次

江戸の新春
水の東京
東京市養育院
武士と町人
江戸の俳諧
相撲沿革
江戸の芝居
水道の水
魚川岸

松の内
藪入
初卯と鶯替
節分
初午
雛市
觀花と潮干狩
彼岸
涅槃と灌佛會

山開と四萬六千日
干蘭盆
川開と角乘
祭禮
入谷の朝顔
觀月
團子坂の菊
夷講と吹革祭
會式

## 名古屋と伊勢

正價二十五錢
郵稅二錢五厘

目次

名古屋武士
名古屋の風景
金の鯱鉾
名古屋の氣風
名古屋の舞踏
祭
名古屋の遊戲
急變の名古屋
大鹽と名古屋
俳人の俗事
枇杷島の青物市場
名古屋の紙鳶

名古屋の芝居
外宮と内宮
御神樂
御遷宮と御木曳
神苑會
神都の名勝
伊勢の社寺
津城
二見と朝熊
津城文學
博覽會と伊勢
滊車名所

伊勢の海濱
伊勢の造船所
伊勢の御師
神都の遊廓
伊勢の花街
山田の名物
鞨鼓踊
伊勢の奇習
伊勢みやげ
伊勢自慢

## 京都と奈良

正價二十五錢
郵稅二錢五厘

目次

京都御苑
京都の山水
京都の美術
法師唄
京都の俳諧
京都の陶磁器
京の花
京の紅葉
西陣の機業
兩本願寺
都踊と鴨川踊

京都の島原
京の神事
鞍馬の竹伐と火祭
太秦牛祭
加茂競馬
壬生狂言
新京極
疏水と電氣
詩の京都
深草と稻荷
伏見と宇治

奈良の記
神鹿
大佛殿
春日神社
八重櫻
奈良の遊廓
蒸風呂
二月堂修二會
奈良風俗
西の京

## 大阪と神戸

正價二十五錢
郵稅二錢五厘

目次

大阪城
大阪の家庭
大阪の特色
大阪の夏祭
浪華の和漢文學
川の大阪
大阪の築港

第五回博覽會の噂
大阪角力
大阪の芝居
俄
大阪の花柳界
堂島の人氣
昔の大阪

神戸發達史
神戸元居留地
神戸の神社
神戸港の側面
神戸の芝居
神戸の花柳界

●關西旅行案內、
●關西名勝案內、

女學世界
毎月壹回五日發行
(明治卅参年拾貳月廿五日第参種郵便物認可) 第参巻第九號 (明治参拾六年七月五日發行)




(定價金貳拾錢)

Vol. III. (東京市小石川區久堅町百八番地 博進社工場印行) No. XI